松東遺跡3次

2014年2月

浜松市教育委員会

松東遺跡３次

2014 年 2 月

浜松市教育委員会

1工区 全景（東から）

1　SK06 銅鐸出土状況（南東から）

2　SK06 銅鐸出土状況（北東から）

3　弥生時代　主要出土遺物

SK06 出土銅鐸

1　奈良・平安時代 主要遺構

2　SD109 出土銅印

3　奈良・平安時代 主要出土遺物

例　　言

1　本書は静岡県浜松市東区天龍川町519番ほかにおける松東遺跡（３次調査）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、天竜川駅周辺整備事業における道路建設工事に先立ち実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、浜松市（土木部東・浜北土木整備事務所）の依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、浜松市教育委員会の監理のもと、浜松市から委託を受けた株式会社フジヤマが実務を実施した。調査にかかわる費用は、全額浜松市が負担した。

3　発掘調査にかかわる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積　2,102㎡

調査期間　（現地調査）　平成24年（2012年）６月１日～平成25年（2013年）３月22日

（整理作業）　平成25年（2013年）６月３日～平成26年（2014年）２月21日

4　発掘調査は、鈴木一有・鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）が監理業務を担当し、現地調査は中川潤次（株式会社フジヤマ）が実務を担当した。また、整理作業は坂下俊介（株式会社フジヤマ）が実務を担当し、原田和子（株式会社フジヤマ）が補佐した。

5　本書の執筆は、第１章１・２、第３章５、第４章２・３を鈴木京太郎が、第１章４を坂田昌代（株式会社フジヤマ）が、第３章１を川本耕三（公益財団法人元興寺文化財研究所）、西田京平・平尾良光（別府大学文化財研究所）が、第３章２・３を西尾太加二（静岡文化財研究所）が、第３章４を鈴木一有が行い、その他を坂下が行った。現地における写真撮影は主に中川が行い、一部を鈴木一有が行った。遺物写真撮影は主に坂下と村松幸壽（株式会社フジヤマ）が行い、一部を鈴木一有が行った。編集は坂下が行い、柴田稔･鈴木加奈子（株式会社フジヤマ）が補佐した。

6　調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

7　現地調査、整理作業および本書の編集にあたり、以下の方々や機関からご協力やご指導を賜った。記して深謝したい（敬称略、順不同）。

渥美賢吾、岩原剛、川江秀孝、佐伯郁乃、佐藤祐樹、篠原和大、柴垣勇夫、高田健一、高田康成、竹内裕貴、寺沢薫、東野治之、中勇樹、中井正幸、難波洋三、贄元洋、林至美、福永伸哉、藤村翔、藤原治、松井一明、渡辺晃宏

伊勢市教育委員会、大垣市教育委員会、四国中央市教育委員会、東京大学総合研究博物館、豊橋市教育委員会、東観音寺

凡　　例

1　本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

2　遺跡の略記号は以下の通りである。

SK：土坑　　SX：大型土坑、不明遺構　　SH：掘立柱建物

SD：溝　　SP：小穴　　SE：井戸　　SR：自然流路

3　遺物番号は種別にかかわりなく、時代ごとに連番を付した。

4　遺構中のアミは、焼土の広がりを示す。

5　本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

□　弥生土器・土師器

■　須恵器

▒　灰釉陶器・山茶碗

▓　陶磁器

ただし、須恵器と灰釉陶器の判断がつかない個体については、断面を黒塗りとした。

6　本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博

（財）浜松市文化協会→浜文協

（財）浜松市文化振興財団→浜文振

（財）静岡県埋蔵文化財研究所→静文研

教育委員会→教委

7　本文中に使用した土器の型式名や用語および編年観は、以下の文献に基づいて記載した。

弥生土器：鈴木一有 2009「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」
『鳥居松遺跡５次　弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団

古式土師器：鈴木一有 2002「古墳時代前期にかんする諸問題」
『恒武西宮遺跡』（財）浜松市文化協会

須恵器・土師器：鈴木敏則 2005「出土須恵器について」
『東若林遺跡』（財）浜松市文化振興財団

陶器・灰釉陶器・山茶碗：

遠江地方　松井一明 1988「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」
『静岡県の窯業遺跡　本文編』静岡県教育委員会

尾張地方　楢崎彰一他 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾張・三河地区）付　猿投窯の編年について』愛知県教育委員会

松東遺跡３次

目　次

巻頭図版
例言・凡例

第１章　序　論…… 1

1　調査にいたる経緯…… 1
2　予備調査…… 2
3　調査の方法と経過…… 3
4　遺跡をめぐる環境…… 6

第２章　調査成果 …… 11

1　基本層位と遺構検出面…… 11
2　弥生時代…… 13
3　奈良・平安時代…… 62
4　鎌倉時代以降…… 87

第３章　後　論…… 93

1　銅鐸・銅印の自然科学分析…… 93
2　銅鐸・銅印の保存処理…… 101
3　井戸材・漆器の樹種同定…… 103
4　松東遺跡における銅鐸破片出土の意義…… 105
5　松東遺跡と長上郡家…… 119

第４章　総　括…… 129

1　発掘調査の成果…… 129
2　特筆すべきことがら…… 130
3　今後の展望…… 130

出土遺物観察表…… 131
付　図…… 141
図　版

図　版　目　次

巻頭図版

1　　１工区 全景（東から）
2　　1　SK06 銅鐸出土状況（南東から）
　　2　SK06 銅鐸出土状況（北東から）
　　3　弥生時代 主要出土遺物
3　　SK06 出土銅鐸
4　　1　奈良・平安時代 主要遺構
　　2　SD109 出土銅印
　　3　奈良・平安時代 主要出土遺物

図　版

1　　１工区 全景（北から）
2　　1　２工区 全景（北東から）
　　2　２工区 全景（東から）
3　　３工区 全景（南西から）
4　　弥生時代 土坑 遺物出土状況（SK361 南西から）
5　　1　SX01 遺物出土状況（西から）
　　2　SX01 土層断面（西から）
6　　1　SX01 焼土内遺物出土状況（北東から）
　　2　SX01 焼土断面（北西から）
7　　SK06 銅鐸出土状況（南東から）
8　　1　SK06 銅鐸出土状況（北東から）
　　2　SK06 土層断面（南東から）
9　　1　SK07 遺物出土状況（北から）
　　2　SK84 遺物出土状況（南から）
10　　1　SK231 遺物出土状況（北東から）
　　2　SK231 土層断面（南西から）
11　　1　SK339 遺物出土状況（北西から）
　　2　SK346 遺物出土状況（南東から）
12　　1　SK352 遺物出土状況（東から）
　　2　SK361 遺物出土状況（南西から）
13　　1　SK03 遺物出土状況（東から）
　　2　SK03 土層断面（南西から）

3　SK03 遺物出土状況（北西から）
14　1　SK208・SK215 遺物出土状況（南東から）
2　SK209 遺物出土状況（北東から）
3　SD03 遺物出土状況（南東から）
4　SD51 完掘状況（北から）
15　弥生時代 遺物出土状況
1.SK337（東から）2.SK350（南東から）3.SP24（東から）
4.SP131（北東から）5.SP713（北東から）6.SD51（西から）
16　奈良・平安時代 遺構集中部（３工区 東から）
17　1　奈良・平安時代 遺構集中部（１工区 北から）
2　SH02（西から）
3　SH03（南から）
4　SH05（南から）
5　SH07（西から）
18　1　SD107 完掘状況（東から）
2　SD107 完掘状況（南西から）
19　1　SD107 遺物出土状況（南東から）
2　SD107 遺物出土状況（北西から）
3　SD107 遺物出土状況（南西から）
4　SD118 遺物出土状況（南から）
20　1　SD109 銅印出土状況（北西から）
2　SD109 銅印出土状況（北西から）
3　SD109 銅印出土状況（南東から）
21　1　SE02 井戸枠 検出状況（南東から）
2　SK301・SK302 遺物出土状況（南西から）
22　鎌倉時代以降 大型溝（SD01・SD02 北から）
23　1　SD01・SD02 完掘状況（南から）
2　SD01 完掘状況（北から）
3　SD02 完掘状況（南から）
24　1　SE01 完掘状況（南から）
2　SE03 遺物出土状況（南から）
3　SE04 遺物出土状況（西から）
25　弥生時代 主要出土遺物
26　弥生時代 大型土器集積土坑（SX01）出土遺物（1）
27　弥生時代 大型土器集積土坑（SX01）出土遺物（2）
28　弥生時代 銅鐸出土土坑（SK06）出土遺物（1）　銅鐸（76）　1. Ａ面　2. Ｂ面

29　1　弥生時代 銅鐸出土土坑（SK06）出土遺物（2）　銅鐸（76）詳細
1. A面 右側面　2. A面 下側面　3. A面 菱環周辺
4. B面 菱環周辺　5. B面 鋸歯文　6. B面 重弧文
2　弥生時代 銅鐸出土土坑（SK06）出土遺物（3）　銅鐸（76）共伴土器
30　弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（1）
31　弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（2）
32　弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（3）
33　弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（4）
34　弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（5）
35　弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（6）
36　弥生時代 土坑 出土遺物（1）
37　1　弥生時代 土坑 出土遺物（2）
2　弥生時代 溝・小穴 出土遺物
38　奈良・平安時代 主要出土遺物（SD107 出土遺物）
39　1　奈良・平安時代 土坑 出土遺物
2　奈良・平安時代 溝 出土遺物（1）
40　奈良・平安時代 溝 出土遺物（2）
41　奈良・平安時代 溝 出土遺物（3）
42　1　奈良・平安時代 溝 出土遺物（4）　SD109 出土銅印
2　奈良・平安時代 井戸（SE02）出土遺物
43　奈良・平安時代 包含層 出土遺物（1）
44　奈良・平安時代 包含層 出土遺物（2）
45　1　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物　1. 緑釉陶器　2. 鞴羽口　3. 鉄滓
2　鎌倉時代以降 出土遺物
46　1　銅鐸X線画像
2　銅印X線画像

挿　図　目　次

Fig.1　松東遺跡の位置…… 1
Fig.2　試掘坑配置図…… 2
Fig.3　試掘坑土層柱状図…… 2
Fig.4　グリッド配置図…… 3
Fig.5　調査風景…… 4
Fig.6　銅鐸検出状況…… 4
Fig.7　現地説明会風景…… 5
Fig.8　整理作業風景…… 5
Fig.9　木船銅鐸　１号・２号 …… 6
Fig.10　森西遺跡 銅鐸形土製品 …… 6
Fig.11　松東遺跡周辺の遺跡分布…… 7
Fig.12　大蒲村東Ⅰ遺跡 木簡 …… 8
Fig.13　木船廃寺跡 軒丸瓦・軒平瓦 …… 8
Fig.14　宮竹野際遺跡６次 官衙関連遺物 …… 8
Fig.15　松東遺跡２次 銅鐸飾耳片 …… 9
Fig.16　松東遺跡周辺の調査状況…… 10
Fig.17　土層観察位置図…… 11
Fig.18　調査区土層柱状図…… 12
Fig.19　弥生時代 遺構分布図 …… 13
Fig.20　SX01 実測図 …… 14
Fig.21　SX01 出土遺物（１）…… 15
Fig.22　SX01 出土遺物（２）…… 16
Fig.23　SX01 出土遺物（３）…… 17
Fig.24　SX01 出土遺物（４）…… 18
Fig.25　SX01 出土遺物（５）…… 19
Fig.26　SK06 実測図 …… 20
Fig.27　SK06 出土銅鐸三次元陰影図 …… 22
Fig.28　SK06 出土銅鐸実測図 …… 23
Fig.29　SK06 出土銅鐸復元図 …… 24
Fig.30　SK06 出土遺物 …… 25
Fig.31　SK07 実測図 …… 26
Fig.32　SK56 実測図 …… 26
Fig.33　SK84 実測図 …… 27
Fig.34　SK231 実測図…… 27
Fig.35　SK339 実測図…… 28
Fig.36　SK346・SK347 実測図 …… 28
Fig.37　SK351・SK352 実測図 …… 29
Fig.38　SK361 実測図…… 29
Fig.39　SK361 における遺物の対応関係 …… 30
Fig.40　SK07 出土遺物 …… 31
Fig.41　SK56 出土遺物 …… 32
Fig.42　SK84 出土遺物 …… 33
Fig.43　SK231 出土遺物…… 34
Fig.44　SK339 出土遺物…… 35
Fig.45　SK346・SK347 出土遺物 …… 36
Fig.46　SK351 出土遺物…… 37
Fig.47　SK352 出土遺物…… 38
Fig.48　SK361 出土遺物（１）…… 39
Fig.49　SK361 出土遺物（２）…… 40
Fig.50　SK02 実測図 …… 41
Fig.51　SK03 実測図 …… 41
Fig.52　SK50 実測図 …… 42
Fig.53　SK79・SK208 実測図 …… 42
Fig.54　SK209・SK212・SK215 実測図 …… 43
Fig.55　SK315・SK320 実測図 …… 44
Fig.56　SK337 実測図…… 44
Fig.57　弥生時代 土坑 出土遺物（１）…… 45
Fig.58　弥生時代 土坑 出土遺物（２）…… 46
Fig.59　弥生時代 土坑 出土遺物（３）…… 47
Fig.60　SD03 実測図（１）…… 48
Fig.61　SD03 実測図（２）…… 49
Fig.62　SD13 実測図 …… 49
Fig.63　SD17・SD51・SD58・SD60 実測図 …… 50
Fig.64　弥生時代 溝 出土遺物（１）…… 51
Fig.65　弥生時代 溝 出土遺物（２）…… 52
Fig.66　SD102 出土遺物…… 52

Fig.67　SP24・SP131・SP713 実測図 …… 53
Fig.68　弥生時代 小穴 出土遺物…… 53
Fig.69　SR01 実測図 …… 54
Fig.70　弥生時代 包含層等 出土遺物（１）…… 55
Fig.71　弥生時代 包含層等 出土遺物（２）…… 56
Fig.72　弥生時代 包含層等 出土遺物（３）…… 56
Fig.73　松東遺跡周辺と弥生時代の遺構…… 60
Fig.74　西遠江における主要弥生時代遺跡分布図 … 61
Fig.75　奈良・平安時代 遺構分布図 …… 62
Fig.76　SH01 実測図 …… 63
Fig.77　SH02・SH05・SH08 実測図 …… 64
Fig.78　SH09 実測図 …… 65
Fig.79　SH03 実測図 …… 65
Fig.80　SH04 実測図 …… 66
Fig.81　SH06・SH07 実測図 …… 66
Fig.82　SK301・SK302・SK317・SK332 実測図 …… 67
Fig.83　SK322・SK325・SK333 実測図…… 68
Fig.84　奈良・平安時代 土坑 出土遺物…… 69
Fig.85　SD107 実測図（１）…… 71
Fig.86　SD107 実測図（２）…… 72
Fig.87　SD109 実測図…… 73
Fig.88　SD110 実測図…… 73
Fig.89　SD107 出土遺物（１）…… 74
Fig.90　SD107 出土遺物（２）…… 75
Fig.91　SD107 出土遺物（３）…… 76
Fig.92　SD109 出土銅印 実測図・三次元陰影図 …… 77
Fig.93　SD109 出土遺物…… 78
Fig.94　奈良・平安時代 溝 出土遺物…… 78
Fig.95　奈良・平安時代 小穴 出土遺物…… 79
Fig.96　SE02 井戸枠検出状況（東から） …… 80
Fig.97　SE02 実測図 …… 80
Fig.98　SE02 出土遺物…… 81
Fig.99　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (1) … 82
Fig.100　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (2)… 83
Fig.101　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (3)… 84
Fig.102　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物 (4)… 84
Fig.103　松東遺跡周辺の地籍図と
奈良・平安時代の遺構 …… 86
Fig.104　鎌倉時代以降 遺構分布図…… 87
Fig.105　SD01 実測図…… 88
Fig.106　SE01・SE03・SE04 実測図…… 88
Fig.107　鎌倉時代以降 出土遺物…… 89
Fig.108　松東遺跡周辺の地籍図 …… 90
Fig.109　松東遺跡周辺の地籍図詳細と
松東遺跡の中世遺構全体図 …… 91
Fig.110　銅鐸鈕（左）、銅印（中・右）と
その分析箇所 …… 93
Fig.111　銅鐸鈕分析箇所（Fig.110 左）の
XRF スペクトル …… 94
Fig.112　銅印分析箇所（Fig.110 中 a）の
XRF スペクトル …… 94
Fig.113　銅印分析箇所（Fig.110 中 b）の
XRF スペクトル …… 94
Fig.114　銅印分析箇所（Fig.110 中ｃ）の
XRF スペクトル …… 94
Fig.115　ICP 発光分析用使用採取部分 …… 95
Fig.116　銅鐸鈕と銅印の鉛同位体比
測定用試料採取部分 …… 96
Fig.117　松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布
（Ａ式図）…… 98
Fig.118　松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布
（Ｂ式図）…… 98
Fig.119　松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の
鉛同位体比分布（Ａ式図）…… 99
Fig.120　松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の
鉛同位体比分布（Ｂ式図）…… 99
Fig.121　Fig.119 の突線鈕式銅鐸の
鉛同位体比分布の拡大図（Ａ式図）…… 99
Fig.122　Fig.120 の突線鈕式銅鐸の
鉛同位体比分布の拡大図（Ｂ式図）…… 99
Fig.123　皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の
鉛同位体比分布（Ａ式図）…… 99

Fig. 124　皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の
鉛同位体比分布（Ｂ式図）…… 99
Fig. 125　奈良・平安時代の鉛同位体比分布
（Ａ式図）…… 100
Fig. 126　奈良・平安時代の鉛同位体比分布
（Ｂ式図）…… 100
Fig. 127　銅鐸のクリーニング処理前後写真
1. Ａ面 処理前　2. Ａ面 処理後
3. Ｂ面 処理前　4. Ｂ面 処理後 …… 101
Fig. 128　銅鐸・銅印の修復状況写真 …… 102
Fig. 129　木材顕微鏡写真 …… 104
Fig. 130　松東遺跡とその周辺における
銅鐸関連遺物分布状況 …… 105
Fig. 131　松東遺跡出土銅鐸想定復元図 …… 106
Fig. 132　東海地方における銅鐸破片 …… 107
Fig. 133　突線鈕式銅鐸と銅鐸破片の分布 …… 109
Fig. 134　遠江における銅鐸の変遷 …… 113
Fig. 135　突線鈕式銅鐸のライフサイクル …… 114
Fig. 136　遠江における銅鐸の分布と地域圏 … 115
Fig. 137　西遠江における郡と郡家の推定地 … 119
Fig. 138　山の神遺跡 墨書山茶碗…… 121
Fig. 139　宮竹野際遺跡「北家」墨書 …… 121
Fig. 140　出土銅印 …… 122
Fig. 141　東海地方における古代銅印分布図
（発掘調査出土品）…… 123
Fig. 142　静岡県関係古代銅印 …… 124
Fig. 143　出土墨書 …… 125
Fig. 144　古代の主な遺構と特殊遺物の出土状況　125
Fig. 145　宮井戸川及び支流の推定流路と
各遺跡の様相 …… 127

付図

Fig. 146　松東遺跡 検出遺構全体図…… 142
Fig. 147　弥生時代 検出遺構…… 143
Fig. 148　奈良・平安時代 検出遺構…… 144
Fig. 149　鎌倉時代以降 検出遺構…… 145
Fig. 150　松東遺跡 検出遺構図①…… 146
Fig. 151　松東遺跡 検出遺構図②…… 147
Fig. 152　松東遺跡 検出遺構図③…… 148

表　目　次

Tab. 1　発掘調査工程表 …… 4
Tab. 2　出土資料器種比率 …… 57
Tab. 3　松東遺跡３次調査の
一括資料における属性分析 …… 58
Tab. 4　一括資料における属性の変遷 …… 59
Tab. 5　小穴出土遺物一覧 …… 79
Tab. 6　松東遺跡出土遺物の分析項目 …… 93
Tab. 7　酸可溶分（sol 液）の定量分析結果 …… 95
Tab. 8　酸不溶分（insol 液）の定量分析結果 … 95
Tab. 9　松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の
化学組成 …… 97
Tab. 10　松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の
鉛同位体比…… 98
Tab. 11　樹種同定結果一覧…… 104
Tab. 12　突線鈕式銅鐸の破片資料…… 108
Tab. 13　銅鐸型式別出土数…… 110
Tab. 14　静岡県出土銅鐸一覧…… 112
Tab. 15　永田遺跡群における特殊遺物の出土状況　120
Tab. 16　東海地方の銅印一覧…… 123

浜松市域から出土した突線鈕式銅鐸群

第１章　序　論

１　調査にいたる経緯

松東遺跡は、静岡県浜松市東区天龍川町に所在する弥生時代～中世の遺跡である。1989 年に企業の社屋建設に伴って発見され、これまでに２度の発掘調査が実施されている。過去の調査では弥生時代の環濠とみられる溝が確認され、銅鐸飾耳の破片が出土するなどの成果が得られている（浜文協 1990 ａ・ｂ）。また、松東遺跡の周辺には弥生時代後期及び古代の遺跡が点在し、永田遺跡群と総称されているが、官衙の存在をうかがわせる遺構・遺物が確認されていることから、長田（長上）郡家の所在地に想定されている。

松東遺跡の南側には、JR 東海道線の天竜川駅が存在する。天竜川駅は通勤・通学時の利用が多く乗降客数が増加傾向にあり、周辺には住宅街が形成されて交通量も多いことから、都市計画上の地域生活拠点に位置づけられている。しかしながら、駅の改札口は北側にしかなく、駅周辺の施設も小規模であることから、交通の結節点機能を果たしていく上で利便性や安全性に課題を抱えている。

こうした課題を改善するため、天竜川駅及び周辺の整備事業が計画された。整備区域のうち、駅北側の駅前広場計画地が松東遺跡の範囲に含まれる可能性があることから、その車道部分の取り扱いについて、浜松市（土木部東・浜北土木整備事務所）と浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が事前協議を行い、2011 年３月 23 日に遺跡の範囲を把握するための予備調査を実施した。予備調査の結果、車道の整備計画地全域に遺跡が広がっていることが明らかとなったため、本発掘調査を実施することとなった。

調査は、浜松市教育委員会（市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は、浜松市から業務を受託した株式会社フジヤマが実施した。現地調査は 2012 年６月１日から 2013 年３月 22 日にかけての約９ヶ月間で実施した。調査面積は 2,102 ㎡である。

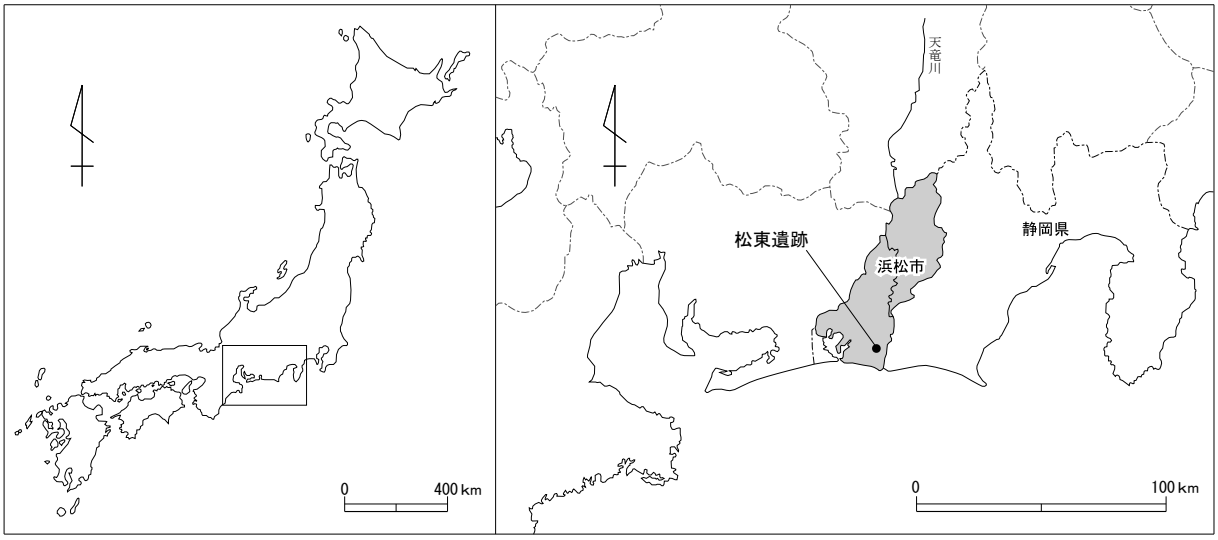


Fig.1　松東遺跡の位置

２　予備調査

従来、今回の調査対象地は松東遺跡の隣接地という扱いであったが、これまでに調査履歴はなく、遺跡が及んでいる可能性があったため、2011 年３月 23 日に浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が予備調査を実施した。

この予備調査では、５箇所の試掘坑（３ｍ×４ｍを１箇所、３ｍ×３ｍを２箇所、２ｍ×４ｍを２箇所）を設定した。いずれもバックホーにて層位的に掘削し、遺構･遺物の有無を確認したのち、人力で試掘坑の壁面を精査して土層の堆積状況を記録した。土層の詳細については、次章１「基本層位と遺構検出面」を参照していただきたい。

調査の結果、いずれの試掘坑でも弥生時代後期の山中～欠山式期の土器、奈良時代の須恵器・土師器、山茶碗などの遺物が認められた。基盤層は地表面より２ｍ以上低い標高約 4.4 ～ 4.8 ｍで確認され、試掘坑２・３・４・５では、基盤層を掘り込んだ遺構が検出された。

試掘坑１・２・３・５では、標高 4.8 ～ 5.1 ｍ付近で弥生時代と古代の遺物包含層（Ⅳ層）が確認された。また、各試掘坑のⅢ層から山茶碗が出土したことから、鎌倉時代の遺構が残されている可能性も推測された。

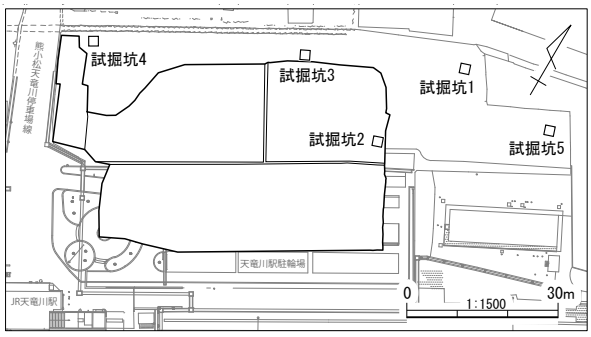


Fig.2　試掘坑配置図

このように、いずれの試掘坑からも遺跡の存在を示す結果が得られ、従来よりも大きく東へと遺跡の範囲が広がることが判明したため、埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行った上で、本発掘調査を実施することとなった。

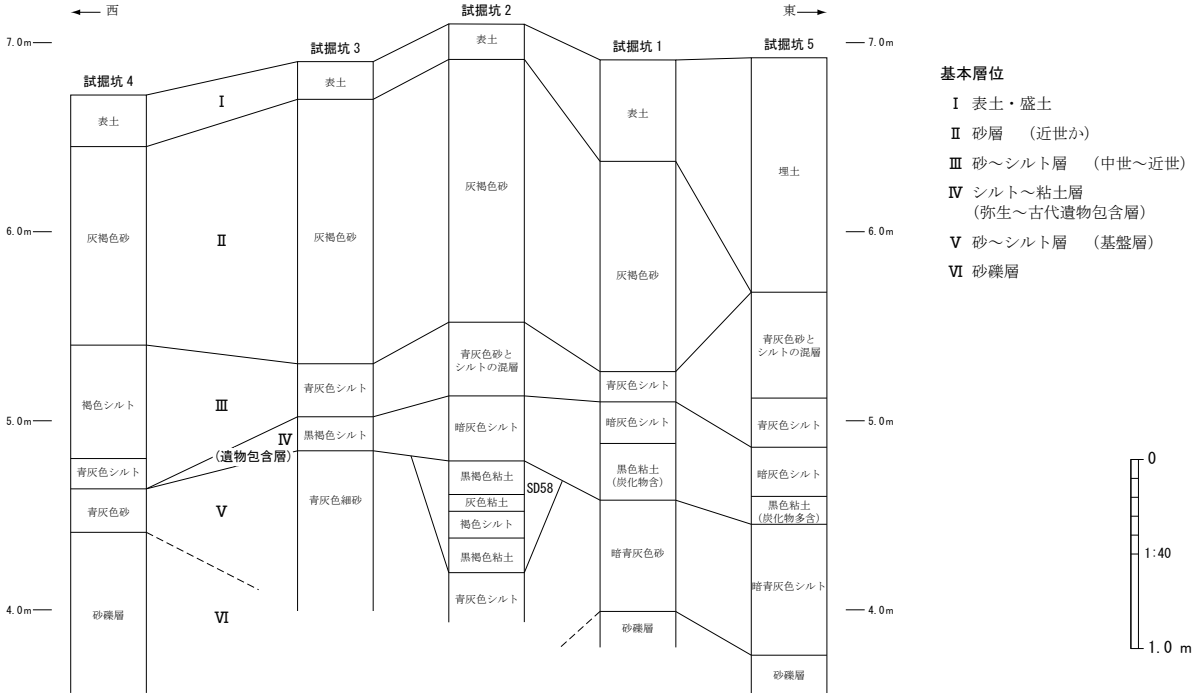


Fig.3　試掘坑土層柱状図

３　調査の方法と経過

（１）調査方法

調査区・グリッドの設定　発掘調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に合わせた 10 ｍ間隔のグリッドを設定した。調査地区の北西隅（X ＝ -141990、Y ＝ -66030）を原点とし、東西方向にアルファベット、南北方向に数字をそれぞれ組み合わせた。各グリッド名は北西の基準点を名称とした。発掘調査区は整備事業の工程との兼ね合いにより、調査対象地を１～４工区に４分割して調査を行った。

表土掘削　調査対象地の遺物包含層上面までは重機（バックホー）を用いて除去した。表土および盛土は 1.2 ～ 2.0 ｍの厚さがあり、中間層は 0.3 ～ 0.6 ｍの厚さで堆積していた。標高 4.8 ～ 5.3 ｍ付近まで掘削した。

包含層掘削・遺構精査　重機で表土などを除去した後、鍬、スコップ、鋤簾等を使用し、人力による包含層掘削と遺構精査を行った。

遺構掘削　遺構検出後、移植ゴテや竹ベラ等を使用し、遺構埋土を掘削した。遺構の埋没状況を把握するため、適宜セクションベルトを設定し、土層断面図を作成した。また、土器集積土坑など土器が多量に出土した遺構や特徴的な遺構は、出土状況図を作成した。出土状況図で図示できなかったものや、特徴的な遺物については取り上げの際に出土位置を測量した。

図面作成　遺構の測量は基準点やグリッド杭をもとに、トータルステーションを用いて行った。遺構の土層断面図の測量も同様の方法で行い、ともに縮尺 20 分の１で作成した。また、遺物出土状況図は一部写真測量を使用し、縮尺 10 分の１で作図を行った。

写真撮影　写真撮影は主に銀塩フィルムを用いた。フィルムはモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムを使用し、６×７判を主体とした。全景写真や重要遺構については４×５判を使用し、35㎜判とデジタルカメラを補助的に使用した。なお、全景写真の撮影にはローリングタワーを使用した。

整理作業　洗浄・注記等の基礎整理作業は、現地調査と並行して現場事務所にて実施した。本格的な整理作業は、現地調査翌年度の 2013 年６月から 2014 年２月まで浜松市東区天龍川町の株式会社フジヤマ事業本部において実施した。

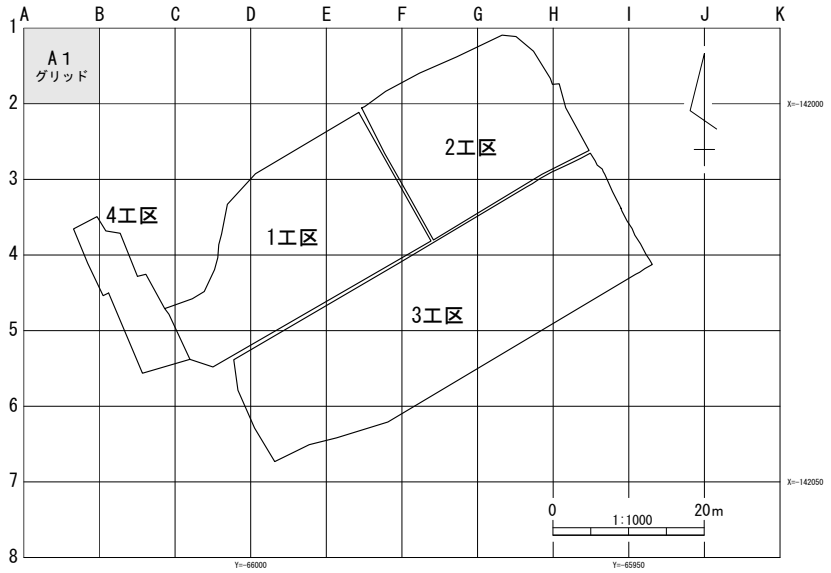


Fig.4　グリッド配置図

（２）調査経過

４工区の調査　１～３工区に先駆け、調査対象地区の出入口にあたる４工区の調査を、2012 年６月 25・26 日の２日間で実施した。調査の結果、遺構は確認されなかったが、遺物包含層から、弥生土器、須恵器、土師器、灰釉陶器等が出土した。土層断面図と調査区平面図の測量を行い、調査を完了した。

１工区の調査　７月 30 日から１工区の表土掘削を開始し、８月３日までの５日間で表土掘削作業を完了した。８月１日から作業員を導入し、調査の準備を整えた後、９月３日まで包含層掘削・遺構精査を行った。８月９日、遺構精査中に銅鐸鈕の破片が出土した。９月４日～ 10 月４日まで遺構掘削を行い、10 月５日に全景写真を撮影した。８日に１工区の調査を完了した。なお、土器洗浄・注記等の基礎整理作業は、１工区現地調査終了後の 10 月８日から開始した。

１工区では、古代の掘立柱建物（SH01・SH02）や、弥生土器集積土坑（SK07 ほか）、銅鐸鈕の破片が出土した SK06 などを検出した。

２工区の調査　10 月 24 日から２工区の表土掘削を開始し、26 日から作業員を導入し、31 日にかけて包含層掘削を行った。11 月２日～８日に遺構精査を、11 月９日～ 12 月３日に遺構掘削を行った。天候が作業工程に若干の影響を及ぼしたものの、12 月 11 日に全景写真を撮影し、12 日に２工区の調査を完了した。

Tab.1　発掘調査工程表

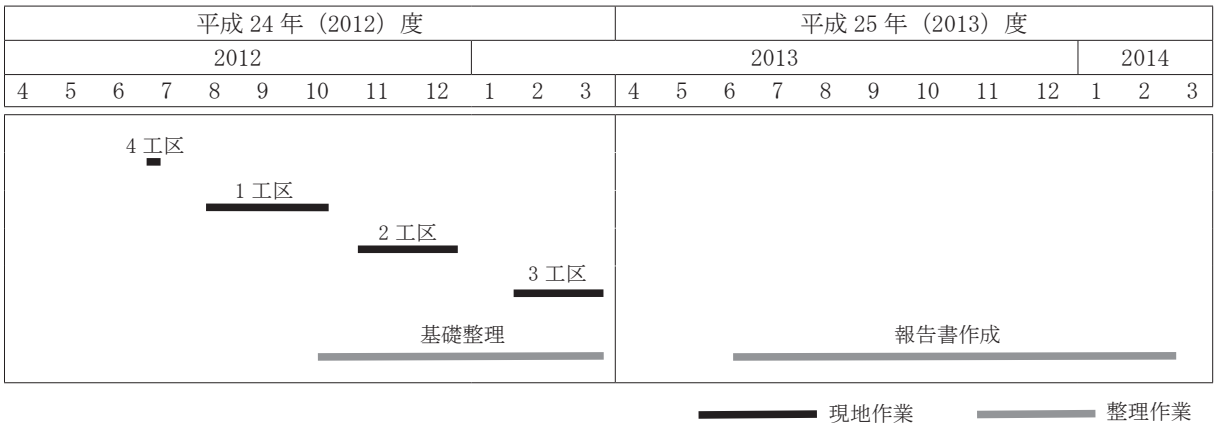


Fig.5　調査風景

Fig.6　銅鐸検出状況

２工区は、１工区と比較してやや遺構密度は薄く、特に中央部から北部にかけては遺構はほとんど検出されなかった。遺構としては、土器が多く出土した弥生時代の大型土器集積土坑（SX01）や溝（SD51 ほか）などが検出された。

３工区の調査　１月 15 日～ 25 日に表土掘削を実施した。21 日から作業員を導入し、包含層掘削・遺構精査の作業を並行して行った。29 日の遺構精査中に、SD109 上層から銅印が出土し、周辺からは墨書土器や灰釉陶器なども出土した。２月７日～３月９日に遺構掘削を行った。３月 14 日に全景写真を撮影し、22 日に調査を完了した。なお、現地調査と並行して行っていた基礎整理作業も、３月 22 日までに完了した。

３工区は今回の調査区の中で一番広い面積であり、遺構・遺物ともに密度が濃かった。土器集積土坑（SK352・SK361 ほか）や溝などの弥生時代の遺構も１・２工区と同様に検出されたが、特筆すべきは１・２工区に比べ古代の遺構が数多く検出されたことである。掘立柱建物（SH03 ～ 09）や井戸（SE02）、溝（SD107・SD109 ほか）などが検出され、特に SD107 からは須恵器や灰釉陶器、土師器等の遺物が多く出土した。

成果の公開　発掘調査期間中は、調査成果を市民へ伝えるため、随時「発掘調査通信」を発行し、現地の道路沿いに掲示するとともに、設置したポストに入れて配布した。また、銅鐸鈕出土に伴い 2012 年９月 15 日に現地説明会を実施した。地域の方の関心は高く、遠方からの方も含め 550 人の見学者が来訪した。その後、浜松市博物館において、出土した銅鐸鈕の速報展示を９月 17 日～ 10 月８日に、銅印の速報展示を 2013 年３月６日～４月７日に実施した。

整理作業　現地調査翌年度の 2013 年６月～ 2014 年２月に、浜松市東区天龍川町の株式会社フジヤマ事業本部において整理作業を実施した。遺物の接合・復元、遺物実測・トレース、遺物写真撮影などを実施し、報告書の編集・執筆を行った。

調査参加者

現地調査	池田典子、伊藤均、植田嘉明、内山孝彦、大石稔、影山文子、木下益男、金原知一、倉田秀彦、佐々木與佐ェ門、鈴木勝太郎、鈴木由美子、永井攻、野沢豊秀、野本徹、橋爪博幸
整理作業	奥野加織、田口久子、豊田七重、野沢豊秀、前島里美、水野知恵子

Fig.7　現地説明会風景

Fig.8　整理作業風景

４　遺跡をめぐる環境

（１）立地環境

松東遺跡は、天竜川の下流域の沖積平野に位置する。遺跡の東方約１km に安間川、西方約２km に芳川、両河川のほぼ中央を宮井戸川が流れ、芳川に合流している。遺跡周辺部は平坦な市街地となっており、南接して JR 東海道線天竜川駅が立地する。

堤防が整備される以前の天竜川は、流路変更を繰り返し、大小の支流が平野全体を網の目のように流下していた。河道や湿地の間に形成された微高地は、古くから居住適地となっており、松東遺跡もそのような微高地上に位置している。

（２）歴史的環境

弥生時代　天竜川の沖積平野の開発は縄文時代晩期にさかのぼることが明らかになっている。これまでの調査から、天王中野遺跡、宮竹野際遺跡、山の神遺跡、松東遺跡、森西遺跡から、わずかに縄文土器が出土している。宮竹野際遺跡では、弥生時代前期の可能性がある水田跡が発見されているが（浜文協 1994)、本格的な開発は弥生時代中期以降に始まったと考えられる。

弥生時代中期から後期にかけて､多くの集落や水田の痕跡が確認されている。大蒲町村東Ⅰ遺跡、森西遺跡、越前遺跡、寺西遺跡などがあげられ、松東遺跡、山の神遺跡、将監名遺跡では環濠集落が確認されている。

浜松市では、これまで 20 個以上の銅鐸が確認されている。中でも、天竜川下流の平野部は有力な銅鐸出土地の一つであり、松東遺跡からは近畿式銅鐸の飾耳片が（浜文協 1990b)、約 0.5km 西方の木船遺跡ではほぼ完全な三遠式銅鐸２口が、約３km 南西の芳川町のツツミドオリ銅鐸出土地においては銅鐸２口（１口は三遠式、もう１口は所在不明）が出土した。また、森西遺跡からは、銅鐸形土製品の鈕部分が発見された（浜文振 2005)。これらのことから、弥生時代後期のこの地域に一定の勢力を持った拠点的集落群が形成されていたと考えられる。

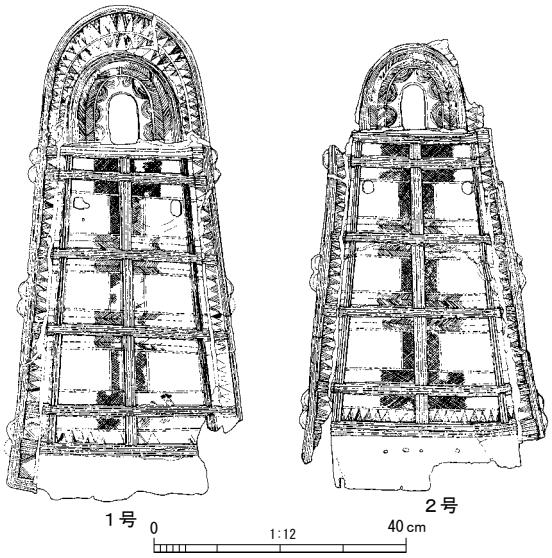


Fig.9　木船銅鐸　１号・２号

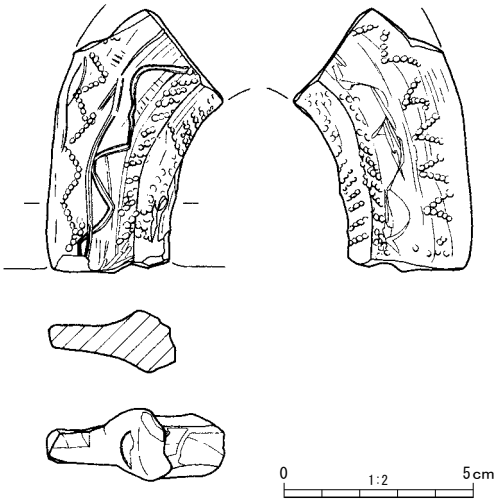


Fig.10　森西遺跡 銅鐸形土製品

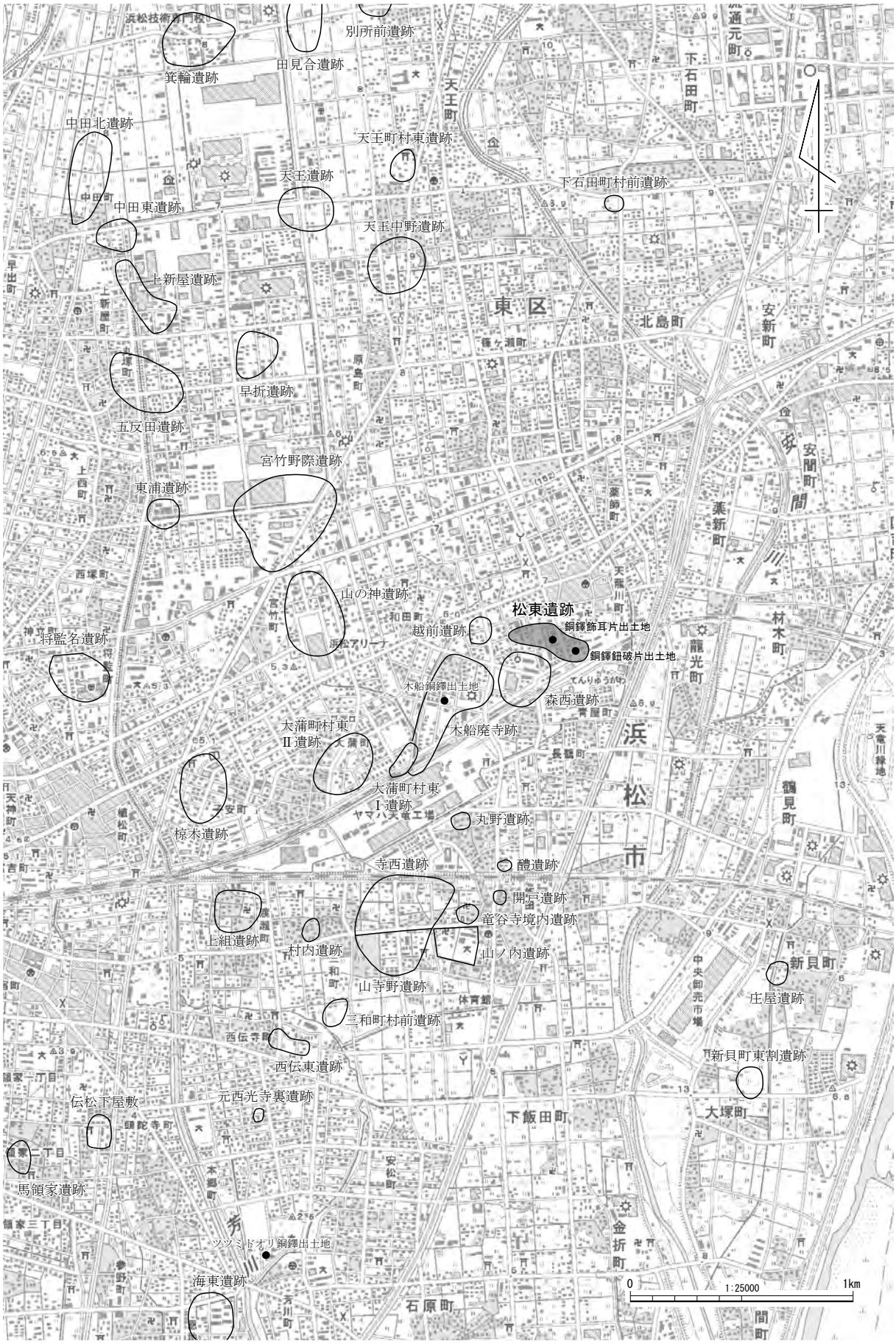


Fig.11　松東遺跡周辺の遺跡分布

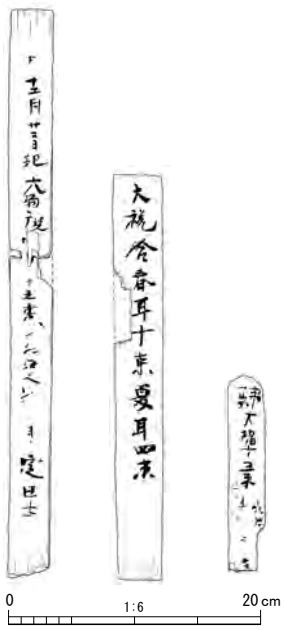


Fig.12　大蒲村東Ⅰ遺跡 木簡

古墳時代　古墳時代の沖積平野上では集落が減少し、代わって天竜川両岸の磐田原台地と三方原台地の縁辺部で古墳が数多く確認されるようになる。

沖積平野にある古墳時代の遺跡として、天王中野遺跡、宮竹野際遺跡、山の神遺跡、越前遺跡、木船廃寺跡、大蒲町村東Ⅰ遺跡、海東遺跡があり、古式土師器が出土している。また、大蒲町村東Ⅱ遺跡では竪穴住居跡も確認されている（浜文協 2004）。しかしいずれも断片的な資料にすぎないため、集落の全体像をつかむには至っていない。

奈良時代　奈良時代に律令制の影響が及ぶと、天竜川下流域の沖積平野に国郡里（郷）制による長田郡が設置された。長田郡は、和銅２年（709）に南北に分割され、以後、北側を長上郡、南側を長下郡と呼ぶ。松東遺跡は長上郡に属すると考えられている。

長田郡及び分割後の長上郡の郡家は、木船廃寺跡に近い大蒲町村東Ⅰ遺跡近辺に中枢部が存在した可能性が大きい。近隣の木船廃寺跡、大蒲町村東Ⅰ遺跡、森西遺跡、越前遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡などを包括する地域は永田遺跡群と総称され、郡家の存在をうかがわせる木簡、墨書土器、円面硯、布目瓦や、規則性のある掘立柱建物跡が発見されている。

木船廃寺は、長田郡家の成立とほぼ同時期に創建された、浜松市内最古の寺院である。2010 年度の調査で、境内地周辺から古代瓦が大量に出土したことから、位置がほぼ特定された（浜文振 2011）。その性格は、後の長上郡の郡司層を担う勢力が造営した私寺で、郡家隣接寺院であると考えられる。木船廃寺は、補修を行いながら平安時代前半まで存続していたことが確認されている。

また、大蒲町村東Ⅰ遺跡では、宮井戸川の近くに、弥生時代中期以前に形成された埋没河川が確認されている（浜文協 2004）。前出のとおり郡家関連遺跡の分布を見ると、古代の宮井戸川と想定される埋没河川の流域に集中している。大蒲町村東Ⅰ遺跡近辺に郡家中枢があり、後に出先機能を宮竹野際遺跡付近に追加したと考えることもできる。

上組遺跡、大蒲町村東Ⅱ遺跡、天王町村東遺跡、箕輪遺跡においても、奈良時代の集落の痕跡が発見されており、郡家周辺に一定の人口を抱えていた事がわかる。これらの遺跡は芳川と安間川の間の一定範囲に分布し、松東遺跡はそのほぼ東端に相当する。

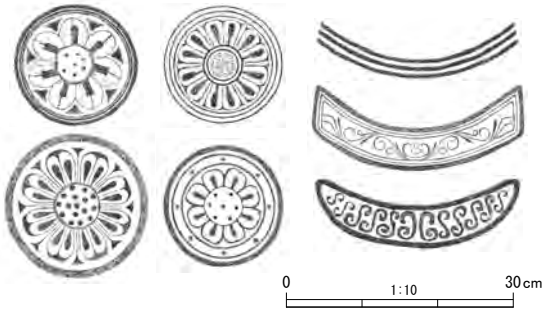


Fig.13　木船廃寺跡 軒丸瓦・軒平瓦

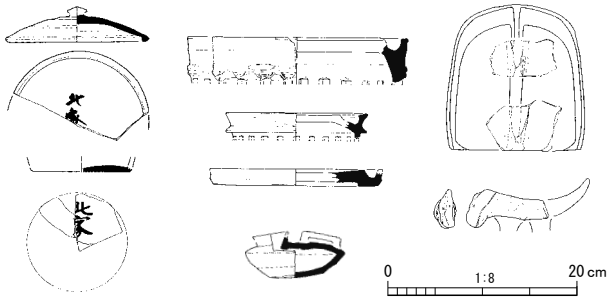


Fig.14　宮竹野際遺跡６次 官衙関連遺物

平安時代　平安時代に律令制が崩れると、長上郡内には市野荘、池田荘、蒲御厨などの荘園が成立した。松東遺跡は蒲二十四郷のひとつ橋羽郷に含まれていた。蒲御厨は、蒲氏が開発し伊勢内宮に寄進した土地のことで、これにより蒲氏は蒲神明宮の神官として荘園経営を行った。山の神遺跡からは、一町四方の大溝で区画された 12 世紀代の屋敷地が確認されており（浜文協 1989）、有力階層の居住地と考えられる。源義朝の異母兄弟である源範頼は、蒲御厨で生まれ、蒲氏の娘を娶ったとの伝承が残る。

後の東大寺文書によると、蒲御厨の範囲は西は名塚町から丸塚町、北は原島町、東は安間町から大塚町、南は飯田町まで及び、木船廃寺跡を中心に約４km 四方に至る。

鎌倉時代以降　鎌倉時代には、山の神遺跡、山寺野遺跡、寺西遺跡、宮竹野際遺跡で掘建柱建物や井戸、水田遺構が確認されている。大蒲町村東Ⅱ遺跡付近には、蒲屋敷という字名と屋敷堀跡の地割が確認できる。

蒲御厨は戦国時代には今川氏の領地となった。山の神遺跡、宮竹野際遺跡からは、14 世紀に湿地を掘り下げ水田と畑を造成した島畑の痕跡が確認されている。古代の集落地の上に農地が拓かれ、松東遺跡周辺は農村景観が広がっていたと考えられる。

松東遺跡の東には応長元年（1311）に開かれた日蓮宗妙恩寺がある。松東遺跡西側の静岡県指定天然記念物「法橋の松」は、妙恩寺の建立者である金原法橋の屋敷内にあったとされ、かつての広大な寺域がうかがわれる。後の元亀三年（1572）、武田方に追われた徳川家康が妙恩寺に逃げ込み、かくまわれたと伝わる。

（３）松東遺跡をめぐる調査履歴

発見の経緯　当初は埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかったが、隣接して越前遺跡、木船廃寺跡などの遺跡が存在することなどから、1989 年 11 月に企業社屋建設の際に工事立会を行い、遺構・遺物が発見されたため、周辺の小字名より松東遺跡と名付けられた。

１次調査　工事立会で遺跡の存在が確認された企業社屋建設地にて、1989 年 12 月に（財）浜松市文化協会が調査を行った（浜文協 1990a）。弥生土器などの遺物出土量は少量であったが、弥生時代後期の環濠を検出した。環濠は、南北方向に延びる幅約 3.0 m、深さ約 1.0 mで、断面形は底が平らな逆台形を呈する。

２次調査　１次調査区の南側隣接地でマンション建設に伴い、1990 年１月から３月にかけて（財）浜松市文化協会が調査を行った（浜文協 1990b）。１次調査で確認された弥生時代後期の環濠が検出され、東へ延びることが確認された。そのほかに掘立柱建物や中世以降の井戸が検出された。遺物は突線鈕３式の近畿式銅鐸の飾耳片が出土した。

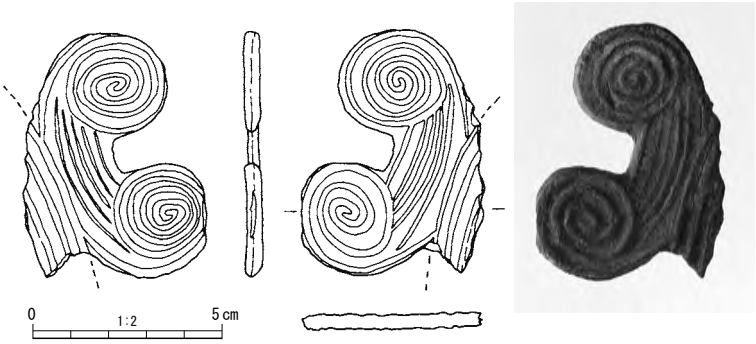


Fig.15　松東遺跡２次 銅鐸飾耳片

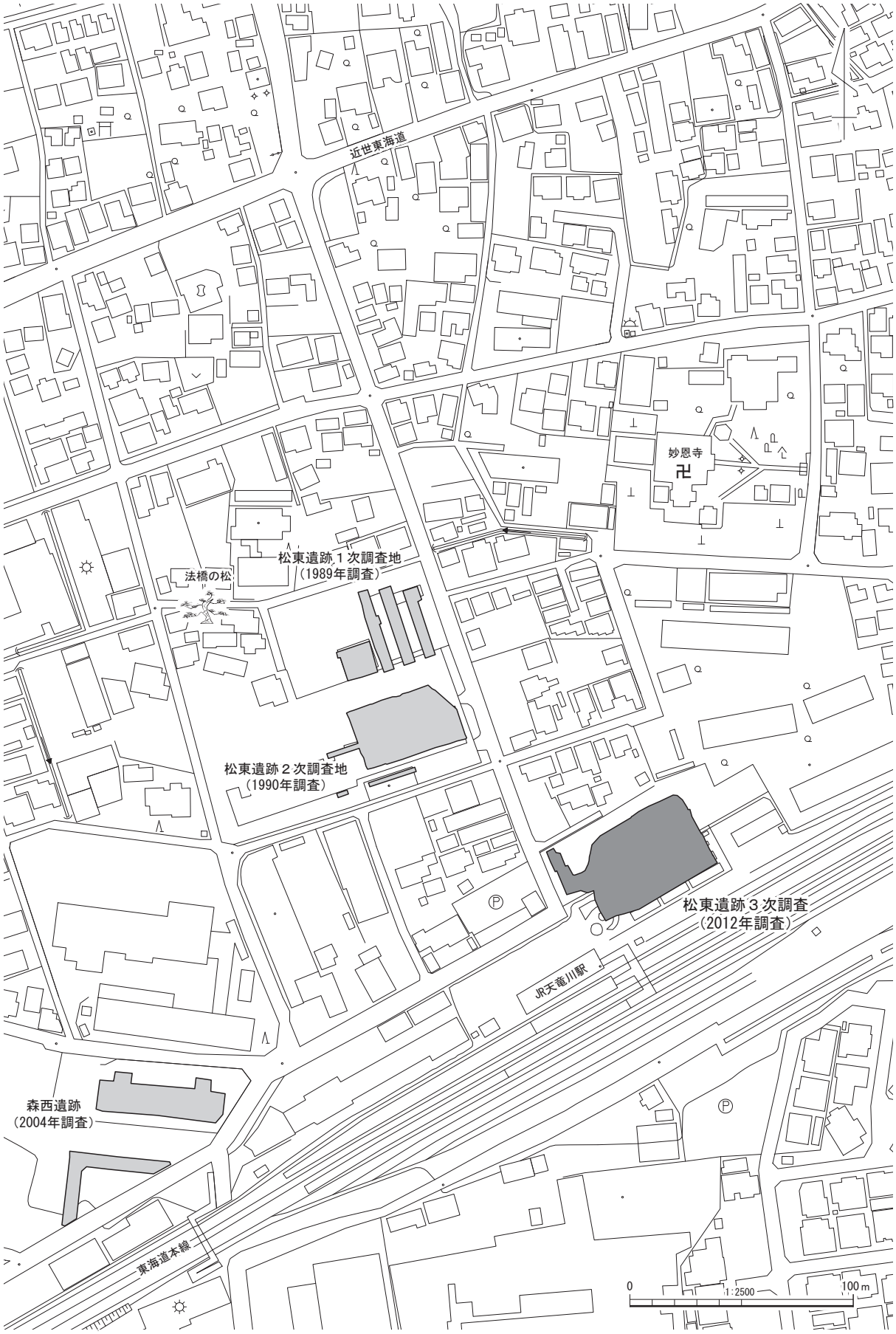


Fig.16　松東遺跡周辺の調査状況

第２章　調査成果

１　基本層位と遺構検出面

松東遺跡３次調査の基本層位は予備調査の結果を踏まえ、本調査で土層柱状図を作成し土層堆積状況を確認した（Fig.18）。土層は大きくⅠ～Ⅵ 層に分けられる。以下、各層を概観する。

Ⅰ層　表土および現代の盛土層である。0.15～0.7ｍの堆積がみられる。

Ⅱ層　灰褐色および褐色を呈する砂層である。厚い箇所では約1.4ｍの堆積がみられる。河川の氾濫等により一気に堆積した層と考えられる。遺物はほとんど含まれないが、近世頃の堆積層とみられる。

Ⅲ層　青灰色、褐色、暗灰色等を呈するシルトまたは砂の層である。ややしまりが弱く、0.3～1.0ｍの堆積がみられる。さらに数層に分層することができ、調査区の東側に向かって若干砂質が強まる傾向がある。中世～近世にかけての堆積層とみられ、遺物出土量は少ないものの、下層からは山茶碗が出土している。

Ⅳ層　黒色、黒褐色等を呈するシルトまたは粘土の層で、弥生時代および古代の遺物包含層である。0.3～0.5ｍ程度堆積しており、箇所によっては数層に分層することができる。本来ならば古代の遺構面がこのⅣ層中に存在するとみられるが、明確に層位を把握することが困難であるため、Ⅴ層上面において遺構確認面としている。

Ⅴ層　この層の上面を遺構検出面としている。２工区の中央部から北部にかけては青灰色の細砂層となっており、遺構・遺物の密度は薄い。それ以外の箇所については褐色のシルト層で、グライ化によって青灰色を呈する箇所がみられる。調査区西側ではこの層が確認できない箇所もある一方で、厚い箇所では１ｍ以上の堆積がみられ、下層であるⅥ層を確認できなかった箇所もある。調査区の地形は、中央部から東部にかけて高く、南西に向って低く傾斜している。

Ⅵ層　直径３㎝前後の円礫からなる砂礫層である。Ⅴ層がみられない調査区西側の一部の箇所では、この層の上面で遺構を検出している。

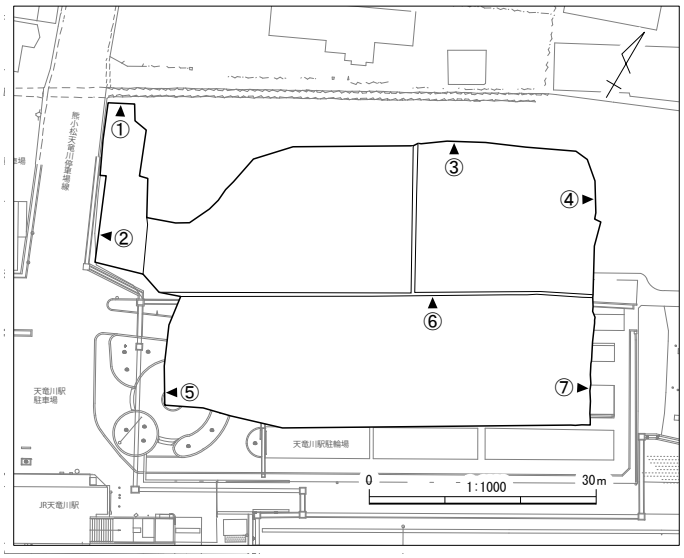
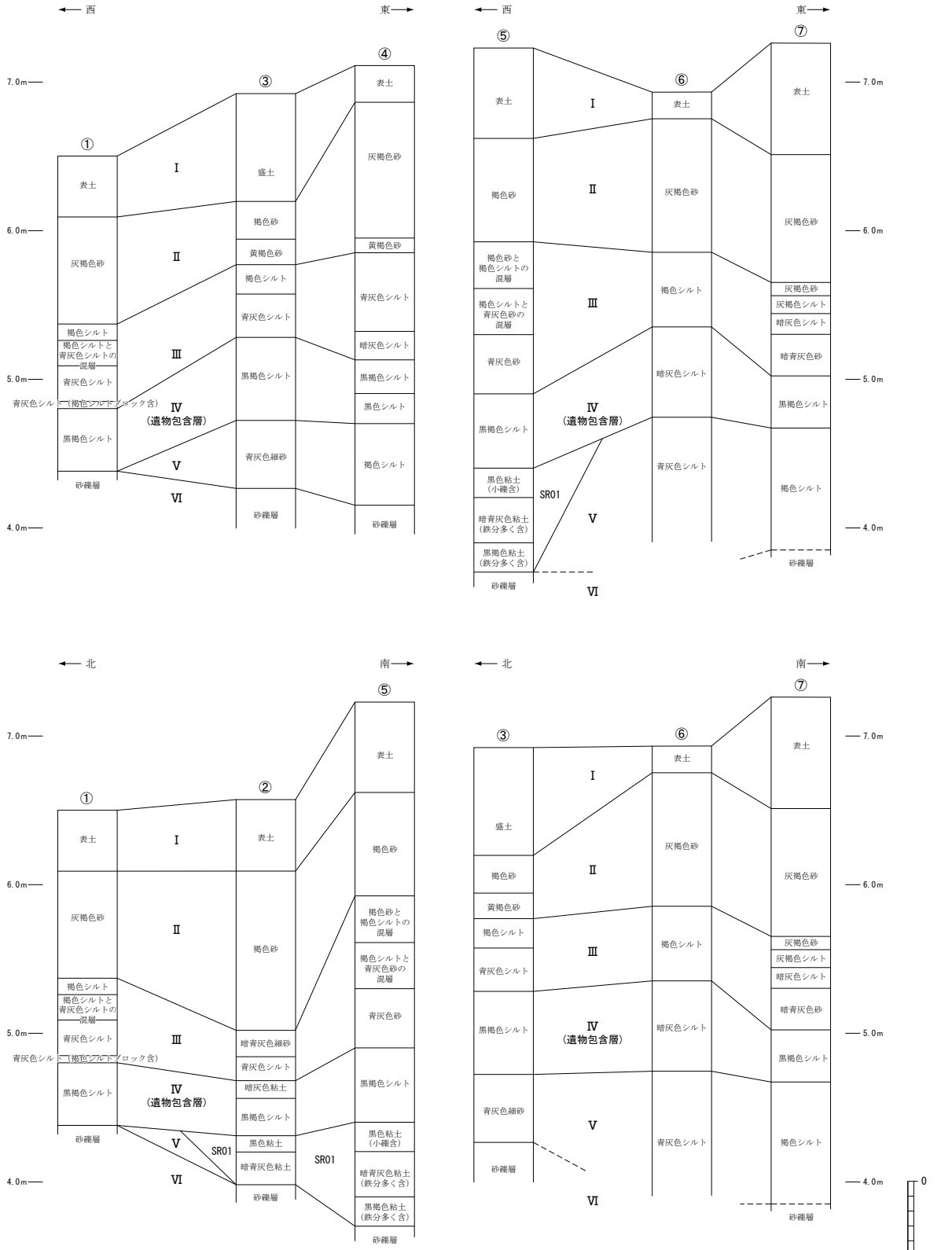


Fig.17　土層観察位置図

1　基本層位と遺構検出図



基本層位

Ⅰ　表土・盛土
Ⅱ　砂層　（近世か）
Ⅲ　砂～シルト層　（中世～近世）
Ⅳ　シルト～粘土層　（弥生～古代遺物包含層）
Ⅴ　砂～シルト層　（基盤層）
Ⅵ　砂礫層

Fig.18　調査区土層柱状図

２　弥生時代

（１）検出遺構の概観

１～３工区のほぼ全域にわたって弥生時代後期から終末期にかけての遺構を検出した（Fig.19）。なお、元屋敷Ⅰ式期を古墳時代初頭に含める考え方もあるが、本書では弥生時代終末期とする。

検出された弥生時代の遺構は、土坑・溝・小穴である。土坑は、SX01 をはじめとして土器が集中して出土するものが多く確認された。これらの分布にまとまりは認められず、調査区全域に分散している。また、SK06 からは銅鐸の鈕の破片が出土している。溝は、SD60・SD103 は低位面へと延びていることから排水溝として、SD03・SD51 は直線的に延びていることから区画溝としての性格がそれぞれ考えられる。多数検出された小穴は、その用途を確定できるものはみられないが、一部は柱穴とみられることから､掘立柱建物が存在した可能性は考えられる。調査区西側には自然流路（SR01）が検出され、遺跡西側一帯に湿地帯が広がっていたことが想定される。調査区北側も徐々に低位面へ移行しており、遺構は希薄である。

（２）大型土器集積土坑（SX01）

SX01（Fig.20）　２工区 F1・F2 グリッドで検出した不定形の大型土坑で、長軸 5.6 ｍ、短軸 2.4 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。２工区北側の遺構が希薄になる付近に位置している。土坑の東側一部を SD51 に切られているが、ほぼ単独で存在しているといえる。土坑内の北側では焼土が検出された。被熱を受けた土器があることから土坑内で焼かれたと考えられたが、焼土の堆積状況が帯状ではなくブロック状になっていることから、土坑内で焼かれたものではなく他の場所で焼かれたものが集

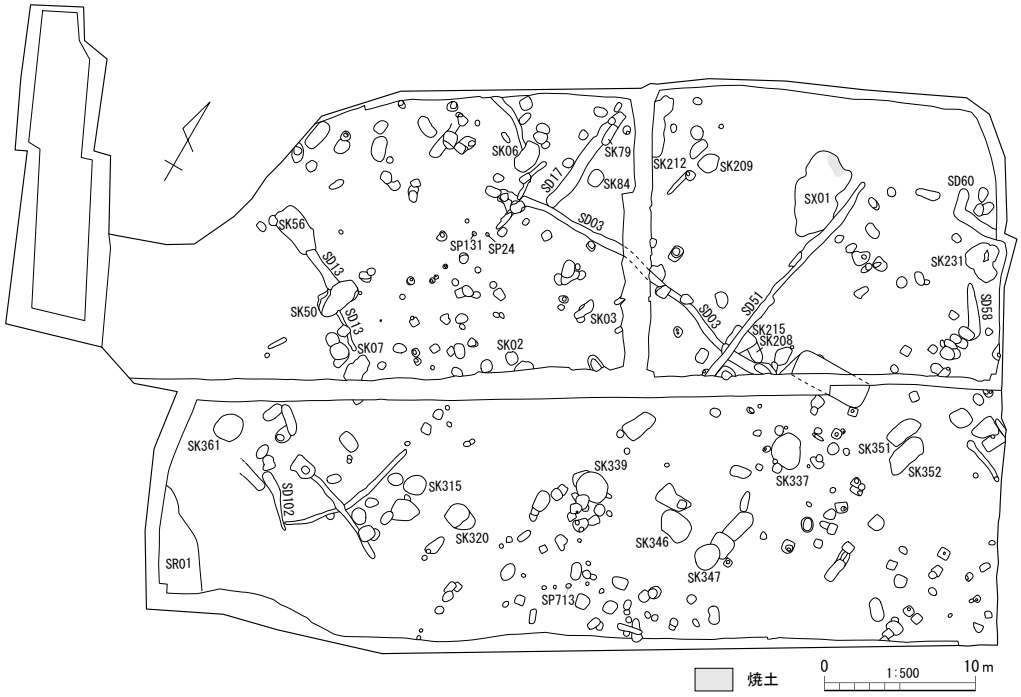


Fig.19　弥生時代 遺構分布図

められて SX01 に廃棄されたと考えられる。遺物はある程度のまとまりで捉えられる箇所もあるが、基本的に土坑全体からまんべんなく出土している。出土遺物は豊富だが破片が多く、図示した遺物 75 点の中で全体を復元できた個体はほとんどない。また、詳しくは後述するが、山中式期から欠山式期の終わりごろまでの土器が出土しており、長期にわたって SX01 が機能していたと思われる。集落のはずれに位置する立地や遺物の出土状況から、SX01 は廃棄土坑として使用されていたと思われる。

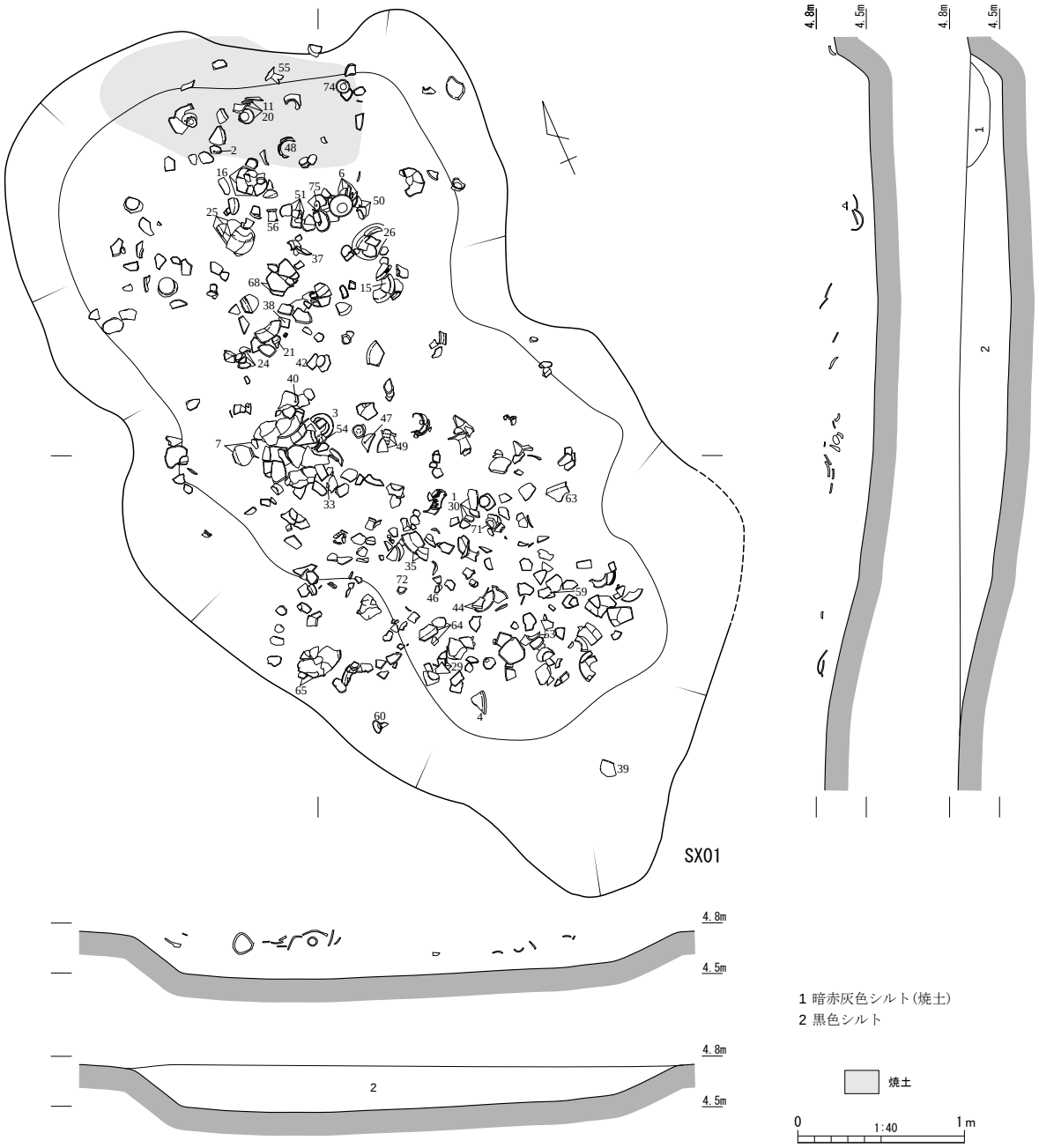


Fig.20　SX01 実測図

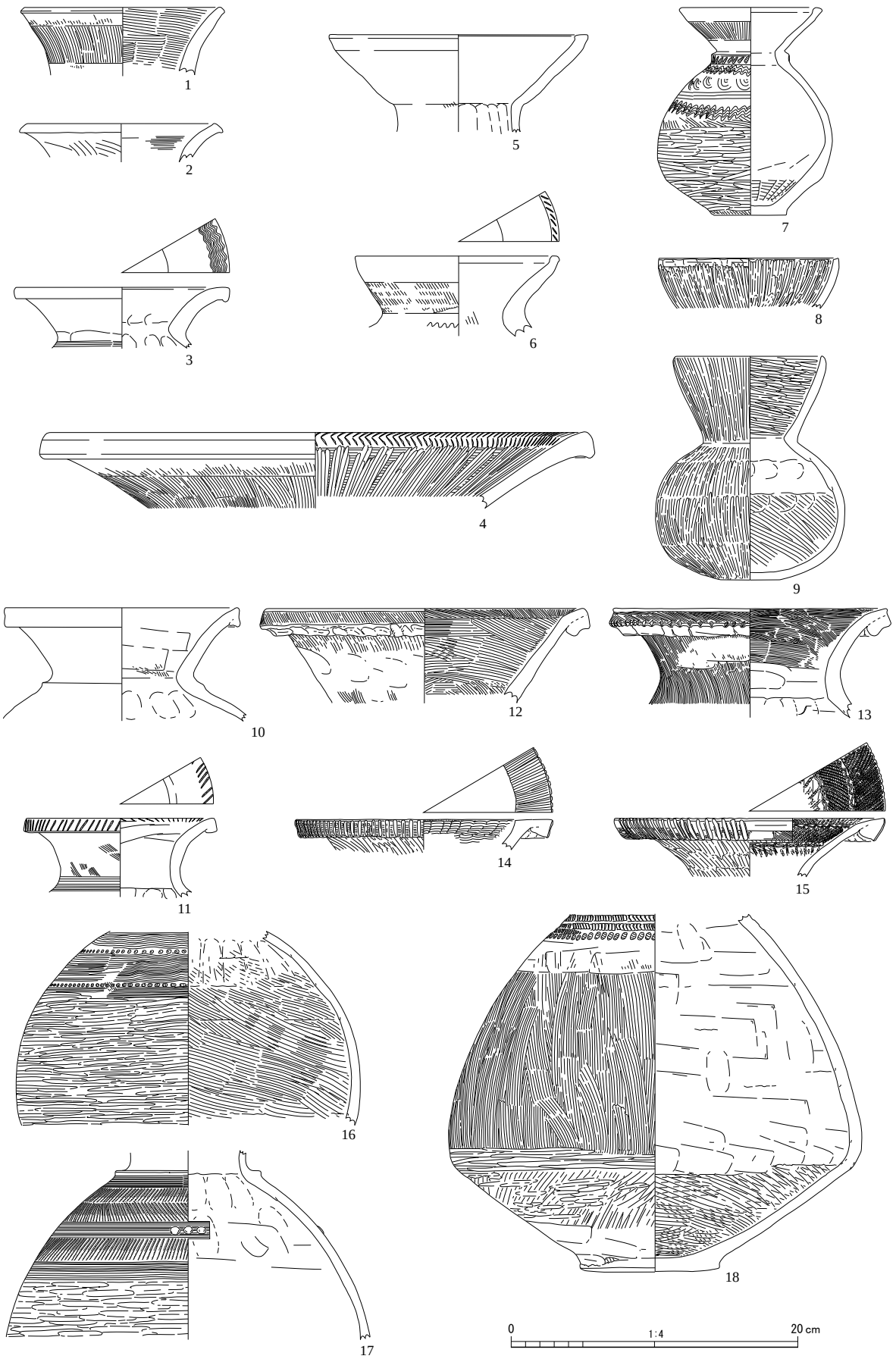


Fig.21　SX01 出土遺物（１）

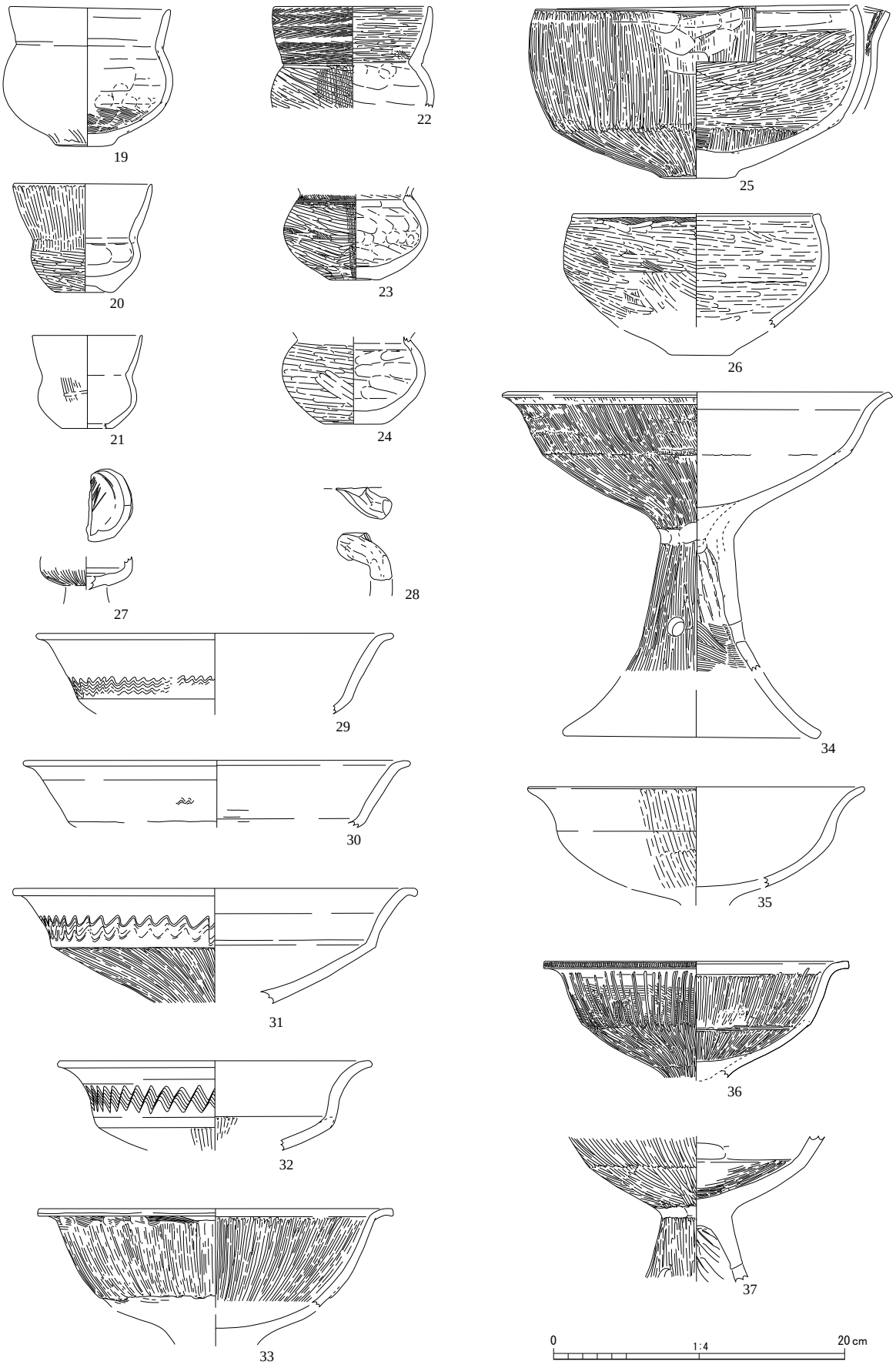


Fig.22　SX01 出土遺物（２）

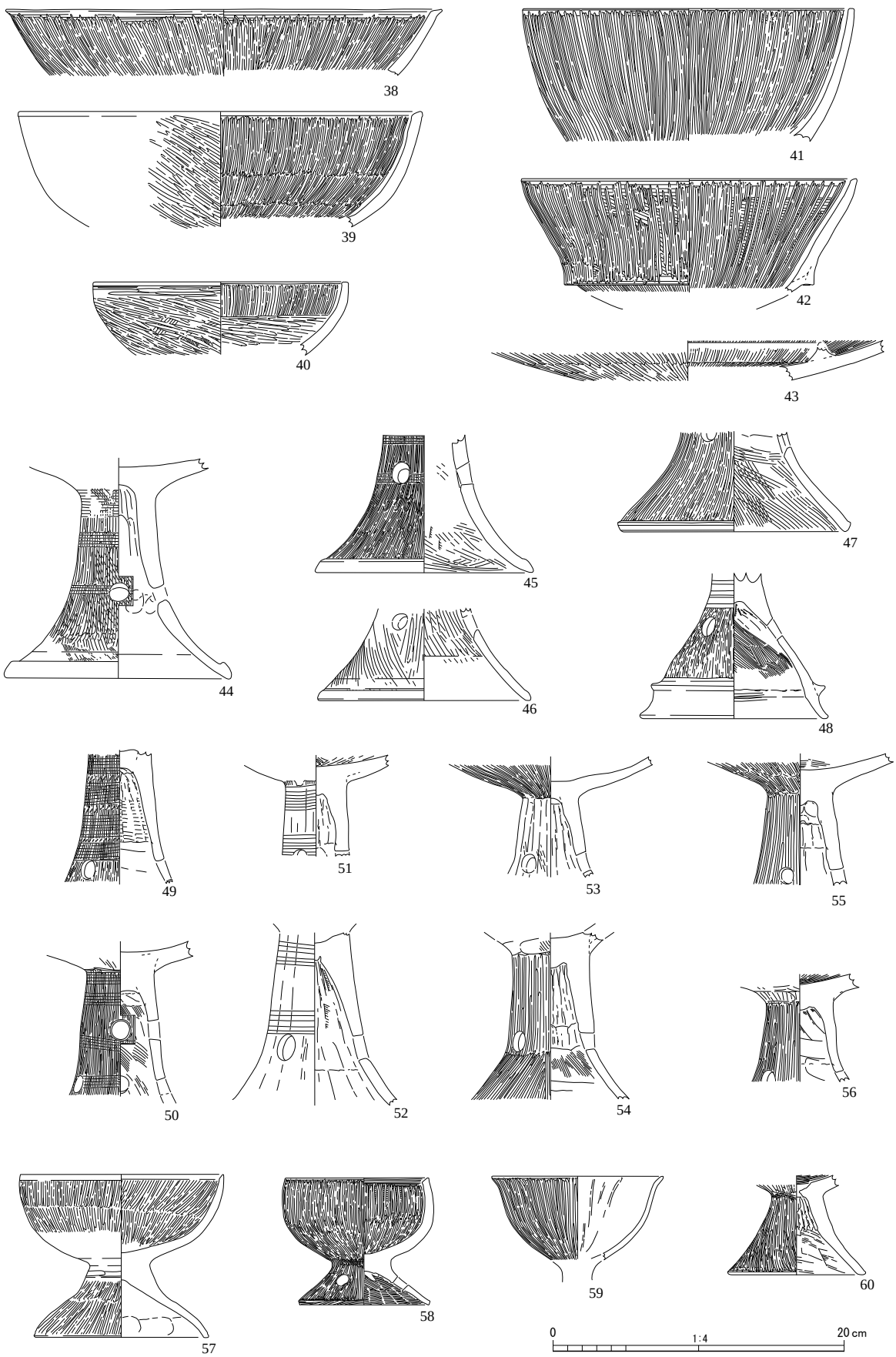


Fig.23　SX01 出土遺物（３）

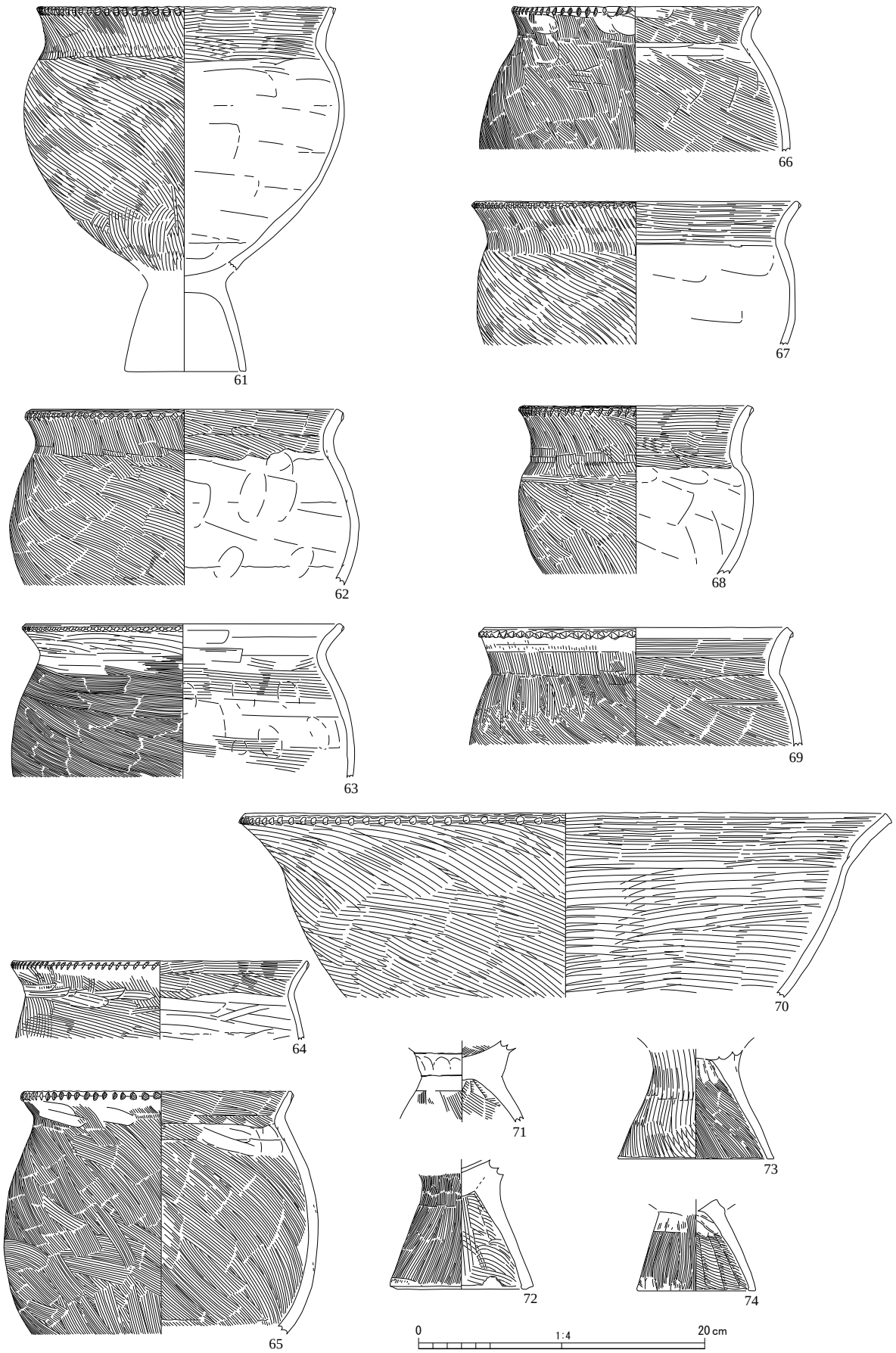


Fig.24　SX01 出土遺物（4）

SX01 出土遺物(Fig. 21 ～ 25)　１～ 75 は SX01 から出土した遺物である。１～ 18 は壺である。口縁形態は､広口（１)､外反口縁（２)､拡張口縁（３・４)、内彎口縁（５～８)、直口（９)、折返口縁（10 ～ 15）の各種が確認できる。４は口縁内面に羽状の刺突文が施され、胎土は緻密である。７は一部口縁が欠けているが、ほぼ完形の小型壺である。側肩部には波状文、横線文、扇形文、刺突文が施されている。14 は口縁部外面に縦の押圧文、内面は平行に並ぶハケ状の調整と簾状文に近い波状文が施され、丁寧なつくりをしている。12・13・15 は菊川式の搬入品であろう。15 は口縁内面に結節縄文を施している。16・17 の側肩部は横線文と刺突の組み合わせが施され、18 は側肩部に櫛により横方向に刺突された文様が入る。また、１個体の中で破片ごとに被熱しているものとしていないものがあり、破断面にもススが付着していることから、割れた後に被熱を受けたことがわかる。

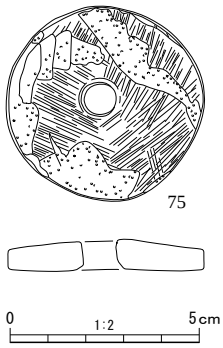


Fig.25　SX01 出土遺物（５）

19 ～ 27 は鉢である。小型直口鉢（19 ～ 21)、装飾小型直口鉢（22)、片口鉢（25)、小型脚付鉢（27）と多種類の鉢が確認できる。22 は羽状文の刺突の単位が長い特徴をもつ。25 は内外面とも丁寧なミガキが施されている。28 は把手である。

29 ～ 60 は高坏である。山中式系統（29 ～ 32）と欠山式系統（41･42）が混在する。坏部の形態は、外反坏部（29 ～ 32)、く字碗形坏部（33 ～ 36)、碗形坏部（39・40)、有稜（41・42）の各種が確認できる。34 は坏部と脚部との接合の様子が観察できた。36 には、簾状文のような細かい刺突が口縁に施され、ミガキは粗く下のハケが残る。43 は返付高坏で、坏部内面の特に返りの内側にススが付着しており、逆位にして蓋の用途として使用された可能性がある。他地域からの搬入品と思われる。脚部は、全体の形状がわかるものの中では外反しながら開くもの（44 ～ 47）が多数を占める。48 は装飾高坏である。50 は、脚部に上段１方向、下段３方向の２段の透孔をもつ。57 ～ 60 は小型高坏である。57 は碗形坏部で、口唇部は内傾している。脚部は低く、内彎している。58 は胎土が緻密で、内外面とも丁寧なミガキが施されている。口唇部は内傾している。脚部の扁平化が顕著で、欠山Ⅲ式期の中でも新しい様相をみせている。59 はく字碗形坏部で、器壁は非常に薄くつくられている。

61 ～ 74 は甕である。図示できた個体はすべて口縁端部に刺突をもっている。図示できなかった個体を含めても、確認できたもののなかで刺突をもたないものは１点のみである。71 ～ 74 は台付甕の脚台部で、脚部は直線的に開いている。71 にのみ接合部に粘土帯を廻らせている。

75 は石製の紡錘車である。泥岩製で、幅 5.2cm、厚さ 0.9cm の円形である。土坑内北側から土器と重なるようにして出土した。

小　結　遺物の出土量は大量にあったが、全体を復元できる個体は少なかった。そのなかでも時期の判断材料となりうる遺物をみていくと、山中式系統の高坏から欠山Ⅲ式期の中でも低脚化した小型高坏（58）など新しい様相を示すものまである。このことから、SX01 は掘削から廃棄・埋没まで一定期間機能していたと思われる。その中でも主体となる時期は欠山Ⅱ～Ⅲ式期といえるだろう。

（３）銅鐸出土土坑（SK06）

概　要　１工区北側に位置するSK06より銅鐸が出土した。近畿式銅鐸の鈕の破片で、鈕の頂部が大きく曲がり、飾耳は一部を残して欠損している。土坑南端の上層から、傾いた状態で出土した。共伴遺物は弥生土器があるが、いずれも小片である。

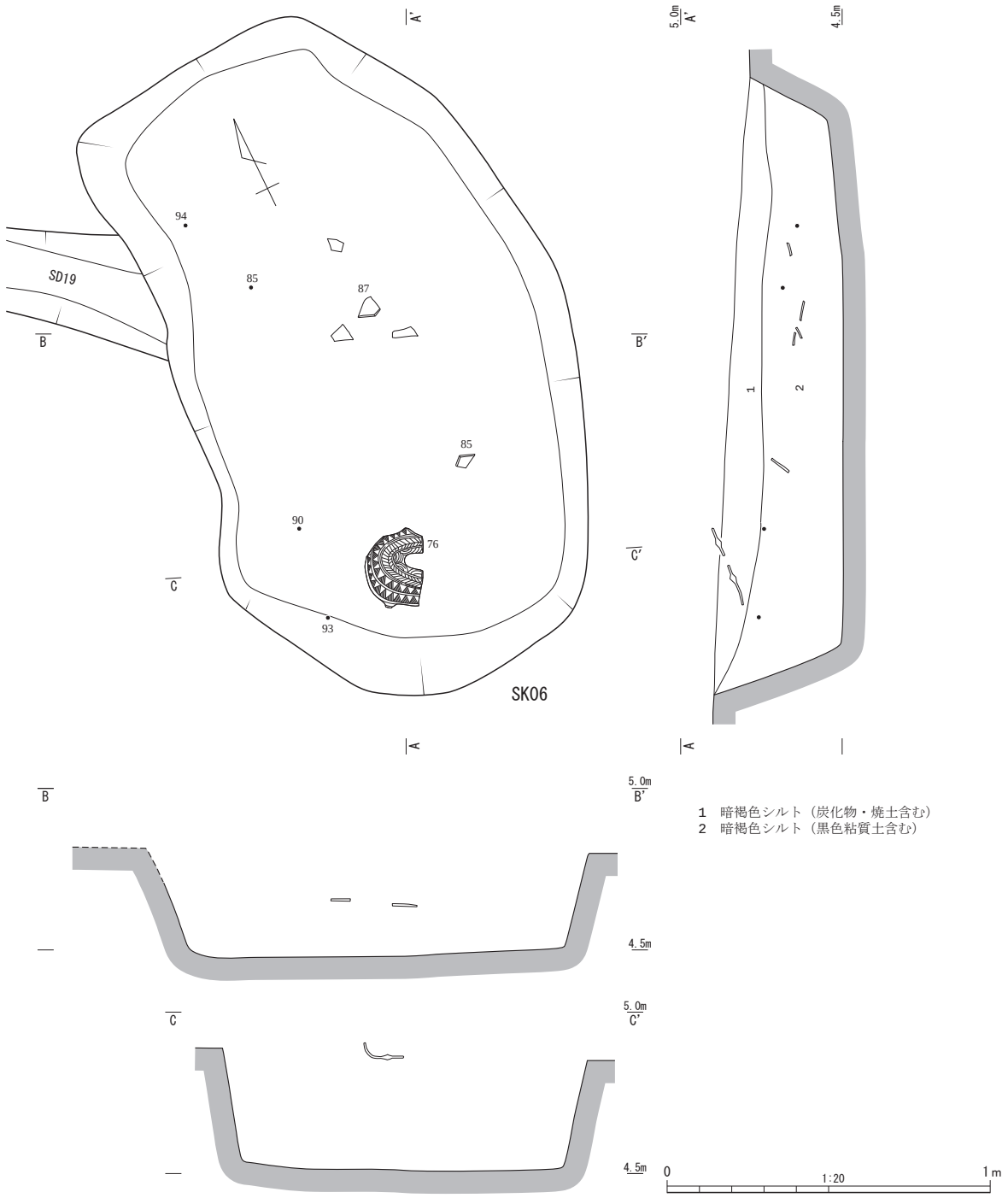


Fig.26　SK06 実測図

SK06（Fig.26）　D2グリッドとE2グリッドとにまたがって検出された。平面形は、長径約2.1ｍ、短径約1.2ｍの不整楕円形である。深さは約0.4ｍである。埋土は暗褐色シルトであるが、１層は、炭化物とパミス状の焼土を少量含んでいる。２層には焼土は見られず、炭化物の量も少ない。

１層からは、銅鐸の破片が出土した。鈕の破片で、第２文様帯付近から上は大きく曲がっていた。また、縦断方向では壁際の方が低い状況で、約23度傾斜していた。遺構検出作業の結果、遺構の検出面は銅鐸検出面より低くなったが、銅鐸が撹乱層に突出していたわけではない。銅鐸出土状況から見れば、土坑が概ね埋積した後の窪地内に置かれていたと解釈できる。しかし、下層の埋土である２層は他の土坑と比較すると遺物の出土量が少なく、有機物の混じりも少ない。また、中央に向って傾斜する堆積を確認することもできなかった。これらを考慮に入れると、２層は人為的に埋めた部分もあるように思える。銅鐸の出土状況をみると、鈕の傾斜方向が一般的な自然堆積の土層で得られる角度とは逆になっており、何らかの目的を持って置いた可能性も考えられる。

銅鐸以外の出土遺物は、弥生土器の小片であり、他の類似した土坑に比較すると、土器の出土量が少ない。

SK06出土銅鐸（Fig.27～29）　銅鐸の鈕は、残存高17.8cm（歪んだ状態）、残存幅25.2cm、重さ1,178gを測る。便宜的に出土した際の表面をＡ面とし、裏をＢ面とする。鈕は大きく歪んでいるため、現況での実測図（Fig.28）とともに、歪みを補正した復元図（Fig.29）も作図した。

鈕の頂部は、第２文様帯付近からＡ面側に大きく歪んでいる。Ａ面側でいえば右側の第２文様帯の半分以上が欠損し、舞に近い部分では菱環の外界線も欠落している。これに対して左側は外周突線まで残存し、飾耳も一部残存している。鈕頂部の飾耳は完全に欠落しているが、その痕跡は明確ではない。欠損した部分は、錆化が進行しており、相当以前に欠損していたと観察できる。

Ａ面右側の菱環の外界線と、第１文様帯の鋸歯文の２箇所に傷が認められる。前者は出土時の傷と思われるが、後者は傷の風化がみられ、いつ受けた傷かは不明である。また、両面とも鈕孔上縁を中心に錆瘤による黒褐色の変色が認められる。鬆は両面に認められるが、Ｂ面の方がＡ面よりやや目立っている。

鈕は、２条の外周突線で縁どられている。第１文様帯と第２文様帯は、２条の突線で界されている。いずれも内向きの鋸歯文が施されている。鋸歯文内の斜線方向は左上から右下方向である（Ｒ鋸歯文）。菱環と外縁との界線は３条、内縁との界線は２条である。菱環には、綾杉文が施されているが、両面ともに中央部に３条の突線が施され、綾杉文はこれを界として左右対称になる。内縁には内向きの重弧文が施されている。重弧文は、中央に１単位左右に各２単位の合計５単位が連続している。Ａ面中央やＢ面右側の重弧文には、線が２つに枝分かれするものがあり、描きなおしが認められる。鈕孔は縦長で、基部に１条の突線を施している。この突線は、舞に接続する部分で左右ともに欠落しており、鈕脚壁が剥落しているのではないかと思われる。突線の剥落している部分から、鈕脚壁の高さはは１cm内外と推定できる。外周突線は、鈕の全周の約半分が残存しているが、その外側１箇所に双頭渦文の飾耳痕跡がある。

第１文様帯、２文様帯の鋸歯文は、区画線、斜線ともに界線側にはみ出した部分が認められる。第１文様帯頂部付近には、外向きの弧線が見られるが、笵傷であろう。

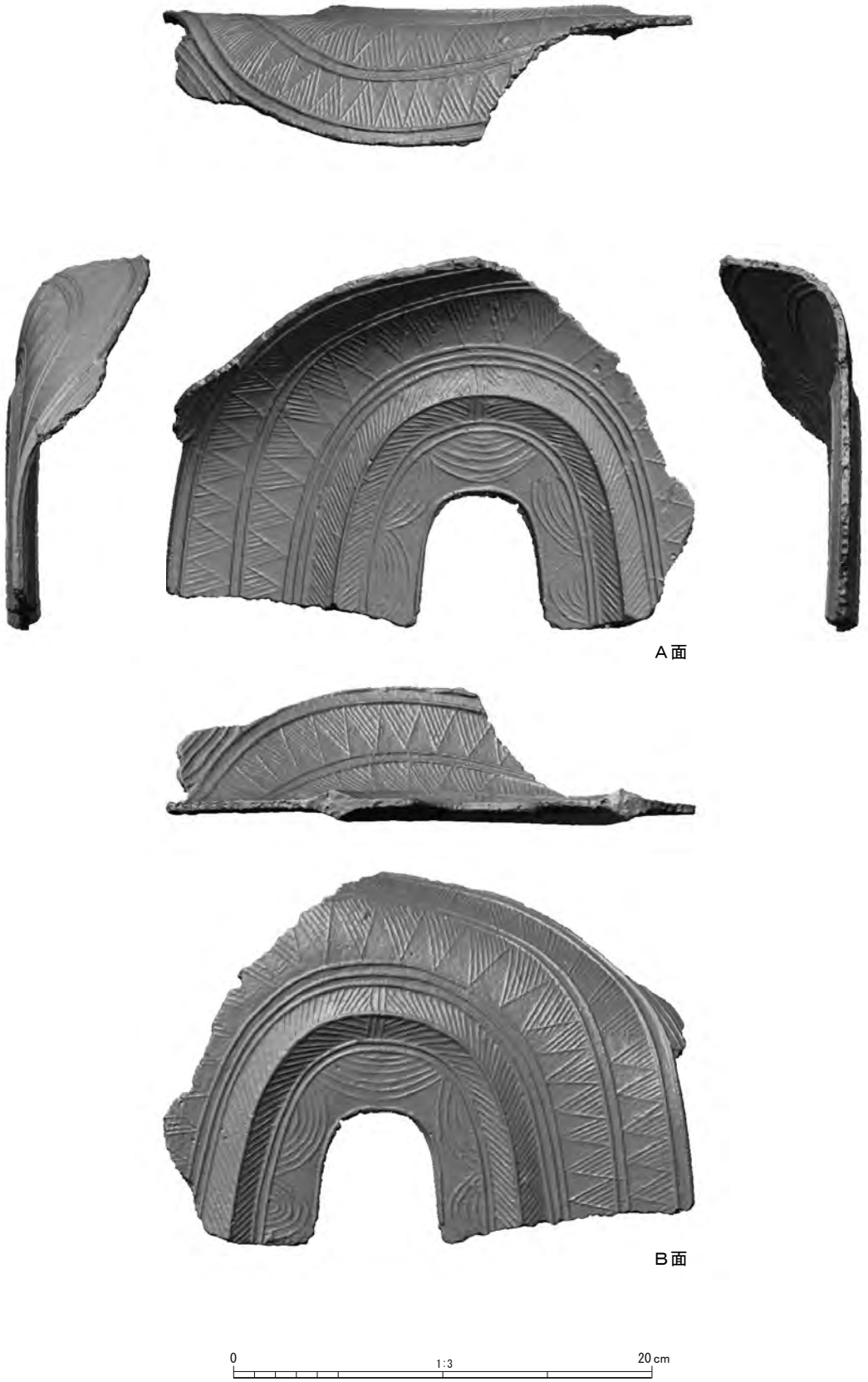


Fig.27　SK06 出土銅鐸三次元陰影図

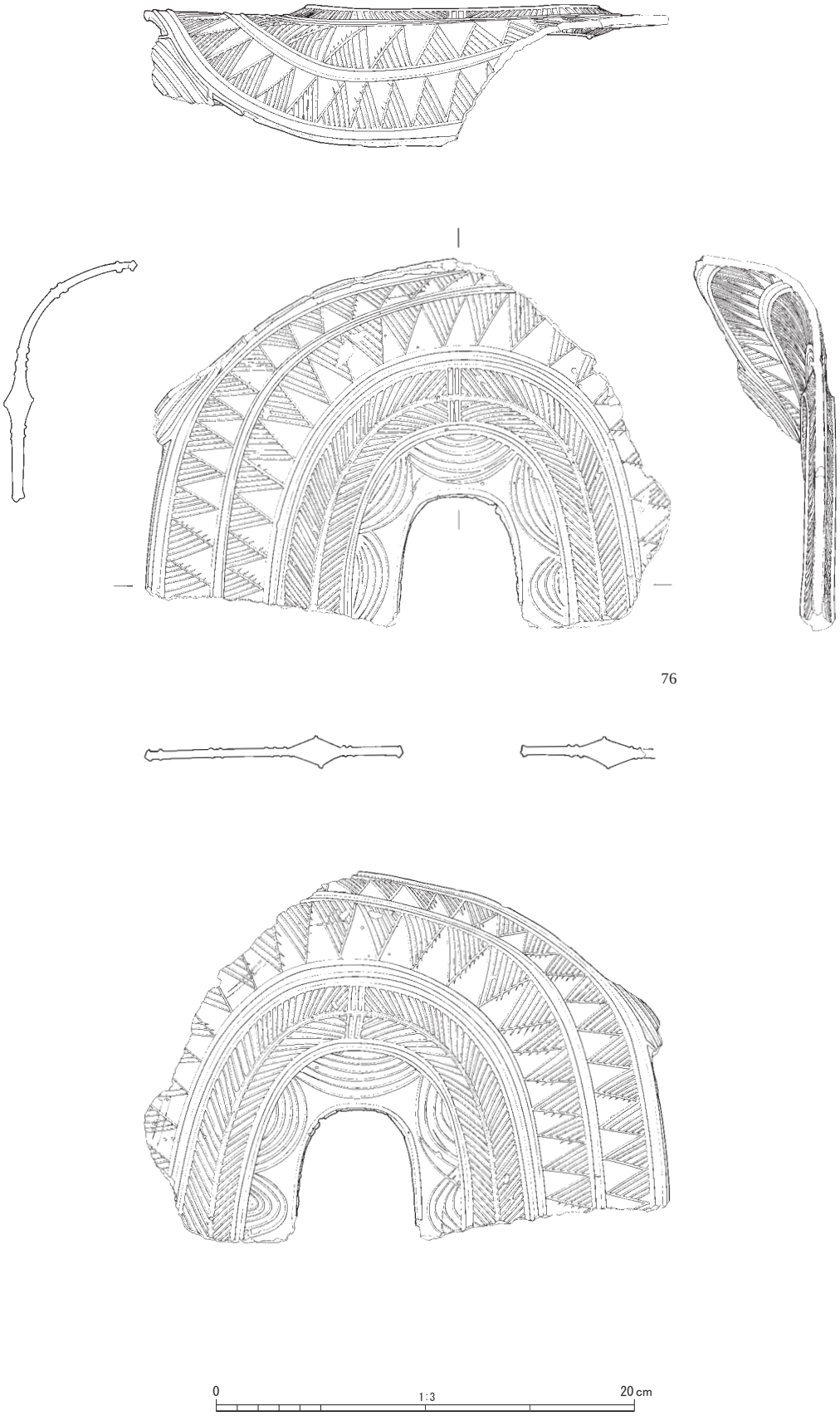


Fig.28　SK06 出土銅鐸実測図

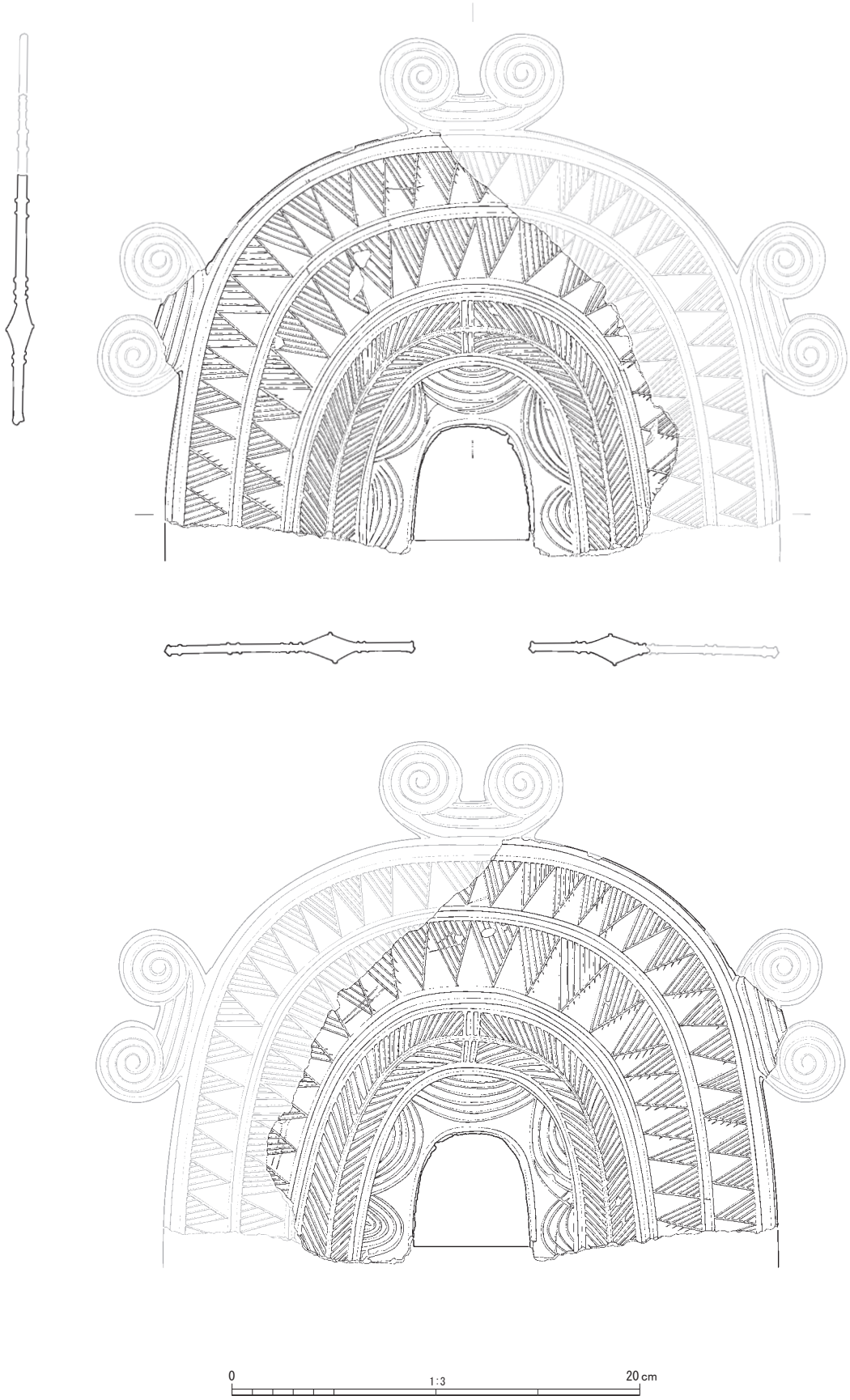


Fig.29　SK06 出土銅鐸復元図

鈕は、Ａ面左側の舞に近いところで約 12.1 ㎝、同様に鈕孔が約 3.0 ㎝であるので、鈕幅は約 30.0 ㎝である。鈕孔の高さは、約 5.6 ㎝、幅は約 5.8 ㎝である。鈕高は、外縁を旧状に復元した状況の頂部で約 20.6 ㎝である。鈕の厚さは、第１・２文様帯で約 0.45 ㎝、内縁で約 0.45 ㎝である。菱環は、幅は約 2.6 ㎝、厚さ約 1.5 ㎝で、幅は均一である。内縁の幅は鈕の中心線付近で菱環内縁界線も含めて約 3.3 ㎝、舞付近で約 2.6 ㎝である。外縁の幅は、中心線方向で菱環外縁界線も含めて約 8.3 ㎝である。第１文様帯、第２文様帯の鋸歯文が施されている部分の幅は、中心線付近でそれぞれ約 2.5 ㎝と約 3.0 ㎝であり、舞付近ではそれぞれ約 2.1 ㎝、約 1.9 ㎝である。

以上の観察結果から、銅鐸全体の高さは、80 ～ 90 ㎝程度と復元できる。

SK06 出土土器（Fig.30）　土器の出土量は少なく、全て破片である。これらの中で、図化可能なものは 77 ～ 94 に示した。77 ～ 84 は、１層から出土した。77 は折返口縁壺である。81 は外反坏部高坏で、波状文が施されている。82 は小型高坏である。84 の土師器の甕は混入品である。85 ～ 94 は銅鐸より下層の２層から出土した。85 は壺の側肩部で、横線文と波状文が施されている。92 は甕で、口縁端部に刺突をもつ。93・94 は台付甕の脚台接合部で、94 には粘土帯が廻っている。

ほとんどが小片のため詳細な時期比定は困難を極めるが、１層の出土遺物は、甕（79・80）の口縁の刺突が省略されていることなどから、山中Ⅲ～欠山Ⅰ式期が想定される。

小　結　鈕の観察結果を見ると、近畿式銅鐸と考えることができる。外周突線が２条である点や、鈕全体に占める内縁の幅が、鈕の文様帯全体に占める割合の約 25％となり、突線鈕２式と考えられている滝峯才四郎谷銅鐸（難波 2007）よりもさらに狭い点などから、突線鈕２式（難波 1986）

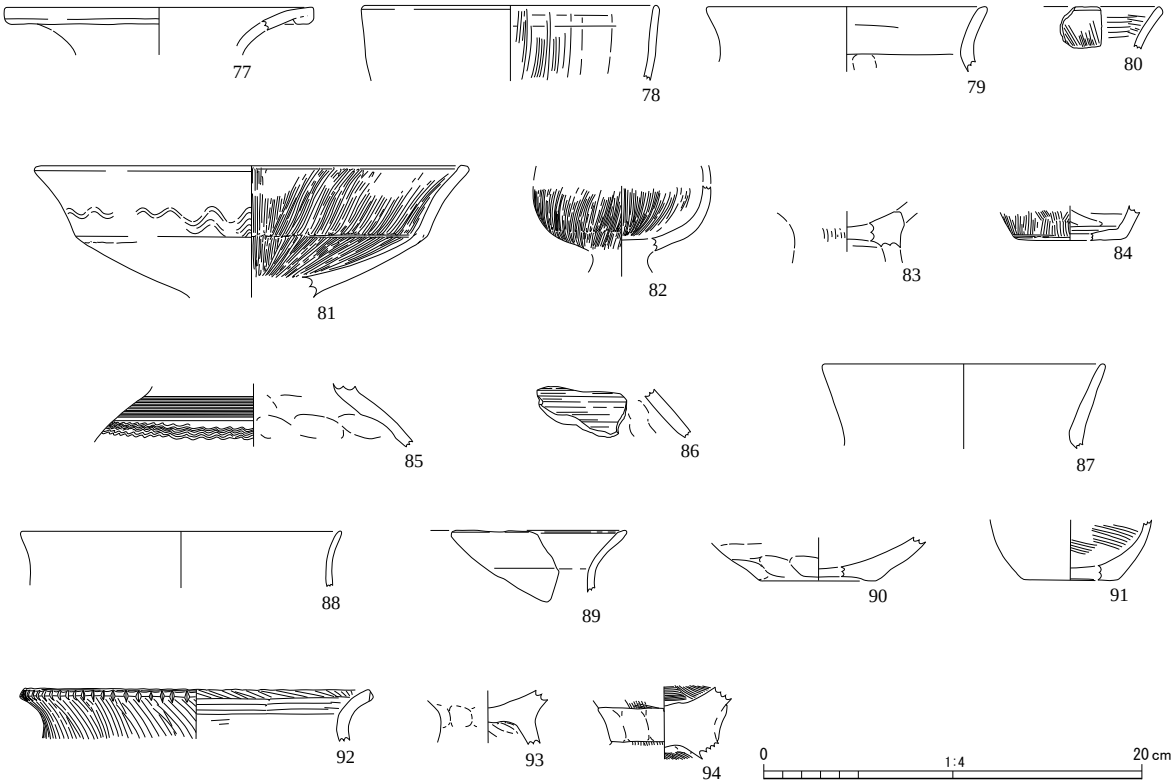


Fig.30　SK06 出土遺物

と考えるべきであろう。しかし、菱環の外界線が３条である点や、推定復元された鐸全体の高さが突線鈕２式に例を見ないほど大きい点や、内縁が狭いながらも完成した状況にある点などから、突線鈕３式の要素もあるといえる。

（４）土器集積土坑

概　要　検出した土坑の内、他の土坑に比べて遺物が集中して出土した土坑を土器集積土坑として抽出した。土器集積土坑としたものは、SK07・SK56・SK84・SK231・SK339・SK346・SK347・SK351・SK352・SK361 の 10 基である。以下に各遺構の詳細を紹介する。

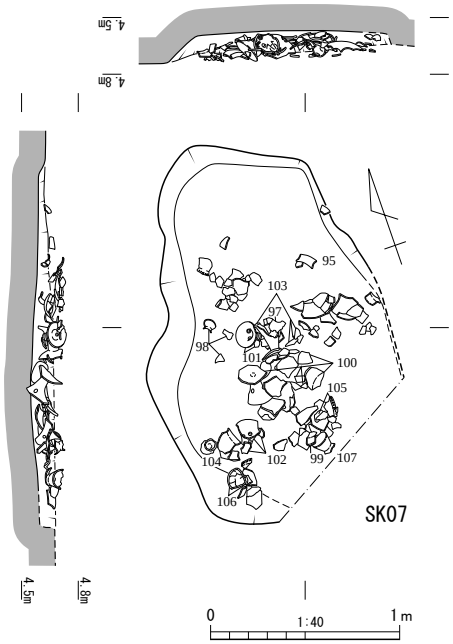


Fig.31　SK07 実測図

SK07（Fig. 31）　１工区 D4 グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸 1.8 m、短軸 1.2 m、深さ 0.2 mを測る。埋土には炭化物が含まれている。中世の溝である SD02 に切られているため上層は大きく削られているが、遺物は豊富に出土した。高坏や穿孔がある小型壺などが出土しており、高坏の割合も多いことから祭祀に伴う土坑とも考えられる。出土した遺物は、95 ～ 107 がある。出土遺物から、欠山Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK56（Fig. 32）　１工区 C4 グリッドで検出した隅丸長方形状の土坑で、長軸 3.2 m、短軸 1.7 m、深さ 0.3 mを測る。埋土中には炭化物が含まれる。３m程東に SK50 があり、同じく SD13 と切り合っていて土坑の形状も似ている。出土した遺物は、108 ～ 134 がある。出土遺物から、欠山

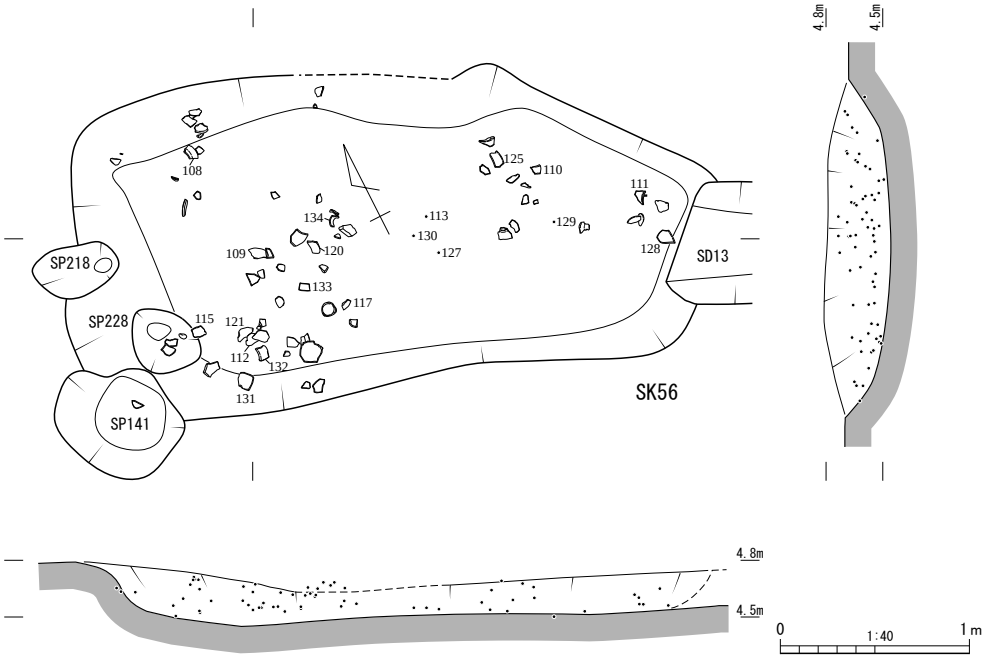


Fig.32　SK56 実測図

Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK84（Fig.33）　１工区 E2 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 1.1 m、短軸 0.9 m、深さ 0.4 mを測る。土坑としては小規模ながら、比較的多くの遺物が出土した。出土した器種は、甕が目立つ。甕に囲まれるように完形の片口瓢壺が出土している。出土遺物は 135 ～ 139 である。出土遺物から、欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK231（Fig.34）　２工区 G1 グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸 2.5 m、短軸 2.4 m、深さ 0.4 mを測る。検出当初はひとつの土坑と考えていたが、土坑が切り合うような遺構となり、不定形土坑として扱う。出土遺物は 140 ～ 162 で、量、器種ともに比較的豊富である。出土遺物から、欠山Ⅰ～Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK339（Fig.35）　３工区 F4 グリッドで検出した円形の土坑で、径 2.0 m、深さ 0.2 mを測る。埋土中に一部炭化物が含まれる。４基の遺構が切り合っている。出土遺物は 163 ～ 169 があり、装飾く字鉢や大型の高坏があげられる。大型の高坏は坏部と脚部が近くから出土していることから、土坑内で割れたと思われる。大型の壺の体部片も出

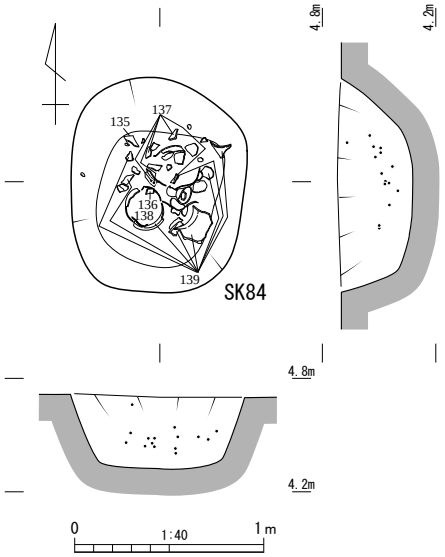


Fig.33　SK84 実測図

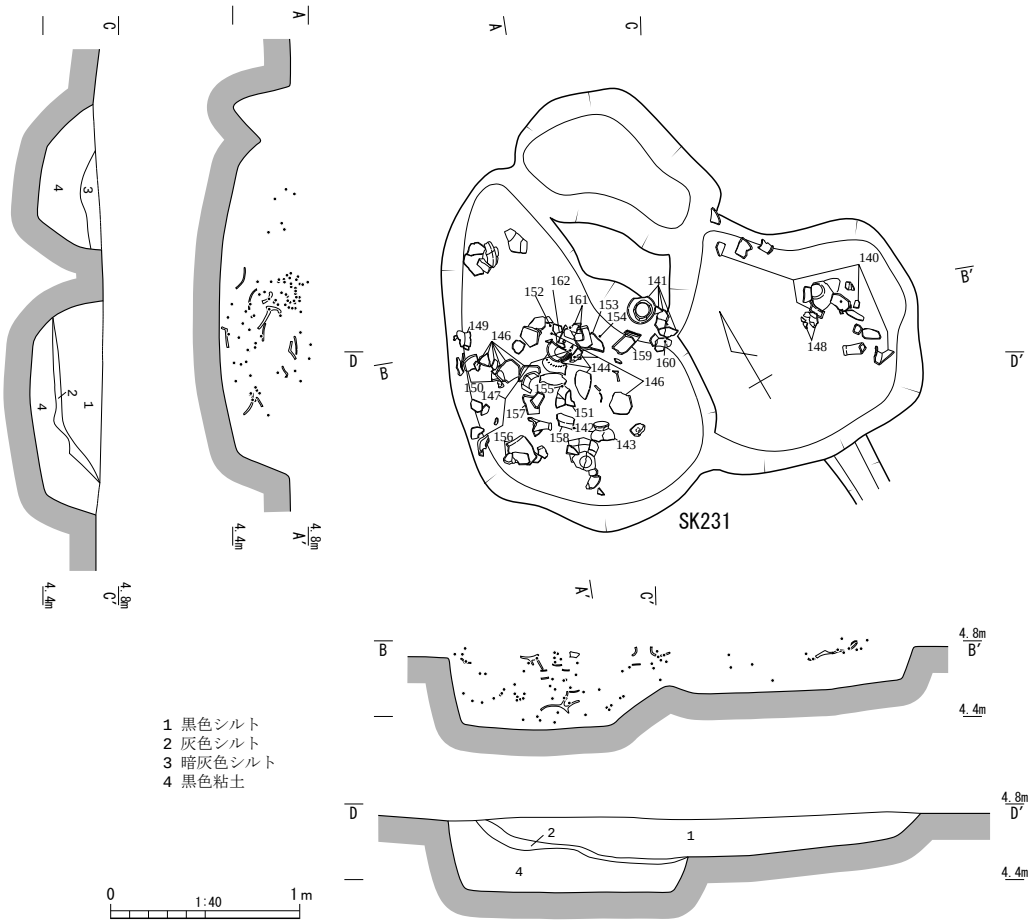


Fig.34　SK231 実測図

土している。出土遺物から、山中Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK346(Fig.36)　３工区G4グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸2.2ｍ、短軸1.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。出土した遺物は170～181がある。比較的良好な状態で出土した遺物が多い。出土遺物から、元屋敷Ⅰ－１式期の遺構と捉えられる。

SK347(Fig.36)　３工区G4グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸1.8ｍ、短軸1.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。遺物はおもに破片で出土した。このことから廃棄土坑としての用途が考えられる。出土遺物は182～187がある。出土遺物から、欠山式期の遺構と捉えられる。

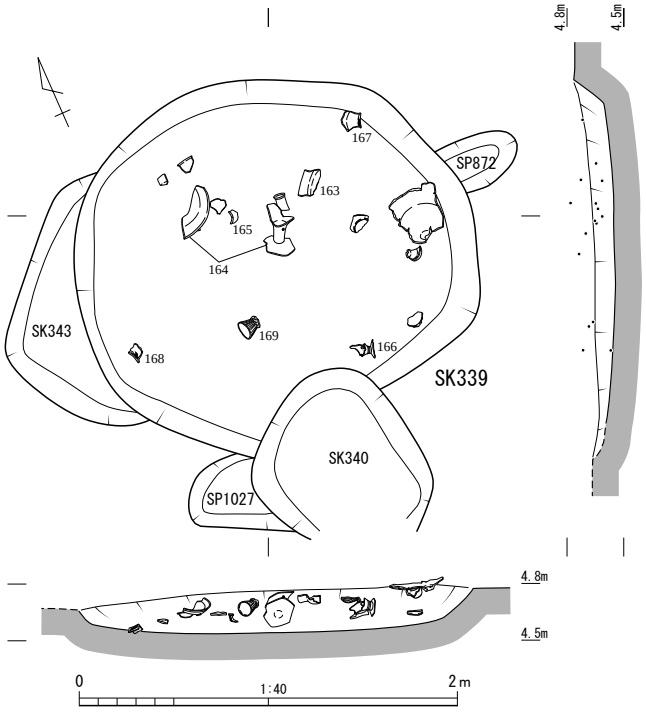


Fig.35　SK339 実測図

SK351（Fig.37）　３工区H3グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸2.2ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は１層で、短期間に埋まったと思われる。SK352に隣接する土坑で、形状が似ている。関連する遺構であろうか。土器片が重なるように出土しているため、廃棄土坑としての用途をもつと思われる。出土遺物は188～196がある。出土遺物から、欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK352（Fig.37）　３工区H3グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸3.0ｍ、短軸1.3ｍ、深さ0.6ｍを測る。隣接するSK351より一回り大きい。出土遺物は197～220で、量、器種ともに豊富である。

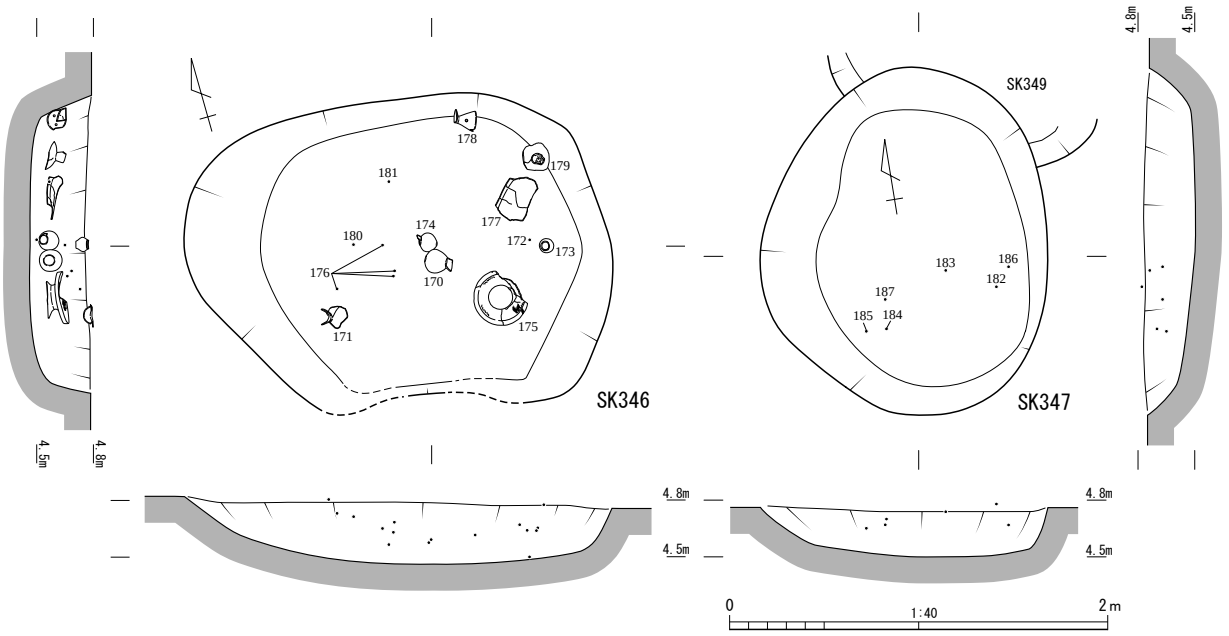


Fig.36　SK346・SK347 実測図

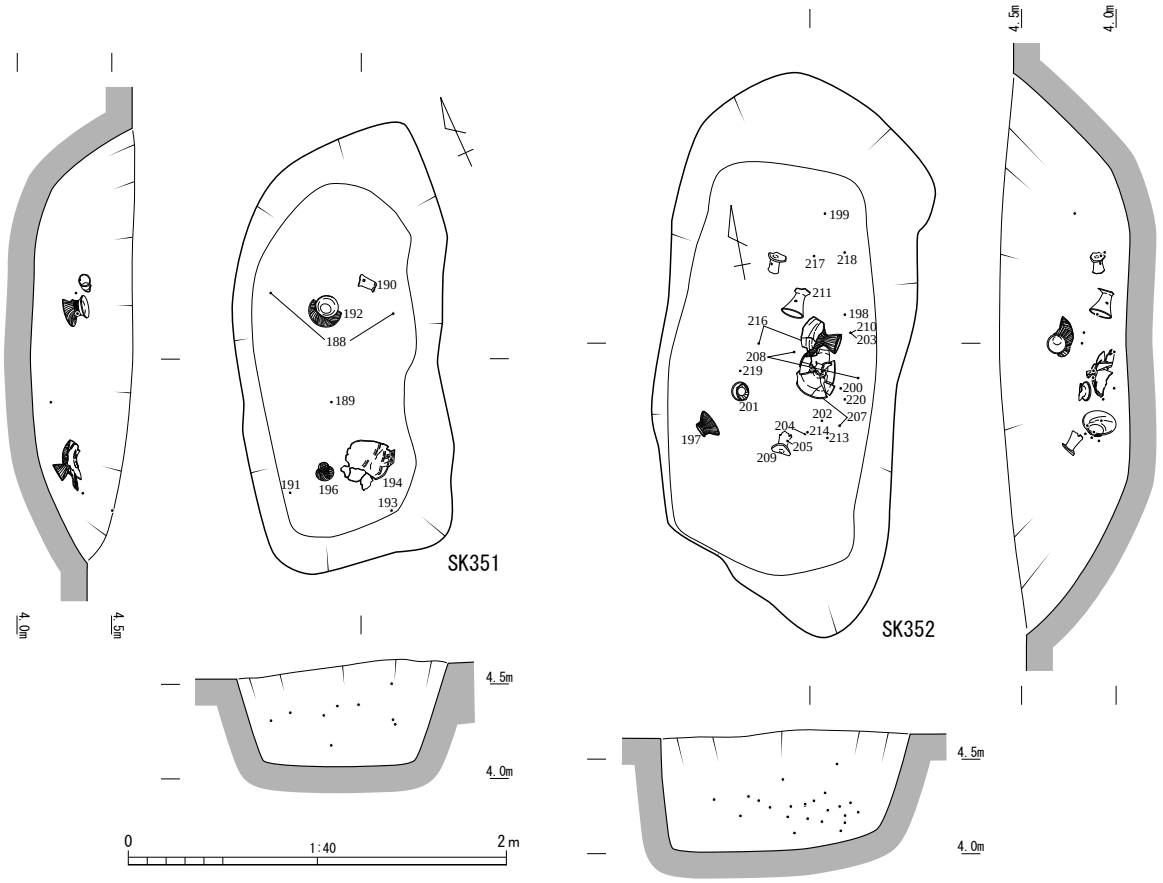


Fig.37　SK351・SK352 実測図

出土遺物から、山中Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SK361（Fig.38・39）　３工区D5グリッドで検出した円形の土坑で、径1.6ｍ、深さ0.5ｍを測る。調査区西端にあるSR01の約５ｍ北東に位置する。Ｖ層が存在しない箇所で、Ⅵ層を検出面としている。出土した遺物は221～257があり、検出上面から床面まで隙間なく土器が堆積した状況で出土した。出土状況から廃棄土坑と考えられる。出土遺物から、欠山Ⅱ式期の遺構と捉えられる。

SK07出土遺物（Fig.40）　95～107はSK07から出土した遺物である。95～98は壺である。96は側肩部に羽状文を施す。菊川式の搬入品と思われる。98は小型の壺で、口縁部に２箇所穿孔を有する。95・99は鉢、100～103は高坏である。100は碗形坏部高坏で、口縁端部は

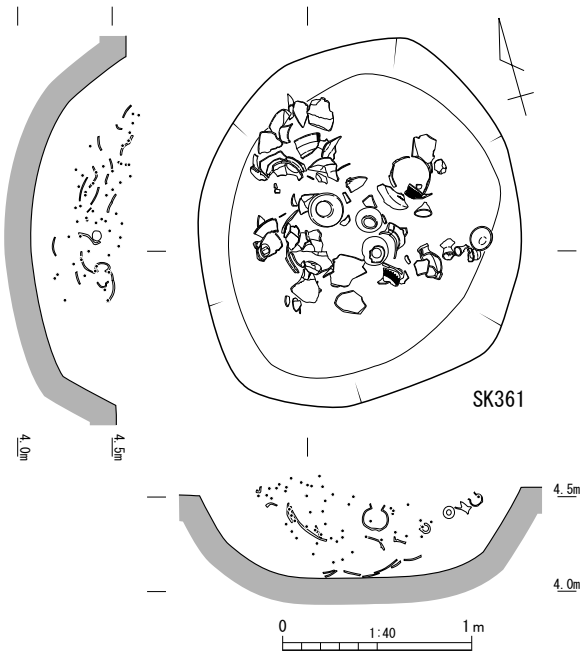


Fig.38　SK361 実測図

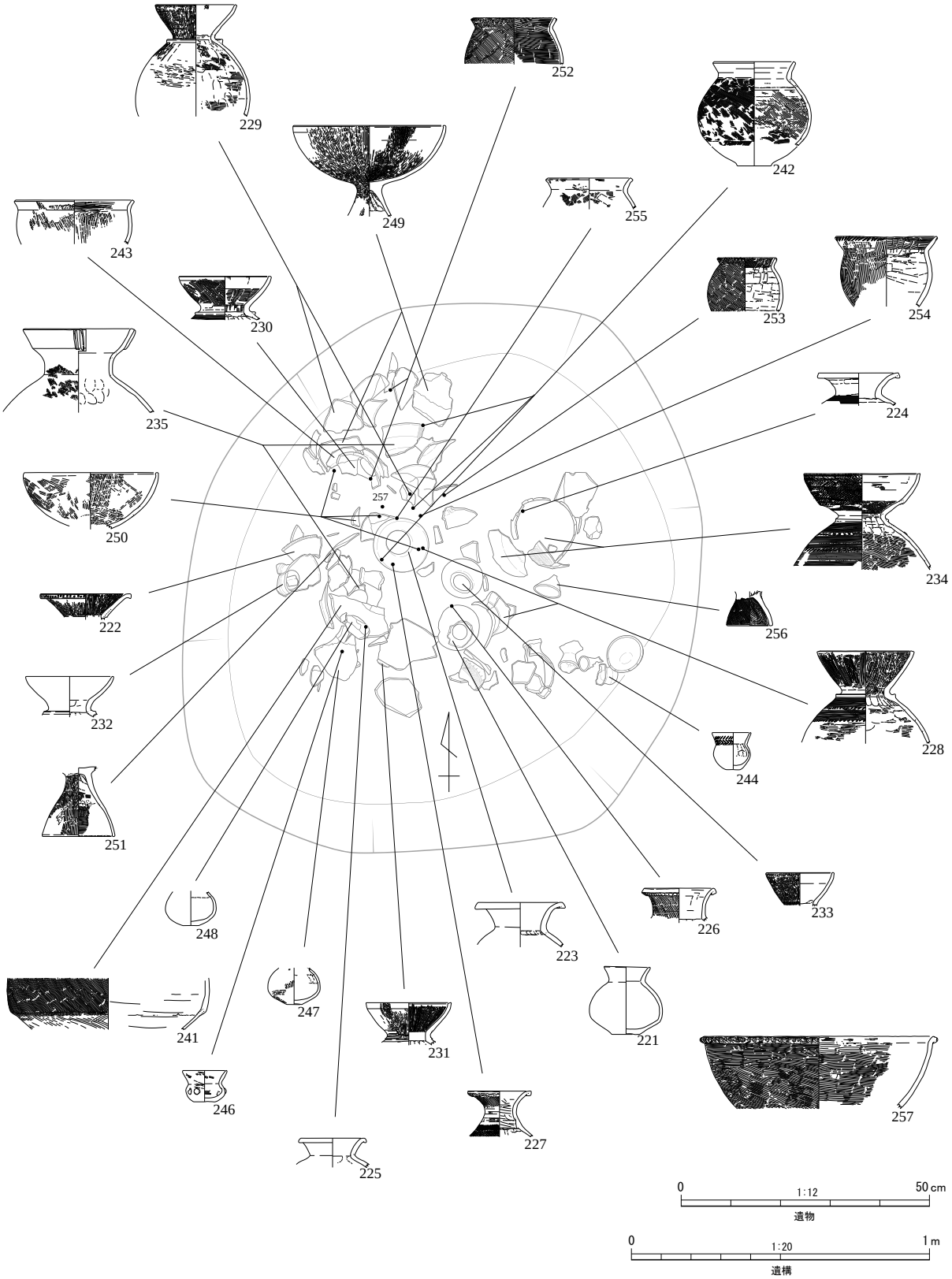


Fig.39　SK361 における遺物の対応関係

内傾している。器壁は薄く、丁寧なつくりをしている。101・102 にはそれぞれ脚部に横線文や山形刺突文の装飾が施されている。４個体とも脚部裾は外反して広がる。104 ～ 107 は甕である。口縁刺突のく字甕（104）やく字大型甕（105）、脚台接合部に粘土帯が廻る個体（106）などがある。106・107 は脚台部の高さから、欠山Ⅱ式期にあたると考えられる。

出土遺物の特徴から SK07 の帰属時期は、欠山Ⅱ式期と考えられる。

SK56 出土遺物（Fig. 41）　108 ～ 134 は SK56 から出土した遺物である。108 ～ 124 は壺である。口縁形態は、外反口縁（108 ～ 111）、折返口縁（114）がある。113 の頸部には刺突による横線文が施されている。122 ～ 124 は側肩部に刺突文を用いている。菊川式の影響を受けたものと考えられる。125・126 は装飾直口鉢である。127 は有台小型壺である。手捏ねで、胎土は灰白色である。128 ～ 131 は高坏である。坏部の形態は外反（128 ～ 130）と碗形（131）がある。山中系統が主体だが、131 は内彎し深い坏部であるため、欠山式の典型であるといえる。132 ～ 134 は甕である。

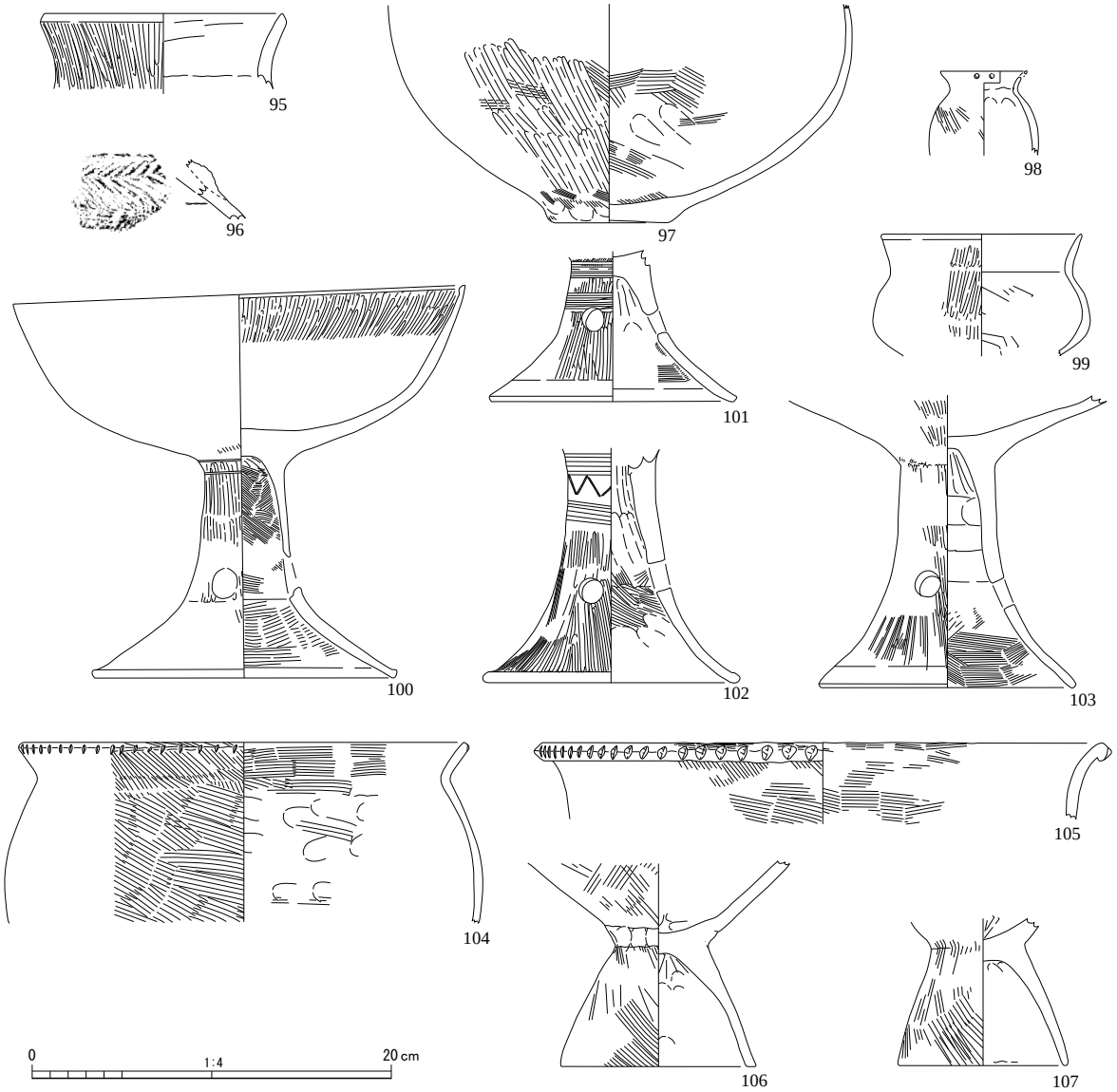


Fig.40　SK07 出土遺物

132・133 の口縁端部には刺突をもつ。

高坏などの特徴から、SK56 は欠山Ⅱ式期に帰属すると考えられる。

SK84 出土遺物（Fig. 42）　135 ～ 139 は SK84 から出土した遺物である。135・136 は壺である。135 は折返口縁壺で、口縁には縦の押圧文を施している。136 は片口瓢壺で、口縁の一部を意図的に打ち欠いている。137 ～ 139 は甕で、137・138 は口縁端部に刺突を施し、139 は無刺突で口縁にヨコナデが入る。

出土遺物から SK84 の帰属時期は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期に位置づけられる。

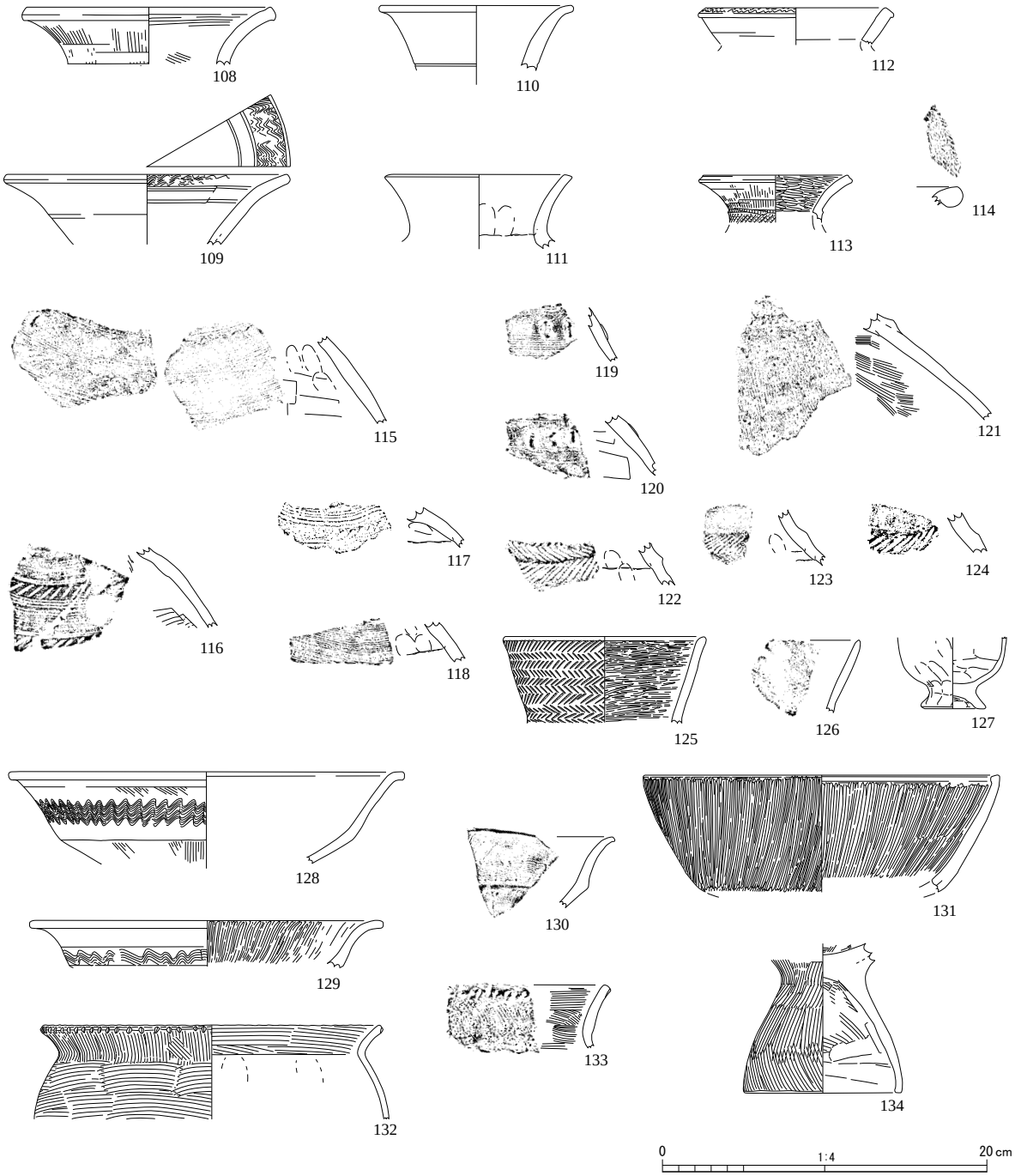


Fig.41　SK56 出土遺物

SK231 出土遺物（Fig. 43）　140 ～ 162 は SK231 から出土した遺物である。140 ～ 148 は壺である。口縁形態は外反口縁（140・141）、直立口縁（142・143）、折返口縁（144）、複合口縁（145）の４種類がある。側肩部の文様帯には、横線文に波状文を組み合わせた文様が多い。148 は菊川式の搬入品である。149 は鉢である。150 ～ 154 は高坏である。150・151 は外反坏部をもつ山中式系統の高坏であるが、151 は山中式期の坏部より深くなっており、欠山式期に残存した変容形態と考えられる。152 は口縁が内側に内彎している。154 は器壁が薄く脚が低脚化し、直線的で新しい要素をもつ。155 ～ 162 は甕である。口縁端部に刺突をもつもの（155 ～ 157）と、刺突をもたないもの（158・159）がある。160 は脚台接合部に粘土帯が廻らされている。

154 は新しい要素をもっているが、出土遺物全体をみると SK231 の帰属時期は欠山Ⅰ～Ⅱ式期と考えられる。

SK339 出土遺物（Fig. 44）　163 ～ 169 は SK339 から出土した遺物である。163 は装飾直口鉢である。摩滅して確認しにくいが、口縁に３列の羽状文が施されている。164 ～ 166 は高坏である。164 はく字碗形坏部高坏で、坏部の口径が 30cm を超える大型品である。長脚で裾は外反して開き、端部を折り返す山中式の特徴をもっている。165・166 は脚部に文様を施しており、３条の横線文の間にそれぞれ刺突文と交差文が施されている。いずれも山中式期の特徴を有する。167 ～ 169 は甕である。167・168 は口縁端部に刺突をもつ。167 は、口縁部に横方向のハケが丁寧に施されている。169 は脚台接合部に粘土帯が廻らされている。

出土遺物は山中式期の特徴をもち欠山式期に降る遺物も見受けられないことから、SK339 の帰属時期は山中Ⅲ式期と考えられる。

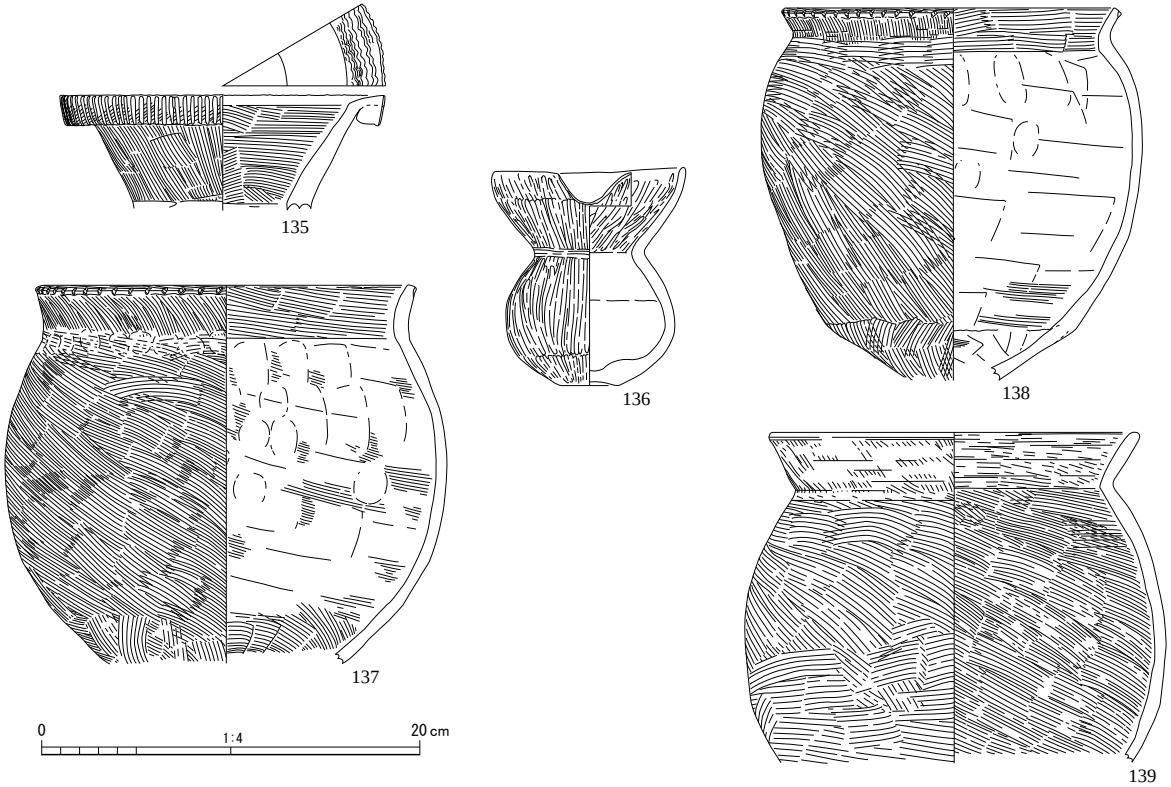


Fig.42　SK84 出土遺物

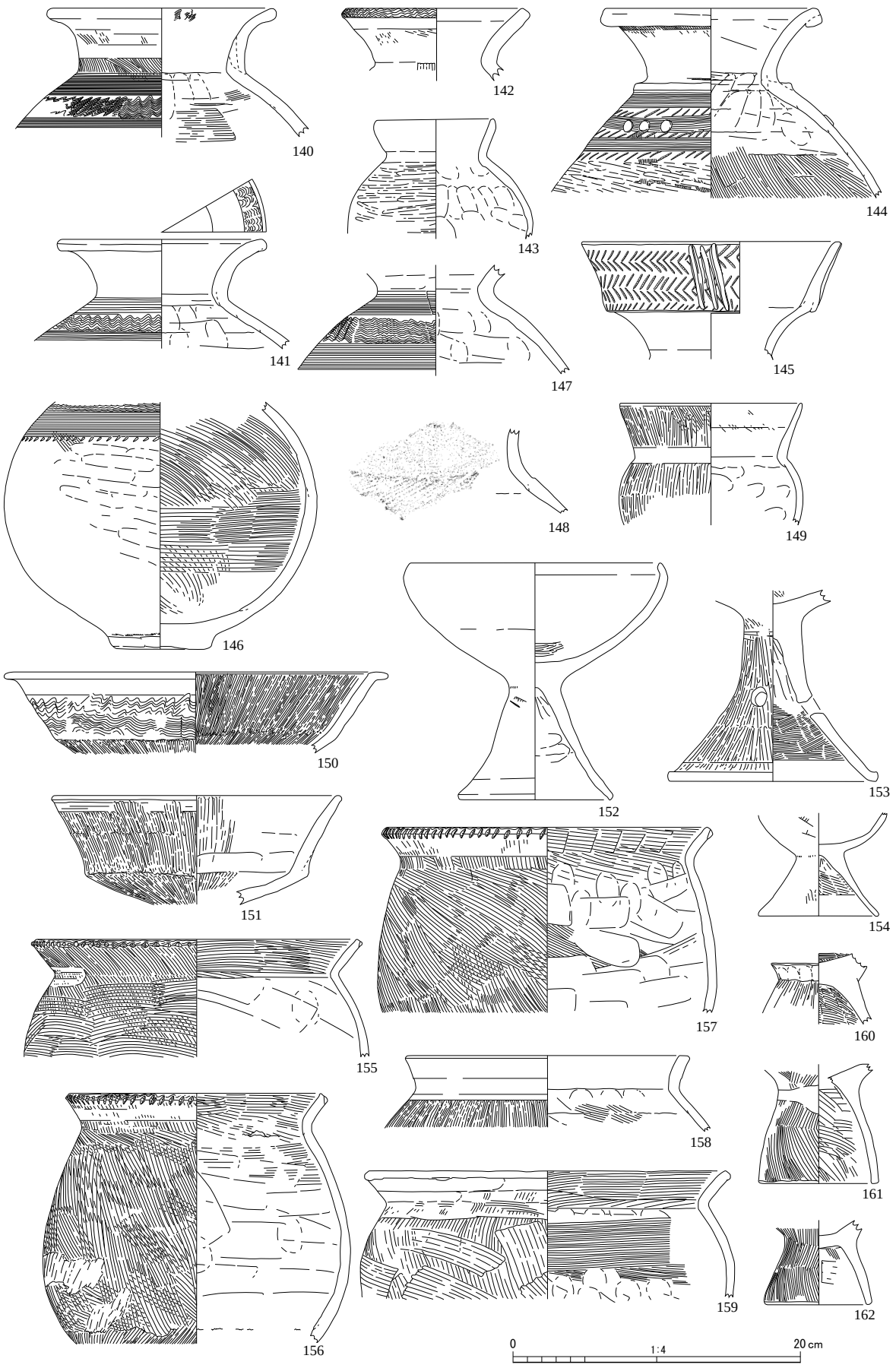


Fig.43　SK231 出土遺物

SK346 出土遺物（Fig. 45）　170 ～ 181 は SK346 から出土した遺物である。170 ～ 176 は壺である。口縁形態は直立口縁（170・171）、内彎口縁（172）、折返口縁（175）がある。175 は口縁内面に縄文を施しており、176 とともに菊川式の搬入品である。177 はく字鉢である。178･179 は高坏である。180・181 は甕である。

直線的に開く高坏の脚（178）や低い甕の脚台部（180・181）の特徴から、SK346 の帰属時期は元屋敷Ⅰ -1 式期と考えられる。

SK347 出土遺物（Fig. 45）　182 ～ 187 は SK347 から出土した遺物である。182・183 は壺である。182 の側肩部は、横線文と刺突文の組み合わせが３列施されている。183 は菊川式の搬入品である。184 はく字鉢である。185・186 は高坏である。187 は甕である。口縁端部に刺突をもっている。

出土遺物から SK347 の帰属時期は、欠山Ⅱ式期を中心としてその前後の時期幅の中で捉えたい。

SK351 出土遺物（Fig. 46）　188 ～ 196 は SK351 から出土した遺物である。188 ～ 190 は鉢である。191 ～ 193 は高坏である。191 は外反坏部高坏で波状文が施されている。194 ～ 196 は甕である。194・195 は口縁端部に刺突をもち、口縁部にヨコナデが入っている。196 の脚台部は直線的に開いている。

特徴として壺より鉢の出土比率が大きいことがいえる。甕の口縁部には刺突とヨコナデが入っている。SK351 の帰属時期は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期に相当すると考えられる。

SK352 出土遺物（Fig. 47）　197 ～ 220 は SK352 から出土した遺物である。197 ～ 201 は壺である。口縁形態は、内彎口縁（197・198）、拡張口縁（199 ～ 201）の２種類がある。202 はく字鉢である。199・200 は口縁内面に波状文が施され、199 の口縁に羽状の刺突文と円形浮文がある。203 ～ 215

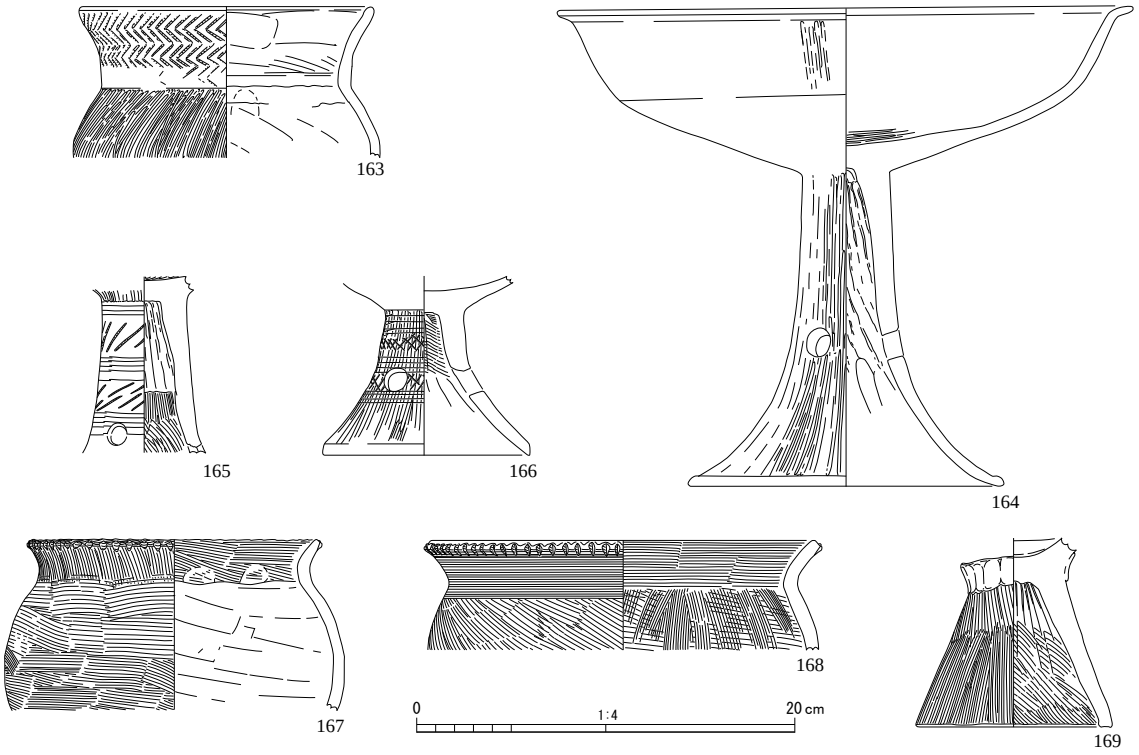


Fig.44　SK339 出土遺物

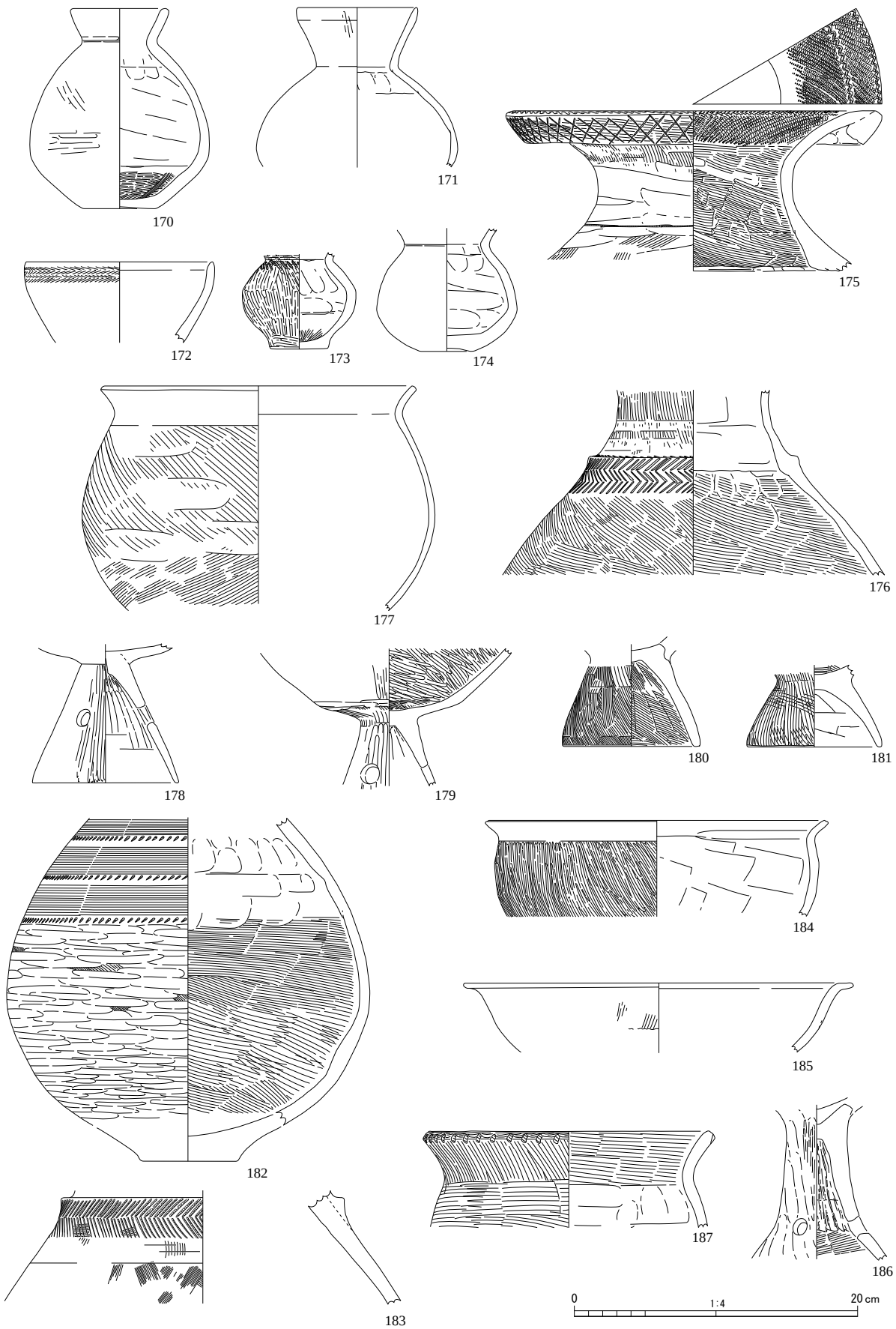


Fig.45　SK346・SK347 出土遺物

170 ～ 181：SK346　182 ～ 187：SK347

は高坏である。外反坏部（203 ～ 208）で、山中式系統の高坏が主体を占めている。203 ～ 206 は坏部に波状文が施されている。207・208 は形や大きさがほぼ同一である。脚部は真ん中付近で明瞭に折れ、若干内彎しながら裾が広がっている。215 は脚接合部から直線的に広がっている。216 ～ 220 は甕である。216・217 は口縁端部に刺突をもつ。脚台部は内彎するもの（216・218）と直線的に開くもの（219・220）があり、218・219 は脚台接合部に粘土帯を廻らしている。

215 の高坏脚部は欠山Ⅲ式期～元屋敷Ⅰ式期頃の新しい特徴をもっているが、出土遺物全体をみると山中式期の遺物として捉えられるため、215 は混入品としてよいだろう。山中式系統の高坏や台付甕の脚部が高いことなどから、SK352 の帰属時期としては山中Ⅲ式期を想定したい。

SK361 出土遺物（Fig.48・49）　221 ～ 257 は SK361 から出土した遺物である。221 ～ 241・245・247・248 は壺である。口縁形態は直立口縁（221）、拡張口縁（222）、折返口縁（223 ～ 227）、内彎口縁（228 ～ 233）、複合口縁（234・235）があり、多種にわたっている。222 の口縁には竹管文、234 は羽状の刺突文が丁寧に施されている。側肩部に突帯をもつもの（228 ～ 232・234）が目立つ。236 は受口状口縁の壺である。器壁は薄く、側肩部に横線文と羽状の刺突文が施されている。横線文と刺突文の組み合わせ（228・234・238）が多く、扇形文（237）も見受けられる。搬入品も多く確認でき、226・227・240・241 は菊川から搬入されたものであろう。235 も他地域からの搬入品と思われる。242 ～ 244・246 は鉢である。246 は扁平な小型直口鉢で、胴部に円形浮文２個１対が貼り付けられている。249 ～ 251 は高坏である。249・250 は碗形坏部をもち、口径は 30cm 近くある大型品である。251 は脚が内彎しながら広がっており、249・250 とあわせて典型的な欠山式の特徴をもつといえる。252 ～ 257 は甕である。口縁端部に刺突をもつもの（252 ～ 254、257）と無刺突

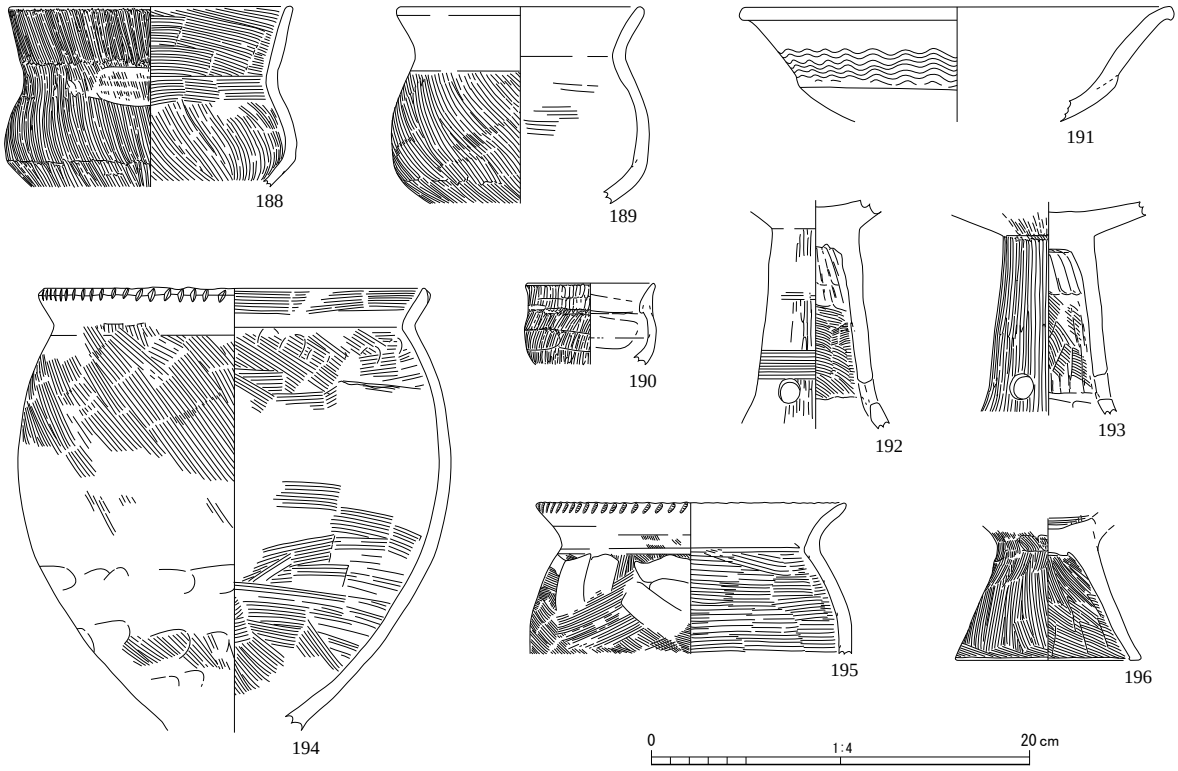


Fig.46　SK351 出土遺物

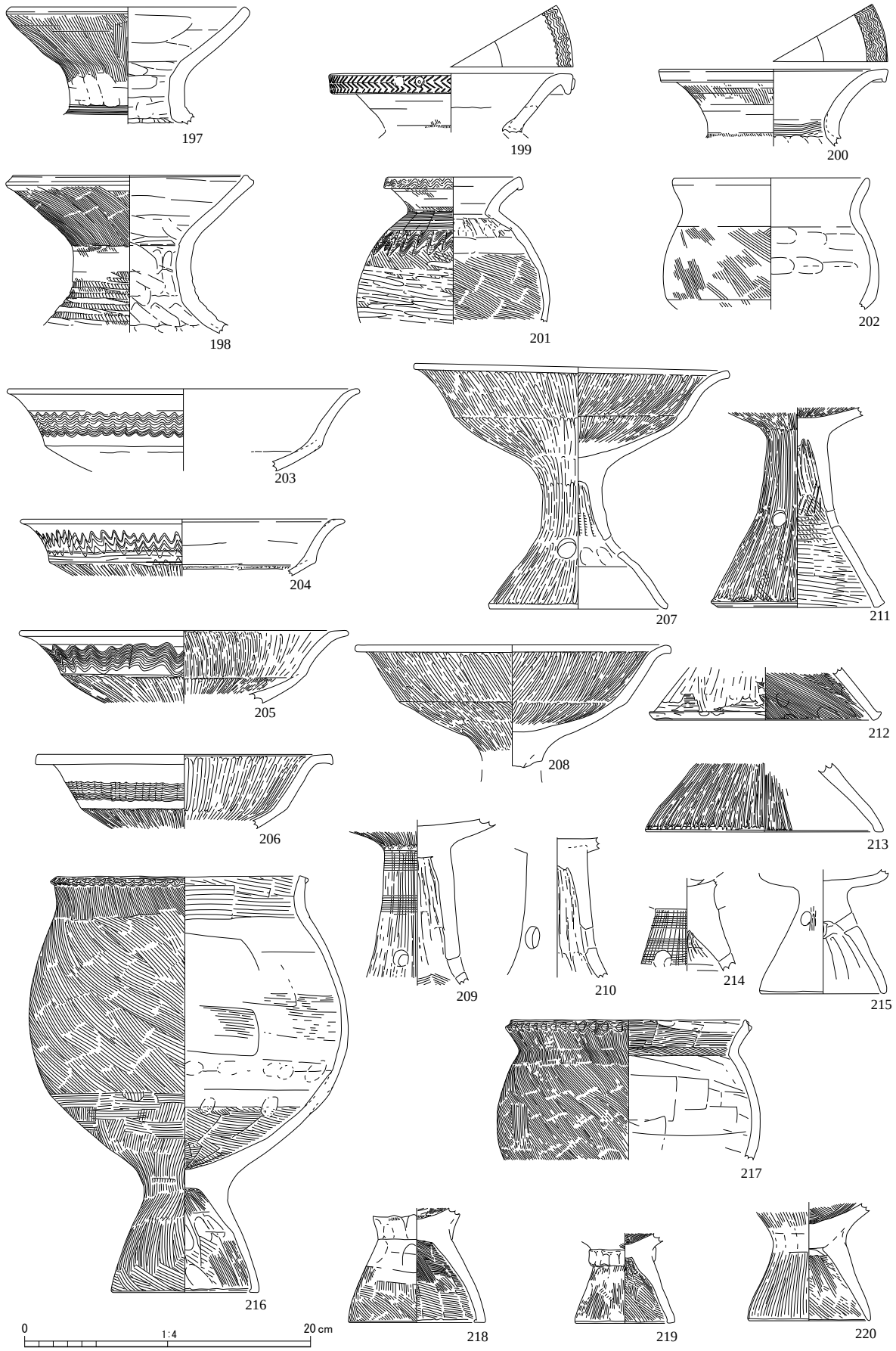


Fig.47　SK352 出土遺物

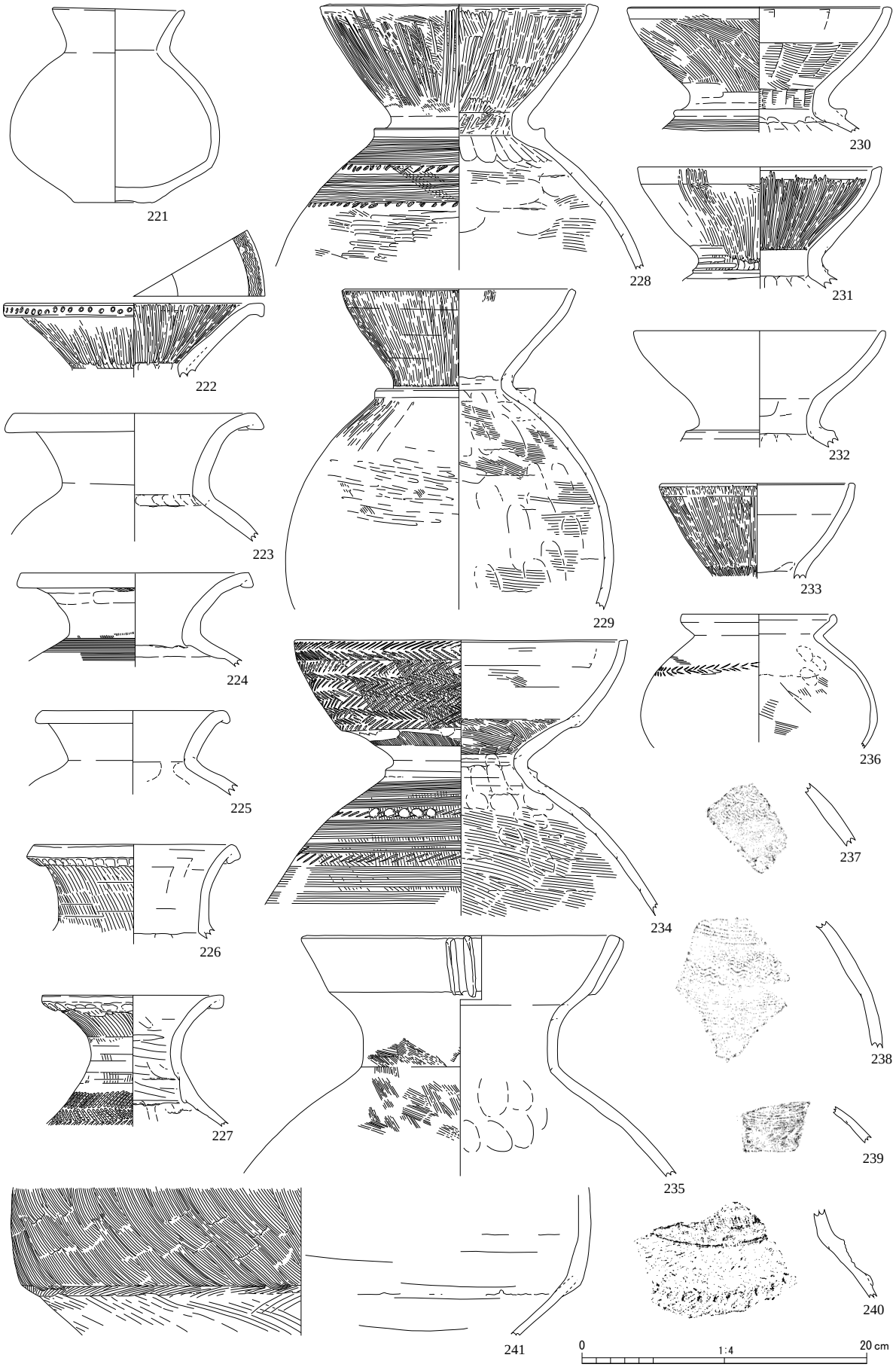


Fig.48　SK361 出土遺物（１）

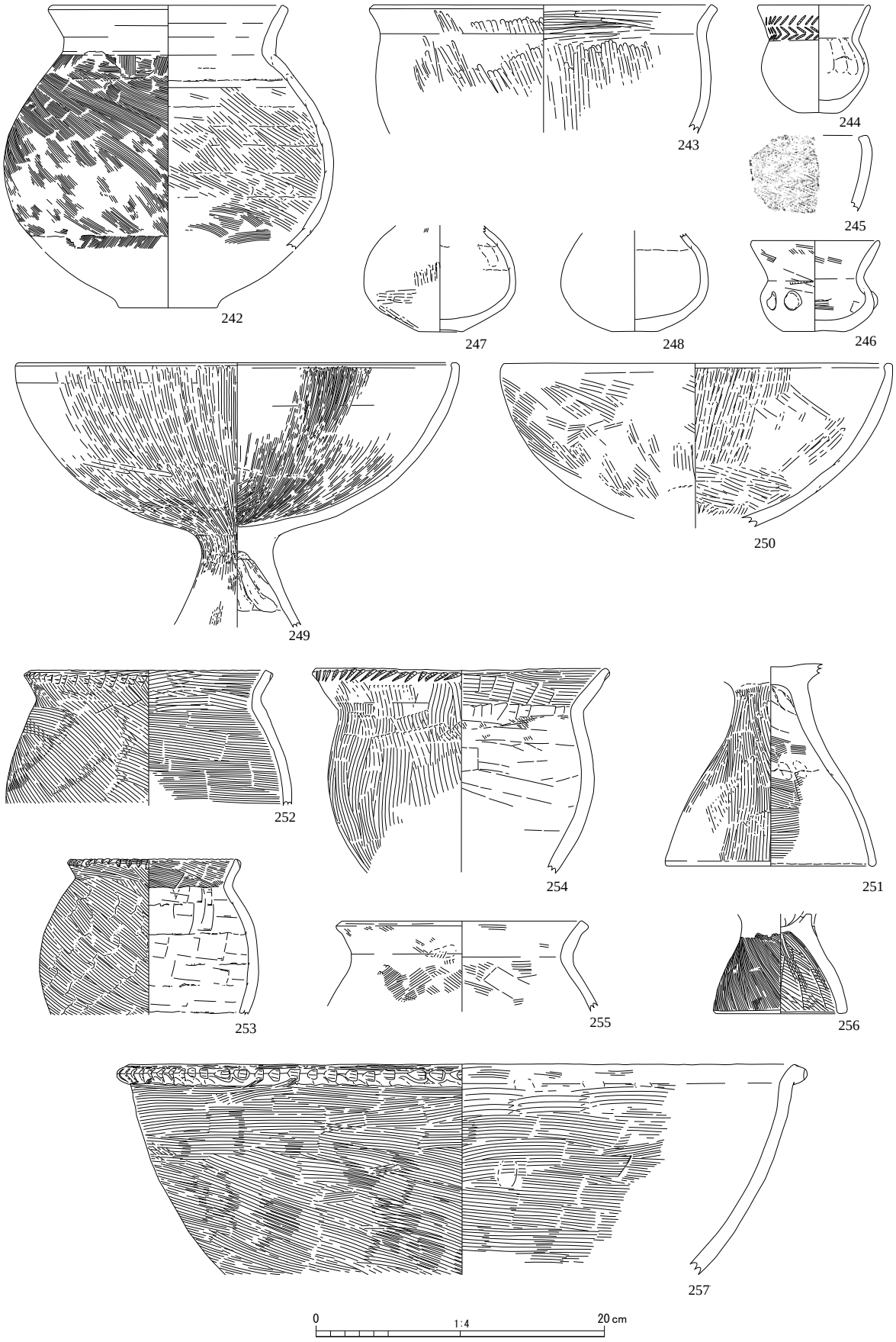


Fig.49　SK361 出土遺物（2）

のもの（255）がある。254・255 には口縁部にヨコナデが入る。

SK361 の出土遺物は量、器種ともに豊富である。拡張口縁壺の存在や高坏の形態が典型的な欠山式の特徴を示すことから、SK361 の帰属時期は欠山Ⅱ式期と考えられる。

小　結　土器集積土坑は、遺物の出土量は多いが、全体的に破片での出土がほとんどである。今回、図化できなかった小片については、遺構図への表示（ドット）を省いたが、それぞれの遺構からは多量の土器片が出土している。１個体に復元できる土器も少数であることから、多くは廃棄土坑としての用途が想定される。出土遺物には、縄文や羽状刺突文など菊川式の影響を受けたと思われる土器が一定量見受けられる。遺構の時期としては、出土遺物から山中Ⅲ式期から元屋敷Ⅰ－１式期に帰属する遺構が確認された。その中でも欠山式期の遺構が多く、土器集積土坑の形成時期は欠山式期に中心があったと考えられる。

（５）土坑

概　要　前述した土器集積土坑以外のものを土坑として扱う。土坑は調査区全域において検出でき、規模・形状は様々なものがある。SK02・SK03 など完形に近い土器が出土する土坑もあるが、破片で出土する土坑が多い。以下では、検出した土坑の内、遺物が出土したものを中心に 11 基の土坑の詳細をみていく。

SK02（Fig.50）　１工区 E4 グリッドで検出した円形の土坑で、径 0.8 ｍ、深さ 0.2 ｍを測る。埋土は２層に分かれる。出土遺物は 259 がある。

SK03（Fig.51）　１工区 E3 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 1.6 ｍ、短軸 0.6 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。土坑北寄りから口縁を欠いた状態の壺が出土した。当初土器棺の可能性も考えたが、甕の開口が北側小口方向に位置している事、北側に壺が単体で位置していることからその可能性は低いと判断した。出土した遺物は 260 ～ 262 がある。

SK50（Fig.52）　１工区 D4 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 2.9 ｍ、短軸 1.5 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。３ｍ程西に同じような形状の土坑 SK56 があり、同じく SD13 と切り合っている。出土した遺物は 269

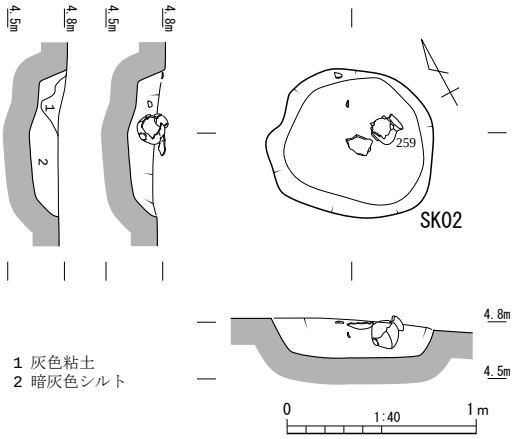


Fig.50　SK02 実測図

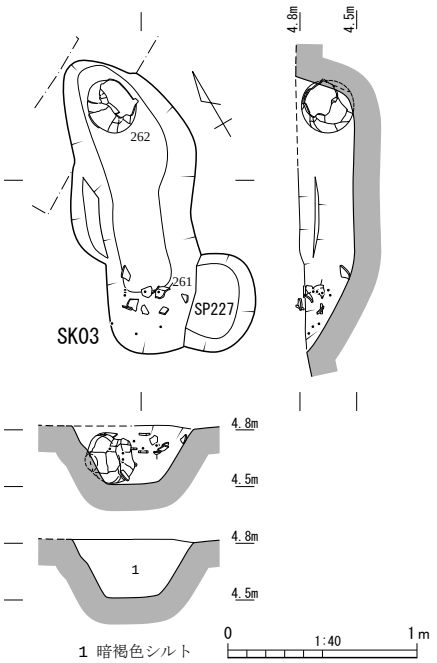


Fig.51　SK03 実測図

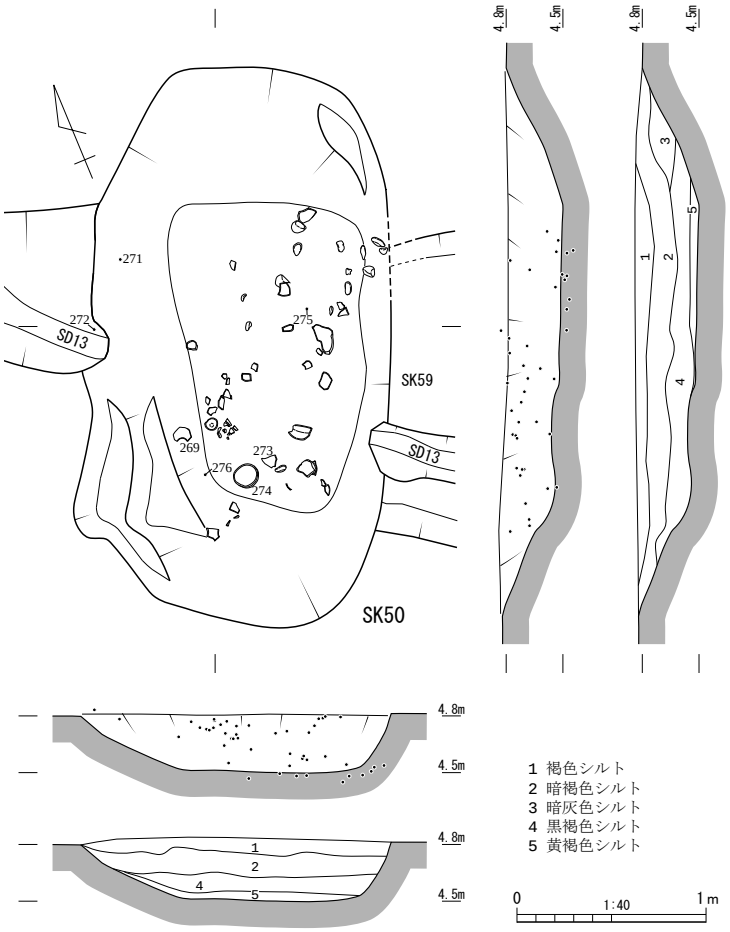


Fig.52　SK50 実測図

～ 276 がある。出土遺物はいずれも小片のため、遺構の時期は不明である。

SK79（Fig. 53）　1 工区 E2 グリッドで検出した縦に細長い楕円形の土坑で、長軸 1.5 m、短軸 0.5 m、深さ 0.25 m を測る。SD17・SP170 と切り合っている。出土した遺物は 280 ～ 282 がある。出土遺物の特徴から、欠山式期の遺構と捉えられる。

SK208（Fig. 53）　2 工区 F3 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 1.2 m、短軸 0.8 m、深さ 0.5 m を測る。北西部は SK215 に切られ上端が削られているが、土坑の立ち上がりが検出できたため長軸は 1.5 m ほどと想定される。埋土は 2 層からなる。出土遺物は 283・284 があり、床面直上から正位の状態で鉢が出土

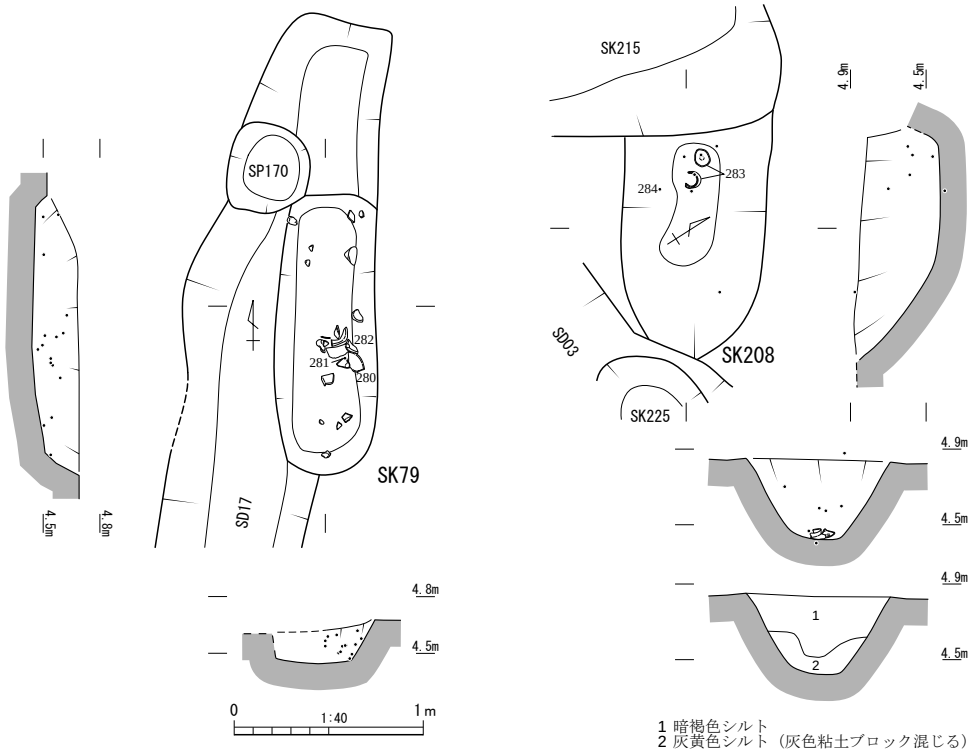


Fig.53　SK79・SK208 実測図

した。土坑の形状、遺物出土状況から土坑墓の可能性が考えられる。

SK209(Fig.54)　２工区F2グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸1.4ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.1ｍを測る。土坑内東寄りの50×30cmほどの範囲に焼土が検出された。出土した遺物は285～288がある。出土遺物から、山中式期の遺構と捉えられる。

SK212(Fig.54)　２工区E2グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸4.0ｍ、短軸0.8ｍ、深さ0.1ｍを測る。１工区寄りの調査区境に位置し、上層での遺構検出作業時から遺物が散見された。遺構北西側の湧水が多く、また地山が砂質であった。そのため平面プランははっきりせず土坑としたが、浅い窪地が土器溜まりとなっている可能性も想定される。出土遺物は289～295で、高坏の出土比率が高くなっている。出土遺物から、山中式期の遺構と捉えられる。

SK215(Fig.54)　２工区F3グリッドで検出した不定形の土坑で、長軸1.7ｍ、短軸1.4ｍ、深さ0.3ｍを測る。中央部をSD51、南側をSD03とSP348にそれぞれ切られている。出土遺物は296・297があり、北東に偏って出土している。

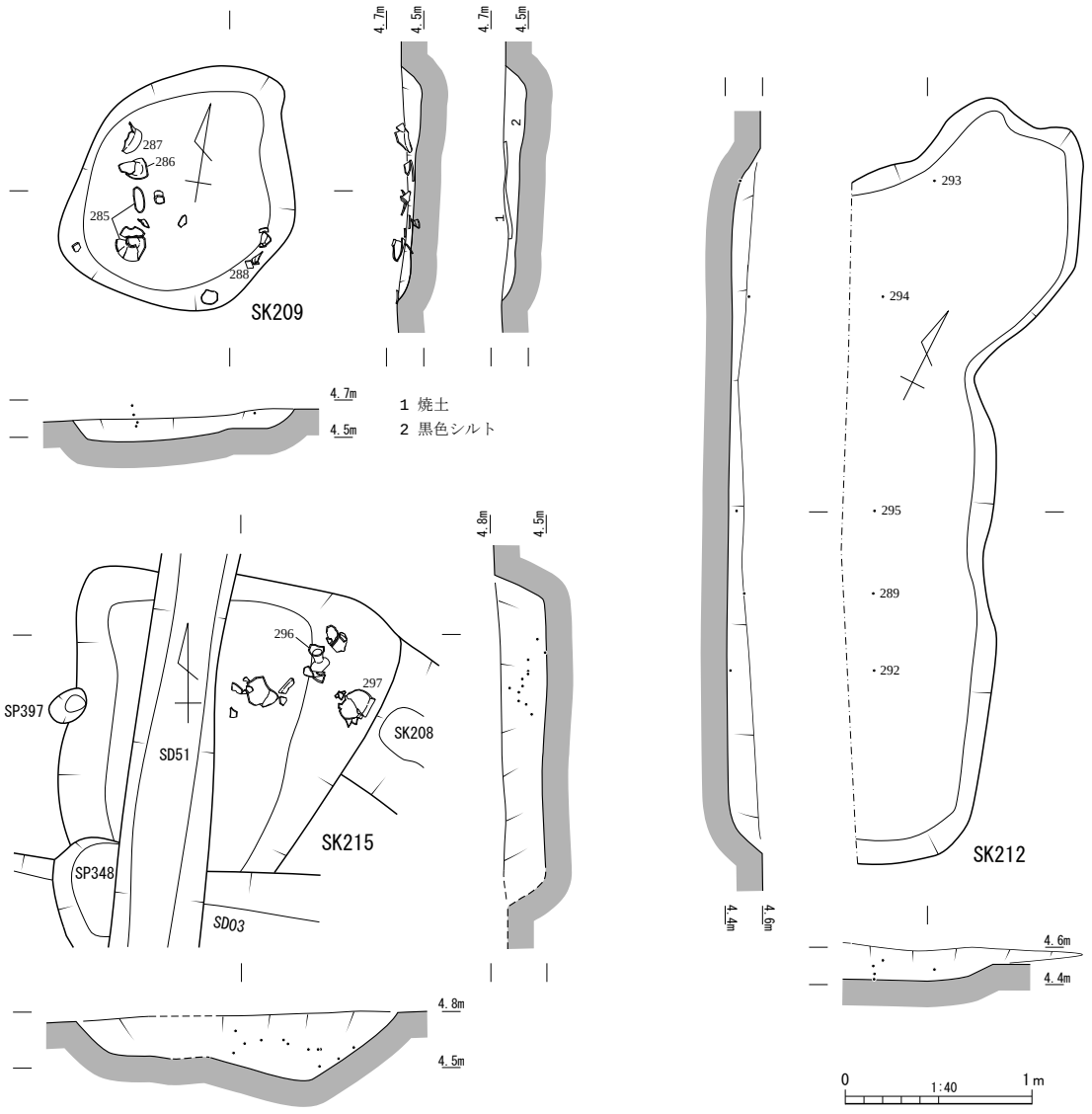


Fig.54　SK209・SK212・SK215 実測図

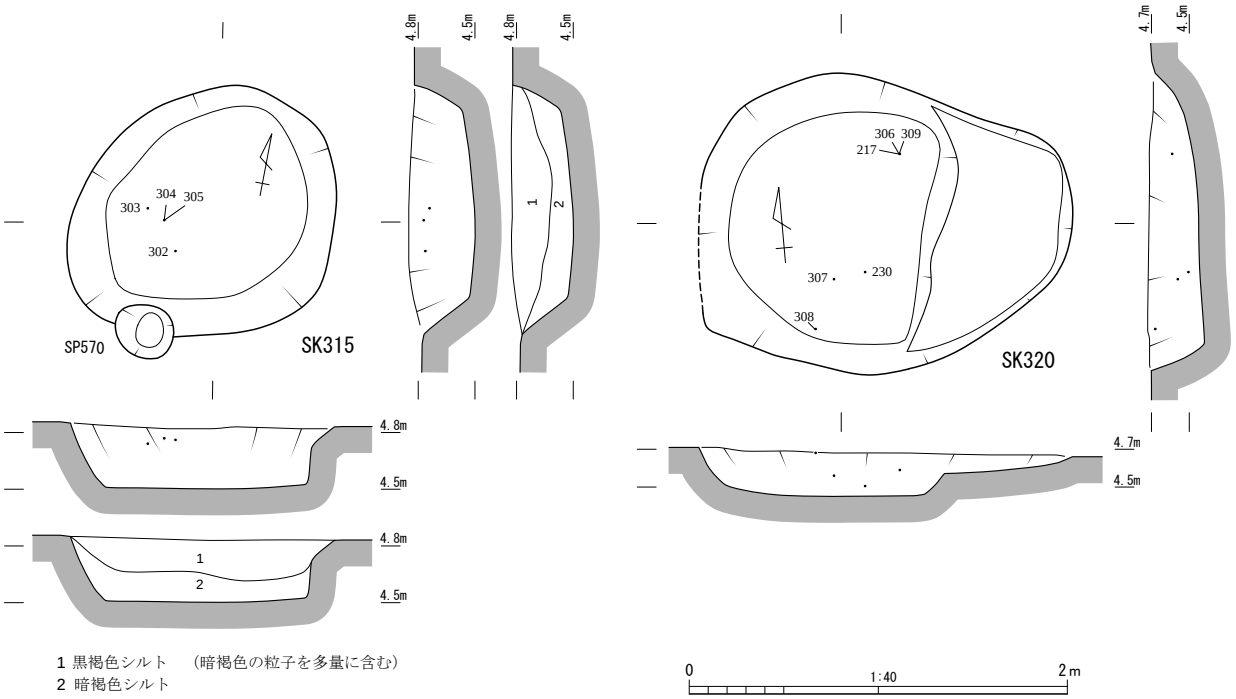


Fig.55　SK315・SK320 実測図

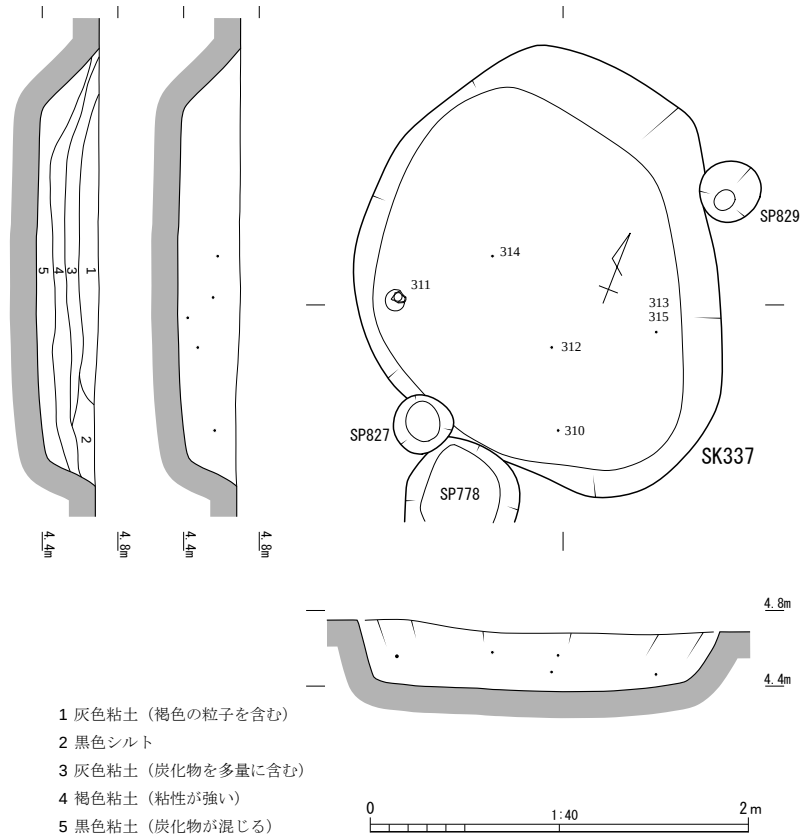


Fig.56　SK337 実測図

SK315（Fig.55）　3 工区 E5 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 1.5 m、短軸 1.3 m、深さ 0.3 mを測る。南側に SP570 が切り合っており、埋土は２層に分かれる。出土遺物は302～305である。出土遺物から、山中式期の遺構と捉えられる。

SK320（Fig.55）　3 工区 E5 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 2.0 m、短軸 1.6 m、深さ 0.3 m を測る。東側に中段があり、西側が一段深くなっている。西側は SP583 に切られている。遺物は 306 ～ 309 が出土した。出土遺物はいずれも小片のため、遺構の時期は不明である。

SK337(Fig.56)　３工区 G3 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長軸 2.4 m、短軸 2.0 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は５層に分かれており、中間の層で炭化物を多量に含む層がみられる。出土遺物は

310 ～ 315 が出土した。西側で小型壺が出土したが、全体的には破片が多く、廃棄土坑としての用途が考えられる。出土遺物はいずれも小片のため、遺構の時期は不明である。

土坑出土遺物（Fig. 57 ～ 59）　258 ～ 262 は壺である。側肩部の文様は、258 は横線文と波状文、259 は横線文と刺突文、260 は羽状の刺突文がそれぞれ施されている。261 は複合口縁の大型壺である。269 ～ 276 は SK50 から出土した。271 は甕壺、272 は内彎口縁細頸壺で、両方とも口縁部に

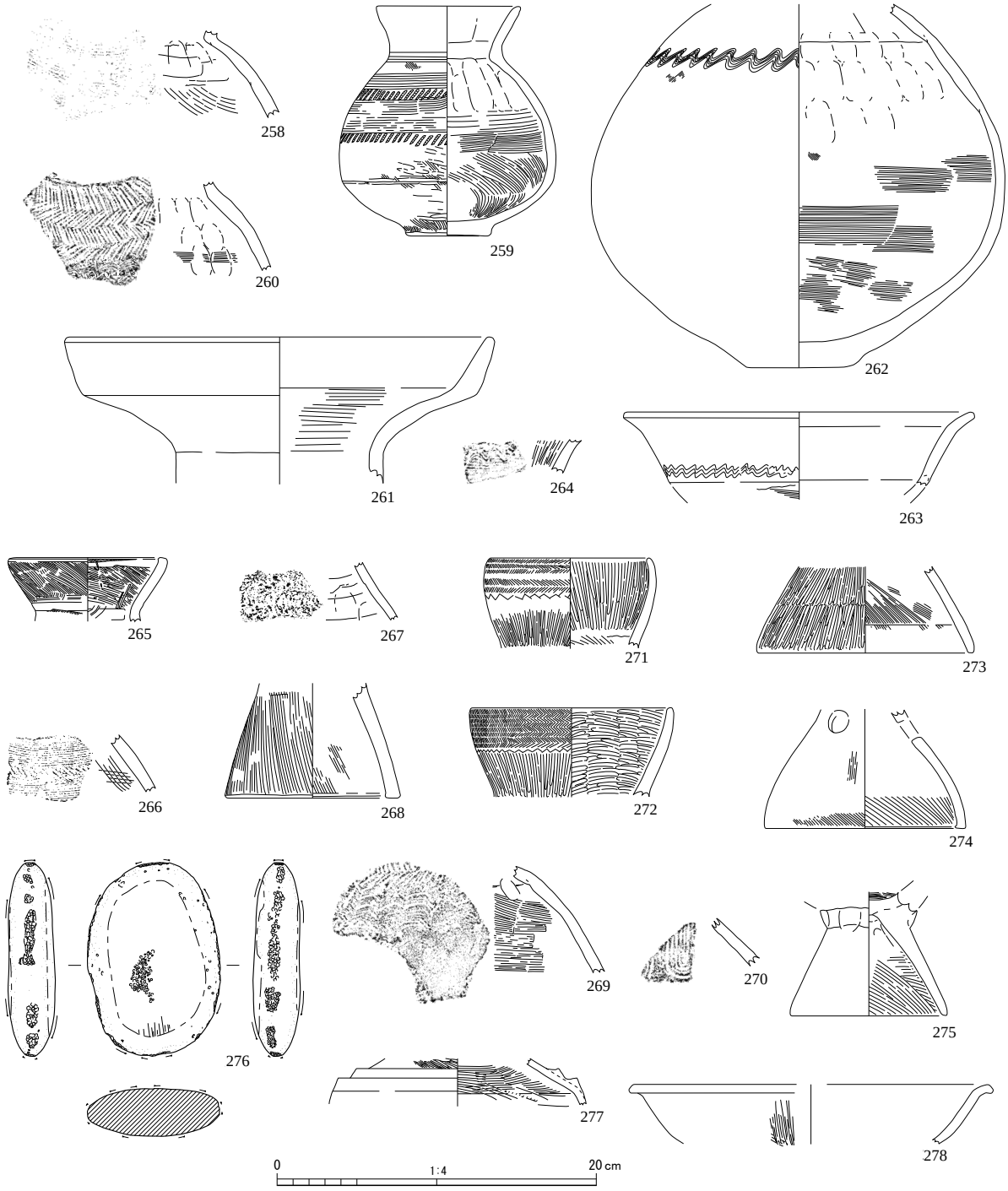


Fig.57　弥生時代 土坑 出土遺物（１）

258:SK01　259:SK02　260 ～ 262:SK03　263・264:SK20　265 ～ 268:SK43　269 ～ 276:SK50　277:SK57　278:SK59

羽状の刺突文と山形文が施されている。後者は、口縁内面に横方向のミガキが短い単位で施されている。273 は高坏の脚部で、２段にミガキが施されている。出土遺物から、SK50 の帰属時期は欠山Ⅱ～Ⅲ式期に相当すると考えられる。277 は SK57 から出土した装飾高坏である。焼成が良好のため器面は硬質で、丁寧なつくりをしている。278 は SK59、279 は SK69、280 ～ 282 は SK79 から出土した。280 は山中式系統の外反坏部高坏であるが、坏部が深く、欠山式期に残存した変容形態と考えられる。283・284 は SK208 から出土した。283 はく字鉢、284 は外反坏部高坏である。285 ～ 288 は SK209 から出土した。285・286 は壺、287・288 は鉢である。285 と 287 は体部中央が張り、扁平な形をしている。289 ～ 295 は SK212 から出土した。外反坏部高坏（290）や横線文が施された高坏の脚（291 ～ 294）から、SK212 は山中式期に帰属すると思われる。296・297 は SK215 から出土した。297 は甕で、口縁端部に刺突をもつ。298 は SK233 から出土した。台付甕で、口縁端部にヨコナデと刺突が入る。脚台部は低く、若干内彎している。299 ～ 301 は SK304、302 ～ 305 は SK315 から出土した。300 は高坏の脚部で、接合部に刺突文が施されている。301 とともに低脚

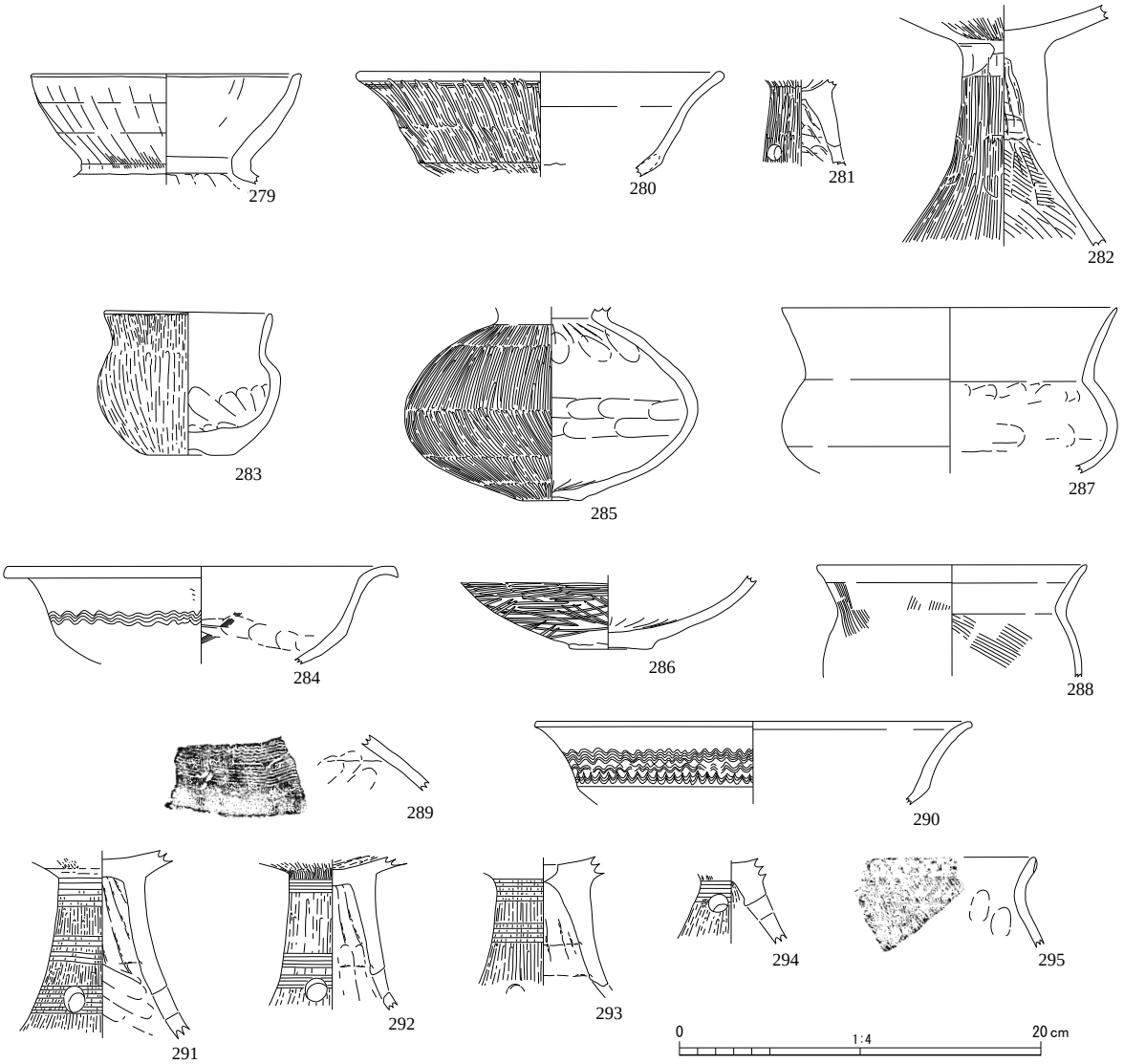


Fig.58　弥生時代 土坑 出土遺物（２）

279:SK69　280 ～ 282:SK79　283・284:SK208　285 ～ 288:SK209　289 ～ 295:SK212

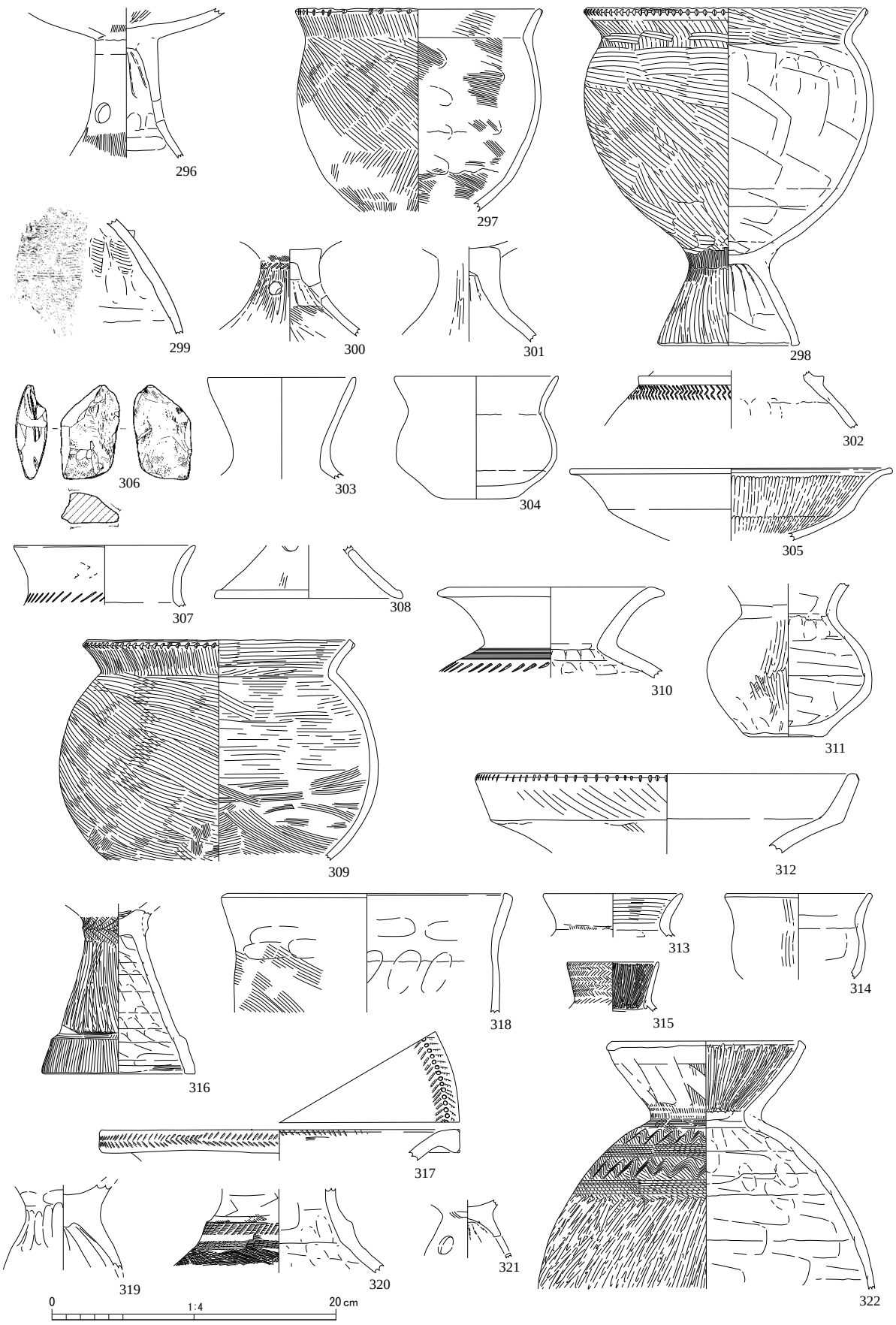


Fig.59　弥生時代 土坑 出土遺物（３）

296・297:SK215　298:SK233　299 ～ 301:SK304　302 ～ 305:SK315　306 ～ 309:SK320
310 ～ 315:SK337　316:SK350　317 ～ 319:SK354　320・321:SK355　322:SK356

で、裾は開いている。302 は壺で、側肩部に突帯文と羽状の刺突文が施されている。306 ～ 309 は SK320 から出土した。306 は流紋岩製の砥石である。309 は甕で、口縁端部に刺突をもつ。310 ～ 315 は SK337 から出土した。310 ～ 312 は壺である。312 は複合口縁で、口縁端部に刺突をもつ。313 ～ 315 は鉢である。315 は装飾く字鉢である。先端が細い工具によって、口縁部に羽状の刺突文を施している。316 は SK350 から出土した。高坏の脚で、脚接合部に羽状の刺突文を施し、裾には段を有している。菊川式の高坏で、搬入品である。317 ～ 319 は SK354 から出土した。317 は壺である。拡張口縁で、口縁に羽状の刺突文、口縁内面に羽状の刺突文と竹管文を組み合わせた文様が施されている。320・321 は SK355 から出土した。320 は壺で、側肩部に突帯文と廉状文風の刺突文が３列施されている。322 は SK356 から出土した。内彎口縁壺で、側肩部に横線文と波状文が施されている。

（４）溝

概　要　弥生時代の溝は、１・２工区を中心に検出された。ほとんどが南北方向か、その直交方向へ延びる溝である。全体的に溝の方向が統一されている印象があり、ある程度の規則性があるのかもしれない。SD51 のような細長く直線的な溝から、SD58 のような太く短い溝、SD60 のようなＬ字状の溝などの溝が確認できる。遺跡の縁辺に位置する溝が多く、SD60・SD103 などは調査区西側や北側の低地へ向って延びており、排水溝としての用途が想定される。出土遺物は多くない。

SD03（Fig.60・61）　１・２工区 E3・F3 グリッドで、工区をまたいで検出した。東西に延び、西端で南へ折れるＬ字状の溝である。溝の延長は東西約 20 ｍ、南北約３ｍである。幅 0.4 ～ 0.7 ｍ、深さは 0.1 ～ 0.2 ｍを測る。１工区では直線的に延び、２工区に入ると多少のうねりをもって延びている。Ｌ字状に折れた南端は､徐々に浅くなっていきなくなる。東側では SD51 と直交するように切り合っている。出土した遺物は、323・324 がある。

SD13（Fig.62）　１工区 D4 グリッドで検出した。東西に延びる溝で、東西約 7.2 ｍ、幅 0.3 ～ 0.6 ｍ、深さは 0.1 ～ 0.3 ｍを測る。SK41・SK50・SK56・SK59 と切り合っており SK50 で分断されているが、両者は一連の遺構と考えた。出土した遺物は、325 ～ 328 がある。

SD17（Fig.63）　１工区 E2 グリッドで検出した。南北に延びる溝で、南北約 7.8 ｍ、幅 0.8 ｍ、深さは 0.2 ｍを測る。

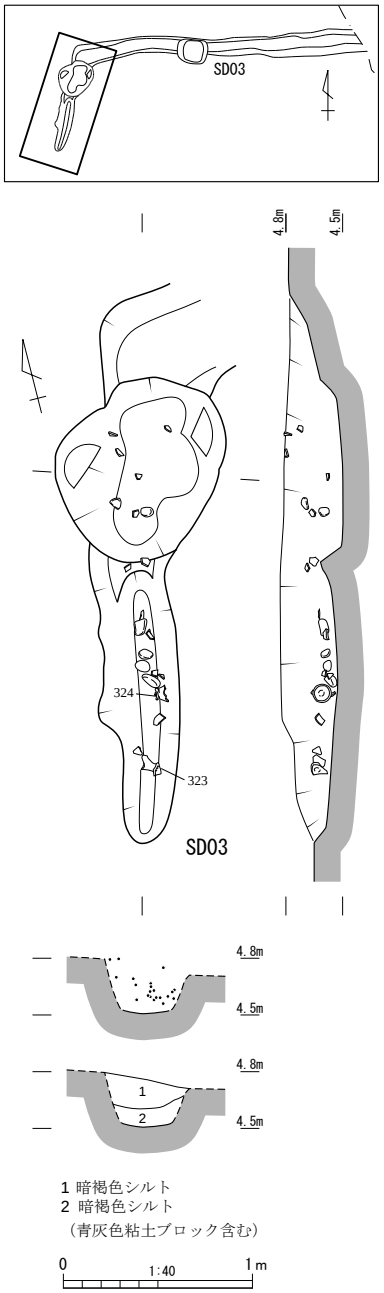


Fig.60　SD03 実測図（１）

SP170・SK79・SD03 と切り合っており、SD03 から直角に北へ直線的に延びている。他の溝と比較すると、溝の幅が広くなっている。低地への排水を意識した溝であろうか。出土した遺物は、329 がある。

SD51（Fig.63）　２工区 F2・F3 グリッドで検出した。南北に延びる溝で、南北約 16.6 m、幅 0.6 m、深さは 0.15 ～ 0.25 m を測る。主に SD03・SX01・SK215 と切り合っており、SD03 と直交している。南の調査区境から北へ延び、SX01 の東側で徐々に浅くなりなくなる。低地への排水を意識した溝であろうか。出土した遺物は、330・331 がある。出土遺物から、山中式期の遺構と想定される。

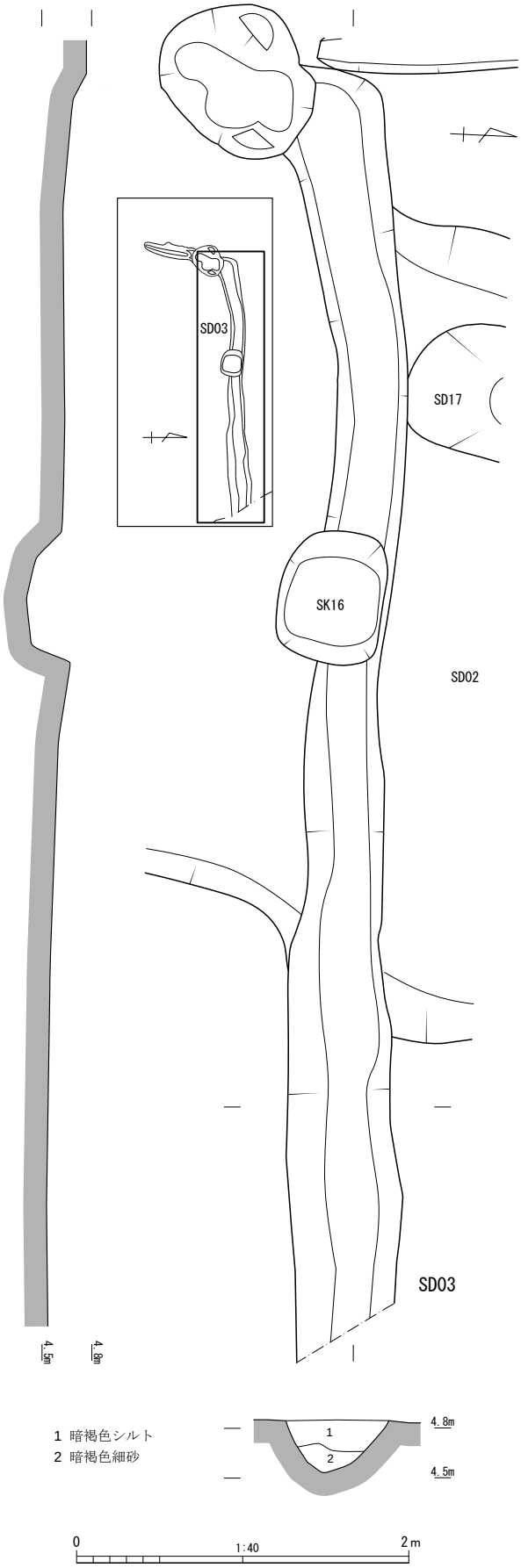


Fig.61　SD03 実測図（２）

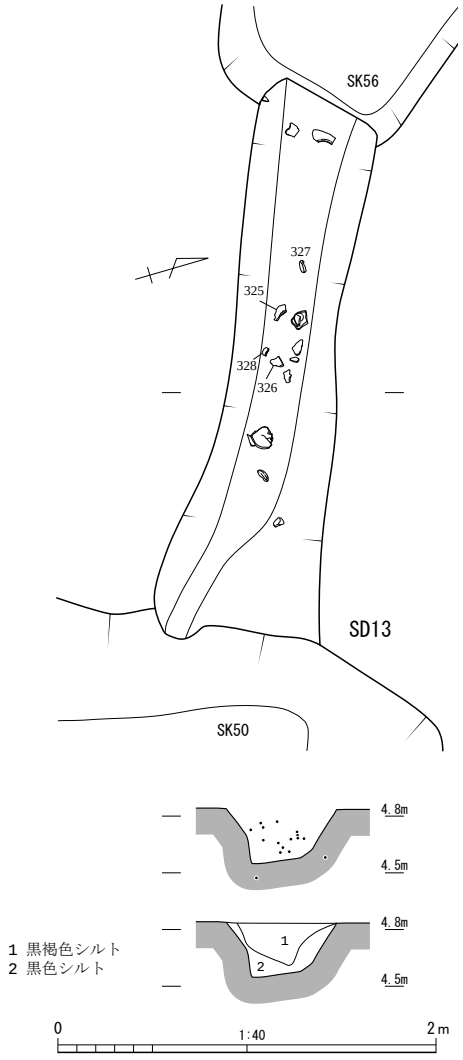


Fig.62　SD13 実測図

SD58（Fig.63）　２工区 H2 グリッドで検出した。北西に延びる溝で、延長約 3.7 m、幅 0.5 ～ 0.8 m、深さは 0.15 ～ 0.4 mを測る。南東側は幅広く深いが北西に延びるにつれ徐々に浅くなっている。SK230 と切り合っている。出土した遺物は、332 ～ 341 がある。出土遺物から、欠山Ⅲ式期の遺構と捉えられる。

SD60（Fig.63）　２工区 G1 グリッドで検出した。東西に延び、西端で北へ折れるＬ字状の溝であ

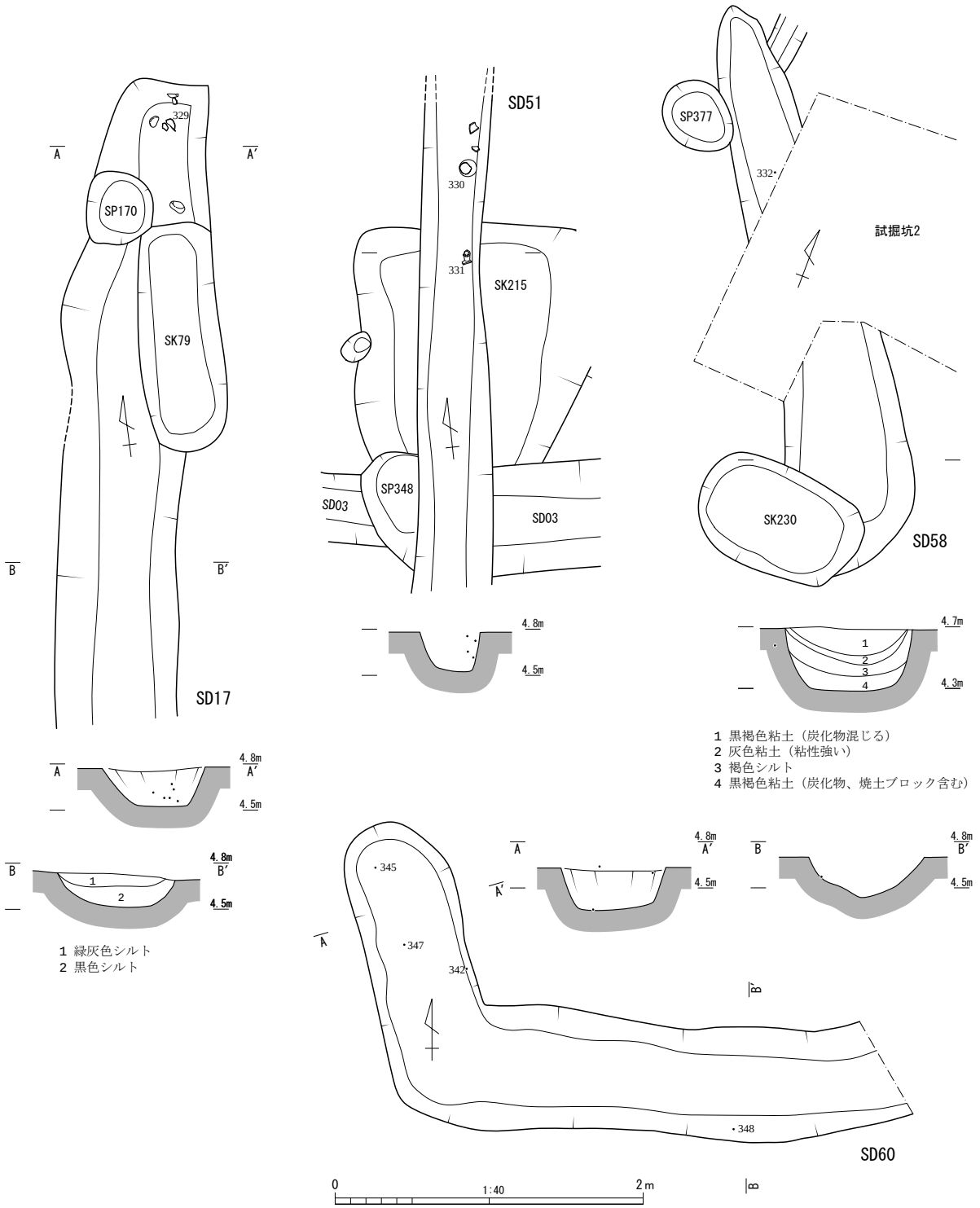


Fig.63　SD17・SD51・SD58・SD60 実測図

る。溝の延長は東西約３ｍ、南北約 1.5 ｍである。幅 0.7 ｍ、深さは 0.2 ～ 0.35 ｍを測る。出土した遺物は、342 ～ 348 がある。出土遺物から、山中式期の遺構と想定される。

SD03 出土遺物（Fig.64）　323・324 は SD03 から出土した遺物である。323 は高坏の脚部である。324 は台付甕の脚部である。いずれも破片であり遺構の帰属時期は不明であるが、弥生時代後期であろう。

SD13 出土遺物（Fig.64）　325 ～ 328 は SD13 から出土した遺物である。325・326 は壺である。325 は折返口縁で、口縁内面に扇形文が施されている。326 は複合口縁で、口縁下部に刺突をもつ。327 は鉢で、口縁が直線的に立ち上がっている。328 は甕で、口縁端部に刺突をもつ。いずれも破片であり遺構の帰属時期を明確にすることは難しいが、欠山式期であろうか。

SD17 出土遺物（Fig.64）　329 は SD17 から出土した遺物である。甕で、口縁端部に刺突をもつ。

SD51 出土遺物（Fig.64）　330･331 は SD51 から出土した遺物である。330 は壺である。小型壺で、底部の厚さが極端に薄くなっている。331 は高坏で、脚部に刺突文と横線文を施している。

遺構の帰属時期は、山中式期に想定したい。

SD58 出土遺物（Fig.65）　332 ～ 341 は SD58 から出土した遺物である。332・333 は壺である。332 は折返口縁壺で、口縁内外面に刺突文が施されている。333 は内彎口縁細頸壺で、口縁に羽状の刺突文を６列施している。334 ～ 337 は高坏である。坏部の形態は外反坏部(334)、碗形坏部(335)、有稜（336）の各種が確認できる。336 は欠山式期の高坏の典型で、内彎傾向が強く深い坏部をもつ。欠山Ⅱ式期のものと思われる。338 ～ 341 は甕である。口縁端部に刺突をもつもの（338・339）ともたないもの（340）があり、338 は口縁にはヨコナデが入る。341 は台付甕の脚台部で、器壁は薄く直線的に開いている。

出土遺物から SD58 の帰属時期は、欠山Ⅱ～Ⅲ式期に相当すると考えられる。

SD60 出土遺物（Fig.65）　342 ～ 348 は SD60 から出土した遺物である。342 ～ 345 は壺である。

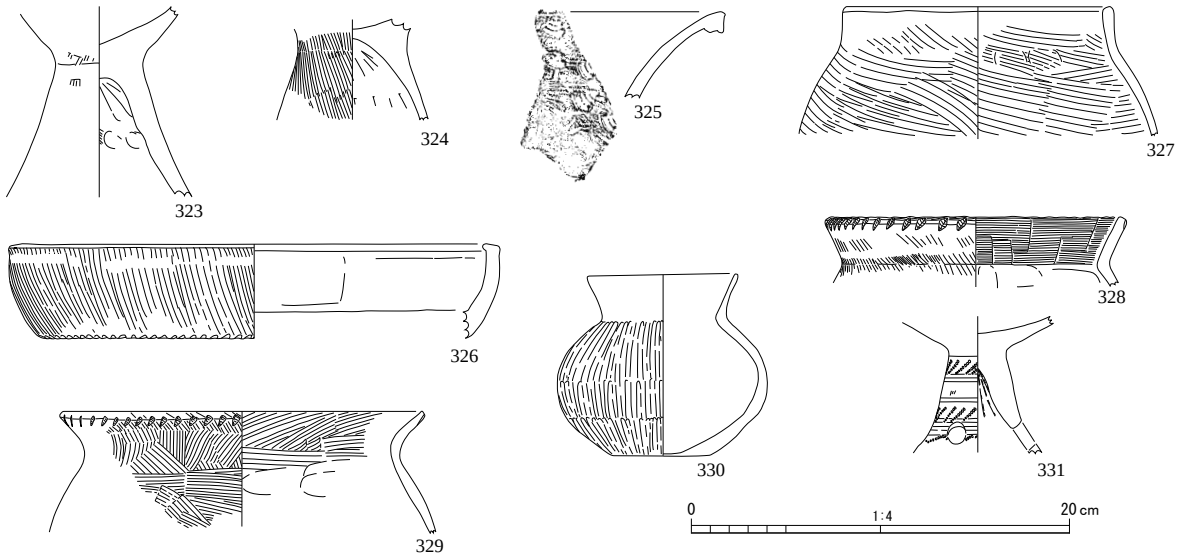


Fig.64　弥生時代 溝 出土遺物（１）

323・324:SD03　325 ～ 328:SD13　329:SD17　330・331:SD51

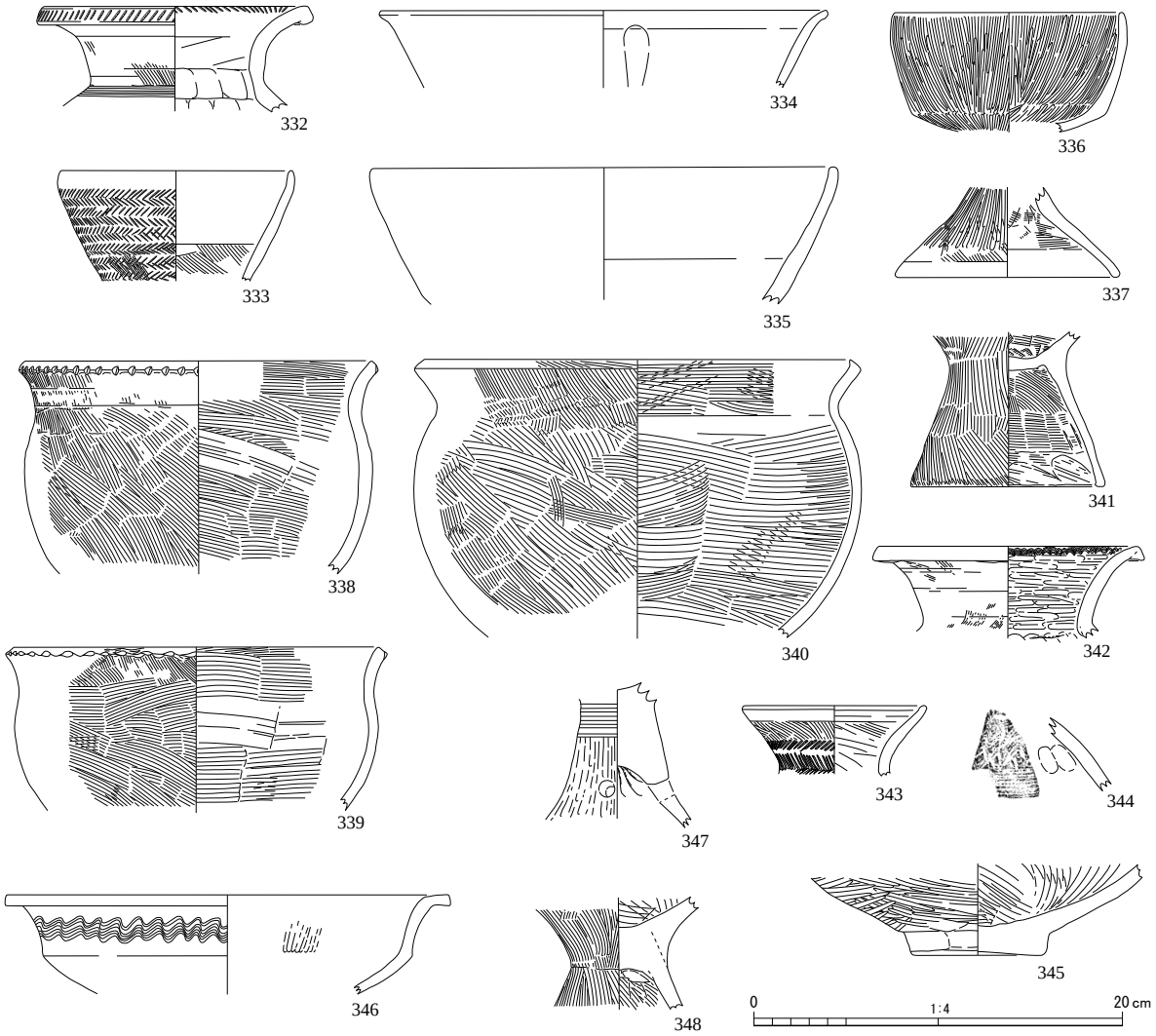


Fig.65　弥生時代 溝 出土遺物（2）

332 ～ 341:SD58　342 ～ 348:SD60

342 は折返口縁壺である。口縁内面に波状文と横方向のミガキが施されている。343 は外反口縁壺で、頸部に羽状の刺突文が施されている。346・347 は高坏である。346 は外反坏部高坏で、坏部に波状文を施している。348 は台付甕の脚台接合部である。

出土遺物から SD60 の帰属時期は、山中式期に相当すると考えられる。

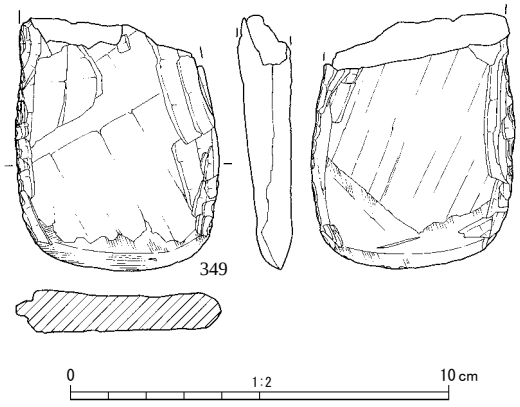


Fig.66　SD102 出土遺物

SD102 出土遺物（Fig.66）　349 は SD102 から出土した扁平片刃石斧である。緑色片岩製で、基部は欠損している。長さ 6.7cm、幅 5.4cm、厚さ 1.4cm を測る。刃部にのみ研磨が施されている。時期は明確にはできないが、他の出土遺物から弥生時代後期のものと考えられる。

（５）小穴

概　要　小穴は調査区全域で多数検出されたが、特に３工区南西部に集中している傾向がみてとれる。出土遺物も小片が多く、ほとんどの小穴の時期や性格は不明である。今回は弥生時代の掘立柱建物等の建物跡は検出できなかったが、小穴に中段があるものは柱穴の可能性があり、建物

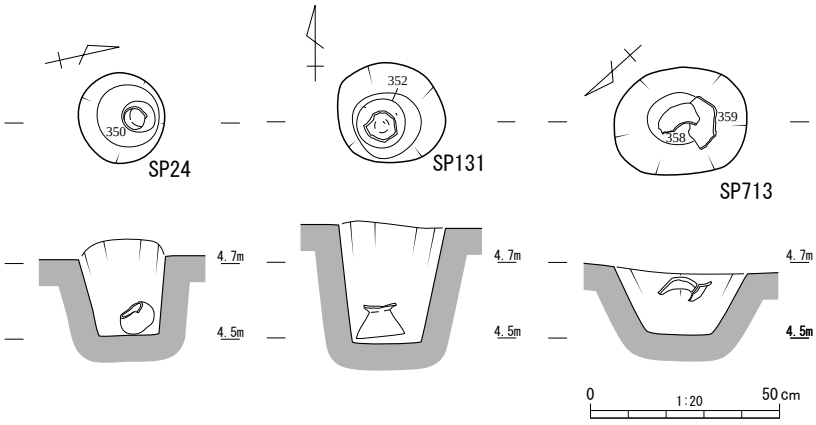


Fig.67　SP24・SP131・SP713 実測図

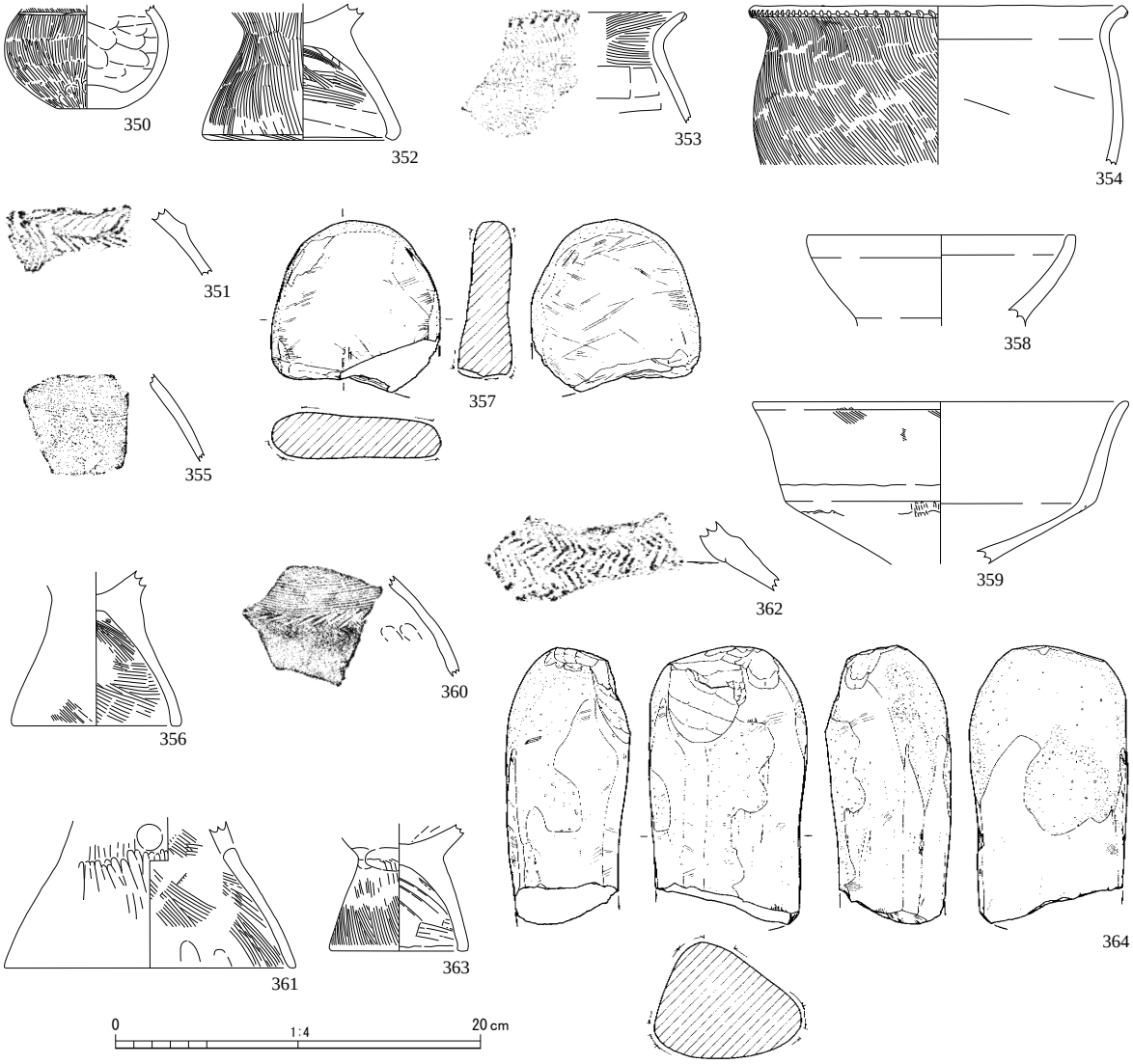


Fig.68　弥生時代 小穴 出土遺物

350:SP24　351:SP73　352:SP131　353:SP170　354:SP172　355:SP351　356:SP575
357:SP597　358・359:SP713　360・361:SP786　362:SP813　363:SP874　364:SP1009

の存在を示唆している。また、SP24 のように土器が埋納されたような状態で検出された小穴も存在する。

SP24(Fig.67)　１工区 E3 グリッドで検出した円形の小穴で、長軸 0.24 m、短軸 0.21 m、深さ 0.25 mを測る。床面直上より口縁が欠損した小型壺が若干斜め上を向いたほぼ正位の状態で出土した。意図的に埋納したものであろうか。出土遺物は 350 がある。

SP131(Fig.67)　１工区 D3 グリッドで検出した円形の小穴で、長軸 0.28 m、短軸 0.25 m、深さ 0.3 mを測る。床面付近より台付甕の脚台部が正位の状態で出土した。出土遺物は 352 がある。

SP713（Fig.67）　３工区 F5 グリッドで検出した楕円形の小穴で、長軸 0.35 m、短軸 0.28 m、深さ 0.16 mを測る。小穴内から壺口縁部と高坏坏部が重なるように出土した。出土遺物は 358・359 がある。

小穴出土遺物（Fig.68）　小穴から出土した遺物は破片が多く、量も少ないため、正確な時期は不明である。

350 は SP24 から出土した壺である。口縁が欠損しているが、胴部のミガキが丁寧に施されている。351・362 はそれぞれ SP73 と SP813 から出土した壺の側肩部である。突帯羽状文で、菊川式の壺であろう。352・356・363 はそれぞれ SP131・SP575・SP874 から出土した台付甕の脚台部である。脚台部しか出土しておらず、他の用途に転用された可能性がある。358・359 は SP713 から出土した。358 は内彎口縁壺の口縁部、359 は外反坏部高坏の坏部である。357・364 はそれぞれ SP597・SP1009 から出土した流紋岩製の砥石である。

（６）自然流路（SR01）

SR01 は３工区南西隅で検出された自然流路である（Fig.69）。調査区境で検出されたため詳細な規模は不明である。３工区西端は徐々に低地に移行し、その先に SR01 が流れている。SR01 の南側は１段下がっており、時期によって流路を変更しながら流れていた可能性がある。深さは 0.4 mで、南側の１段下がった箇所は 0.7 mを測る。SR01 はⅲ層（基本層位Ⅵ層）の砂礫層を削って流れている。SR01 上層のⅰ・ⅱ層（基本層位Ⅳ層）は遺物包含層で、灰釉陶器など古代の遺物を中心に出土した。SR01 埋土の１層からは、弥生時代の遺物を中心に出土したが、その下層の３層以降からは遺物はほとんど出土していない。これらのことから、SR01 は弥生時代かそれ以前の自然流路であり、弥生時代以降に埋没したと考えられる。

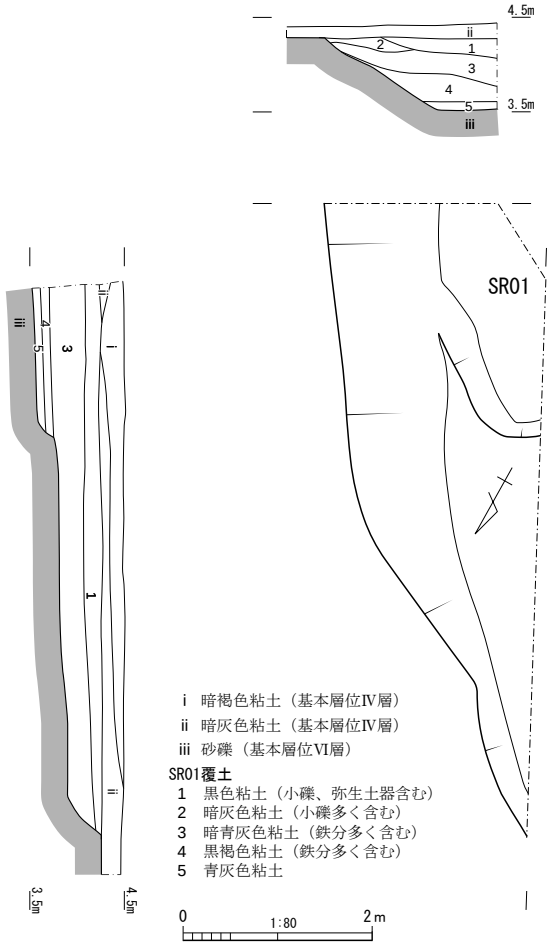


Fig.69　SR01 実測図

ただし、松東遺跡２次調査でも南西側は湿地帯が広がっていたとされており、SR01 が埋没したあとも調査区西側一帯は、ある程度の期間湿地帯が広がっていたと思われる。

（７）包含層等出土遺物

包含層からは比較的多くの遺物が出土した（Fig. 70 ～ 72）。その内、実測可能なものの中から抽出して図示した。

365 は二重口縁壺で、口縁に羽状の刺突文が施されており、柳ヶ坪型壺と思われる。367・368 は複合口縁壺である。ともに口縁に棒状浮文が貼り付けられ、367 は棒状浮文の下に交差文が施されている。382 ～ 384 は高坏の脚部で、383 は横線文と山形文を施している。どれも裾は外反しながら広がっている。385 は装飾高坏である。389 はＳ字甕の口縁である。ハケメ調整は内面を省略し、

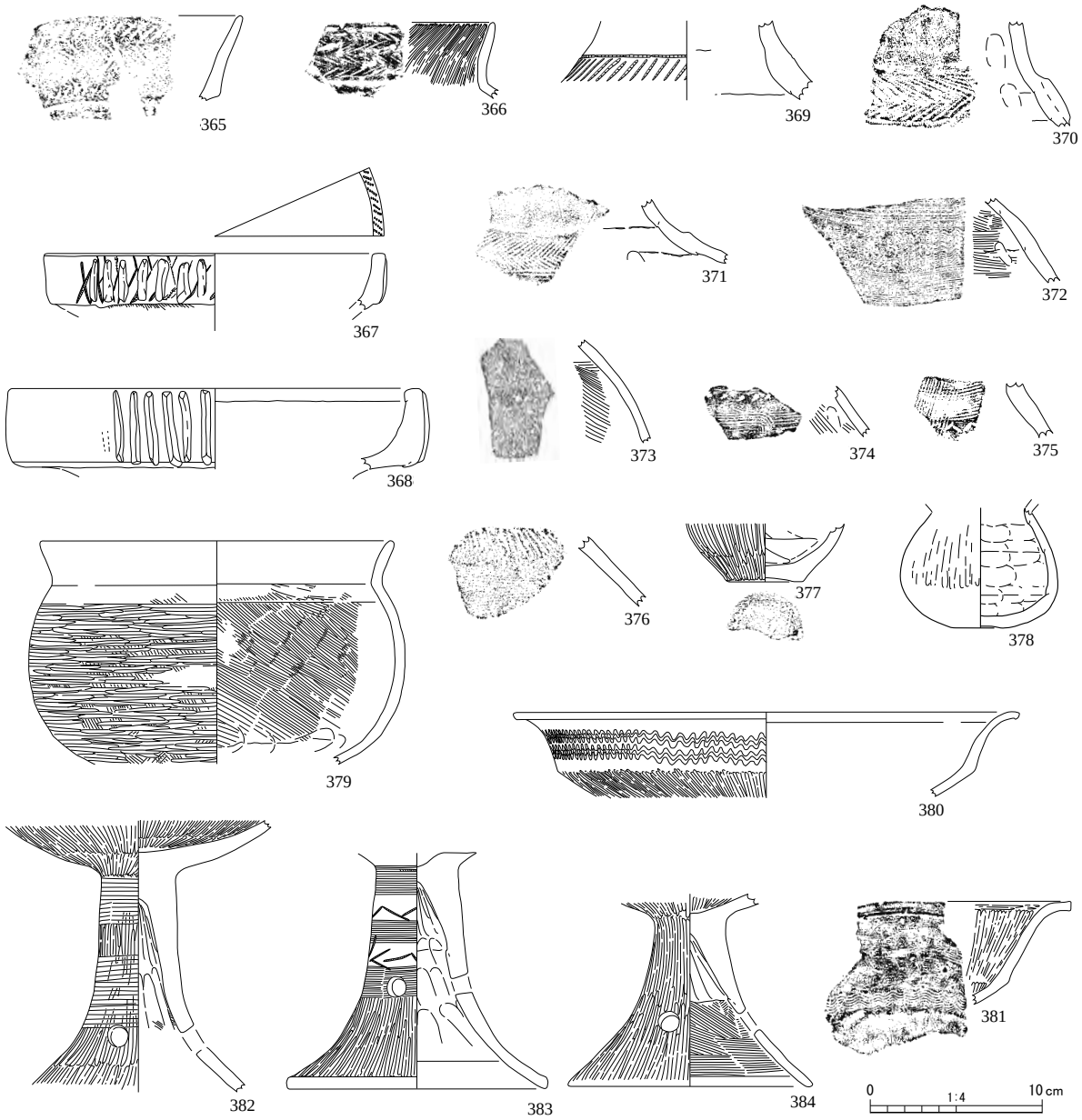


Fig.70　弥生時代 包含層等 出土遺物（１）

屈曲部内面にのみ行っている。これらの特徴からＳ字甕Ｂ類に相当する（赤塚 1990）。392 は砂岩製の叩石である。393 は SK60 から出土した磨製石斧である。SK60 は古代の遺構で、393 は混入品であるため、ここで扱う。泥岩製の扁平片刃石斧で、長さ 5.2cm、幅 3.3cm、厚さ 1.2cm を測る。完形品で丁寧に研磨されている。胴部に比べて刃部の幅がややひろがる形状をとる。時期は明確にはできないが、弥生時代中～後期のものと考えられる。394 ～ 399 は軽石である。砥石として使用されている。

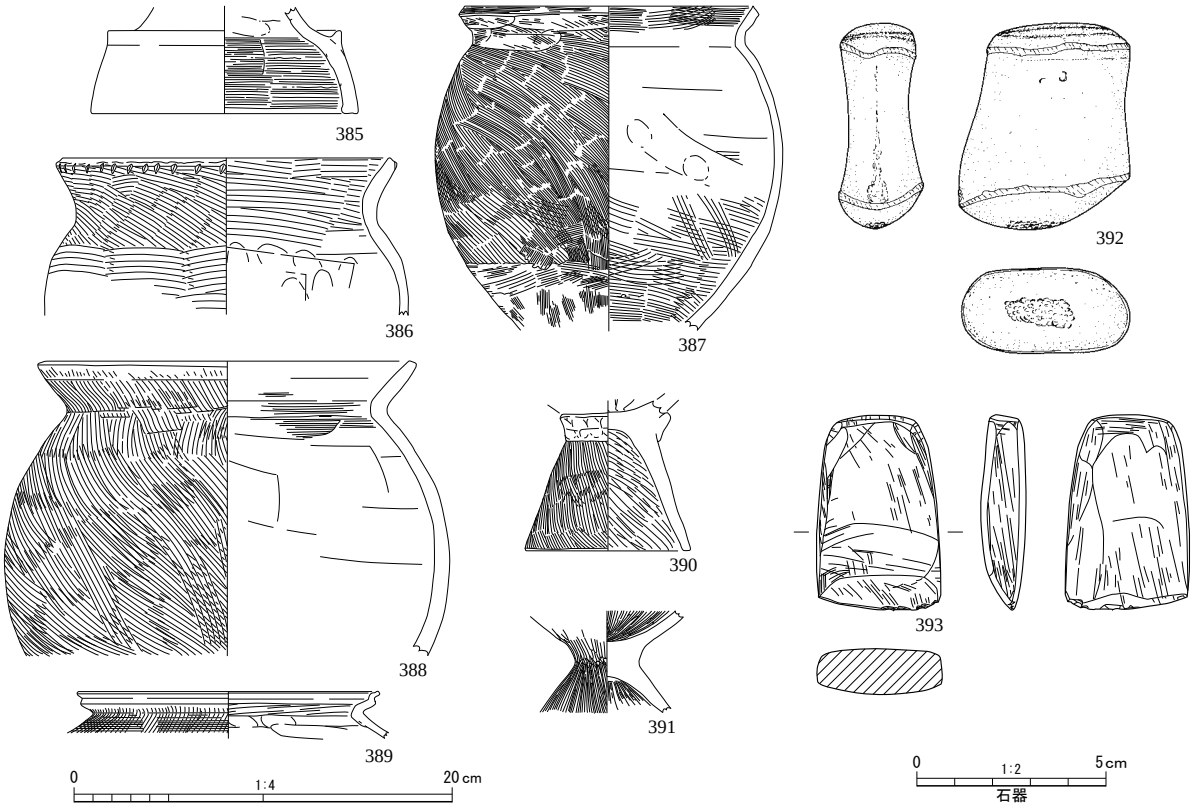


Fig.71　弥生時代 包含層等 出土遺物（２）

385 ～ 392: 包含層　393:SK60

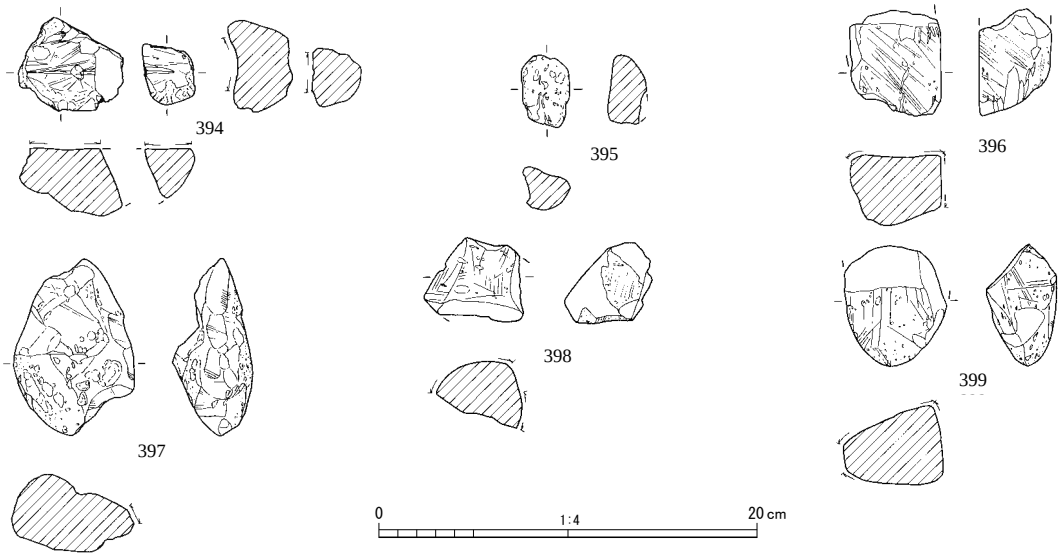


Fig.72　弥生時代 包含層等 出土遺物（３）

（８）弥生時代検出遺構・遺物の特徴

松東遺跡における弥生時代の遺構は、弥生時代後期の遺構を中心に、一部終末期に含まれるであろう遺構も検出できた。竪穴住居や掘立柱建物等は検出されず居住域は確認できなかったが、土坑を中心として遺物が豊富に出土した。以下、一括資料を示したうえで各遺構の時期的な位置付けを行い、松東遺跡における弥生時代の景観を復元してみたい。

器種比率と属性分析　松東遺跡３次調査において出土した土器様相の変化を、遺構ごとに属性分析を行うことにより編年的位置を読み取る。分析方法、器種の識別基準等は、鈴木 2009a に基づく。

器種比率　定量的な分析に耐えられる遺構として、土器集積土坑を中心に SX01・SK231・SK346・SK352・SK361 を抽出し、遺構別に器種ごとの個体数をまとめた（Tab.2）。遺構の時期順に並べると、時期を追うごとに壺の割合が多くなり、逆に高坏が減少している。壺は元屋敷期に入ると半数を超える。甕に関してはあまり変化がみられず、時期を問わずに一定量出土している。鉢に関しては、底部から口縁部まで全体が復元できるもののみカウントしているため、若干の誤差があると思われる。鳥居松遺跡５次調査の同時期の遺構を比較すると、若干の違いはあるものの、欠山式期を中心に概ね一致している。両遺跡の位置する箇所が天竜川平野南部と浜松南部であるため(Fig.74)、一概には比較できないが、同時期遺構の器種比率の傾向は近似することが示された。

属性分析　次に、同一器種や器形における属性分析を Tab.3 にまとめた。ここでは壺肩部の模様と台付甕の口縁部刺突の有無、脚台接合部における粘土帯の有無を数値化し、浜松南部の遺跡の分析結果（Tab.4）と比較しながら検討してみたい。

壺肩部の模様では、今回縦方向の直線文は確認されなかった。

扇形文は山中式期に多用される模様だが、山中Ⅲ式期の SK352 では確認されなかった。SX01 ではある程度確認できたが、時期幅があるため比較は難しい。SK361 では少量確認され、浜松南部の傾向から SK361 は欠山Ⅱ式期でも古相に帰属するものかもしれない。

波状文は、山中Ⅲ式期を最大に時期が降るごとに減少している。逆に列点文は、欠山Ⅲ式期まで確認数は増加している。浜松南部では山中式期で主体的だった波状文は、山中Ⅲ－２～欠山Ⅰ式期あたりで同程度になり、欠山Ⅱ式期以降は列点文が主体となるが（鈴木 2009a）、天竜川平野南部

Tab.2　出土資料器種比率

遺構		段階	壺		鉢		高坏		甕		計
			数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	
松東遺跡３次	SK352	山中Ⅲ	11	35%	1	3%	13	42%	6	20%	31
	SK231	欠山Ⅰ～Ⅱ	11	40%	0	0%	9	34%	7	26%	27
	SK361	欠山Ⅱ	19	44%	3	7%	10	23%	11	26%	43
	SX01	山中Ⅲ～欠山Ⅲ	39	46%	5	5%	23	28%	18	21%	85
	SK346	元屋敷Ⅰ-1	16	55%	0	0%	8	28%	5	17%	29
鳥居松遺跡５次	SD108	山中Ⅲ-2	29	40%	3	4%	24	33%	16	22%	72
	SX204	欠山Ⅰ	26	44%	2	3%	21	35%	10	16%	59
	SD104	欠山Ⅱ(古相)	13	35%	3	8%	12	32%	9	24%	37
	SD201下	欠山Ⅱ(古相)	81	32%	22	9%	65	26%	79	31%	247
	SX103中	欠山Ⅱ(新相)	14	41%	2	6%	12	35%	6	17%	34
	SX101	欠山Ⅲ	16	37%	2	5%	15	34%	10	23%	43
	SD201上	欠山Ⅲ	90	41%	6	3%	50	22%	73	33%	219

鈴木 2009ａ　Tab.6 を一部改変

Tab.3　松東遺跡３次調査の一括資料における属性分析

遺構名	時期	模様							口縁刺突・ヨコナデ					粘土帯	
		縦	扇	波	刺				有・有	有・無	無・有	無・無	不明	有	無
					点	羽	山	交							
SK352	山中Ⅲ			6	3	4			4	7				2	4
									11						
SK231	欠山Ⅰ～Ⅱ			4	8				4	8	2	1		3	4
									12		3				
SK361	欠山Ⅱ		2	3	10	5			9	9	1	1	5	2	9
									18		2				
SX01	山中Ⅲ～欠山Ⅲ		5	16	18	3			9	14		1	1	3	15
									23		1				
SK346	元屋敷Ⅰ-1				1	1				2	1	2	5		5
									2		3				

凡例
縦：縦方向直線文（Ｔ・Ｊ字文）　扇：扇形文　波：波状文
刺：刺突文　点：列点文　羽：羽状文　山：山形文　交：交差文
アミ：濃いアミは主体の様相であること、薄いアミは新旧の様相が拮抗することを示す。
個体数：個体数のカウントは、非抽出遺物を含む全体を対象とした。また、甕口縁の摩滅が激しく観察が困難なものについては不明とした。

でも同じ傾向が示された。元屋敷Ⅰ－１式期の SK346 でも列点文と波状文が確認され、元屋敷Ⅰ式期に入っても少量残る傾向が天竜川平野南部でも示された。

羽状文・山形文・交差文は欠山Ⅱ～Ⅲ式期に好んで採用されている模様である。菊川式土器に好んで採用される羽状文が、山中Ⅲ～欠山Ⅲ式期まで一定量認められる。また、他の遺構からも縄文を施したものや、胎土などから菊川式の影響を受けたと思われる土器が見受けられる。一方、交差文や尾張地方のパレススタイル土器に好まれる山形文が確認されなかった。今回の調査で検出された他の遺構から出土した土器をみても、高坏の脚部に少量認められる程度である。浜松南部の欠山Ⅱ～Ⅲ式期の遺構からは一定量出土しており、この差は地域性をあらわすものであろうか。

台付甕は口縁端部の刺突の有無と、西遠江にみられる脚台接合部の補強としての粘土帯の有無の２点について属性分析を行った。口縁端部の刺突は、山中式期は有刺突の個体のみで、欠山式期になると無刺突の個体が見受けられるようになる。また、口縁端部における刺突の有無が同数になるのは、元屋敷Ⅰ－１式期であると想定されており（鈴木 2009a）、天竜川平野南部でも同じ傾向が示された。脚台接合部の粘土帯の有無は山中式期ではほぼ同数だったものが、時代を降るごとに粘土帯をもたない個体が増加し、元屋敷式期に入ると粘土帯をもつものがなくなる。これも浜松南部と同じ傾向である。

以上、浜松南部の一括資料と比較しながら天竜川平野南部をみてきた。今回の分析結果を浜松南部の遺跡の属性分析表に当てはめてみた（Tab. 4）。結果として若干の違いはあるものの、概ね浜松南部の属性分析の傾向は、天竜川平野南部にもあてはめることができるといえる。ただ、壺肩部の山形文や交差文が確認されなかったことは地域性をあらわしているのかもしれない。今回は尾張地方のパレススタイル土器に多用される山形文が確認されず、菊川式土器の影響が考えられる羽状文が多くみられた。このことは、尾張地方に近い浜松南部より東側で、菊川様式圏と接する境界に松東遺跡が位置するという地理的要因が考えられるのではないだろうか。しかし、同じ天竜川平野南部に位置する遺跡の中でも、寺西遺跡のように菊川様式の強い影響がみられる遺跡もあれば、山の神遺跡のように伊勢湾沿岸地域との交易が活発であったと考えられる遺跡もある。このことは、集

Tab.4　一括資料における属性の変遷

資料名	時　期	模　様							口縁刺突		粘土帯	
		縦	扇	波	刺				有	無	有	無
					点	羽	山	交				
梶子 10 次 SD08	山中Ⅱ -2	2	5	33					10		13	7
梶子 10 次 SD10	山中Ⅱ -2		7	28	1				7		12	10
梶子 8 次 SX01	山中Ⅲ -1	3	8	26	2				12		10	4
鳥居松 3 次 SD04	山中Ⅲ -1	1	1	1	1				5		3	4
梶子 8 次 SD01A・B	山中Ⅲ -2		2	14	6	1	1		8		8	6
梶子 8 次 SK06・07	山中Ⅲ -2	1	4	10	4				10		10	10
鳥居松 5 次 SD108	山中Ⅲ -2	2	2	12	13				18	1	13	3
松東 3 次 SK352	山中Ⅲ			6	3	4			11		2	4
鳥居松 5 次 SX204	欠山Ⅰ		1	7	7				16	1	5	5
松東 3 次 SK231	欠山Ⅰ～Ⅱ			4	8				12	3	3	4
鳥居松 5 次 SD104	欠山Ⅱ（古相）		4	14	24				8	1	9	1
鳥居松 5 次 SD201 下	欠山Ⅱ（古相）		1	4	37	4	5		96	3	34	39
鳥居松 5 次 SX103 中	欠山Ⅱ（新相）			2	3				3	1	3	3
椿野 1982 溝	欠山Ⅱ（新相）			8	13	5			21	5	2	4
松東 3 次 SK361	欠山Ⅱ		2	3	10	5			18	2	2	9
鳥居松 5 次 SX101	欠山Ⅲ			2	8		2		11	6	1	9
松東 3 次 SX01	山中Ⅲ～欠山Ⅲ		5	16	18	3			23	1	3	15
鳥居松 5 次 SD201 上	欠山Ⅲ		3	19	100	3	7	6	111	23	16	27
鳥居松 1 次 SX03・06	欠山Ⅲ			7	21	4	11	1	32	9	5	26
坊ヶ跡 1 次 SB25	元屋敷Ⅰ -1			1	1				5	3	2	8
松東 3 次 SK346	元屋敷Ⅰ -1				1	1			2	3		5
坊ヶ跡 1 次 SB49	元屋敷Ⅰ -1		2	2	3				3	5	1	3
坊ヶ跡 1 次 SK33	元屋敷Ⅰ -1				2				4	5	1	8
坊ヶ跡全体	元屋敷Ⅰ -1・2		3	5	23	3			19	61	6	59
北神宮寺全体	元屋敷Ⅰ・Ⅱ			21	25		4		95	228	2	78

凡例：Tab. 3 参照　　鈴木 2009a Tab. 7 を一部改変

落のあり方が拠点集落か分岐集落かにより、出土する土器組成の違いに表れてくることが指摘されている（鈴木 2000）。これらのことから、松東遺跡は分岐集落と考えることができ、山の神遺跡を拠点集落とした集団関係が成立していた可能性がある（向坂 1989）。

弥生時代後期の集落　松東遺跡では、過去２回の調査において環濠を伴う集落の存在が明らかになっている。また、突線鈕３式（近畿Ⅱ式）と考えられる銅鐸飾耳の破片が出土し（２次調査）、今回出土した銅鐸鈕の破片も含めて集落の様相を知る上で貴重な発見である。

松東遺跡は、過去に天竜川が激しく流路変更して形成された微高地上に位置し、その周辺には低位面が広がっていた。周辺には同じく微高地上に集落が形成された遺跡が点在し、銅鐸型土製品が出土した森西遺跡や環濠を伴う山の神遺跡などがある。今回の調査区から西へ約 600 ｍのところからは、木船銅鐸２口（Fig. 9）も出土しており、集落が密に集まるこの地域は、銅鐸という共通祭祀具を用いた集落間の深い関係が想定されている（浜文協 2000）。特に山の神遺跡は、松東遺跡と同様に環濠を伴う集落が検出されており、規模は松東遺跡の環濠よりはるかに大きいと想定される。山の神遺跡が規模、出土遺物の内容などから、天竜川平野南部地域において拠点集落であると評価でき、その分岐集落として松東遺跡が存在していたと考えられる（鈴木 2000）。

今回の調査区は、過去の調査で検出された環濠より南東へ約 100 ｍのところに位置する。環濠は南北約 80 ｍ、東西約 55 ｍと想定されており、今回の調査区は環濠の外側にあたる。土坑と溝が検出され、建物跡が１軒も検出されなかった。しかし、小穴が多数検出されていることから、建物跡

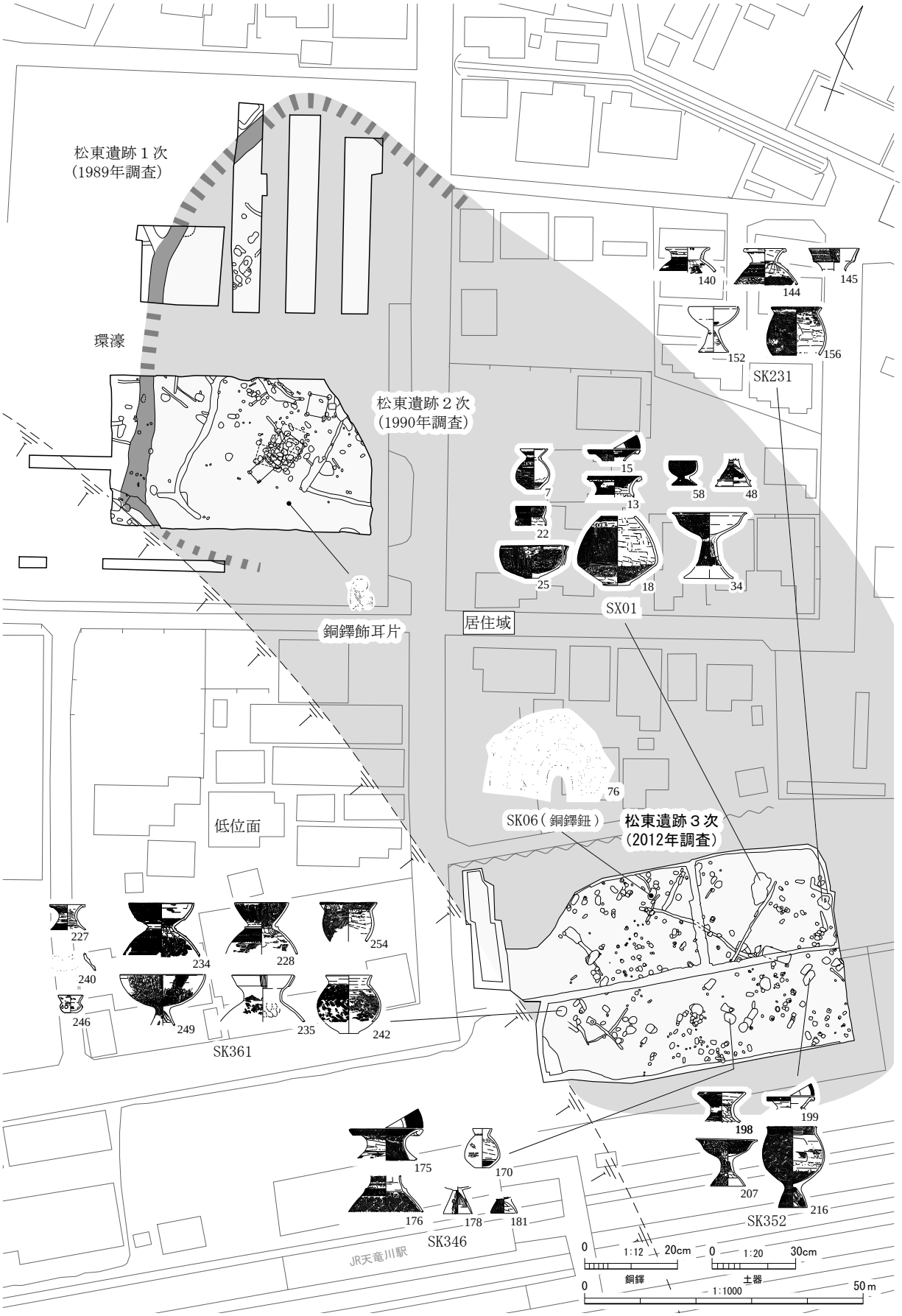


Fig.73　松東遺跡周辺と弥生時代の遺構

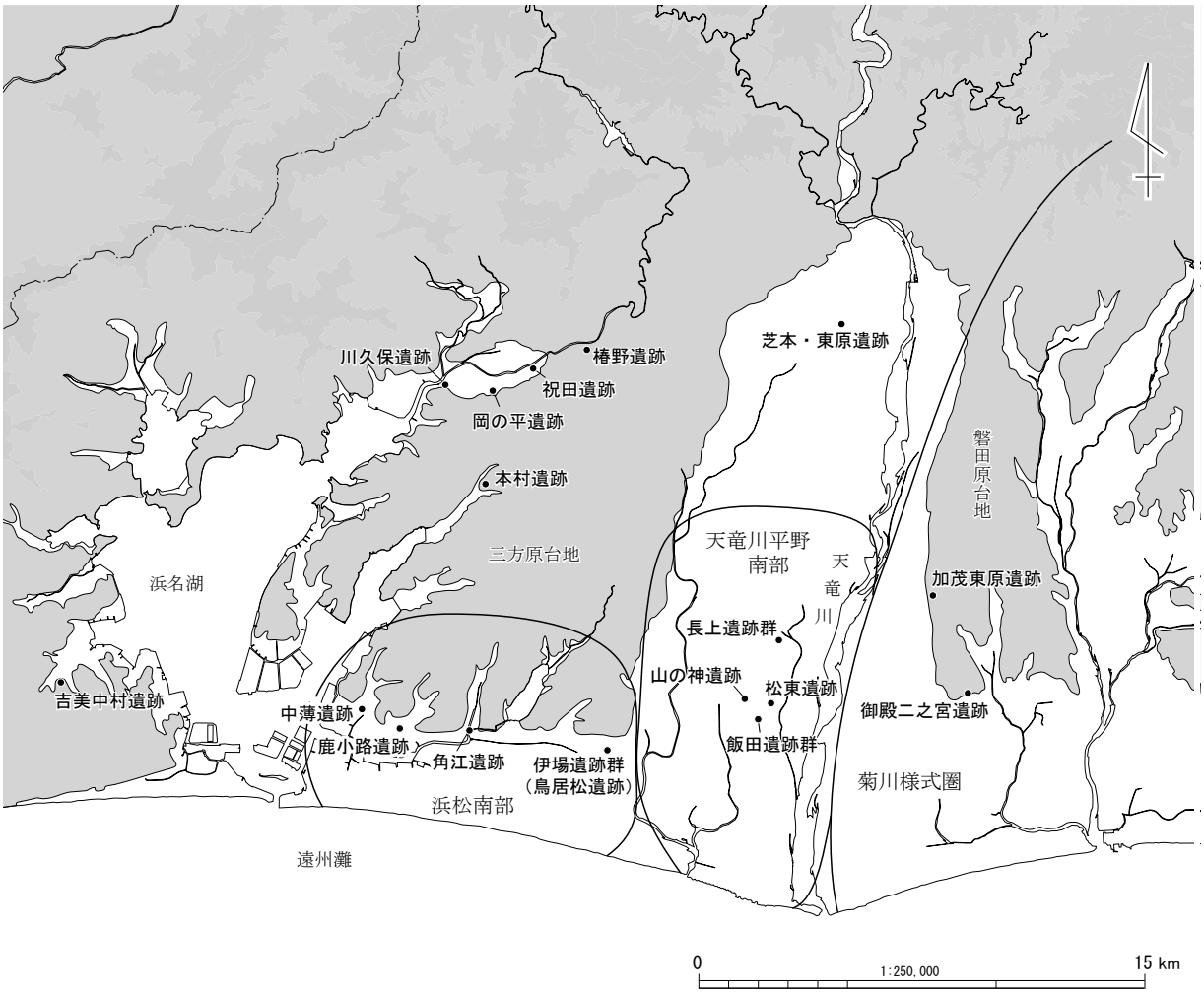


Fig.74　西遠江における主要弥生時代遺跡分布図

が存在していた可能性はある。また、環濠の内側で検出された溝と今回検出された溝の方向が一致しているものがある。環濠内の小区画溝とされており、同じ性格の遺構であると考えれば、区画溝に囲まれた小区画単位の集落が存在していた可能性はある。検出された遺構の時期は山中Ⅲ式期から元屋敷Ⅰ－１式期まで存在する。環濠は欠山式期には廃絶しており、今回検出された遺構は、環濠が機能しなくなった欠山Ⅱ式期を中心に構成されている。山の神遺跡の環濠も同様の時期に廃絶し、欠山式期に遺跡の範囲が最大規模になっていることから、今回検出した遺構も、遺跡の範囲が最大規模に広がった時期のものと考えられる。また、過去の調査により低位面が西側に広がっていることが想定されていたが、今回も遺跡西側に低位面が広がることが確認された。天竜川平野南部の他の遺跡と同様に水田が営まれていたと思われ、弥生時代後期の集落としては一般的な集落景観が復元できる。

元屋敷式期の土坑は１基確認されたが、その後は遺物も乏しく、元屋敷式期に入って集落は急速に衰退していったと考えられる。同様の傾向は浜松南部の鳥居松遺跡でもみられ、居住地の中心が三方原台地上に移り、低地に展開していた弥生時代的な集落景観は次第に姿を消していったと思われる（鈴木 2009b）。

３　奈良・平安時代

（１）検出遺構の概観

奈良・平安時代の遺構は、調査区の全域から検出された（Fig.75）。ここで、奈良・平安時代の遺構と認定したものは、①小片であっても当該時期の遺物を含んでいるもの、②遺構の重複関係からこの時期と認定できるもの、③遺構を構成する要素からこの時期と認定できるものである。この方法だと、弥生土器の小片しか出土していないが、掘立柱建物の柱穴のように、②、③の条件から奈良・平安時代の遺構に認定されるものもある。逆に、遺物を伴出していないために時期不明とした小穴や、弥生時代と認定した小穴などの中にも奈良・平安時代に属するものが若干含まれると考えられる。

以上の方法で認定した遺構の分布を見ると、相対的には調査区の北隅方向では、遺構密度が薄くなる。また、調査区南西端側は低地に移行する部分となり、遺構が検出されない。

奈良･平安時代の遺構としては、高床構造と考えられるものも含めた掘立柱建物９棟、土坑多数、溝状遺構多数、小穴多数、井戸１基が検出された。

土坑、小穴については、その区別が厳密ではない。溝状遺構は、区画溝的性格を持つ例の他に、不明確なものが多くある。

SD107･SD110 からは､遺物が豊富に出土している。また､SK301･SK302 からは鉄滓が主に出土した。

（２）掘立柱建物

概　要　東西に長く延びる SD107 の北側（以後 SD107 区画溝外側と呼ぶ）に所在するものと、南

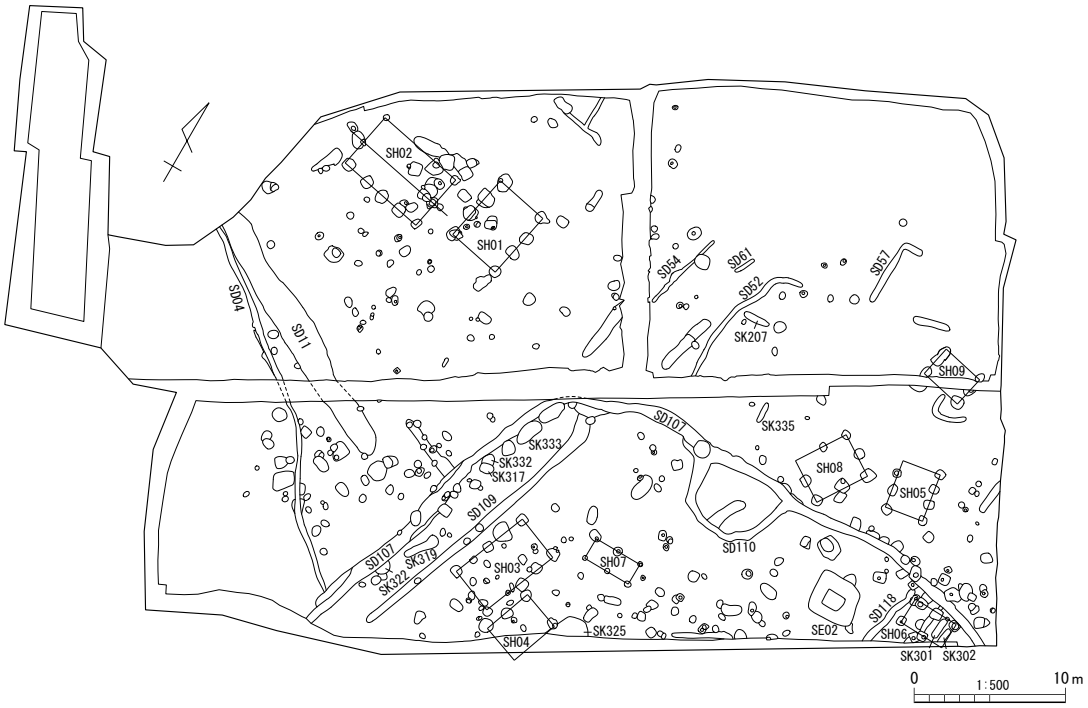


Fig.75　奈良・平安時代 遺構分布図

側（以後 SD107 区画溝内側と呼ぶ）に所在するものとがある。前者に属するものとして、SH01・SH02・SH05 ・SH08・SH09 がある。また後者に属するものは、SH03・SH04・SH06・SH07 がある。

SD107 区画溝外側の５棟の内､SH01 と SH02 は､隣接しているのと同時に建物方位も近似しており、関連性がうかがえる。同様に、SD107 区画溝内側の、SH03 と SH04 も関連性がうかがえる。

柱穴内からは土器・須恵器・陶器などの細片が少量出土した程度で、いずれの建物も厳密な年代を決定することはできなかった。

また、掘立柱建物には復元できないが、形状から柱穴と考えられる小穴もいくつかみられる。

① SD107 区画溝外側の建物跡

SH01（Fig.76）　１工区 D3 から E3 グリッドにまたがって検出された。SH02 と建物方位が近似している。桁行３間、梁行１間で、高床構造の可能性が高い。桁行 4.7 m、梁行 3.8 mである。柱穴は、直径 0.8 ～ 1.2 mと大型で、不整隅丸方形である。深さは、0.2 ～ 0.4 mで、埋土は、若干有機質を含んでいる。SP214 ～ SP216 、SP209 は、建物東側桁行に属する柱穴であるが、これらは、中世以降に属する SD02 の底面に検出面があり、低地化のために埋土はグライ化している。西側の列に属する、SP132・SP138・SP51・SP140 の埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。柱痕は、SP132 以外では検出できなかった。

遺構を構成する柱穴からは、律令期の遺物は検出できず、弥生土器の小片が検出されただけであるが、SH02 との関連性を根拠として、律令期の遺構と考えた。

SH02（Fig.77）　１工区 D3 グリッドから検出された。SH01 とは隣接し、建物方位も近似している。桁行４間、梁行２間であるが、梁行側の棟持柱に該当する SP203 と SP194 に隣接した外側に、SP200 と SP118 がある。この柱穴は、建物を構成している他の柱穴より浅い点などの疑問点はあるが、独立棟持柱の可能性が考えられる。桁行 6.25m、梁行 3.95 mである。柱穴は､直径 0.5 ～ 1.0 mで、SP105・SP195 のように隅丸方形の平面形を呈する例がある。深さは、0.5 m前後のものもある。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。柱痕は、SP135 以外では検出できなかった。遺構を構成する柱穴中に SK47 のように土坑と認識したものもあるが、柱穴である。

SK47・SP89・SP135・SP196・SP200・

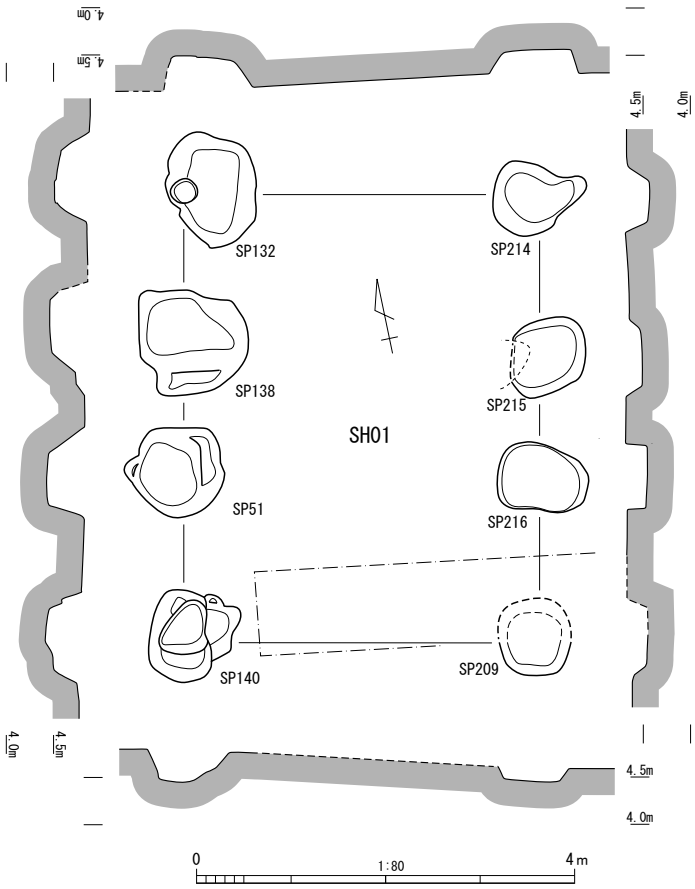


Fig.76　SH01 実測図

SP203からは、律令期の土器小片が出土した。

SH05（Fig.77）　３工区H3グリッドから検出された。桁行３間、梁行１間で、高床建物の可能性が高い。桁行3.25ｍ、梁行2.65ｍである。柱穴は、直径0.5～0.6ｍで、不整隅丸方形である。

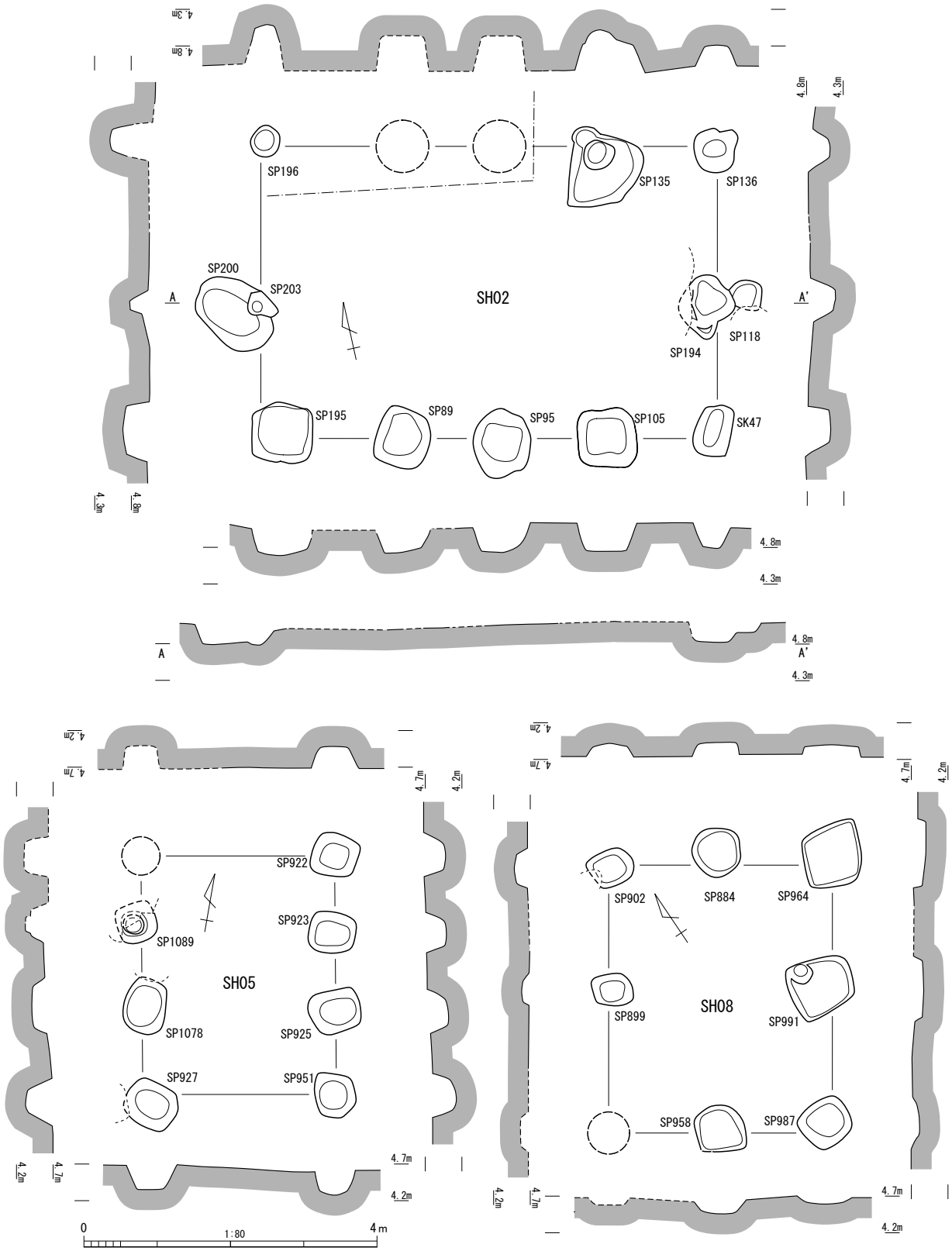


Fig.77　SH02・SH05・SH08 実測図

深さは、0.3ｍ程度である。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。北東隅の柱穴は、弥生時代に属するSK352と重複していたと考えられるが、検出することはできなかった。柱痕はいずれの柱穴からも検出できなかった。

SP923・SP925・SP1078からは、律令期の土器小片が出土した。

SH08（Fig.77）　３工区G3グリッドから検出された。SH05に近接しているが、建物方位が大きく異なっている。桁行２間、梁行２間である。桁行3.65ｍ、梁行3.0ｍである。柱穴の直径は0.5～1.0ｍで概して西側が小さい。深さは、0.1～0.2ｍと浅い。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。南西隅の柱穴は、SK337と重複しており、検出できなかった。

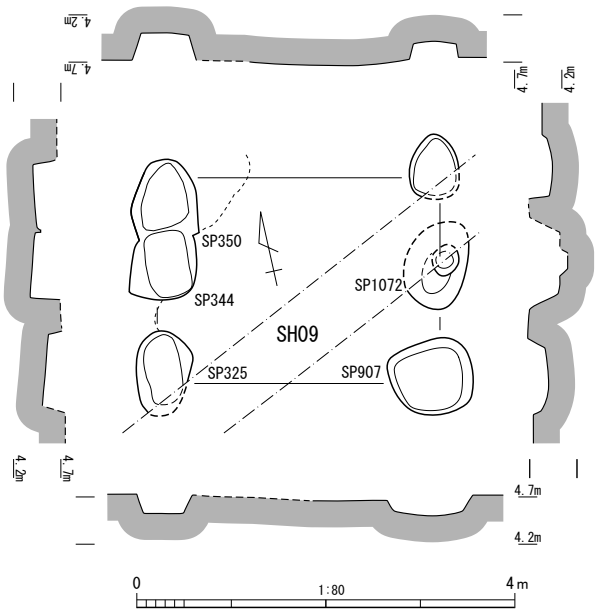


Fig.78　SH09 実測図

SP902・SP987・SP991からは律令期の土器小片が出土した。

SH09（Fig.78）　２工区・３工区H2グリッドから検出された。発掘調査は１～３工区に分けておこなったが、当遺構は２工区と３工区にまたがって検出された。建物方位はSH01、SH02に近似している。桁行２間、梁行１間である。桁行2.15ｍ、梁行2.95ｍである。桁行の方が短い高床建物であろう。柱穴は、直径0.5～0.9ｍで、深さは、0.2～0.5ｍである。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。柱痕は、SP1072以外からは検出できなかった。

SP325・SP1072から律令期の土器小片が出土した。

② SD107区画溝内の建物跡

SH03（Fig.79）　３工区F5グリッドから検出された。SH04と建物方位が近似している。桁行４間、梁行２間である。桁行5.55ｍ、梁行3.25ｍである。桁行の東側通りでは、西側通りのSP1017に対応する柱穴が検出されてない。柱穴の直径は、0.6～0.8ｍで不整隅丸方形である。深さは、0.2

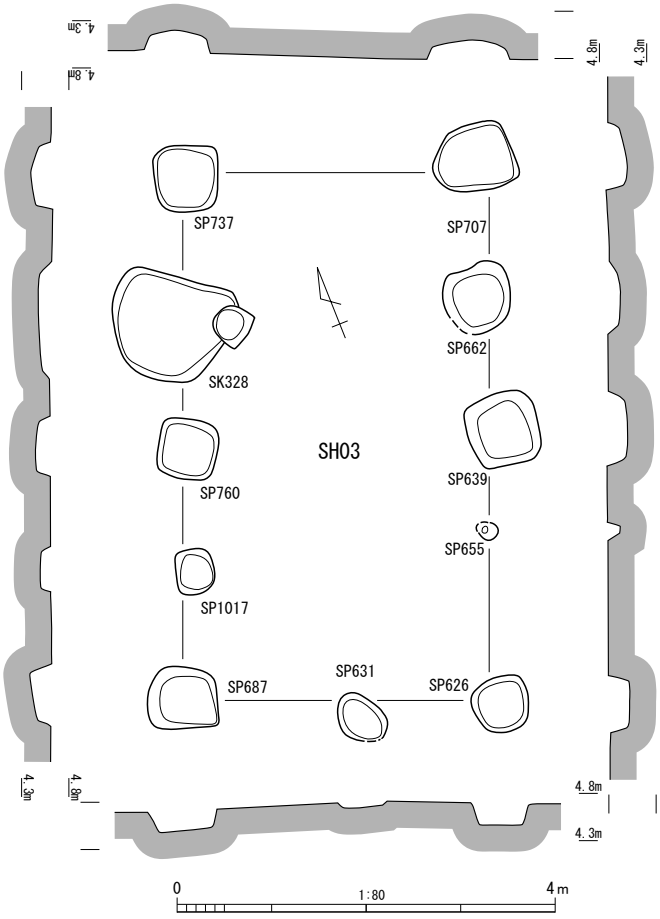


Fig.79　SH03 実測図

m前後と浅い。埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。柱痕は検出できなかった。

SP626・SP639・SP687・SP707・SP737・SP760から律令期の土器小片が出土した。

SH04（Fig.80）　３工区F5グリッドから検出された。南東側が調査区外となるために詳細は不明であるが、桁行２間、梁行１間の建物と考えられる。SH03と方位が近似し、至近の位置にある。桁行3.45ｍ、梁行2.75ｍである。柱穴は、直径0.7～0.8ｍである。深さは0.2～0.3ｍである。柱痕は、SP792から検出された。

SP642・SP710から律令期の土器小片が出土した。

SH06（Fig.81）　３工区H4グリッドから検出された。鉄滓の出土量が多いSK301は、この建物の中の取り込まれるような位置にある。桁行２間、梁行１間で、桁行3.2ｍ、梁行1.8ｍである。南西隅は調査区外となる。柱穴は、直径0.5～0.8ｍでSP931やSP879のように隅丸方形に近いものもある。深さは、0.3～0.4ｍとやや深い。柱痕は、SP879・SP931・SP944から検出された。

SP877・SP879・SP932・SP942から律令期の土器小片が出土した。

SH07（Fig.81）　３工区F4グリッドから検出された。桁行２間、梁行１間である。桁行3.35ｍ、梁行1.5ｍである。小形であるが、掘立柱建物であろう。柱穴は、北側のSP324・SP818が直径0.6～0.8ｍで、他は0.3～0.4ｍである。深さは、0.2～0.3ｍであるが、SP818は約0.35ｍで、径に比較して深い。柱痕は、北側の列では検出できたが、南側の列では検出できない。

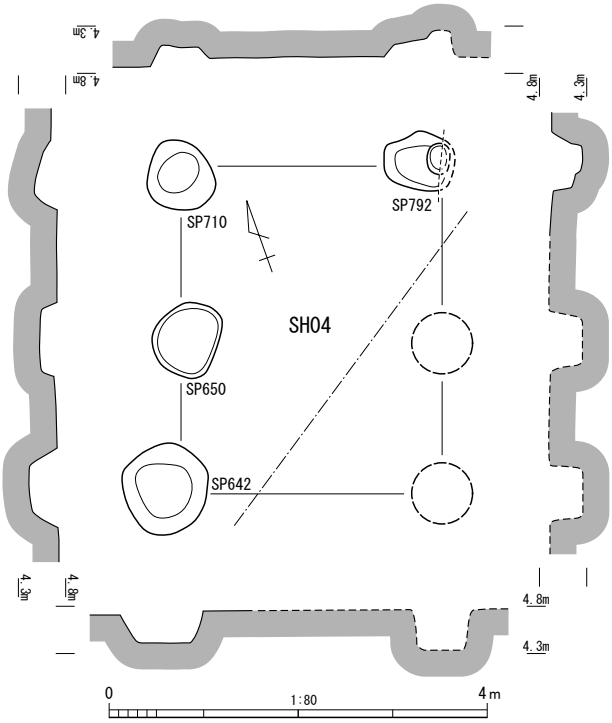


Fig.80　SH04 実測図

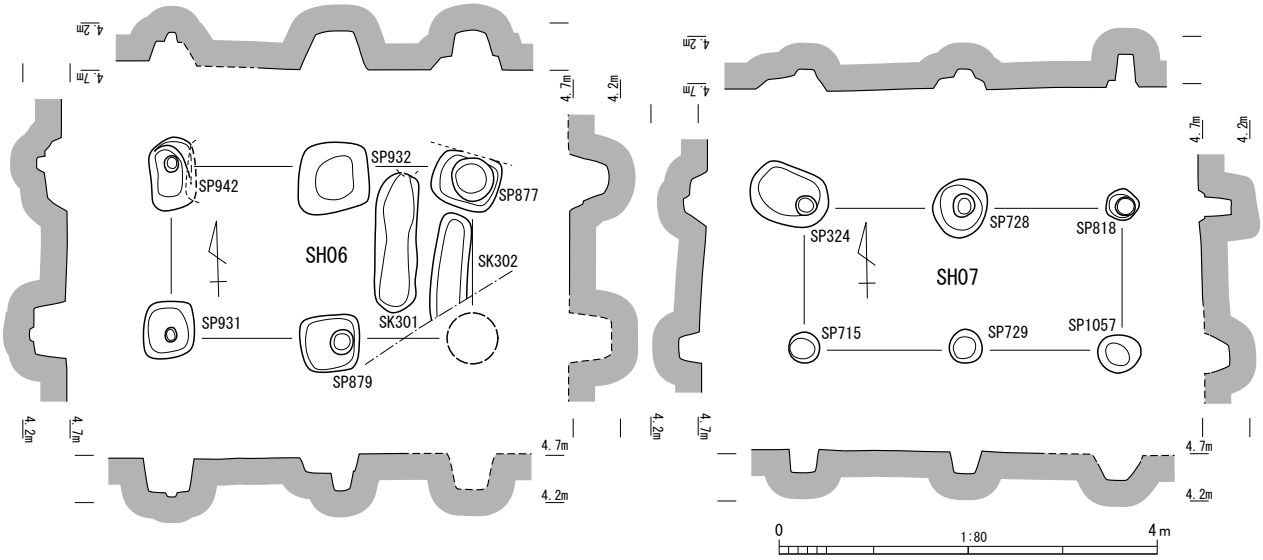


Fig.81　SH06・SH07 実測図

埋土は有機質の混じった黄褐色粘質土である。

SP728 から律令期の土器小片が出土した。

小　結　SH03 と SH04 は隣接し、ともに区画溝に沿って建てられており関連性が認められる。また、区画溝内の SH06 は、鉄滓と鞴羽口が出土した SK301・SK302 を取り囲むように建っている。周辺の遺構からも鉄滓が出土しており、SH06 は鍛冶関連の工房の可能性がある。

掘立柱建物を構成している小穴、および一部の土坑から出土した遺物はきわめて少ない。出土したのは、土師器・須恵器・灰釉陶器の小片であり、実測図として掲載できるものはなかった。

（３）土坑

概　要　SD107 区画溝の内外から多数検出された。多くの場合、土師器・須恵器・灰釉陶器の細片が出土しているが、その用途を限定するのは困難である。SD107 の南北に延びる部分の内側に接して検出した土坑からは比較的多くの遺物が出土した。また、SK301・SK302 のように、鉄滓を多く出土する土坑もある。

調査の段階で土坑と認識したものは多数あるが、後述する小穴との区別は厳密ではない。

SK301(Fig.82)　３工区H4グリッドから検出した。SK302 と隣接している。SH06 の内側に存在する。長さ 1.6 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 mの浅い溝状である。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は 245 ～ 248 で、少量の土師器小片と鞴羽口１点（245)、鉄滓 13 点（246 ～ 248)が出土した。

SK302（Fig.82）　３工区 H4 グリッドから検出した。SK301 と隣接しているが、北端が 0.4 m南側になっている。南端は調査区外となるため長さは不明であるが、現況で 1.15 mを測る。幅は、0.4 m、深さは 0.1 mである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

埋土から鉄滓が４点出土している。また、SK301・SK302 周辺の包含層からも鉄滓は多数出土している。

SK317（Fig.82）　３工区 E4 グリッドから検出された。平面形は、長径 0.95 m、短径 0.65 mの

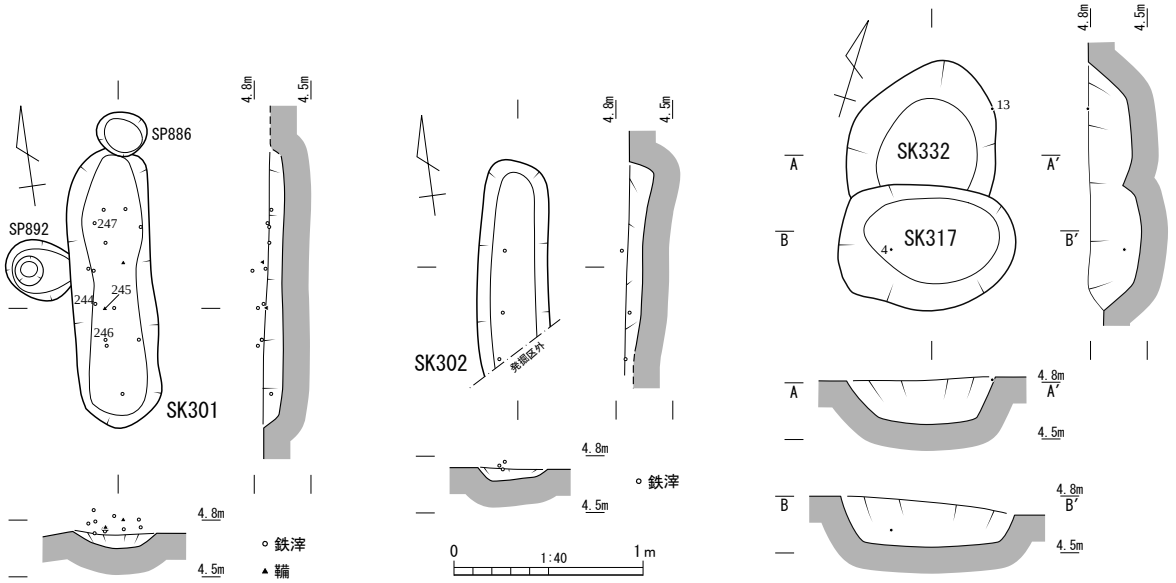


Fig.82　SK301・SK302・SK317・SK332 実測図

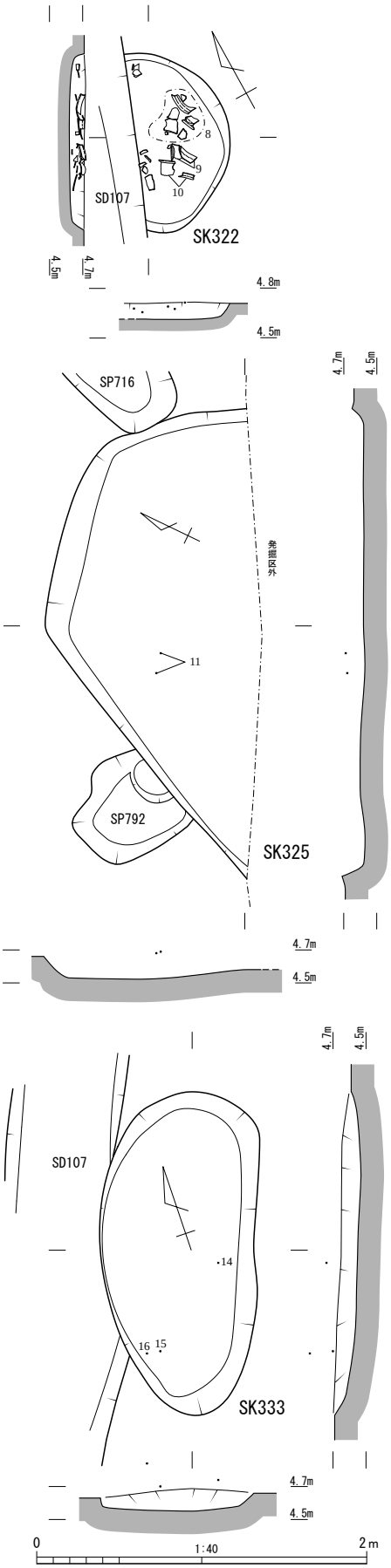


Fig.83　SK322・SK325・SK333 実測図

不整楕円形である。深さは、0.25 mを測る。SK332 と切り合い関係にあり、SK332 の方が古いという観察結果を得ているが、出土遺物は同時期のものである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は２～７で、土師器甕の他に灰釉陶器瓶、土師器坏が出土した。

SK322（Fig.83）　３工区 E5 グリッドから検出された。西側が SD107 に切られているので、規模は不明であるが、平面形は径 1.25 mの不整円形であろう。深さは、0.1 mである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は８～ 10 で、土師器甕片がまとまって出土した。

SK325（Fig.83）　３工区 F5 グリッドから検出した。調査区端から検出したもので規模は不明である。現状で、調査区壁面に沿って 2.85 m、壁面に直行する方向で 1.3 mが確認できる。深さは、調査区壁際の深い所で 0.15 mであるが、浅い部分は 0.1 m以下になる。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は 11 で、その他に図示できないが数点の土師器小片が出土した。

SK332（Fig.82）３工区 E4 グリッドから検出された。SK317 と切り合い関係にある。平面形は、不整楕円形であろうが、長径側は SK317 に切られている。現況で長径 0.65 m、短径 0.8 mである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は 12・13 で、その他に土師器甕、鉢の小片が出土した。

SK333（Fig.83）　３工区 E4 グリッドから検出した。SD107 と重複している。遺構の観察では SD107 に切られているように見えたが、明確ではない。平面形は、長径 1.95 m、短径 0.95 mで、深さは 0.5 mと浅い土坑であるが、遺物の出土状況を見ると、遺構面はもう少し上にあったようである。埋土は、有機質を含む黄褐色粘質土である。

出土した遺物は 14 ～ 16 で、その他に数点の土師器と灰釉陶器片が出土した。

その他の土坑　３工区 F3 グリッドで検出した SK207 は

長径 1.8 m、短径 0.5 m、深さ 0.2 mの溝状を呈する。形態は SK301 や SK302 に類似している。３工区 E5 グリッド検出の SK319、３工区 G3 グリッド検出の SK335、２工区 F2 グリッド検出の SD61 などは類似した平面形であり、共通した用途の可能性がある。

不整円形で径が１m前後の土坑や不整形の土坑は調査区全域から検出されているが、出土遺物は少ない。

土坑出土遺物（Fig. 84）　土坑内出土の遺物は必ずしも多くはない。土師器・須恵器・灰釉陶器は、かなりの小片も復元実測したが、土師器 10 点、灰釉陶器７点が図示できたに過ぎない。これら以外には、SK301 から鞴羽口１点と鉄滓 16 点が出土した。鉄滓は、16 点中３点を図示した（246 ～ 248）。

土師器の中で、１は、F3 グリッドから検出した SK207 の埋土から出土した。内外面共に丹塗りの摘蓋である。Ⅵ期に属し、時期的には８世紀後半であろう。３は、SK317 出土の坏である。４～９・11 は、SK317・SK322・SK325・SK333 出土の長胴甕、10 は鉢である。口縁部が上外方に内彎気味に伸びる特徴や、８で見られるように頸部帯が見られるなどの特徴は、Ⅵ～Ⅶ期に属するものであろ

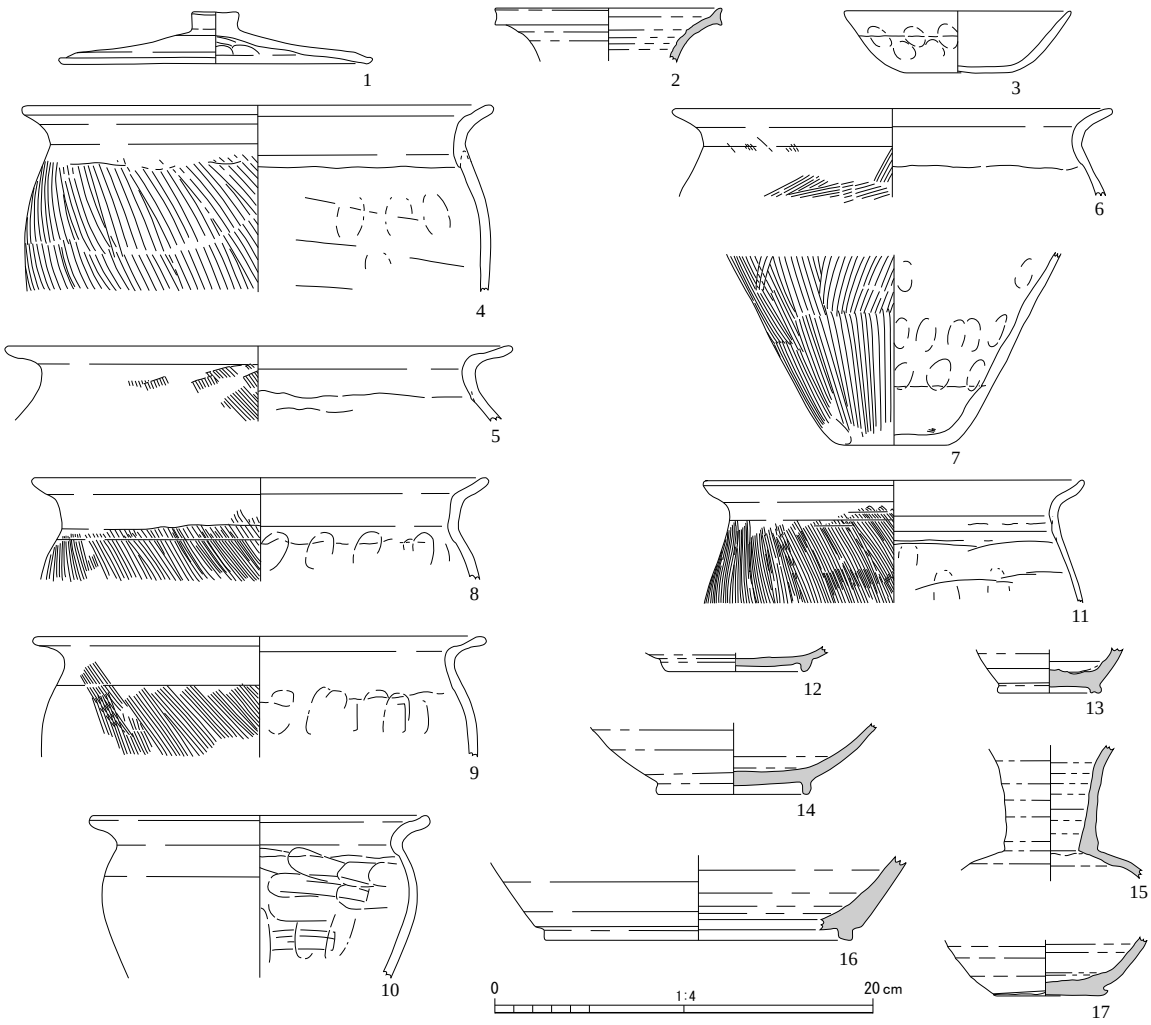


Fig.84　奈良・平安時代 土坑 出土遺物

1:SK207　2 ～ 7:SK317　8 ～ 10:SK322　11:SK325　12・13:SK332　14 ～ 16:SK333　17:SK334

う。

２、12 ～ 17 は、灰釉陶器である。いずれも小片からの復元であるが、13・15 は胎土・色調などから、猿投山古窯跡群の製品である可能性が高い。おそらく、黒笹 90 号窯式に属するものであろう。12・14 は、宮口古窯跡群の製品と考えられる。12 は、Ⅱ－２段階、14 はⅢ－１段階に属するものであろう。他の灰釉陶器も猿投編年でいえば、黒笹 90 ～折戸 53 号窯式に並行するものであろう。

鞴羽口・鉄滓は、SK301、SK302 以外の遺構では、SD118、SP982 から鉄滓が１点ずつ出土している（249・250）以外は、包含層出土である。

小　結　ほとんどの土坑は遺物の出土が少量のため、遺構の性格は不明である。その中で、SK301 と SK302 からは鉄滓と鞴羽口が出土している。ほとんど鞴羽口と鉄滓のみの出土であり、鍛冶関連の遺構と想定される。さらに、土坑の西側に位置する SD118 や SP982 からも鉄滓が出土しており、SH06 を含めた区画溝内のこの一帯で、鍛冶に関連した作業が行われていたと考えられる。

（４）溝

概　要　調査区全体から、合計 24 条の溝状遺構が検出された。SD11 を除くと幅１ｍ以下のものが目立つ。これらの中で、SD04、SD107、SD109、SD110 は、細く長く延び、何かを区画しているように見える。また、SD118 も調査区外に延びているので全容は分からないが、区画溝の可能性がある。幅広の溝は、SD11 だけであるが、この溝を境にしてその西側では遺構密度が急速に低くなるので、区画溝と考えてよいであろう。

SD107、SD110 からは多量の遺物が出土しているが、包含層中から確認された律令期の遺物の多くが、SD107 に区画された内側からのものである。一方で SD107 に区画された外側の包含層には、弥生土器が多く、律令期の遺物は少ない傾向がみられる。

以下、主要な溝の概要を記す。

SD04　C4 グリッドから E6 グリッドにかけて、１工区と３工区の調査区を横断するように緩やかに湾曲しながら続いている。この溝を境にして西側は低地になって行くので、その境界付近に掘られた溝であろう。長さ約 25 ｍに渡って検出された。幅は 0.4 ～ 0.5 ｍ、深さは 0.2 ｍ前後である。埋土は、有機質を含む暗褐色粘質土である。

埋土からは、土師器・須恵器、弥生土器小片が出土している。

SD11　１工区と３工区の D4 から E4 グリッドにかけて検出された。幅 2.0 ｍ前後と他の溝に比べると幅広で、深さは 0.2 ～ 0.3 ｍである。溝の西側は調査区外になるので全長は不明であるが、現況で長さ約 18 ｍである。SD04 よりは少し高い位置にあるが、基本的には低地との境に掘削されたと考えることができる。埋土は有機質を含む暗褐色粘質土である。床面は砂礫層に達している。

埋土からは、弥生土器片も多く出土したが、古代の土師器片も出土しているため、古代の遺構と考えられる。

SD107（Fig.85・86）　３工区 I4 グリッドから F3 グリッドにかけてほぼ東西に延び、F3 グリッドで約 105 度の角度で緩やかに屈曲し、E6 グリッド方向に延びている。調査区内では L 字状に検出されただけであるが、東方向･南方向ともに調査区外まで続いており、全貌は不明である。なお、

調査区内での総延長は約 55 ｍである。溝の幅は狭い所では 0.5 ｍ、広い所では１ｍを測り、深さは 0.2 ～ 0.3 ｍである。遺物の出土状況を見ると、遺構面はもう少し上位にあると考えられる。埋土は、暗褐色粘質土が主体である。土地を方形に区画する、いわゆる区画溝と考えられる。

SD04、SD108、SD109、SD110 は、SD107 に接した状況になるが、交差することはない。また、それぞれとの新旧関係は不明確である。いくつかの土坑も SD107 と重複して検出されたが、律令期と認定できた土坑との新旧関係を明確にすることはできなかった。

出土した遺物は 18 ～ 112 である。

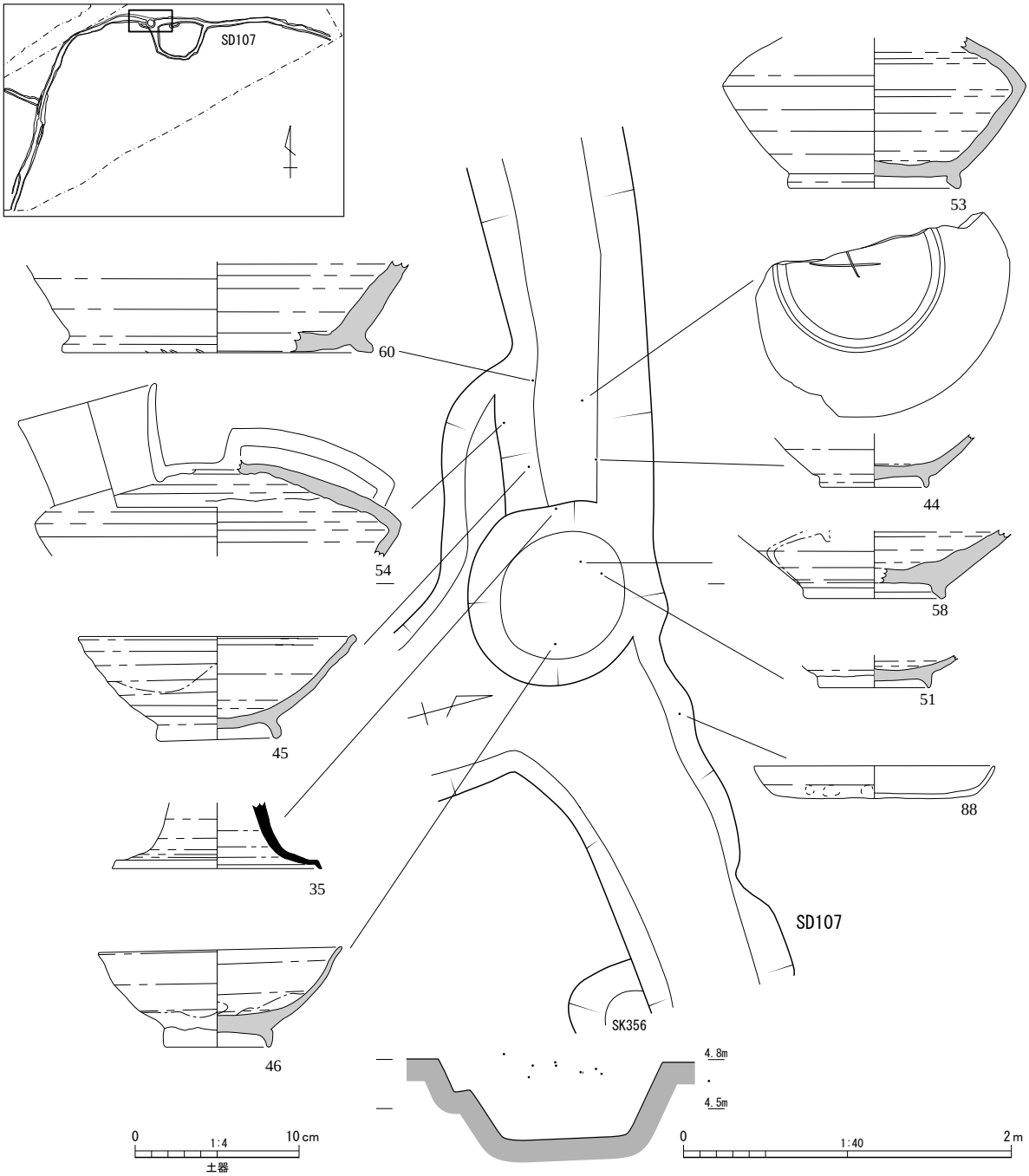


Fig.85　SD107 実測図（１）

SD109（Fig.87）　３工区 F4 グリッドから E5 グリッドにかけて検出された。長さ 19 m、幅 0.6 mで深さは 0.1 mにも満たない。本来の遺構面はもう少し上位にあると考えられる。SD107 と接する部分に SK341 があり、SD107 と直接的な関連性は確認できない。ただし、SD107 南北方向の溝約 2 m東の位置に並行して延びており、SD107 との関連性がうかがえる。

埋土は暗褐色シルト又は粘質土である。

出土遺物は少なく磨耗した小片が目立つが、溝の最も北寄りで SK341 に接した場所から、銅印（113）と墨書のある土師器（114）が出土した。銅印、土師器は、ほぼ遺構検出面と同じレベルから出土している。

SD110（Fig.88）　３工区 G4 グリッドから検出された。SD107 の東西方向の溝に接し、内側に向って半円形に展開している。SD107 とは同時期のものと思われる。溝の幅は、0.4 ～ 1.0 mであるが、全体としては幅 0.5 m前後である。深さは、約 0.2 mである。SD107 と SD110 に囲まれた範囲は、東西約 5.0 m、南北約 4.5 mである。

出土した遺物は 121 ～ 124 がある。

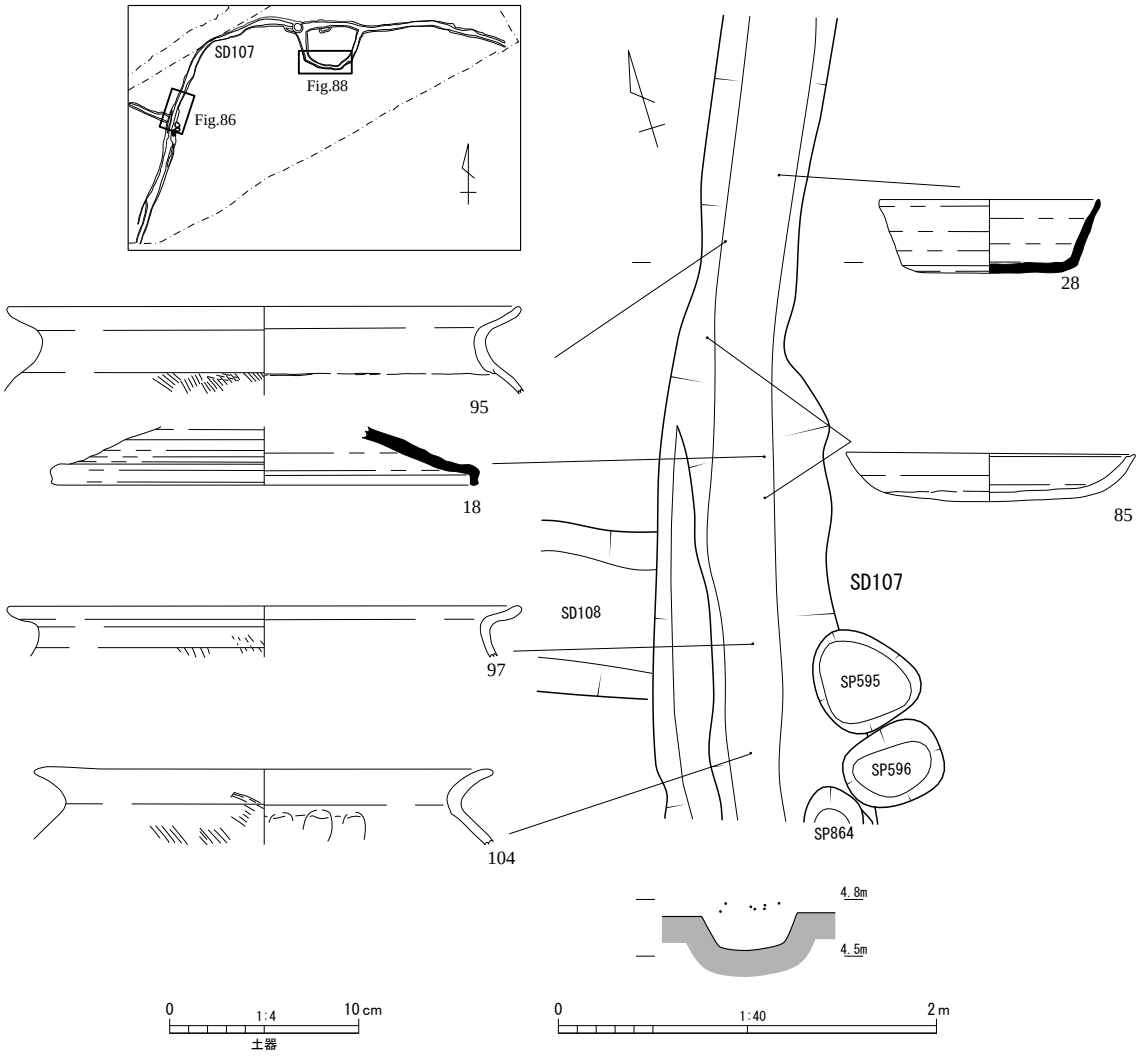


Fig.86　SD107 実測図（２）

その他の溝状遺構　２工区 F2・F3 グリッド検出の SD52 や SD54、２工区 G2 グリッド検出の SD57 は、何らかの区画溝とも考えられる。３工区 H4 グリッド検出の SD118 からは、鉄滓（249）が出土しており、SK301、SK302 との関連性が注目される。

SD107 出土遺物（Fig. 89 ～ 91）

18 ～ 112 は、SD107 から出土したものの中で図示できたものである。18 ～ 38 は須恵器、39 ～ 60 は灰釉陶器、61 ～ 112 は土師器である。

須恵器は、古墳時代に属する例はない。18・19・21 ～ 23 は、Ⅵ期に属する蓋坏である。26 ～ 32 はⅦ期に属する箱坏であろう。33・34 は、Ⅶ期に属する皿であろう。35 は高坏脚部、36 は鉄鉢形須恵器、37・38 は甕であるが、これらはⅥ期に属すると考えられる。32 は底部外面に墨書がみられる。この墨書は、SD109 出土土師器（114）の坏底部外面に施されたものと類似している。

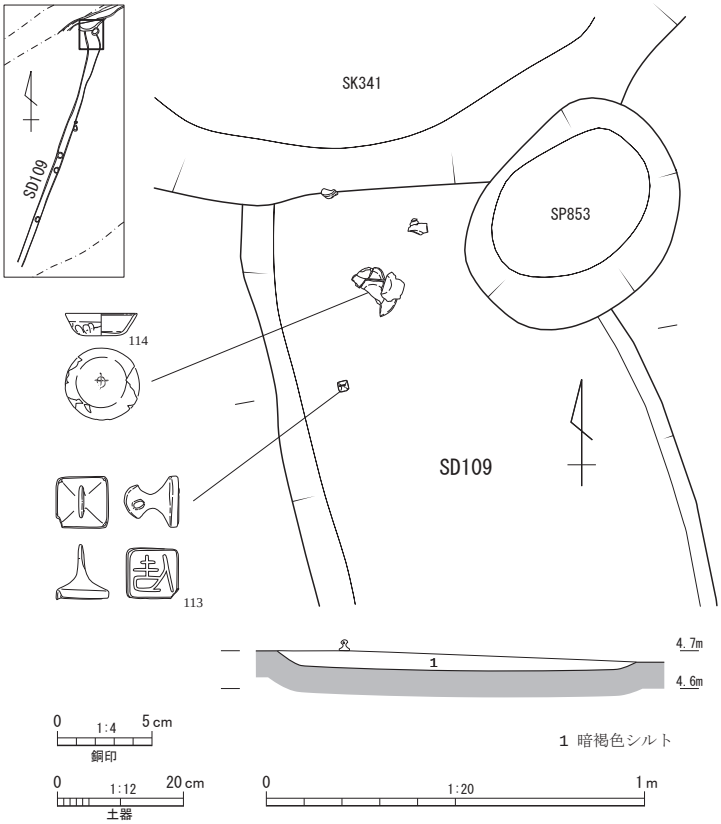


Fig.87　SD109 実測図

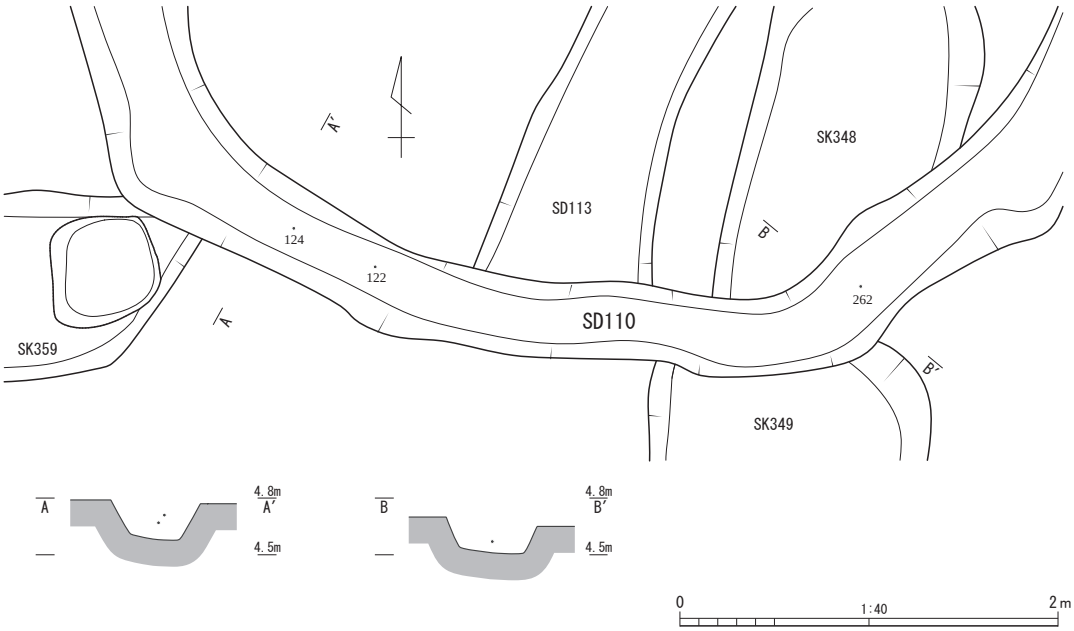


Fig.88　SD110 実測図

灰釉陶器は、猿投編年の黒笹 14 号窯式、黒笹 90 号窯式、折戸 53 号窯式に並行するものが出土している。黒笹 14・90 号窯式の時期に属する灰釉陶器は全て尾張産と考えられ、折戸 53 号窯式に並行するものは、宮口窯産及び清ヶ谷窯産と考えられる。39 ～ 43 は黒笹 14 号式に属する皿、44 は黒笹 90 号窯式に属する碗である。45 ～ 51 は折戸 53 号窯式に並行する遠江産の灰釉陶器である。これらの中で、45 は清ヶ谷窯産、他は宮口窯産であろう。52 ～ 60 は、全て尾張産と思われる。

土師器は、61 ～ 64 が有台坏、65 ～ 84 が坏、85 ～ 91 が皿、92 は鉢、93 は盤、94 は横断面が八角形になる高盤脚部である。95 ～ 112 はいわゆる長胴甕である。

有台坏の 62 はⅥ期、61 はⅦ期に属するものであろう。坏、皿等は、個別に時期を限定するのは困難である。66、83、84 は内彎坏の要素を留めている点や、口径と底径の差が少ない点などから、Ⅵ期に属すると考えることもできるが、多くはⅦ期に属すると見てよいであろう。長胴甕も多くはⅦ期に属すると考えられる。土師器では、多量の破片の中に甑が認められない。

以上から、SD107 出土遺物は、８世紀代の遺物を少量含むが、多くは黒笹 14 号窯式から折戸 53

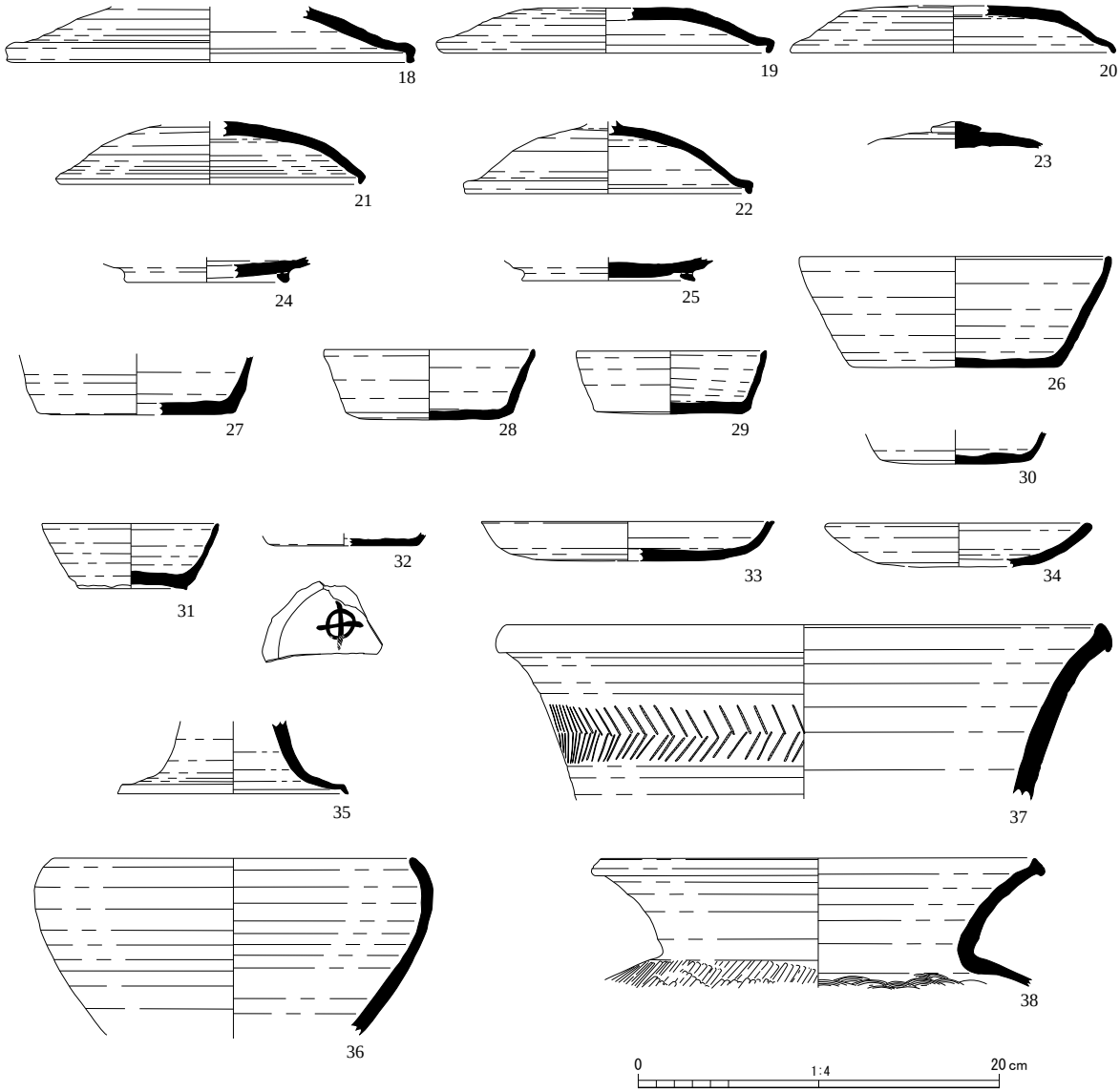


Fig.89　SD107 出土遺物（２）

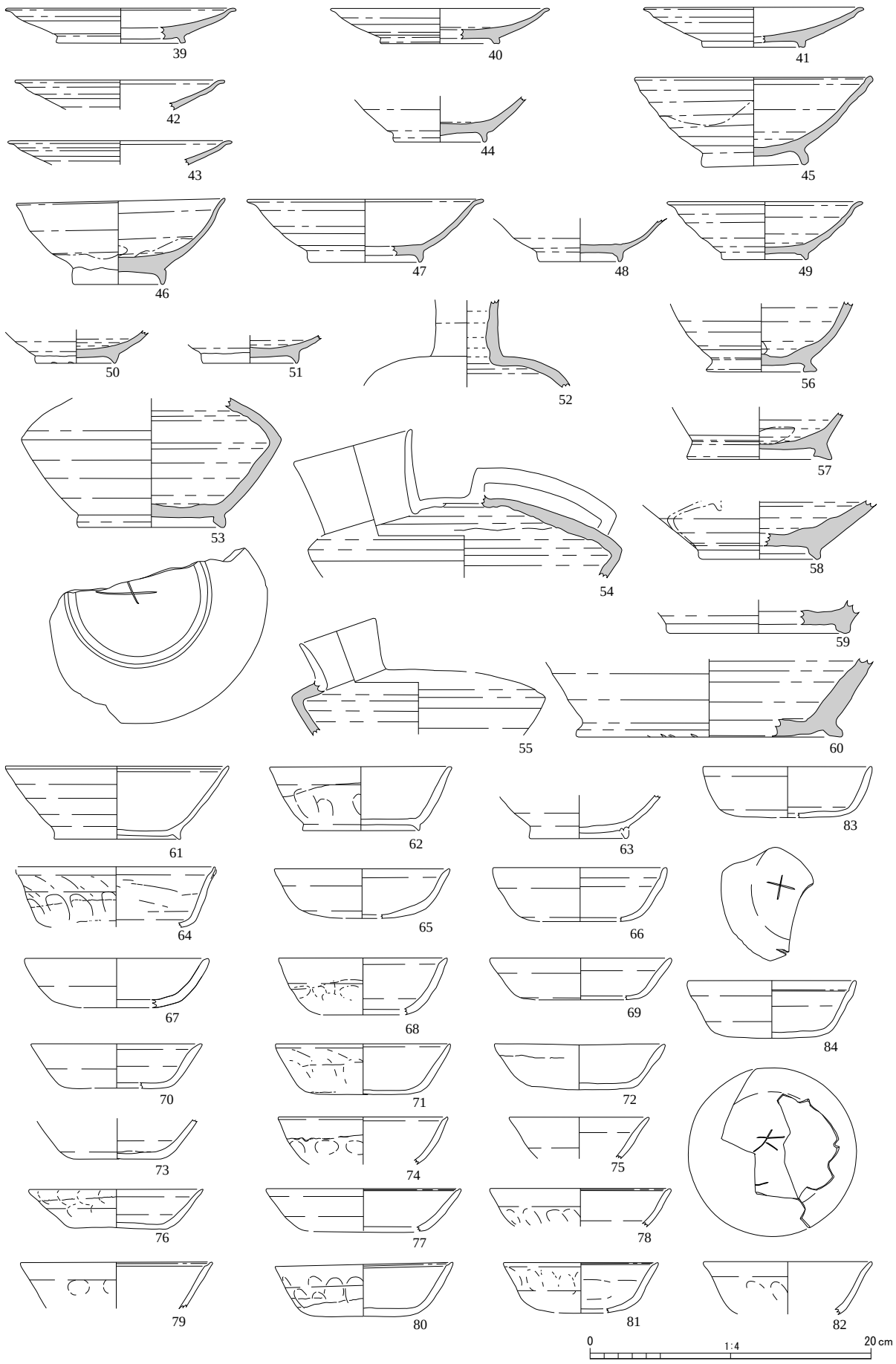


Fig.90　SD107 出土遺物（２）

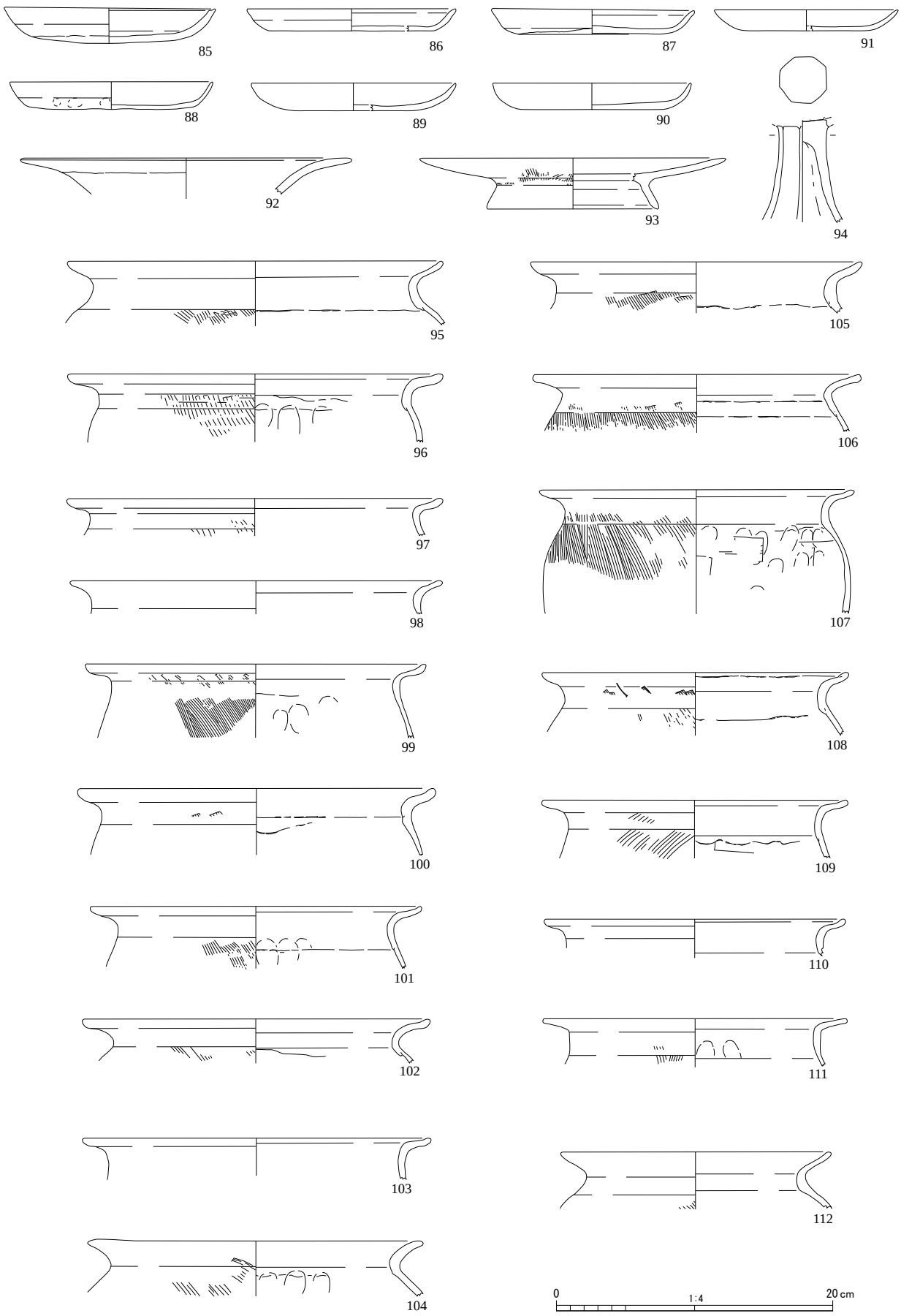


Fig.91　SD107 出土遺物（３）

号窯式の時期と見て良いであろう。すなわち、８世紀後半に使用を開始し９世紀から10世紀前半を中心に機能していた遺構といえよう。

SD109 出土遺物（Fig.92・93）　SD109の埋土から出土した土器類は、磨耗が目立つものが多かったが、北端付近から銅印（113）と底部外面に墨書のある土師器坏（114）が出土した。114の墨書は、SD107から出土したものと類似している。この土師器は、Ⅶ期に属するものであろう。

土師器と近接して銅印が出土した。隅の一箇所を欠損しているが、保存状況は良好である。鈕は、鋳造後ほとんど整形されていない。鈕には特に文様を施すことはなく、きわめてシンプルな形状である。材質は、銅の含有量が多く、ほぼ純銅製と判断した方が良いかもしれないとする分析結果が出ている（第３章１参照）。

印面は縦横2.7㎝とほぼ方形で、隅が丸い。高さは、2.9㎝である。鈕は、弧鈕有孔の形式に属し、側面は分銅形である。鈕孔は、縦0.5㎝、横0.35㎝の楕円形であるが、印綬等で擦れた痕跡は観察できない。印面輪郭は有郭で、郭の幅は約0.1㎝である。重さは約30ｇである。　印面は、「佶」の一字とも「吉人」の二字とも読める。

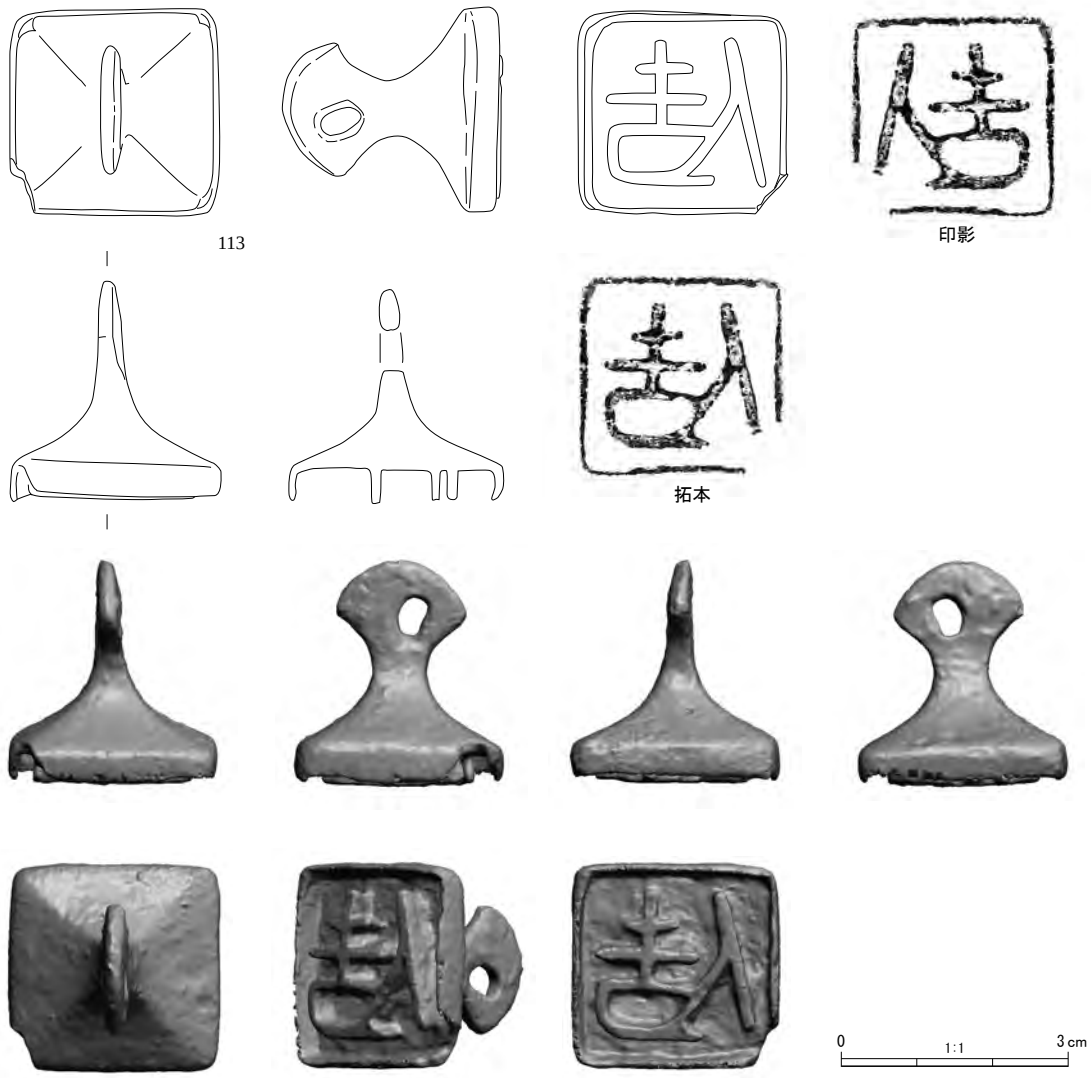


Fig.92　SD109 出土銅印 実測図・三次元陰影図

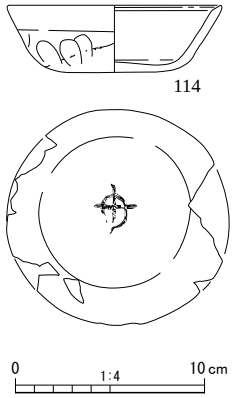


Fig.93　SD109 出土遺物

『類聚三代格』にしたがえば、印鑑の大きさは一寸五分以下なので、私印ということになる。

共伴遺物など周辺の状況や鈕の形状を考慮に入れると、この銅印は9世紀代のものであろう。

SD110 出土遺物（Fig.94）　121・123・124 は須恵器、122 は灰釉陶器である。121・123 は、Ⅵ期に属するであろう。124 は、黒笹 14 号窯式に並行する時期であろう。122 は、黒笹 90 号窯式である。

その他溝出土遺物（Fig.94）　115 は SD05、117 は SD57 出土の須恵器である。時期はⅥ期に属すると考えられる。116 は SD08 出土の内面に暗文のある土師器で、Ⅵ期に属するであろう。118･119 は SD101 出土で、118 は黒笹 14 号窯式の灰釉陶器、119 は流紋岩製の砥石である。120 は SD108、125 は SD112 出土の須恵器である。いずれもⅦ期に属するであろう。126 は、SD113 出土で、黒笹 14 号窯式の灰釉陶器である。SD118 から鉄滓（249）が出土している。溝状遺構は 24 箇所で検出されているが、ここに示した遺構以外からの出土遺物はいずれも小片であり、図示することができない。

小　結　SD107 をはじめ、多くは区画溝として機能していたと思われる。特に SD107 は総延長約 55 mあり、広大な面積を囲う区画溝と考えられる。黒笹 14・90 号窯式の時期に属する尾張産の灰釉陶器も出土しており、出土遺物から主に 9 世紀～ 10 世紀前半に機能していたと思われる。その区画溝の内側からは、銅印や墨書土器（SD109）、陶馬、製塩土器（SE02）など特殊遺物が多く出土していることから、鍛冶関連遺構も含め区画溝で囲まれた区画は、特別な区域であったと想定できる。

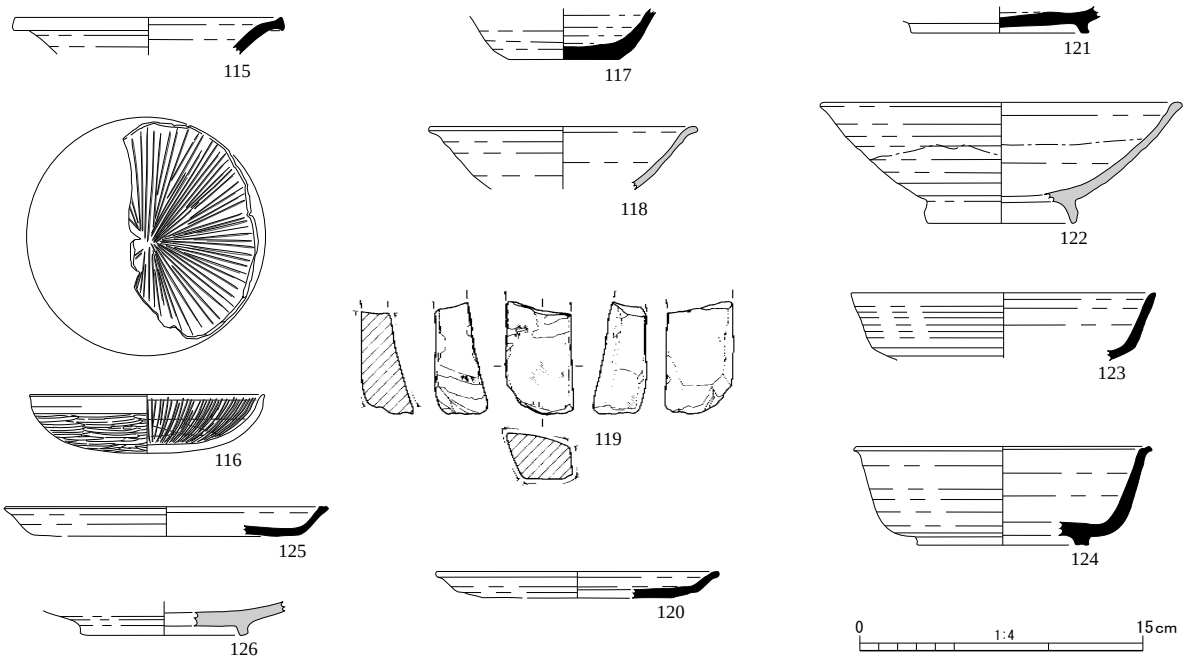


Fig.94　奈良・平安時代 溝 出土遺物

115:SD05　116:SD08　117:SD57　118・119:SD101　120:SD108　121 ～ 124:SD110　125:SD112　126:SD113

（４）小穴

概　要　小穴は、全時期を通すと 1000 を超える数が検出されているが、時期を認定できるものは少ない。１工区 D3 グリッドや３工区 H3・H4 グリッド付近では、柱痕と思われる穴を伴う例も少なくないが、掘立柱建物を復元するに至らなかった。

小穴出土遺物（Fig. 95）　出土した遺物は、127 ～ 144 がある。出土した遺物の詳細は表に示した（Tab. 5）。

Tab.5　小穴出土遺物一覧

番号	種　類	器種	形　式	遺構名
127	土師器	坏	Ⅵ	SP18
128	須恵器	碗	Ⅶ	SP39
129	土師器	皿	Ⅶ	SP39
130	土師器	甕	Ⅵ	SP39
131	土師器	甕	Ⅶ	SP47
132	須恵器	有台坏	Ⅵ	SP100
133	土師器	坏	Ⅶ	SP155
134	灰釉陶器	碗	Ⅲ	SP533
135	灰釉陶器	碗	Ⅲ	SP539
136	灰釉陶器	碗	Ⅲ？	SP585
137	須恵器	摘蓋	Ⅵ	SP593
138	土師器	甕	Ⅶ	SP620
139	灰釉陶器	碗	Ⅲ？	SP620
140	灰釉陶器	平瓶	黒笹 14 ？	SP699
141	須恵器	皿	Ⅶ	SP785
142	須恵器	壺	Ⅵ	SP785
143	土師器	甕	Ⅶ	SP868
144	灰釉陶器	壺	黒笹 14 ？	SP939

（５）　井戸

概　要　井戸は４基検出されたが、その中で、SE02 が平安時代に属するものである。

SE02（Fig. 96・97）　多量の湧水で井戸枠周辺が崩落したために、井戸の掘り方は十分に確認できなかった。井戸枠は、周辺に矢板が打ち込まれ、その内部に板材を井桁に組んでいる。井桁内法は、東西約 0.85 m、南北は西側で約 0.75 m、東側で約 0.8 mと、平面形はほぼ正方形である。深さは約 1.1 mで、底面の標高は約 3.55 mである。井桁は、いわゆる三枚組接ぎである。井戸枠は組接

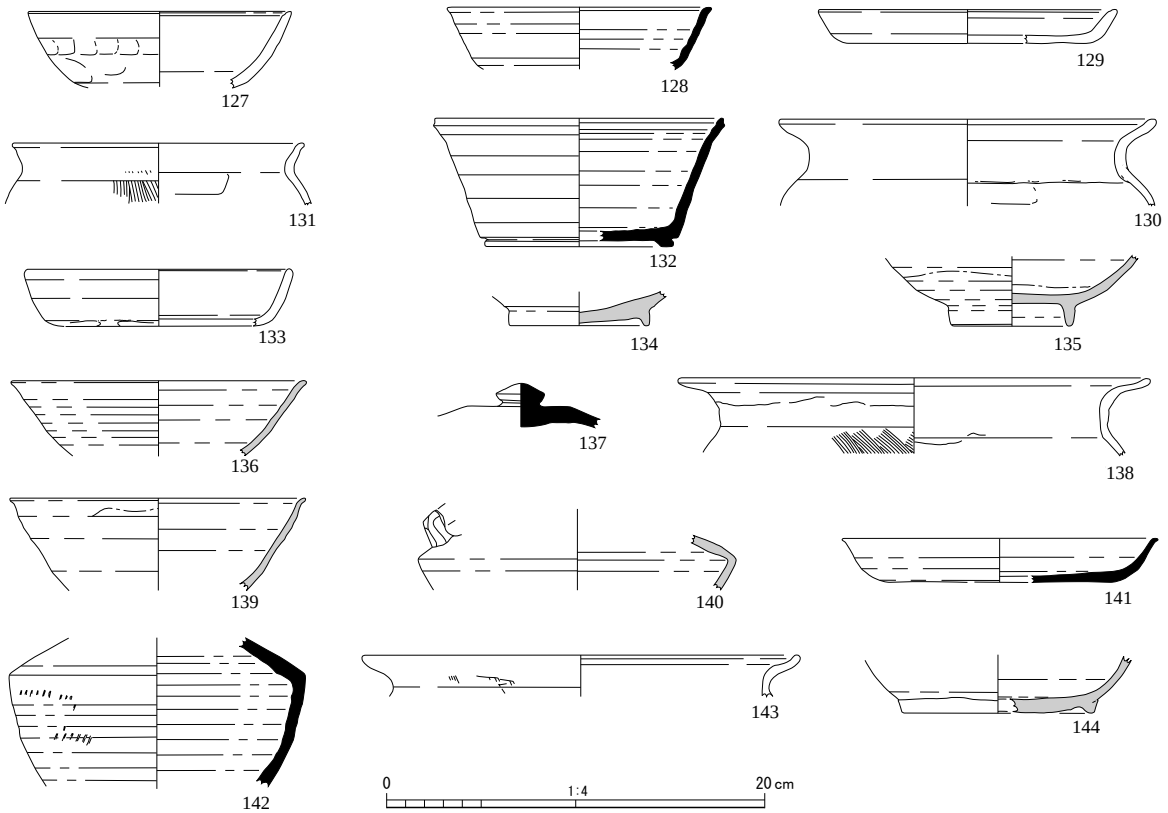


Fig.95　奈良・平安時代 小穴 出土遺物

127:SP18　128 ～ 130:SP39　131:SP47　132:SP100　133:SP155　134:SP533　135:SP539
136:SP585　137:SP593　138 ～ 139:SP620　140:SP699　141 ～ 142:SP785　143:SP868　144:SP939

Fig.96　SE02 井戸枠検出状況（東から）

ぎ分を除くと 0.89 m（170）と 0.84 m（171）である。井戸底と思われる位置から２枚の板材が検出された(172･173)。173 は長さ 0.78 m、174 は長さ 0.82 mである。井戸枠等の材質は全てヒノキである。

出土した遺物は 145 ～ 173 がある。

SE02 出土遺物（Fig.98）145 ～ 150 は須恵器、151 ～ 158 は灰釉陶器、159 ～ 167 は土師器、168 は陶馬、169 は製塩土器の脚部である。

須恵器の内で、145･146、148 ～ 150 はⅥ期、147 は、

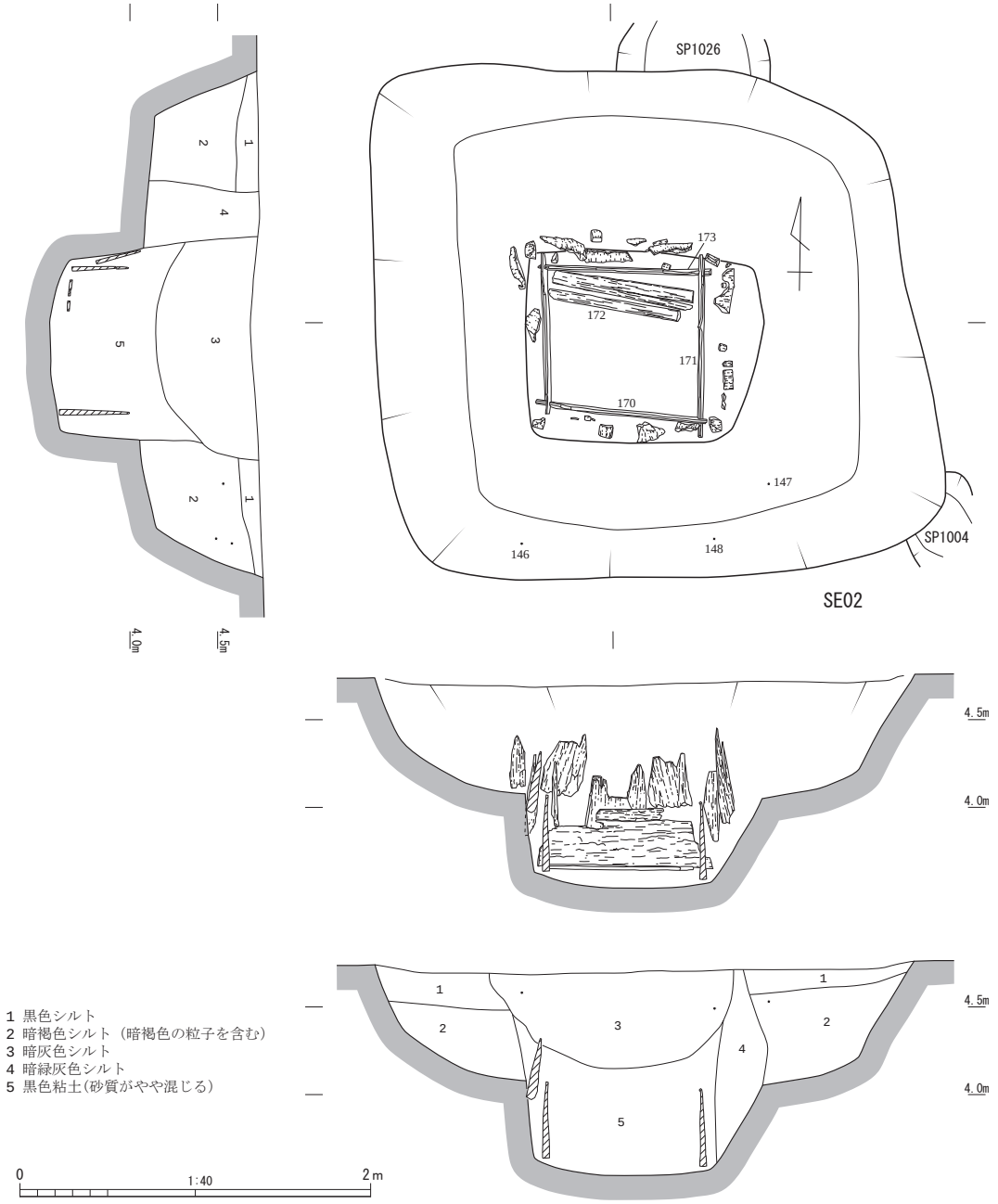
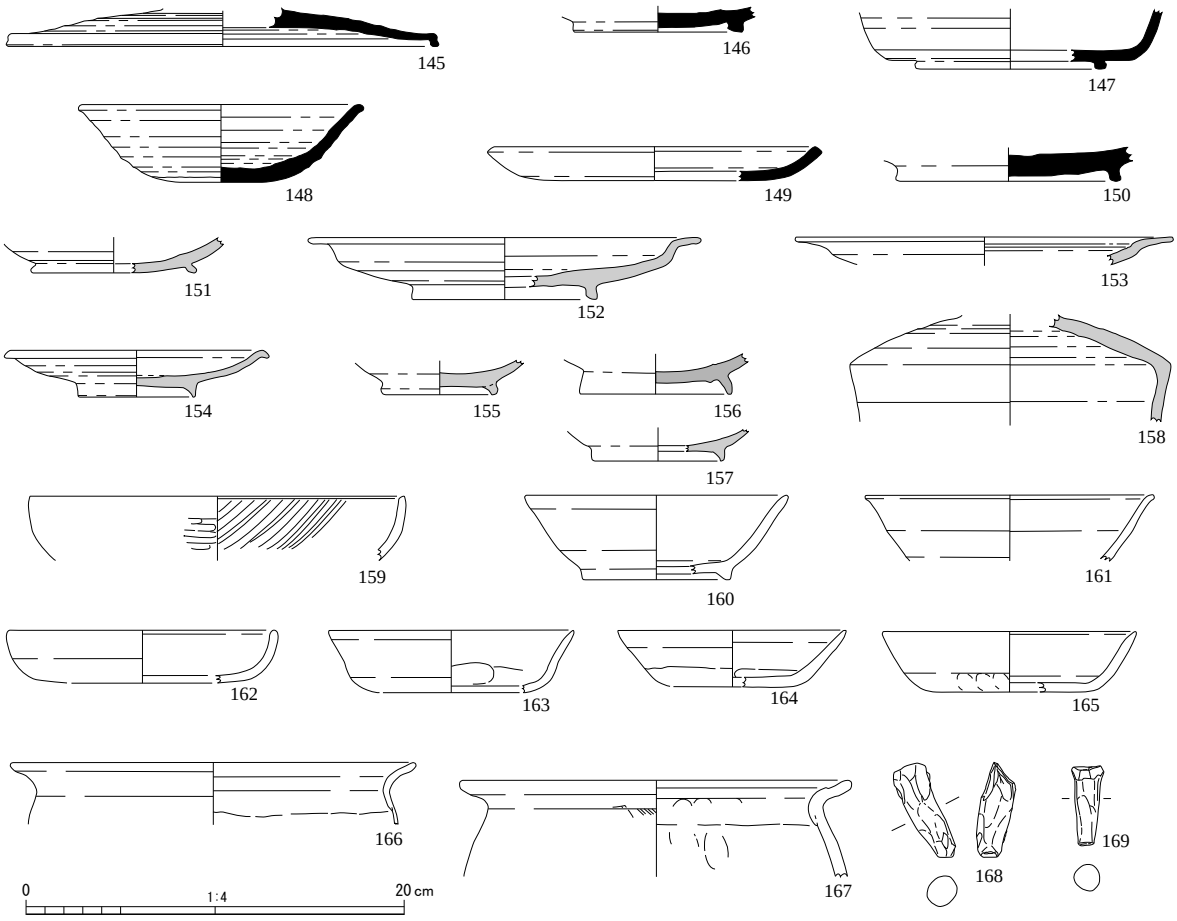


Fig.97　SE02 実測図



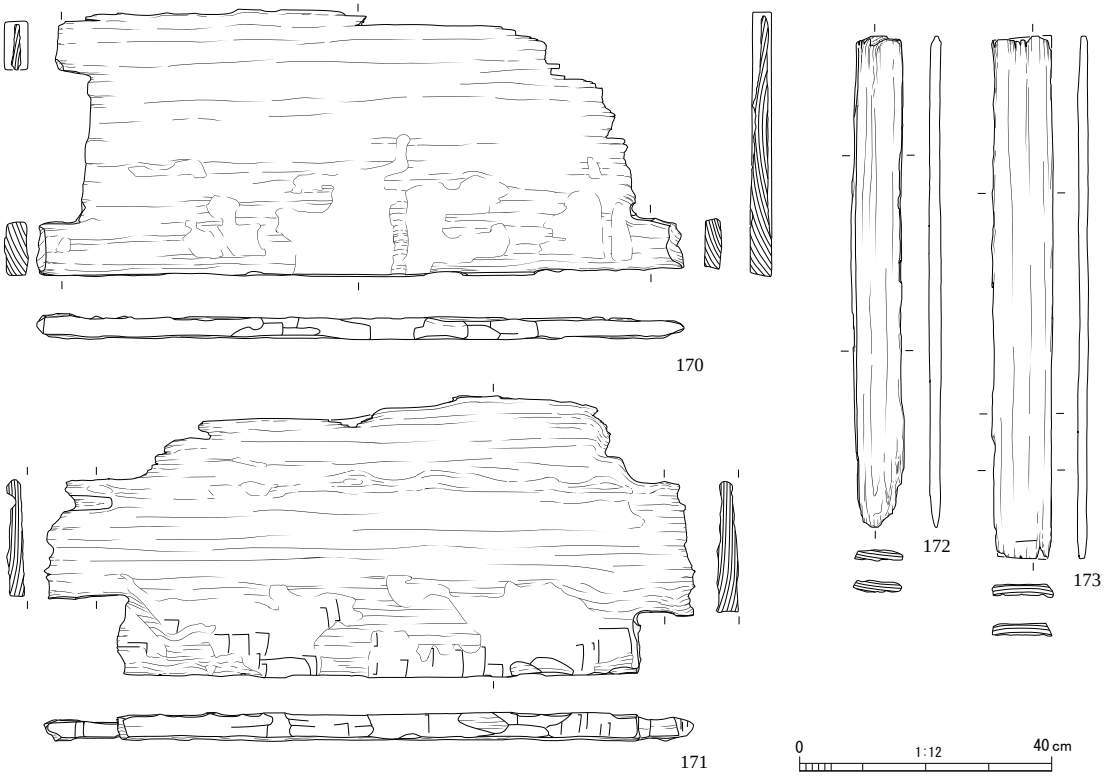


Fig.98　SE02 出土遺物

黒笹 14 号窯式並行であろう。

灰釉陶器は、151 が黒笹 14 号窯式の碗、152・153 が黒笹 14 号窯式の段皿、154 は、折戸 53 号窯式の皿である。155 ～ 157 も折戸 53 号窯式並行であろう。158 は、灰釉の長頸壺である。土師器は､159 がⅥ期に属し､他はⅦ期に属するものであろう。169 の製塩土器は特筆すべきものであろう。

（６）　包含層等出土遺物

古代の遺構検出面の把握が困難で、弥生時代の遺構と同一面で確認したこともあって、包含層と

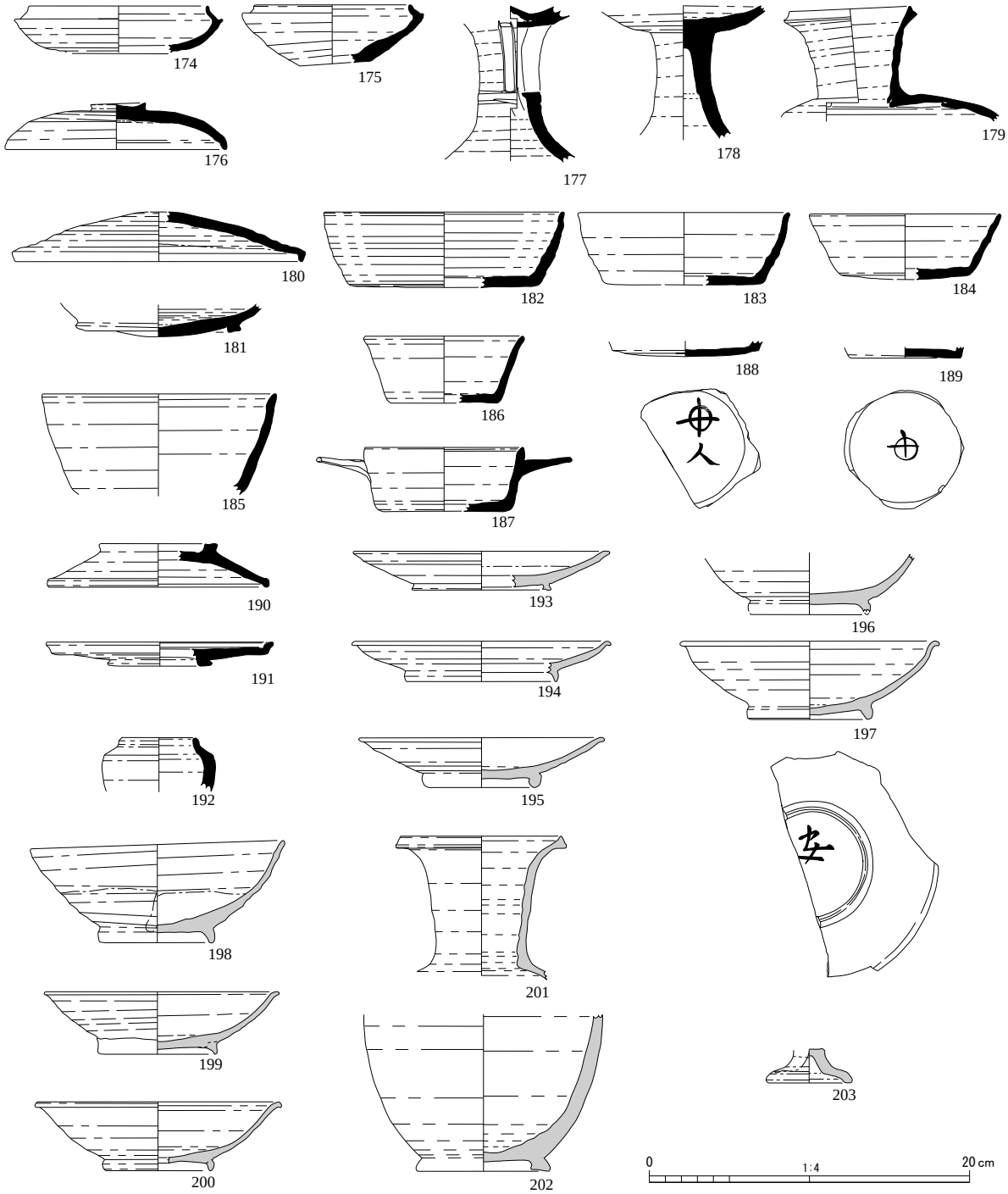


Fig.99　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物（１）

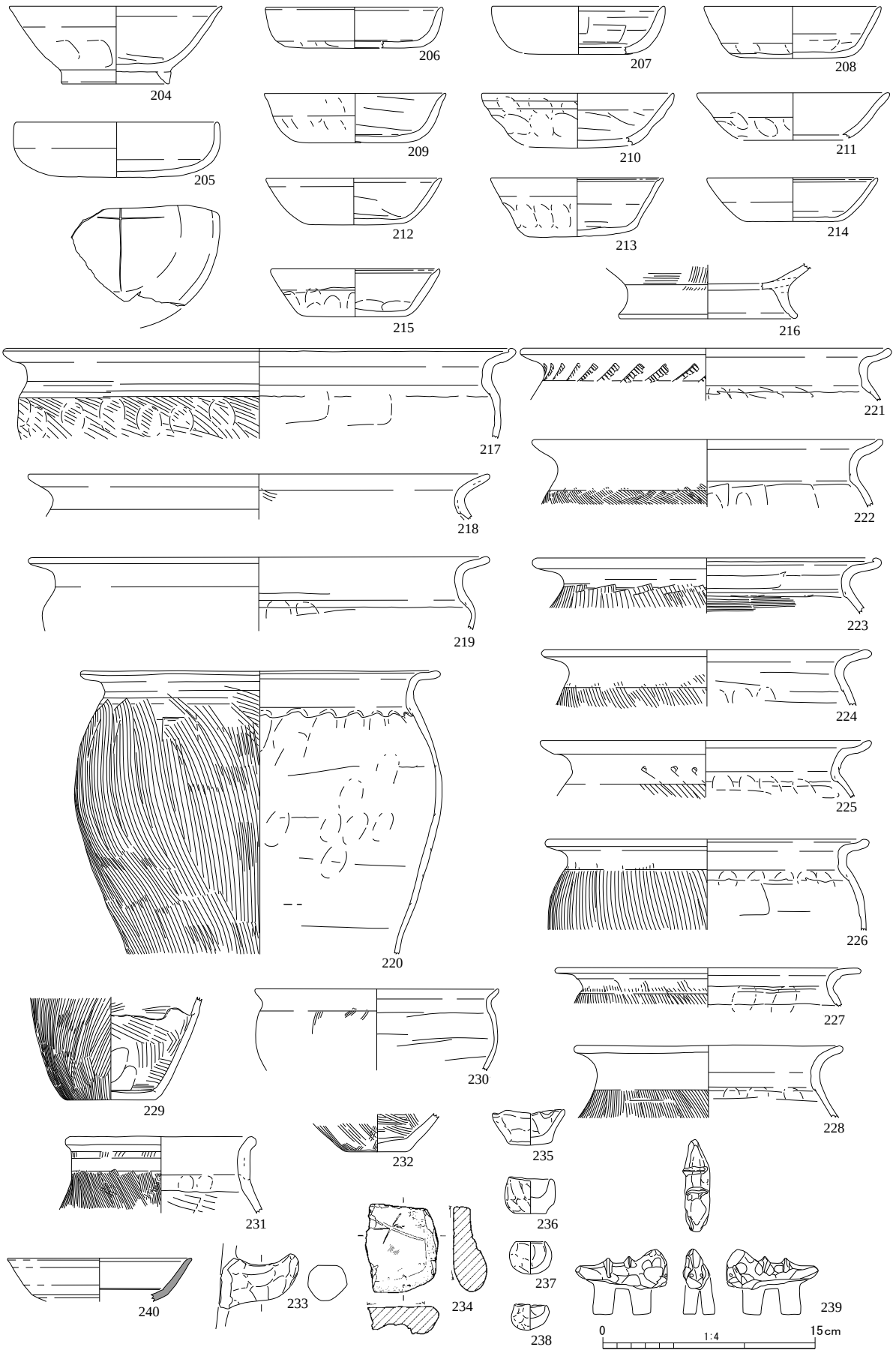


Fig.100　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物（２）

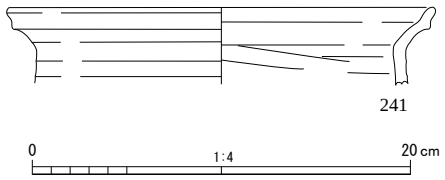


Fig.101　奈良･平安時代 包含層等 出土遺物（３）

して取り上げた遺物が少なくない。これらの中で実測可能なものは図示した。

174 ～ 192 は須恵器、193 ～ 203 は灰釉陶器、204 ～ 233 は土師器､234 は砥石､235 ～ 238 は手捏ね土器、239 は土馬、240 は緑釉陶器、241 は詳細の不明な土師器である。

174 ～ 179 は古墳時代に属する須恵器である。174 は岩崎 17 窯式に属する尾張系の須恵器である。175 ～ 177 はⅢ期に属するものであろう。180 ～ 183 はⅥ期､184 ～ 192 はⅦ期に属するものであろう。

灰釉陶器は､193 が黒笹 14 号窯式の皿､194 は黒笹 90 号窯式の皿､196 が黒笹 90 号窯式の碗である。195･197 ～ 200 は、折戸 53 号窯式に属している。これらの内で、197 ～ 200 は宮口古窯産であろう。201 は黒笹 14 号窯式の長頸壺であり、202・203 もこの時期であろう。

土師器坏は、204 ～ 209 はⅥ期に属するとみてよいであろう。210 ～ 215 はⅦ期であろう。217 ～ 229 のいわゆる長胴甕は、Ⅵ期～Ⅶ期に属するであろう。230・231 は、Ⅵ期に属する鉢である。

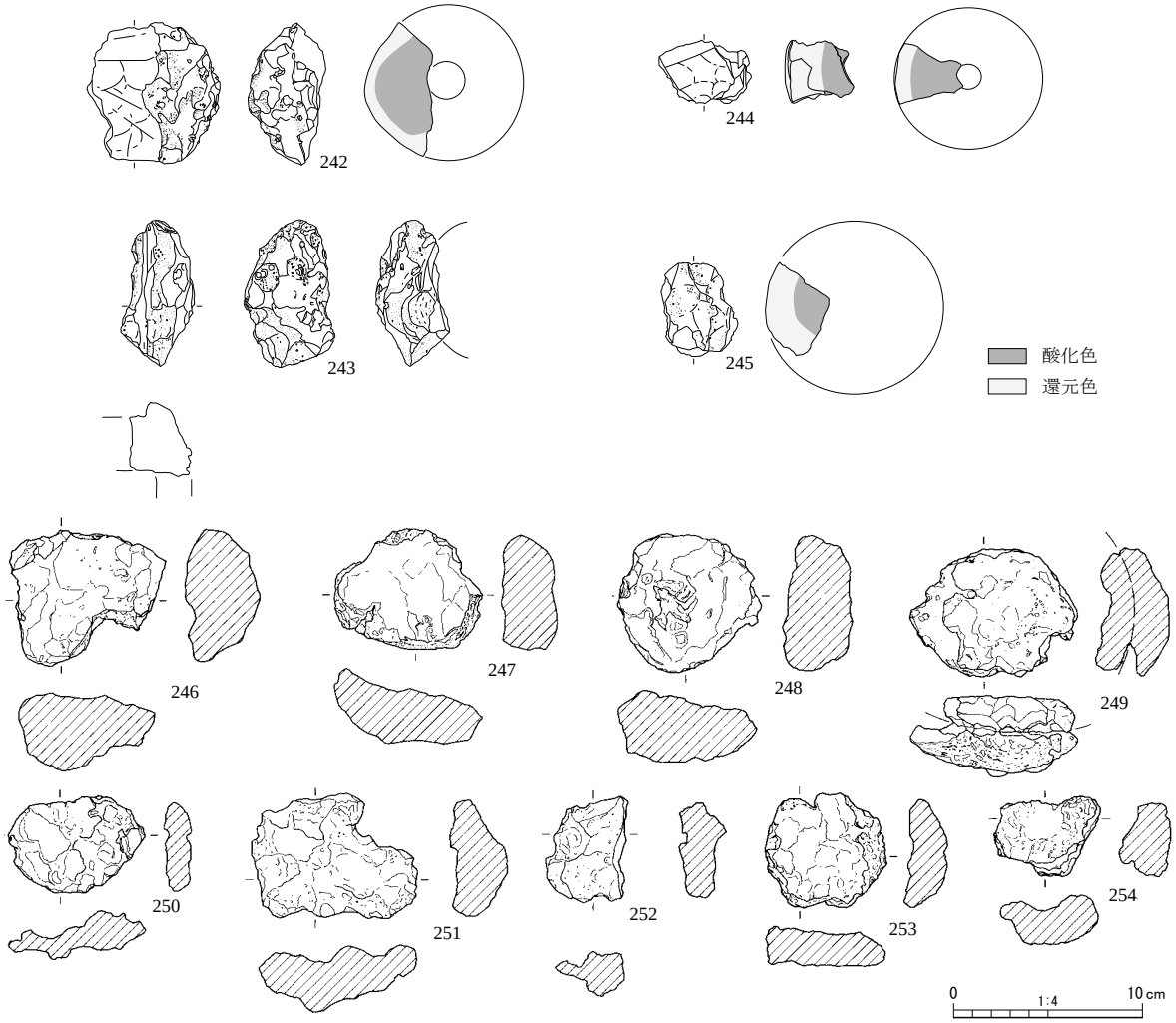


Fig.102　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物（４）

242・244・251・252・254: 包含層　243: 表土　245 ～ 248:SK301　249:SD118　250:SP982　253: 表採

233 は、今回の調査で唯一出土した土師器の把手である。240 は、黒笹 90 号窯式に属する緑釉の稜碗である。

241 は、この地域では類例を見ることができない甕形土器である。口縁部は、強く押し付けるように横ナデ成形されていることから、明瞭な稜を有して上方に伸びている。頸部から体部上部も内外ともに横ナデ成形で、外面にはこれに伴う稜が明瞭に観察できる。胎土には、径 0.5 ㎝以下の白色チャートと、微細な金雲母を含み、焼成はきわめて良好である。いわゆる常総型甕と総称されているものに類例がみられる。相模地方などにも少量分布しているようで、概ね９世紀代と考えられている。

242 ～ 244 は鞴羽口、251 ～ 254 は鉄滓である。これらは、包含層でも E4・E5 グリッドから多く出土しているが図示されなかったものの多くは、SH06 付近から出土している。

（７）　奈良・平安時代検出遺構・遺物の特徴

当調査区では、弥生時代後期と律令期に盛行したと考えることができる。そして、古墳時代の遺構遺物が極めて少ないことも確認することができた。

奈良･平安時代という括りのなかで考えると、積極的に８世紀前半の遺物といえるものは少なく、８世紀後半から急速に増加している。また 10 世紀後半以降は、鎌倉時代に至るまで遺構・遺物は皆無になる。その内容から推定すれば、当調査区は、８世紀後半から 10 世紀前半という約 200 年間が盛行期であったといえる。

奈良・平安時代の遺構で特記できるのは、土地を方形に囲んだと考えられる SD107 であろう。この SD107 は、調査区周辺の古い地割と区画の方向が近似しており（Fig.103)、地割が古代から踏襲されていた可能性が考えられる。

SD107 のように、ある程度の範囲を囲み多量の遺物を出土する溝状の遺構は、官衙関連の遺跡や有力氏族の居館等にみられるが、一区画が広大な面積に及ぶことから、全容を把握できた例は少なく、当遺跡においてもその位置付けは簡単ではない。しかし、普通の集落ではなかったことは指摘できよう。この点は、この溝とその周辺から尾張地方で生産された灰釉陶器がある程度まとまって出土していることや、隣接する SD109 から銅印が出土していることからも理解できそうである。

９世紀代の灰釉陶器は、大略でいえば黒笹 14 号窯式、黒笹 90 号窯式の時期である。この時期の遠江周辺では、灰釉陶器の生産は本格化しておらず、出土するものの大半は尾張産である。これら灰釉陶器の生産と供給には、国家的規制が働いていたと考えられるので、これら初期の灰釉陶器を多く出土する遺跡は、その性格や規模は別として、国家の地方支配と密接にかかわっていると見てよいであろう。

調査区東端の SD107 の内側から、鞴羽口、鉄滓が集中的に出土している点は注目できる。この付近で鍛冶に関連する作業が行われていたと考えられ、SK301・SK302・SD118・SH06 などは、鍛冶関連遺構と捉えることが可能と思われる。

また、出土遺物の中で、土師器の甑が出土していないのは注目すべき点であろう。遠江地方では９世紀代になると甑の出土例が極めて少なくなる傾向は、当遺跡でも検証できた。

Fig.103　松東遺跡周辺の地籍図と奈良・平安時代の遺構

４　鎌倉時代以降

（１）検出遺構の概観

鎌倉時代およびそれ以降の時代の遺構・遺物は少ない（Fig.104）。井戸跡３基、幅広の溝状遺構４条、幅の狭い溝状遺構２条以外の遺構は、きわめて不明確な土坑、小穴が数箇所で検出されたに過ぎない。

（２）溝

概　要　SD01・SD02・SD20・SD21 は、幅の広い溝状遺構というべきか、沖積微高地を水田化した名残なのか識別困難であったので、溝として扱う。SD07 と SD08 は、SD01 と関連のある溝と考えられるが、性格は不明である。

SD01・SD02・SD20・SD21（Fig.105）調査区全体から、幅４～６ｍ、深さ約 0.3 ｍの幅広で浅い溝状遺構が４条検出された。４条の溝状遺構は、主軸が真北から東方向に 16 ～ 17 度傾斜し、ほぼ等間隔で並行に延びている。SD01 内には近代の掘り抜き井戸が２本検出された。

埋土からは、磨耗した土器片が出土したが、その量は決して多くない。

溝出土遺物　磨耗した弥生時代～江戸時代の遺物が出土したが、いずれも小片であり図示できるものはない。

（３）井戸

概　要　調査区中央付近で１箇所、東隅で２箇所検出された。

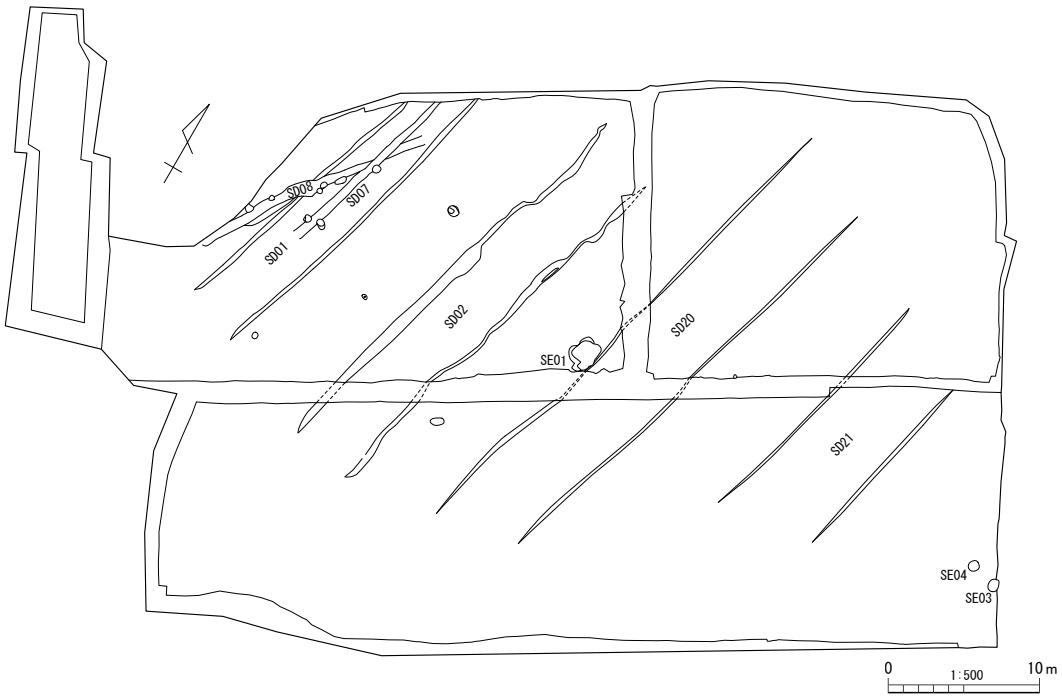


Fig.104　鎌倉時代以降 遺構分布図

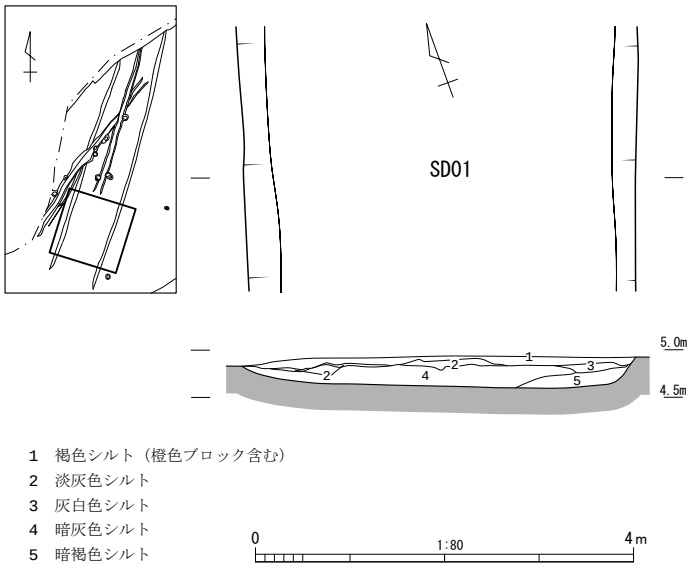


Fig.105　SD01 実測図

SE01（Fig.106）　1 工区 E3 ～ F3 にかけて検出された。隣接して SD20 がある。南～西側で湧水によって遺構が一部崩落している。直径 1.5 m前後の不整形な平面形を呈する。底面は砂礫層に達している。現況で深さ 0.5 mである。底面の標高は、4.35 mである。土層観察では、掘り方の中に直径約 0.6 mの井戸枠状の窪みが認められたが、木枠等の施設は検出できなかった。出土した遺物は、255 がある。

SE03（Fig.106）　3 工区 I3 グリッドから検出された。平面形は長径 0.8 m、短径 0.7 mである。深さは、0.75 mで、底面は砂礫層に達する。埋土は、有機質の強い暗褐色土である。いわゆる野井戸であろう。

底面から約 0.3 m浮いた状況で、山茶碗 1 点（256）が出土した。

SE04（Fig.106）　3 工区 H3 グリッドから検出した。SE03 から約 1.1 m西に位置する。平面形は直径 0.7 mの円形で、深さは 0.55 mである。底面は砂礫層に達する。埋土は、有機質の強い暗褐

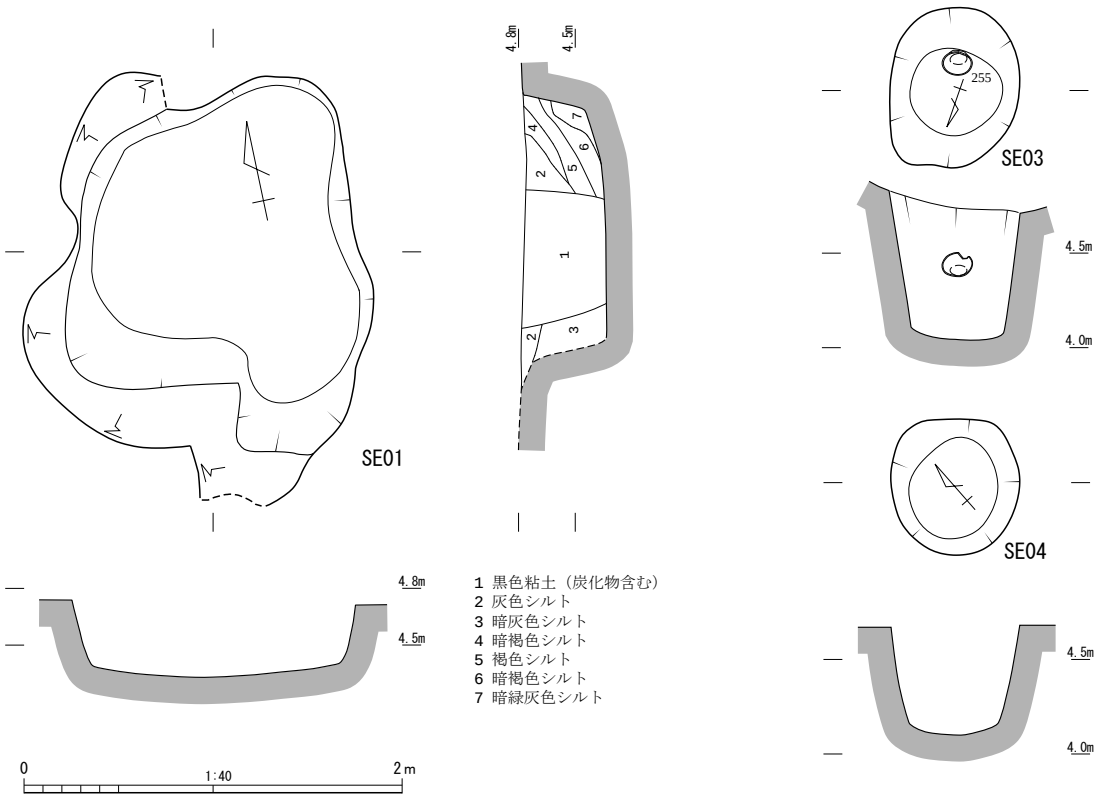


Fig.106　SE01・SE03・SE04 実測図

色土である。いわゆる野井戸であろう。

出土した遺物は、257・258 がある。

井戸出土遺物（Fig. 107）　255 は SE01、256 は SE03 出土の山茶碗、257 は SE04 出土の山皿である。山茶碗のⅡ形式に属するものであろう。

（４）包含層出土遺物

258 ～ 265 は包含層出土である（Fig. 107）。258 ～ 260 は、戦国時代頃のかわらけである。261 は羽釜の小片、262・263 は青磁小片である。いずれも中国産であろう。前者は 13 ～ 14 世紀頃の稜皿である。後者は、14 ～ 15 世紀頃の碗である。264 は内面に半肉彫りの花文を有する白磁である。近世の国産とも考えられる。265 は漆器の小片である。材はトチノキで、内面赤漆、外面黒漆である。

（５）鎌倉時代以降検出遺構の特徴

鎌倉時代以降の遺構・遺物は他の時代と比べると希薄である。主な検出遺構は、井戸跡３基、幅広の溝状遺構４条である。

SD01・SD02・SD20・SD21 の溝状遺構の性格は不明だが、４条が平行して並び主軸が一致している状況は、遺構の時期であると考えられる鎌倉～江戸時代の区画を表しているとみて間違いないと思われる。そこで、現在の都市計画図に地籍図を重ねたものに検出された遺構をあてはめてみた（Fig. 108・109）。詳細にみていくと、おおまかにＡとＢの２種類の地割りがみえてくる。Ａは、検出した溝状遺構と主軸方向がほぼ一致するものとそれに直交する地割りである。Ｂは、Ａの地割りを切るように設定された、Ａより西へ振れている地割りである。Ａの地割りをＢの地割りが切っていることから、ＢよりもＡの地割りの方がより古いということがいえる。応長元年（1311）に開創されたと伝わる日蓮宗妙恩寺は、今回の調査区の北東に位置し、さらに妙恩寺から西へ 200 ｍには、開基金原法橋の屋敷にあったと伝わる法橋の松が存在する。松東遺跡は当時、妙恩寺の広大な境内

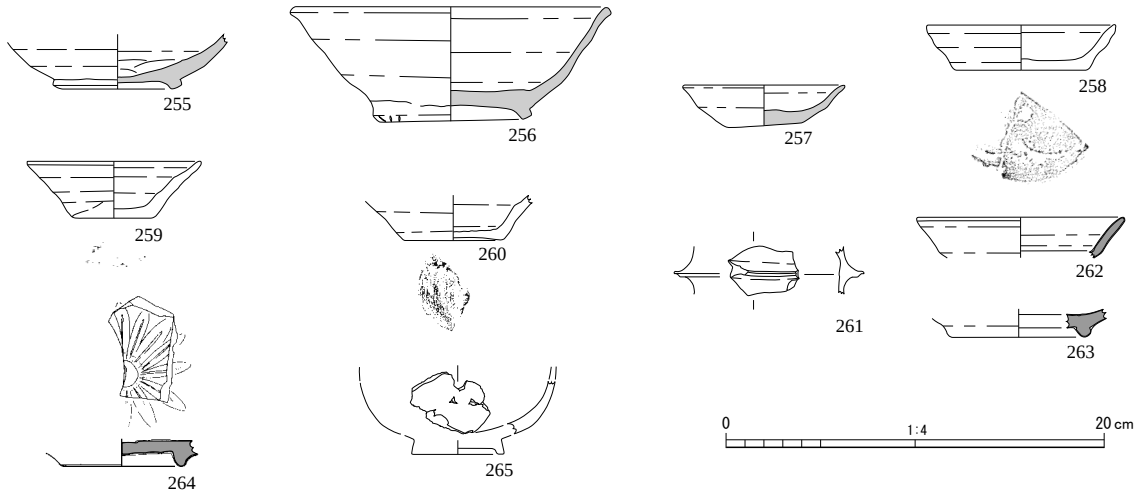


Fig.107　鎌倉時代以降 出土遺物

255:SE01　256:SE03　257:SE04　258 ～ 265: 包含層

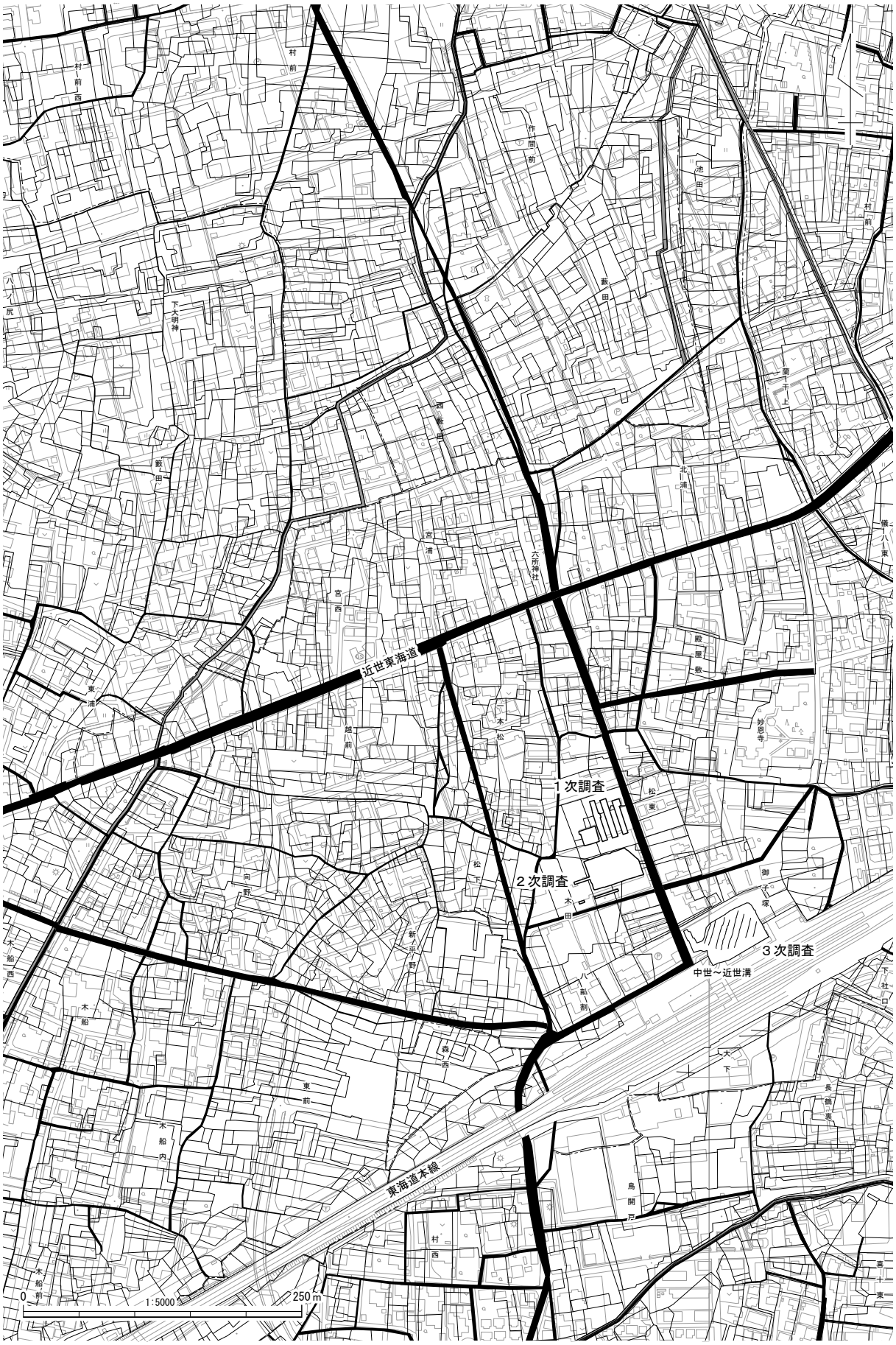


Fig.108　松東遺跡周辺の地籍図

Fig.109　松東遺跡周辺の地籍図詳細と松東遺跡の中世遺構全体図

の中に位置しており、その妙恩寺の地割りと今回検出された溝状遺構の方向は一致していることが確認された。また、Ｂは近世に成立した近世東海道を意識した地割りとみられ、Ａの地割りを無視した区画を形成している。Ｂの方がＡよりひとつひとつが大きな区画で構成され、整然としている印象である。今回の調査区近辺はＢの地割りの箇所が多く、検出された溝状遺構とは明らかに主軸方向が異なることがわかる。これらのことからも、Ａは中世段階の地割りであり、Ｂは近世頃から現代に続く新しい地割りであることがいえる。また、Ａは奈良・平安時代の区画溝である SD107 とも主軸方向が近似しており、中世段階のものと考えられるＡの地割りは、さらに古代までさかのぼる可能性もある。

１章・２章参考文献

論文

赤塚次郎　1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』（財）愛知県文化財センター
国立歴史民俗博物館　1999 『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 79 集
鈴木一有　2000 「第４章　考察」『山の神遺跡５次』（財）浜松市文化協会
鈴木一有　2009a「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」『鳥居松遺跡５次　弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有　2009b「鳥居松遺跡の集落構造とその特質」『鳥居松遺跡５次　弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団
難波洋三　1986 「銅鐸」『弥生文化の研究』 第６巻　雄山閣
難波洋三　2007 『難波分類に基づく銅鐸出土地地名表の作成』平成 15 年度～ 18 年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書
向坂鋼二　1989 「浜松市の弥生文化再考」『浜松市博物館館報』Ⅰ

発掘調査報告書

（財）静岡県埋蔵文化財研究所　1996 『角江遺跡Ⅱ　遺物編３（石器・金属製品他）』
（財）静岡県埋蔵文化財研究所　1999 『元島遺跡Ⅰ　遺物・考察編 1- 中世 -』
（財）静岡県埋蔵文化財研究所　2007 『井通遺跡　井伊谷川流域の遺跡　Ⅱ』
（財）静岡県埋蔵文化財研究所　2010 『西の谷遺跡』
（財）浜松市文化協会　1989 『山の神遺跡』
（財）浜松市文化協会　1990a『松東遺跡発掘調査報告書』
（財）浜松市文化協会　1990b『松東遺跡Ⅱ』
（財）浜松市文化協会　1991 『梶子遺跡Ⅷ』
（財）浜松市文化協会　1994 『宮竹野際遺跡２』
（財）浜松市文化協会　1997 『下滝遺跡群』
（財）浜松市文化協会　2000 『山の神遺跡５次』
（財）浜松市文化協会　2002 『天王町村東遺跡』
（財）浜松市文化協会　2002 『恒武西宮遺跡』
（財）浜松市文化協会　2004 『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』
（財）浜松市文化協会　2004 『坊ヶ跡遺跡』
（財）浜松市文化協会　2005 『梶子北（三永）・中村遺跡　弥生時代編』
（財）浜松市文化振興財団　2005 『森西遺跡』
（財）浜松市文化振興財団　2007 『中田北遺跡』
（財）浜松市文化振興財団　2011 『木船廃寺跡２次』
（財）浜松市文化振興財団　2012 『宮竹野際遺跡６次』
静岡県埋蔵文化財センター　2012 『将監名遺跡』
浜松市教育委員会　2008 『伊場遺跡総括編　文字資料・時代別総括』
細江町教育委員会　1991 『滝峯才四郎谷遺跡発掘調査報告書』

第３章　後　論

１　銅鐸・銅印の自然科学分析

川本耕三（公益財団法人元興寺文化財研究所）
西田京平・平尾良光（別府大学文化財研究所）

（１）分析内容

Tab.6 に分析項目をまとめた。ICP 発光分析は日鉄住金テクノロジー株式会社が行った。また、鉛同位体比測定については、遺物から採取した鉛同位体比測定に供する試料の鉛含有の有無を蛍光Ｘ線分析法で確認した後、別府大学文化財研究所・平尾良光が分析した。

Tab.6　松東遺跡出土遺物の分析項目

	銅鐸鈕	銅印
蛍光X線分析法による定性成分分析	○	○
ICP発光分析法による定性定量分析	○	－
鉛同位体比測定	○	○

文章は、（１）～（３）を川本が、（４）を西田・平尾が、（５）を坂下が執筆した。

（２）銅鐸鈕、銅印の蛍光Ｘ線分析法による定性成分分析

分析原理　蛍光Ｘ線分析法は、試料の微小領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光Ｘ線を検出することにより元素を同定する分析法である。

分析方法　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置(XRF)【SII ナノテクノロジー SEA5230】を用いて、大気中でφ 1.8mm のコリメータと 45kV の管電圧で 180 秒間測定を行った。なお、Ｘ線管球はモリブデン（Mo）である。

分析結果　銅鐸鈕の分析箇所(Fig.110 左)を XRF にて測定したところ、銅(Cu)、ヒ素(As)、銀(Ag)、スズ（Sn)、アンチモン（Sb)、鉛（Pb）などを検出した（Fig.111）ことから、銅鐸鈕は青銅製であると考えられた。

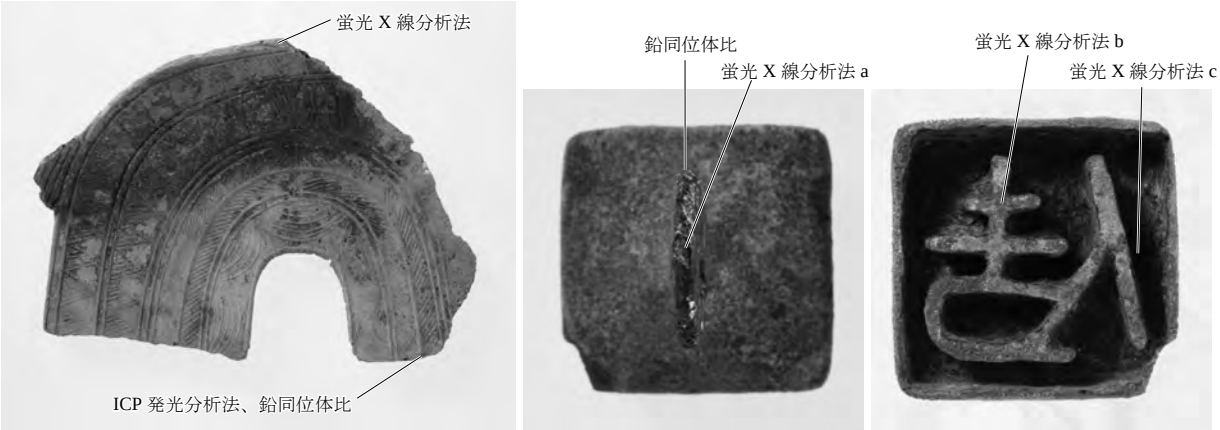


Fig.110　銅鐸鈕（左)、銅印（中・右）とその分析箇所

次に、銅印の分析箇所（Fig. 110 中の a、Fig. 110 右の b、c）を XRF にて測定したところ、銅、ヒ素、銀、スズ、鉛、ビスマス（Bi）などを検出した（Fig. 112 ～ 114）ことから、銅印は青銅製であると考えられた。印面から水銀朱（硫化水銀（HgS））は検出できなかった。

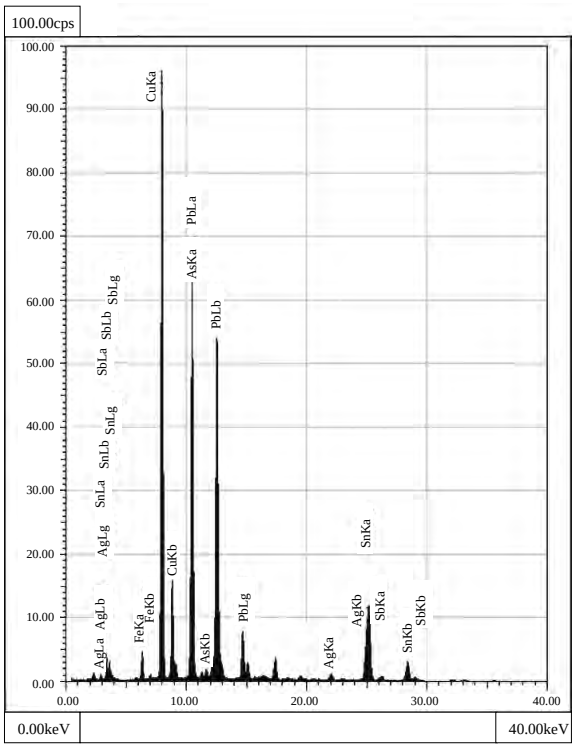


Fig.111　銅鐸鈕分析箇所（Fig. 110 左）の XRF スペクトル

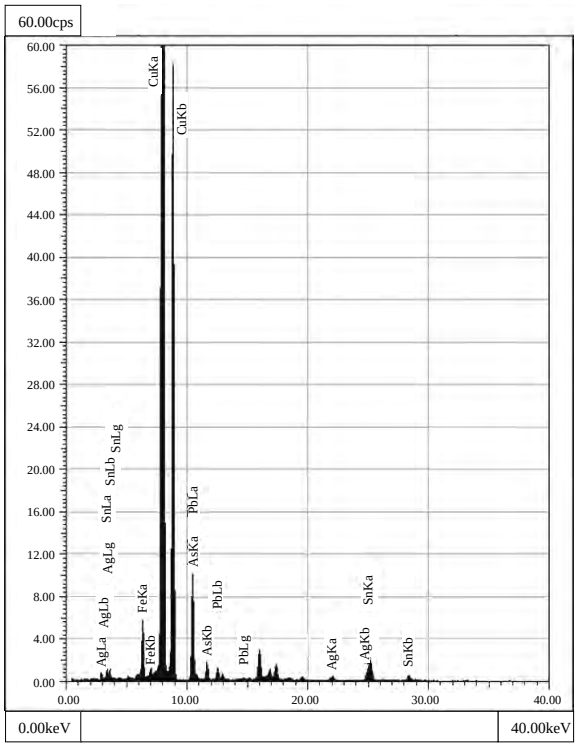


Fig.112　銅印分析箇所（Fig. 110 中 a）の XRF スペクトル

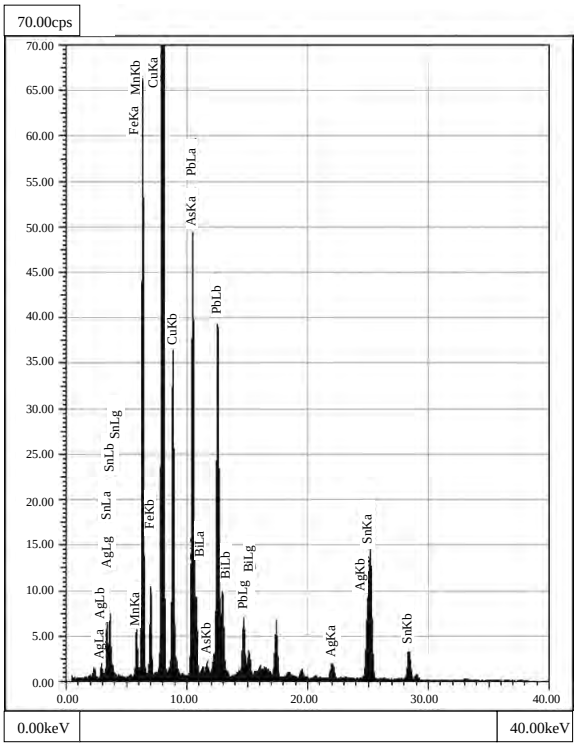


Fig.113　銅印分析箇所（Fig. 110 中 b）の XRF スペクトル

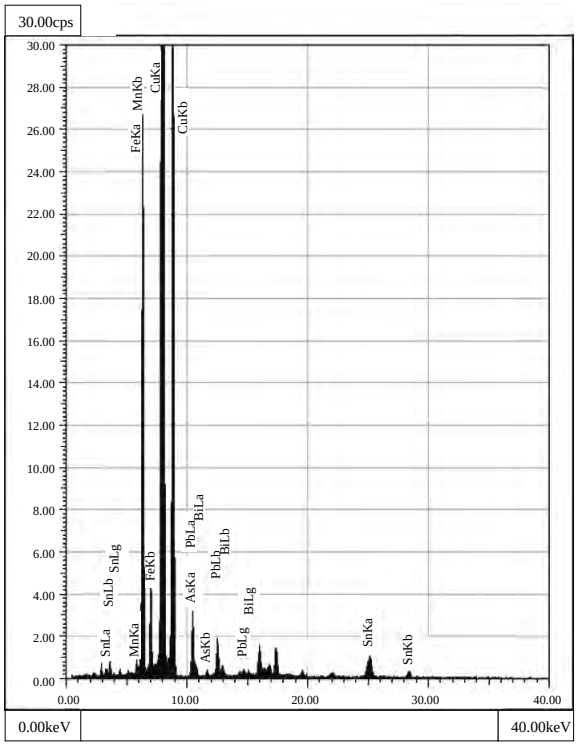


Fig.114　銅印分析箇所（Fig. 110 中 c）の XRF スペクトル

Tab.7　酸可溶分（sol 液）の定量分析結果

単位：重量%

	ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ Mg	ｹｲ素 Si	ｶﾙｼｳﾑ Ca	ｸﾛﾑ Cr	ﾏﾝｶﾞﾝ Mn	鉄 Fe	ｺﾊﾞﾙﾄ Co	ﾆｯｹﾙ Ni	銅 Cu	亜鉛 Zn	ﾋ素 As	銀 Ag	ｽｽﾞ Sn	ｱﾝﾁﾓﾝ Sb	金 Au	鉛 Pb	ﾋﾞｽﾏｽ Bi
銅鐸鈕	0.002	0.033	0.017	0.001	0.004	0.19	0.037	0.077	87.6	0.003	0.42	0.15	4.32	0.45	0.005	3.31	0.023

※網掛け部分はICP-MSによる測定結果

Tab.8　酸不溶分（insol 液）の定量分析結果

単位：重量%

	ﾏｸﾞﾈｼｳﾑ Mg	ｱﾙﾐﾆｳﾑ Al	ｹｲ素 Si	ｶﾙｼｳﾑ Ca	ﾁﾀﾝ Ti	鉄 Fe	ﾆｯｹﾙ Ni	銅 Cu	亜鉛 Zn	ｽｽﾞ Sn	鉛 Pb
銅鐸鈕	0.002	<0.001	0.055	0.019	<0.001	0.097	0.019	0.12	0.13	0.19	0.011

（３）銅鐸鈕の ICP 発光分析法による定性定量分析

銅鐸鈕の Fig.110 に示した箇所から試料を採取し、ICP 発光分析を日鉄住金テクノロジー株式会社が行った。Fig.115 に試料採取部分を示す。

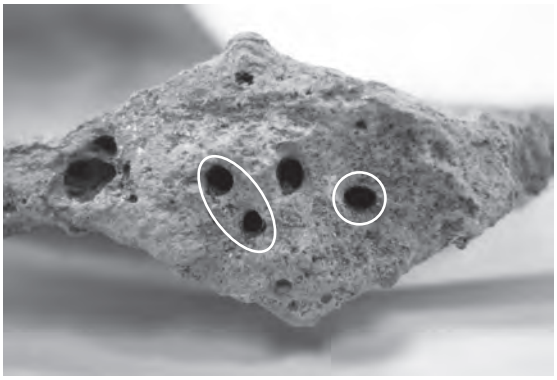


Fig.115　ICP 発光分析用使用採取部分

分析原理　誘導結合プラズマ発光分光分析では、試料にプラズマのエネルギーを外部から与えると含有されている成分元素（原子）が励起される。その励起された原子が低いエネルギー準位に戻るときに放出されるスペクトル線を測定することにより、その元素の種類と含有量を知る。

誘導結合プラズマ発光質量分析では、プラズマ中でイオン化した試料が質量分析計により質量選別され、イオン検出器により検出される。高感度分析が可能である。

分析方法

①前処理　試料0.05gを硝酸、塩酸で分解後、濾過し、50mlに希釈定容したものを酸可溶分(sol液)の測定試料とした。酸で分解不可能であったものは、濾紙上に濾別された。この濾別された酸不溶分は、濾紙とともに灰化・融剤（ホウ酸ナトリウム）で溶融した後、硝酸溶液にて溶解させ、50ml に定容した。この溶液を酸不溶分（insol 液）として測定試料とした。

②定量方法　SPEX 製標準溶液を用いて、検量線を作成することにより定量値を算出した。

③測定方法　誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP）【SII ナノテクノロジー SPS3100HVUV】、誘導結合プラズマ発光質量分析（ICP-MS）【セイコーインスツルメンツ SPQ9200】

分析結果　酸可溶分（sol 液）の測定結果を Tab.7 に、酸不溶分（insol 液）の測定結果を Tab.8 にまとめた。

（４）鉛同位体比分析

銅鐸鈕、銅印の Fig.110 に示した箇所からそれぞれ試料を採取し、XRF で成分分析して鉛の含有を確認後、試料の鉛同位体比分析を平尾良光が実施した。以下に試料採取部分（Fig.116）とその報告を示す。

Fig.116　銅鐸鈕と銅印の鉛同位体比測定用試料採取部分

銅鐸　本銅鐸は第１工区において弥生時代の遺構が検出され、この遺構の集落内の土坑から土器と共に出土している。共伴土器の形式から弥生時代後期と判断される。本資料は銅鐸の鈕部分（上部吊り手）の破片であり、銅鐸の文様や製作技法から、突線鈕２式（近畿Ⅰ式）銅鐸と判断されている。銅鐸は完全な形で集落外に埋納される場合と、故意に破壊され、再利用あるいは破棄される場合がある。本資料は故意に破壊・破棄された部分と判断される。

銅鐸の形式はⅠ式（菱環鈕）から、Ⅱ式（外縁付鈕）、Ⅲ式（偏平鈕）、Ⅳ式（突線鈕）まで形式的に大きく４つの段階に変化するとされており、各形式はさらに細分化される。本資料はⅣ式（突線鈕）の中の第２形式で、弥生時代後期に現れた形式である。この形式の銅鐸は今までの鉛同位体比測定結果ではFig.117とFig.118の中で示される華北領域（Ａ・Ａ’領域）内に位置し、しかもａ・ａ’領域に含まれる場合が多い。すなわち中国華北産の材料で、あたかも一つの鉱山から産出された鉛を利用しているかのようである。

浜松市周辺の遺跡から出土する銅鐸の形式はⅣ式（突線鈕）がほとんどであり、弥生時代後期にこの地で銅鐸に関連した人間の活動があったと推定される。

銅印　銅印は第3工区において、奈良～平安時代（700～800年頃）の遺構や遺物が検出されるなかで、溝（SD109）から確認されている。古代においては銅印を作ることが極めて珍しい。印字から「吉人」という個人名が推定され、個人が利用したと判断される。このような私印はさらに希少と推定されている。静岡県で5例目、浜松市では初めての出土である。

調査方法　資料の化学組成を測定するために蛍光Ｘ線法を利用する。分析用に供された試料は表面の錆を除いた内部から得られた金属部分であるため、本来の化学組成に近い値が得られると期待される。蛍光Ｘ線分析は別府大学に設置されているSIIナノテクノロジー社製の蛍光Ｘ線分析装置SEA5230Aで行う。測定条件は、測定時間：300秒、雰囲気：大気、測定面積：φ2.5㎜、励起電圧：50kV、管電流：8μA、定量方法：FP法、以上の条件である（中井2005）。

資料に使われた金属材料の産地を推定するために、鉛同位体比法を利用する。鉛同位体比法は鉛を構成する^{204}Pb、^{206}Pb、^{207}Pb、^{208}Pbという4種類の安定同位体の比が鉱山や鉱床の成因によって異なることを利用して、文化財資料に含まれる鉛の同位体比を測定し、鉱山や産地の明らかな文化財資料の鉛同位体比値と比較することから材料産地を推定する（平尾1999・2001）。

鉛同位体比の測定は次の手順で行う。分析用試料を石英製ビーカーに入れ、硝酸で溶解する。こ

Tab.9　松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の化学組成

単位：%

資料名	Fe 鉄	Cu 銅	As ヒ素	Sn スズ	Sb アンチモン	Pb 鉛	分析番号
銅鐸鈕	0.2	88.7	0.3	4.9	0.3	5.5	BP5916
銅　印	1.1	92.8	2.6	2.6	-	1	BP5917

の溶液を蒸留水で希釈し､直流２Ｖで電気分解する。鉛は二酸化鉛として白金電極に析出するので、白金電極を取り出して硝酸と過酸化水素水で鉛を溶解する。この溶液の鉛濃度を測り、0.2 μgの鉛を分取する。この鉛にリン酸とシリカゲルを加えてレニウムフィラメント上に乗せる。以上のように準備したフィラメントを別府大学に設置されているFinnigan MAT262の中にセットし、測定諸条件を整え、1200℃で鉛同位体比を測定する。測定値は同一条件で測定した標準鉛試料NBS-SRM-981で規格化する（平尾・馬淵1989)。

調査結果　測定された化学組成の値をTab.9で示す。それによると銅鐸の化学組成は銅が89%、スズ4.9%、鉛5.5%である。突線鈕式銅鐸や広形銅矛など後期弥生時代青銅器の目安である銅90%、スズ５%、鉛5%、という平均値にほぼ一致する。それ故、Ⅳ式の銅鐸としては典型的な化学組成と判断できる。鉄（Fe）やヒ素（As)、アンチモン（Sb）は銅の不純物として含まれたと判断できる。

銅印は銅が93%､スズ3%､ヒ素3%､鉄1%であることから､鉄やヒ素は銅の不純物であろう。3%程度のスズは人為的に加えられたのか、銅の不純物として、混入していたのかは判断しにくい濃度である。銅にスズが3%程度含まれていたとしても、融点や強度に影響が顕著に表われるとは思えないので、本資料は青銅製（銅とスズの合金）と見るよりも、純銅製と判断した方が良いかもしれない（平尾2001)。

測定された鉛同位体比値をTab.10で示し、Fig.117とFig.118に図示する。

銅鐸の分析結果　Fig.117とFig.118に於いて、本銅鐸資料はＡ・Ａ’領域の中でもａ・ａ’領域に含まれると判断できる。このことから、本資料は弥生時代後期に利用された青銅材料であり、第IV式の銅鐸としては典型的な値である。化学組成からも、弥生時代後期の銅鐸として、典型的な銅、スズ、鉛濃度であると示されている。

Fig.119とFig.120とに、今までに測定されたⅣ式銅鐸の鉛同位体比分布を示す（平尾2003)。これらの図から判断すると、ほとんどのⅣ式銅鐸はＡ・Ａ’領域の中のａ・ａ’領域に含まれており、本銅鐸資料もこの中の一つであると示される。Ⅳ式の第１式銅鐸は華北（Ａ・Ａ’）領域にやや拡がるが、第２式以降はａ・ａ’領域に集中する。このFig.119とFig.120を拡大してFig.121とFig.122とする。松東遺跡出土の銅鐸はａ・ａ’領域から少々はずれるようにも見えるが、このａ・ａ’領域の境界線は今までの銅鐸の分布から任意に設定されているので、この領域をより大きく拡げても問題はない。領域設定の意味は「Ⅳ式銅鐸はこの辺りに集まることが多い」と示しているだけなで、この領域から外れても問題ではなく、他のⅣ式銅鐸と類似した鉛同位体比であると判断できる。

Tab.10　松東遺跡で発掘された銅鐸と銅印の鉛同位体比

資料名	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	分析番号
銅鐸鈕	17.739	15.534	38.381	0.8757	2.1636	BP5916
銅　印	18.447	15.608	38.543	0.8461	2.0894	BP5917
誤差範囲(1σ)	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

銅印の分析結果　Fig.117 と Fig.118 に於いて、日本産の材料であることが示されている。

日本における銅の生産は奈良時代に始まり、平安時代中期まで続く。皇朝十二銭の生産から判断すると、和同開珎（708 年）や万年通宝（760）などの初期の銅銭は大きく、化学組成も銅濃度が高い。それが皇朝十二銭の最後の乾元大宝（958）になると、大きさが初期の銭貨の 70%程度となり、鉛が 50%を超えるようになる。しかも発行量は予定の三分の一であったという。これら皇朝十二銭はそのほとんどが日本産材料を利用していると判断できるが、時代が進むにつれ日本における銅の生産が極限されたことを示唆する（斉藤 2001、平尾 2008・2013）。乾元大宝を発行した後、日本産材料を用いた銅銭の製作は 500 年以上無くなる。そこで、今までに測定された皇朝十二銭を含む平安時代の資料と本銅印を Fig.123 と Fig.124 で比較する。皇朝十二銭は主として日本産材料を利用しているが、日本産材料と判断できない材料もいくらかは含まれる。皇朝十二銭の分布は日本産材料領域の中でかなり大きくばらついており、本銅印資料の値はその中心から外れているようにも見える。

皇朝十二銭を外した奈良～平安時代初期の一般資料に関して、鉛同位体比を調べてみると、Fig.125・Fig.126 となる。これらには火熨斗、小金銅仏、銅碗などが含まれる。今回調査した銅印はこれら資料とよく似た同位体比を示しておりこの時代の典型的な材料を利用していると判断できる。それ故、本銅印は奈良時代後期から平安時代初期の典型的な銅材料を示していると判断される。鉛同位体比の値から得られた年代は、考古学的な所見で得られた奈良時代から平安時代初期という年代観とほぼ一致していることが示された。

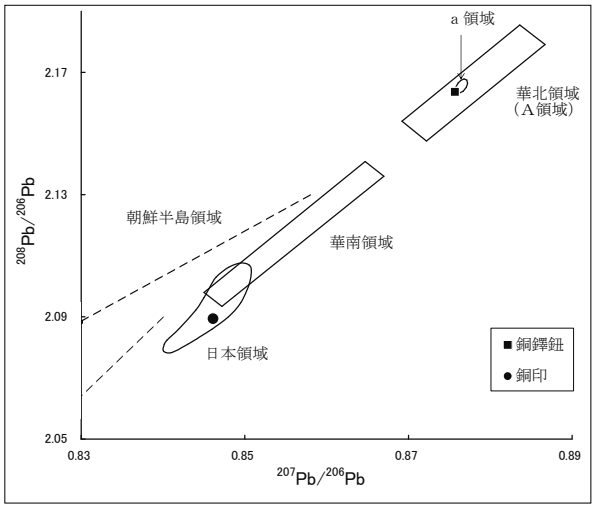


Fig.117　松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布（A式図）

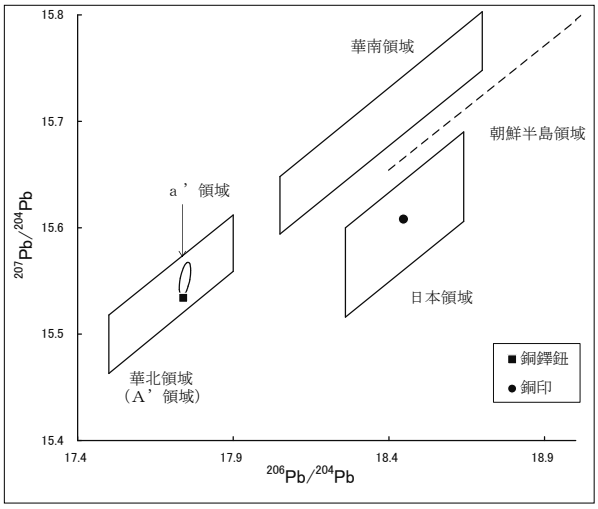


Fig.118　松東遺跡出土資料の鉛同位体比分布（B式図）

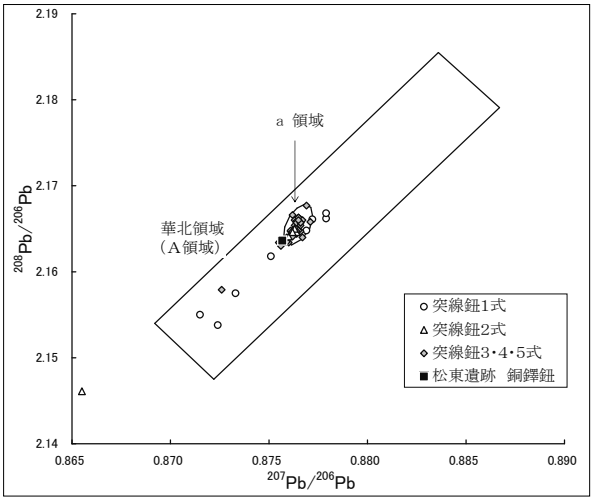


Fig.119　松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布（A式図）

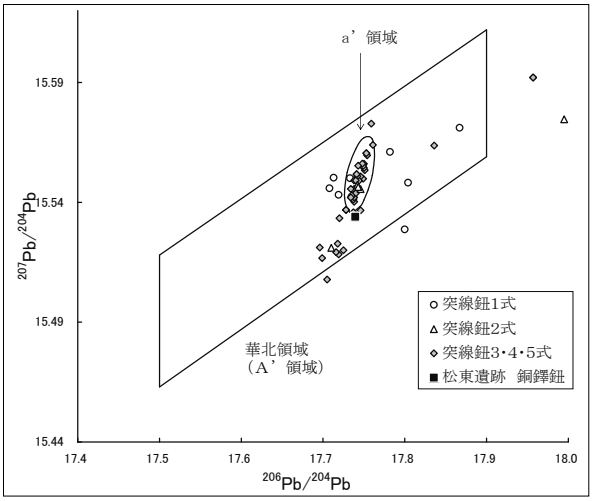


Fig.120　松東遺跡出土銅鐸と突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布（B式図）

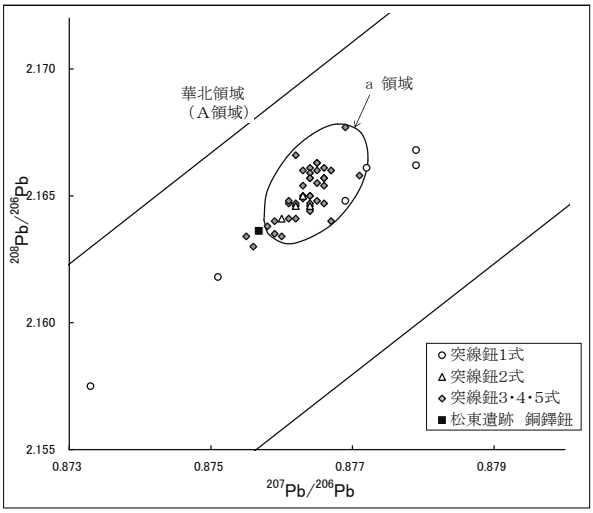


Fig.121　Fig.119 の突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布の拡大図（A式図）

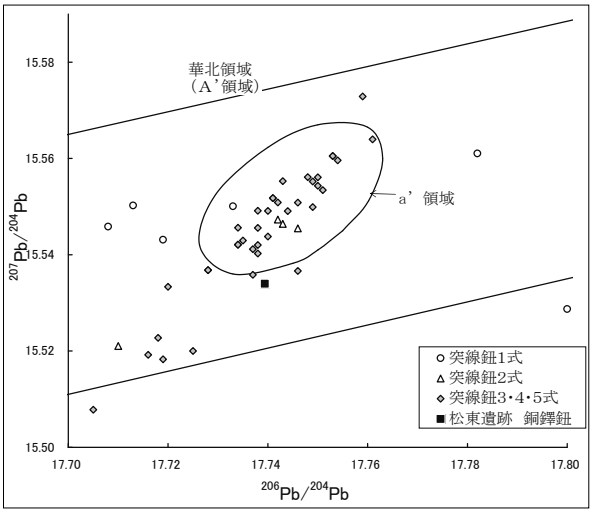


Fig.122　Fig. 120 の突線鈕式銅鐸の鉛同位体比分布の拡大図（B式図）

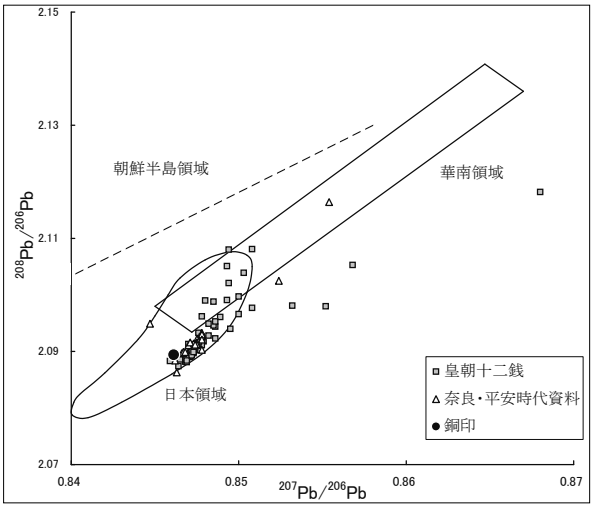


Fig.123　皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の鉛同位体比分布（A式図）

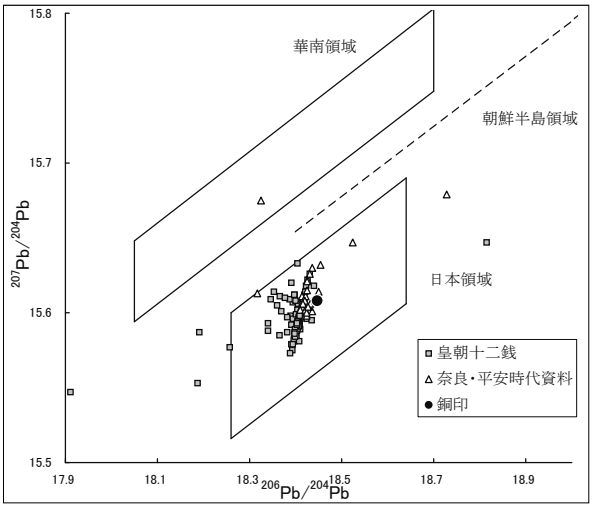


Fig.124　皇朝十二銭と奈良・平安時代資料の鉛同位体比分布（B式図）

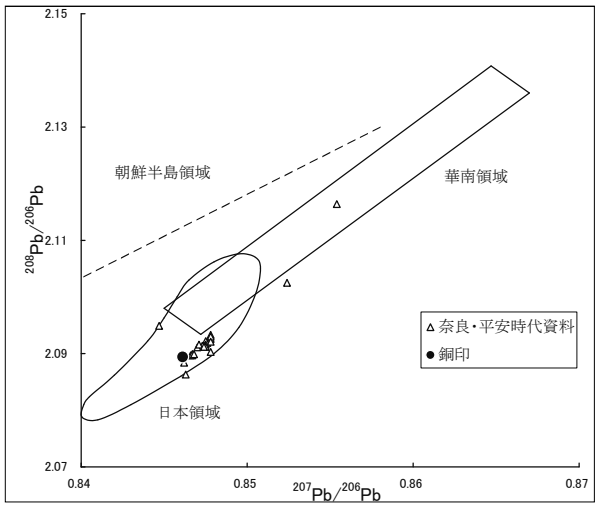


Fig.125　奈良・平安時代の鉛同位体比分布（A式図）

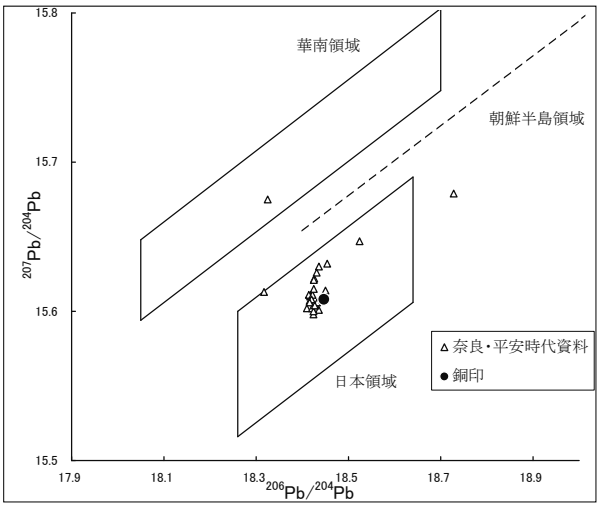


Fig.126　奈良・平安時代の鉛同位体比分布（B式図）

（5）まとめ

分析の結果、銅鐸は青銅製で、鉛同位体比の値はほとんどの突線鈕式銅鐸が含まれるＡ領域の中のａ領域に入った。弥生時代後期の青銅器の典型的な化学組成を示し、中国華北産の材料で鋳造されていると考えられる。

銅印は、化学組成の分析の結果、スズが人為的に加えられていない可能性があるため、青銅製ではなく純銅製と判断した方が良いかもしれない。鉛同位体比を測定して得た値は日本領域に含まれ、日本産の材料で鋳造されたと考えられる。

銅鐸については、他の突線鈕式銅鐸と類似した化学組成・鉛同位体比の値を示し、銅印についても奈良時代後期から平安時代初期の典型的な銅材料を示し、両資料ともに考古学的な所見と一致する結果を得ることができた。

引用・参考文献

斉藤努　2001 「日本の銭貨の鉛同位体比分析」『国立歴史民俗博物館研究報告第 86 集』pp. 65-128

中井泉　2005 『蛍光Ｘ線分析の実際』朝倉書店

平尾良光・馬淵久夫　1989 「表面電離型固体質量分析計ＶＧ Sector の規格化について」『保存科学』28　pp. 17-24

平尾良光編　1999 『古代青銅の流通と鋳造』, 鶴山堂

平尾良光編　2001 『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂

平尾良光　2003 「鉛同位体比の測定と分析」『考古資料大観　第６巻、弥生・古墳時代、青銅・ガラス製品』小学館　pp. 345-368

平尾良光　2008 「材料が語る中世－鉛同位体比測定からみた経筒－」『文化財研究所企画シリーズ－１　経筒が語る中世の世界』pp. 21-33

平尾良光　2013 「鉛から見える世界」『文化財学へのいざない（平尾良光先生古稀記念論集）』pp. 25-84

２　銅鐸・銅印の保存処理

西尾太加二（静岡文化財研究所）
坂下俊介（株式会社フジヤマ）

（１）はじめに

松東遺跡から出土した銅鐸・銅印の保存処理・修復を実施した。銅鐸の保存処理は株式会社フジヤマが､銅印の保存処理及び銅鐸･銅印のサンプリング孔の修復は静岡文化財研究所がそれぞれ行った。

銅鐸は、出土直後にクリーニング及び保存処理を行い、分析後にサンプリング孔の修復を実施した。サンプリング孔は、断面に４か所開けられていた。

銅印は、印面の角が一部欠損するがほぼ完形である。分析のために開けられた直径約 1.2㎜ のサンプリング孔（１か所）の部分に金属光沢が露呈していた。

文章は、（１）・（３）を西尾が、（２）を坂下が執筆した。

（２）銅鐸の保存処理

クリーニング（Fig. 127）　実体顕微鏡（８倍～ 10 倍）で観察しながら、錆と銅鐸との境目に医

Fig.127　銅鐸のクリーニング処理前後写真　1. Ａ面 処理前　2. Ａ面 処理後　3. Ｂ面 処理前　4. Ｂ面 処理後

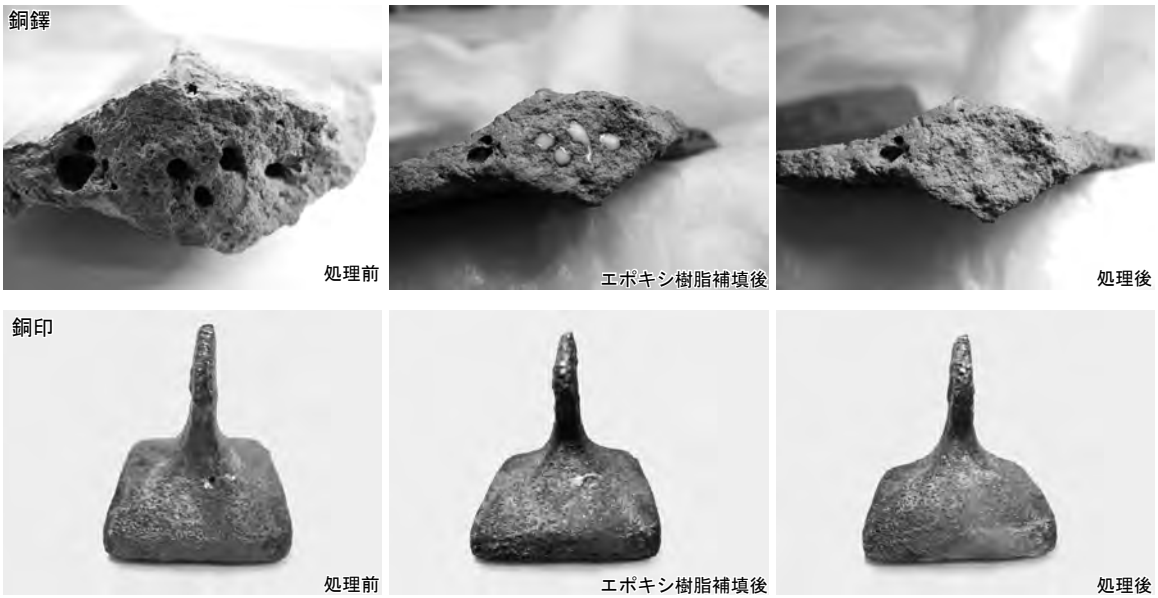


Fig.128　銅鐸・銅印の修復状況写真

療用メスNo.10 又はNo.11 の刃先を刺し入れて錆瘤を剥ぎ取った。地下水に含まれた鉄分などと結合して出来たと思われる錆瘤は堅牢であった。この除去には小型のグランダー（ミニター）を併用した。全ての銹は取りきれないので、主に鋸歯文・連孤文を明瞭に浮き上がらせるよう努めた。

合成樹脂の含浸　クリーニング終了後、合成樹脂（インクララックをキシレンで５％に希釈）の溶液に常圧下で１週間含浸した。含浸槽から取り出して表面の溶液をパルプ等で拭き取ってから、樹脂の色斑を防ぐためキシレンの雰囲気（蒸気）の中で自然乾燥させた。

（３）銅印の保存処理

事前調査　処理前の形状等を写真により記録した。

クリーニング　資料に付着する不要な土砂及び錆びを除去した。

安定化処理　資料をＢＴＡ（ベンゾトリアゾール）２％エタノール溶液に浸漬し、減圧含浸した。

強化処置　資料をアクリル樹脂（パラロイドＢ 72）10％キシレン溶液に浸漬し、減圧含浸した。

(4) 銅鐸・銅印の修復

エポキシ樹脂（セメダインハイスーパー）とフェノールマイクロバルーンを混和し、サンプリング孔に補填し、精密加工機で整形し、アクリル絵の具で補填部を彩色した（Fig.128）。

３　井戸材・漆器の樹種同定

西尾太加二（静岡文化財研究所）

（１）はじめに

松東遺跡から出土した井戸材９点（SE02・170 ～ 173）と、漆椀と思われる漆器片１点（包含層・266）の計 10 点の樹種同定を行った（Tab. 11）。判明した樹種は、井戸材はすべて針葉樹材のヒノキ、漆器片は広葉樹材のトチノキである。

（２）試料および方法

樹種同定用のプレパラート標本は、井戸材については、製品から切り出した数ミリ四方のブロック、漆器片については、製品から直接、両刃カミソリを用いて木口、放射、接線の各断面方向の切片を採取して作製した。封入はガムクロラールで行った。樹種同定は、生物顕微鏡によって 40 ～ 400 倍で観察し（Fig. 129）、現生標本および文献資料と比較しながら行った。

以下、同定に利用した材の解剖学的特徴を示す。

（３）同定結果

針葉樹材：ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa Endl.*　**ヒノキ科**）　仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞の３種類の構成要素からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅および年輪幅が狭く均質な材である。樹脂細胞は晩材部に散在し、ときに接線状となる。樹脂細胞の内容物は赤褐色を呈することが多く、水平壁は通常肥厚し、結節状となることが多い。分野壁孔は円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で斜めに位置しトウヒ～ヒノキ型で１分野に通常２個存在する。放射組織は単列で、細胞高は１～ 15 である。

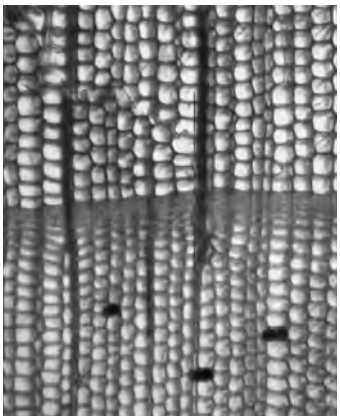
ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する常緑針葉高木で樹高 30 ～ 40m、幹径 50 ～ 150cm。材は木理通直、割裂性がよく、緻密、強靭で光沢美しく、芳香がある。建築材、仏像、箸など様々な用途に用いられる。

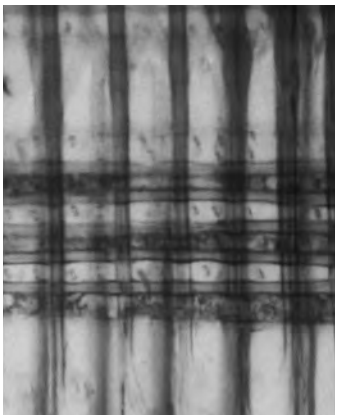
静岡県内では、大井川を境にして以西からヒノキが多量に出土し、以東からはヒノキではなくスギが多量に出土する（西尾 2007）。

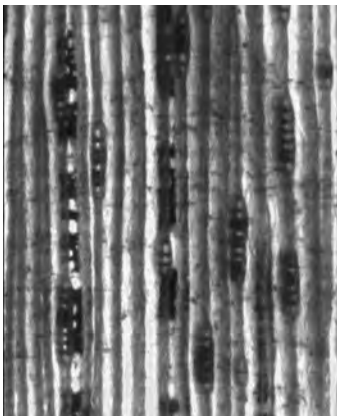
広葉樹材：トチノキ（*Aesculus turbinate Blume*　**トチノキ科**）　20 ～ 80 μｍの小型で丸い道管が単独あるいは放射方向に２～数個複合してやや疎らに散在する散孔材。道管の直径は年輪界に向けてやや減少し、密度はしばしば年輪のはじめと終りで低い。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚があり、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。道管内部にはしばしば褐色の物質が詰まっている。放射組織は単列同性で、しばしば層階状配列（リップルマーク）し、道管との壁孔は小型で密に分布する。

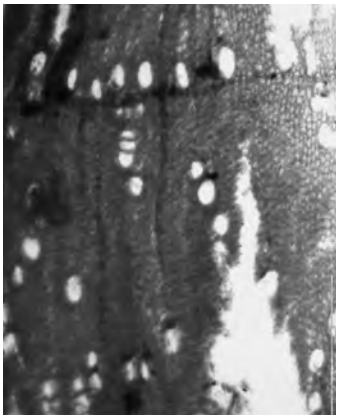
Tab. 11　樹種同定結果一覧

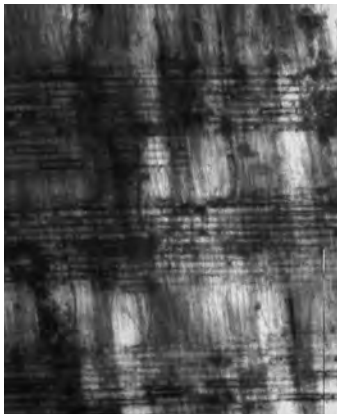
標本 No.	遺構名	遺物番号	遺物名	樹種
142	SE02	—	井戸材（柱材）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
143	SE02	—	井戸材（柱材）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
144	SE02	—	井戸材（柱材）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
145	SE02	173	井戸材（底板）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
146	SE02	172	井戸材（底板）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
147	SE02	—	井戸材（側板）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
148	SE02	—	井戸材（側板）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
149	SE02	170	井戸材（側板）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
150	SE02	171	井戸材（側板）	ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Endl.*　ヒノキ科
151	包含層	266	漆器（漆椀）	トチノキ　*Aesculus turbinate Blume*　トチノキ科


No. 0149　ヒノキ　木口　100 ×


柾目　400 ×


板目　100 ×


No. 0151　トチノキ　木口　50 ×


柾目　100 ×

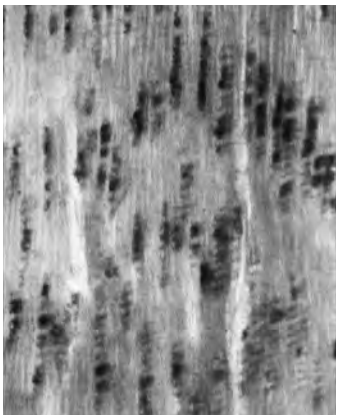

板目　50 ×

Fig.129　木材顕微鏡写真

トチノキは北海道西南部から九州まで広く分布する日本特産の落葉高木で樹高 15 ～ 20 m、幹径 50 ～ 60 ㎝。材は柔らかく緻密であるが保存性は良くない。遺跡から出土する漆椀の材はトチノキをはじめクリ、ケヤキ、シオジ、ブナなどが一般的である。

参考文献

島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』 地球社

西尾太加二　2007 「静岡県の遺跡から出土する建築材の樹種構成」『井通遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所

４　松東遺跡における銅鐸破片出土の意義

（１）はじめに

浜松市東区にある松東遺跡の３次調査において、銅鐸の鈕の破片が出土した。同遺跡からは過去の調査（２次調査）において銅鐸飾耳の破片（浜文協 1990）が出土しているが、周辺には、銅鐸形土製品を出土した森西遺跡（浜文振 2005）や、木船銅鐸出土地（梅原 1927）などが点在し、「永田遺跡群」[1] として包括しうる銅鐸関連遺物の集中域を形成している（Fig. 130）。本遺跡が所在する西遠江は突線鈕２式（佐原 1960、難波 1986）[2] 以降の「見る銅鐸」（田中 1970）が集中する地域としても著名であるが、永田遺跡群の様相は、今後の銅鐸研究において欠かせない重要な情報をはらんでいる。本稿では、近年、急速に進んでいる弥生集落の調査状況をふまえ、西遠江地域を中心にした銅鐸の出土傾向を整理し、松東遺跡（永田遺跡群）における銅鐸破片出土の意義について触れてみたい。

（２）出土遺構と銅鐸破片の概要

土坑の詳細　銅鐸破片が出土した松東遺跡３次調査 SK06 は、長軸 2.1 m、短軸 1.2 mほどの、比較的大型の土坑である（Fig. 26）。検出面からの深さは 0.4 mほどであるが、銅鐸破片が含まれ

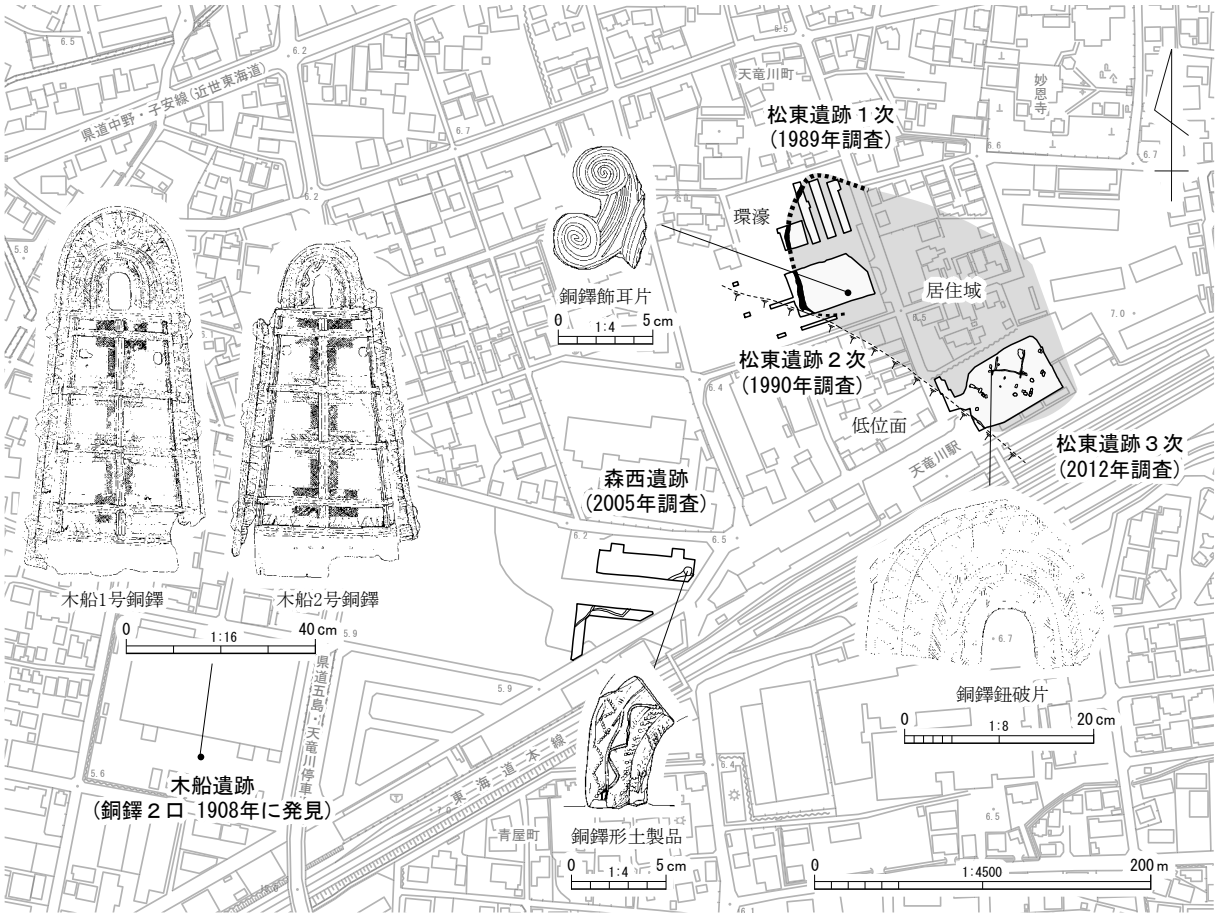


Fig.130　松東遺跡とその周辺における銅鐸関連遺物分布状況

るのは土坑埋土の上層（１層）部分である。１層は深さ 0.15 mほどであり、土坑というよりも浅い窪地と呼ぶほうが実態に近い。銅鐸が出土した１層には炭化物と焼土の破片が多く含まれ、土坑を人為的に埋めた可能性が考えられる。また、銅鐸の出土状態が自然堆積と捉えるにはやや不自然な傾斜であること、破片が幅 25cm の大型品で、完形の銅鐸を想起させるに足る状態であること、などから判断して、銅鐸の破片は何らかの意図をもって土坑内に埋められた可能性が高いと考えられる。

埋没の時期　銅鐸が出土した SK06 からは弥生土器が出土している。このうち、銅鐸と同一層位の１層から出土した遺物（Fig.30-77 ～ 83）には、小型高坏（82）や山中式系統の外反坏部高坏（81）が含まれる。これらの土器は比較的大きな破片なので、銅鐸破片の埋没時期を示すものと捉えてよいだろう。外反坏部高坏は、屈曲が弱いもので直径に対して坏部が深い点が注目できる。同様の形態は、山中様式期の最終段階の特徴を示している。SK06 の１層からは、甕の口縁（79・80）も出土している。いずれも小破片で不明確ながら、口縁端部の刺突が観察できない。当地域において、甕の口縁の刺突が省略されるのは、欠山様式期に移行してからのことと考えられ（鈴木－2009、p126）、編年的位置づけを考える上で参考になるだろう。以上の特徴を示す SK06 の１層出土遺物は、西遠江の山中Ⅲ式新相期（鈴木－2009）に中心があるとみられ、時期的には欠山Ⅰ式期頃まで下降する可能性を残している。この時期は、尾張の弥生土器編年（赤塚 2002）では山中Ⅱ式新相期に、大和の弥生土器編年（藤田・豆谷 2003）では、大和Ⅵ - ２～３期に接点があるといえる。

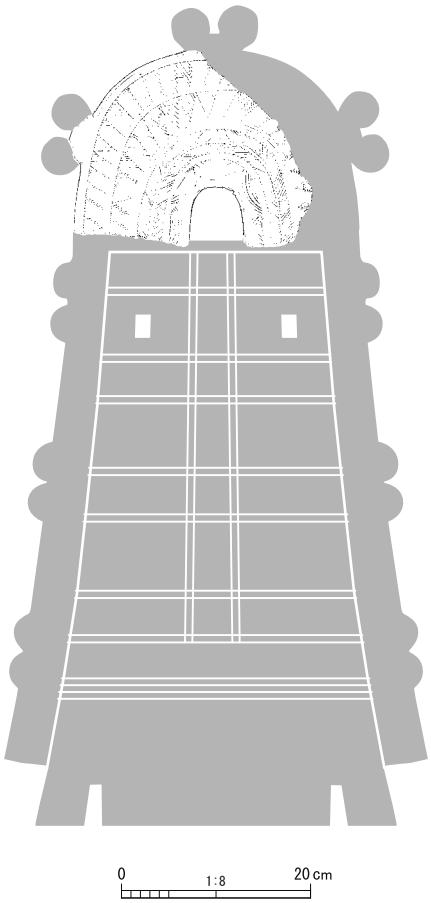


Fig.131　松東遺跡出土銅鐸想定復元図

銅鐸の型式と時期　出土した銅鐸は鈕の破片で、幅 25.2cm、高さ（補正値）は 20.6cm、重さ 1,178 g である。双頭渦文飾耳を欠損しているが、鈕の大部分が遺存しているといえる。突線構成は両面ともに、外側から菱環を挟んで２・２・３－２・１である。菱環外界線は３条であるが、外周突線は２条であることから、近畿式銅鐸の突線鈕２式（難波 1986）と判断できる。鈕幅は復元値で約 30cm、鈕高は現状で 20.6cm（歪みの補正値）が遺存しており、鈕脚壁分（0.6cm 程度）を加えると、推定の鈕高は 21.2cm 程度とみられる。鈕高／鈕幅の比率は、21.2 ／ 30 ＝ 0.7066（以下 0.7 とする）である。外縁第１・２模様帯の位置から舞長径の復元値を求めると、22.5cm ほどとみられる。舞長径の大きさから突線鈕２式の事例を比例的にあてはめると、本例の全高は 80cm を超える可能性がある[3]。この想定が正しいとすれば、本例は本来、突線鈕２式の中でも例がない大型品であったといえるだろう。

本例における鈕の形状は、鈕の高幅比（0.7）から判断すると兜形と小判形の中間形態といえるが、舞長径が鈕高より大きいことから、兜形に含めておく方が妥当との意見もある[4]。

また、本例は、菱環が鈕脚壁近くにおいても舞に対して垂直ではなく、左右に開いていることも留意される。鈕孔の形態についても高さと幅がほぼ同一（5.6cm）で、縦長化していない。菱環外界線が３条である点や、全高が 80cm を超える大型品である点などが特異であるが、鈕の形態的特徴から判断すると、必ずしも突線鈕２式の中でも最新の段階に位置づける必要はないだろう。

遺存状態の特徴　本例は、第２模様帯の付近から大きく一方に折れ曲がっている。埋没後の土圧などで現状のように曲がるとは考えにくい。出土状態からも、上位から特別な圧力がかかっている様相はうかがえない。本例は鈕破片の状態に破砕された段階で、既に大きく折れ曲がっていたものと判断できる。近畿式銅鐸の青銅は錫の含有量が２～５％と低く展延性が高いため、小片に破砕することが難しい。このため､近畿式銅鐸の破砕に際しては高熱を加えることが想定されているが(難波 2005･2007)、本例に見る変形状態は、銅鐸を破砕するにあって鈕に変形をもたらすような大きな衝撃や圧力が加えられたことを示すものとして注目できるだろう。

（３）銅鐸破片の諸例

遠江における銅鐸破片出土例　遠江における銅鐸破片としては、松東遺跡の２例（以下、２次調査出土例を１号破片、３次調査出土例を２号破片とする）のほかに、浜松市梶子遺跡例、袋井市掛ノ上遺跡例を加え、合計４点が知られている。このほか、出土状態は明確でないが、「浜松南海岸」出土と伝えられる破片が２点ある[5]。これらの破片資料は、いずれも突線鈕式期の近畿式銅鐸で、共伴する遺物から埋没の時期がうかがえるものを含む点で重要である。銅鐸破片は発掘調査の多寡によって出土量が左右されるとみられるが、遠江は東海地方においても銅鐸破片の出土例が集中する地域といえる。

松東遺跡１号破片は、突線鈕３Ⅰａ～３Ⅱａ式に位置付けられる双頭渦文飾耳の破片で、２次調査で確認された不定形土坑（SX08）から出土した。この土坑は鎌倉時代の遺構と捉えられるが、比

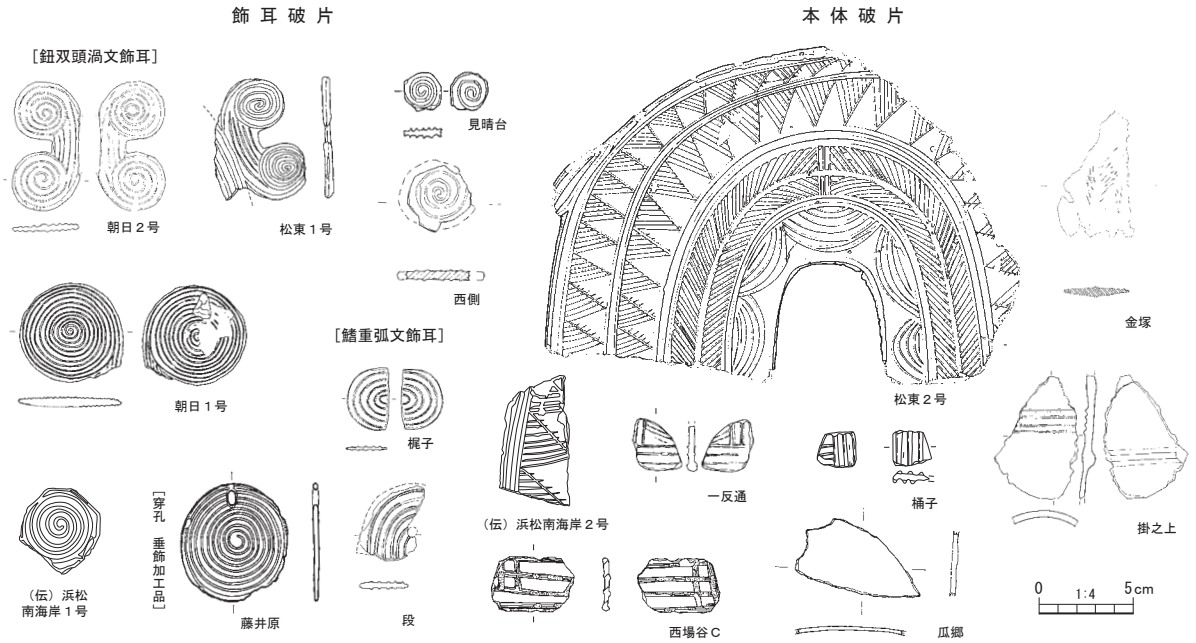


Fig.132　東海地方における銅鐸破片

Tab.12　突線鈕式銅鐸の破片資料

遺跡名・資料名	出土地	出土年	型　式	部　位	寸　法	備　考
西分増井	高知県高知市	2001･02	扁平鈕式新～突線鈕２式	鈕	3.8×3.0	青銅器破片共伴
青木	島根県出雲市	2003	３Ⅰa式の可能性が高い	双頭渦文飾耳	6.1	
青谷上寺地１号	鳥取県鳥取市	1998	４式～５Ⅰ式	身	5.2×3.9	貨泉出土遺跡
青谷上寺地２号	鳥取県鳥取市	1998	４式～５Ⅰ式	身	6.8×4.5	
青谷上寺地３号	鳥取県鳥取市	1999	４式～５Ⅰ式	身	3.7×4.4	
玉野市沖海底	岡山県玉野市	1988	３Ⅰｂ～３Ⅱ式の可能性が高い	裾部	14.2	
高塚	岡山県岡山市	1989	２式もしくは３式	身	4.0×2.9	貨泉出土遺跡
女代神社南	兵庫県豊岡市	1991	２式	鰭	15.0	
穴尾	兵庫県宍粟市	1980	４式～５式	鈕	18.4×9.0	
大井川第６地点	兵庫県姫路市	1999	３式の可能性がある	鰭か鈕脚壁	6.0	
利倉	大阪府豊中市	1970	２式～３Ⅰａ式	鰭飾耳	2.1×1.9	
利倉南	大阪府豊中市	1996	２式～３Ⅰ式	鈕	3.9×3.8	
亀井	大阪府八尾市	1981	４式～５Ⅰ式	鰭下端	5.0×3.6	
池上曽根１号	大阪府和泉市	1970･71	４式～５式	身	4.9×3.5	
池上曽根２号	大阪府和泉市	1974	２式～３式	身	4.7×3.8	
纏向１号	奈良県桜井市	1972	３Ⅰｂ～５Ⅱ式	双頭渦文飾耳	4.2	
纏向２号	奈良県桜井市	2010	突線鈕式か	鰭		
脇本１号	奈良県桜井市	2007	３～５式	身	3.2×2.7	鋳造関連遺物共伴
脇本２号	奈良県桜井市	2007	３～５式	身	2.0×1.4	
脇本３号	奈良県桜井市	2007	３～５式	身	1.9×1.3	
大福１号	奈良県桜井市	2008	２式～４式	身	5.9×4.6	鋳造関連遺物共伴
大福２号	奈良県桜井市	2009	２式～３式	身（舞）	8.0×5.5	
下長	滋賀県守山市	1990	２式か３Ⅰａ式の可能性が高い	双頭渦文飾耳	6.4×3.5	
高柳・下安田１号	福井県坂井市	2004	３Ⅱｂ～５Ⅱ式	鈕	3.7×2.3	銅鐸片Ａ
高柳・下安田２号	福井県坂井市	2004	突線鈕式か	身	3.7×3.1	銅鐸片Ｂ
高柳・下安田３号	福井県坂井市	2004	突線鈕式か	身	1.8×0.8	銅鐸片Ｃ
荒尾南	岐阜県大垣市	2006	３Ⅰｂ～５式	双頭渦文飾耳	5.0	
(伝）千歳	三重県伊賀市	—	３Ⅱａ～５Ⅱ式	双頭渦文飾耳	6.6×6.2	
西場谷Ｃ	三重県伊賀市	1989	４式の可能性が高い	鰭下端	4.2×2.7	
一反通	三重県鈴鹿市	1989	３Ⅰａ～５Ⅰ式	鰭下端	2･6×2.3	
金塚	三重県四日市市	1998	扁平鈕式新～突線鈕２式	鈕	6.8×4.2	
桶子	三重県伊勢市	2003	３式～５式	鰭	1.8×1.6	採集資料
朝日１号	愛知県清洲市	1975	３Ⅱａ～５Ⅱ式	双頭渦文飾耳	5.4×5.2	山中式共伴
朝日２号	愛知県清洲市	1980	３Ⅰａ～３Ⅱａ式	双頭渦文飾耳	6.9×3.5	
見晴台	愛知県名古屋市	1999	２式の可能性が高い	双頭渦文飾耳	2.0×2.0	
西側	愛知県豊橋市	2002	３Ⅰｂ～３Ⅱ式の可能性が高い	双頭渦文飾耳	3.4×3.4	山中式共伴
瓜郷	愛知県豊橋市	1947～49	型式不明確　近畿式か	裾部	7･0×3.3	採集資料
梶子	静岡県浜松市	1983	３Ⅰｂ～３Ⅱ式	鰭飾耳	3.2×2.1	山中式共伴
松東１号	静岡県浜松市	1990	３Ⅰａ～３Ⅱａ式	双頭渦文飾耳	6.6×4.7	
松東２号	静岡県浜松市	2012	２式	鈕	25.0×20.6	山中式共伴
(伝）浜松南海岸１号	静岡県浜松市	—	３Ⅰｂ～３Ⅱ式	双頭渦文飾耳	4.2×4.2	
(伝）浜松南海岸２号	静岡県浜松市	—	３式の可能性が高い	鰭	6.7×3.6	
掛之上	静岡県袋井市	2001	２式か３式古段階の可能性が高い	身	6.3×4.3	
藤井原	静岡県沼津市	1976	３Ⅱａ～５Ⅱ式	双頭渦文飾耳	6.0×5.7	穿孔、垂飾に転用
段	静岡県伊豆の国市	1988	４式もしくは５式	鰭飾耳	4.0×3.2	穿孔、垂飾に転用
(伝）宮縁	長野県松本市	—	２式か３式古段階の可能性が高い	鈕	8.9×6.0	三遠式・採集資料

難波2005の表３をもとに、新出例などを加えて作成。１片ごとに出土した事例（難波Ａ類型、難波2005）のみを例示。
扁平鈕式以前に遡る可能性がある事例を含む。寸法：長辺×短辺の値、不明確なものは長辺値のみを記載。

較的多くの弥生土器片が含まれている。厳密な意味での共伴遺物とはいえないが、近隣する遺構からの出土遺物は山中Ⅲ式期から欠山Ⅱ式頃までにおさまることから、銅鐸破片の埋没時期もおおよそこの時代幅の中で捉えることができるだろう。松東遺跡２号破片は、先述のとおり突線鈕２式の鈕の大型破片で、山中Ⅲ式新相期を中心とする遺物との共伴関係が確認できた。梶子遺跡例は鰭飾耳の破片で、７次調査で確認した土坑（Ａ４区土坑２）から出土した。銅鐸片は突線鈕３Ⅰｂ～３Ⅱ式に相当し、共伴遺物の時期は山中Ⅱ～Ⅲ式期と判断できる。掛之上遺跡例は、突線鈕２～３式の身の破片であり、６次調査で確認された小穴から出土した。共伴遺物は小片で細かな時期を示すことが難しいが、弥生時代後期末の廃棄と想定されている。これらの事例が示すとおり、遠江においては、突線鈕２～３式期の近畿式銅鐸破片が集中的に出土しており、その埋没時期は山中Ⅱ～Ⅲ式期頃に中心がある、と整理できる。

銅鐸破片の分布と時期　突線鈕式段階の銅鐸破片の出土例は近年増加傾向にあり、東海地方にお

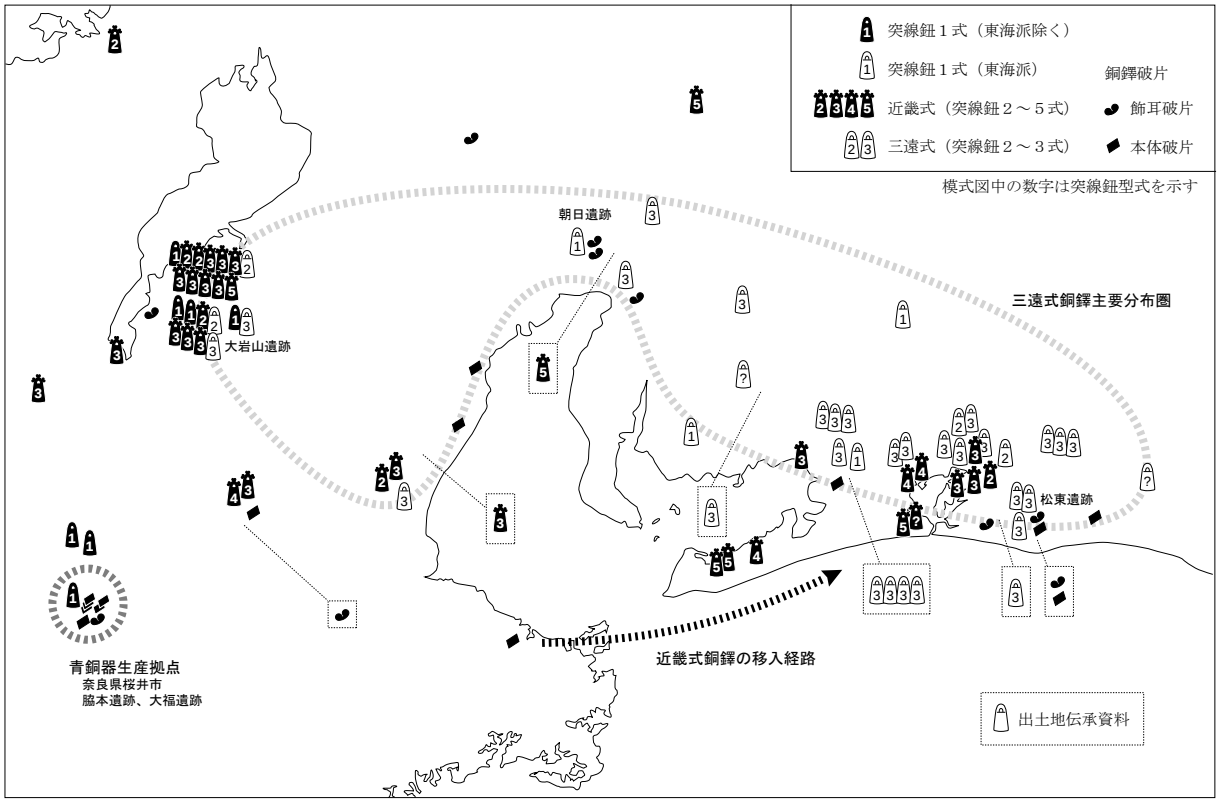


Fig.133　突線鈕式銅鐸と銅鐸破片の分布

いても 20 例ほどが確認できる（Tab. 12）。銅鐸破片については､進藤武（進藤 1999）や福永伸哉（福永 2001）、難波洋三（難波 2005）が検討を進めている。銅鐸破片の類型化をふまえ詳細な検討を加えた難波によると、破砕された銅鐸の事例は近畿式銅鐸が圧倒的に多く、１片ごとに砕片化して出土するＡ類型と多くの破片がまとまって見つかるＢ類型の２種があることを指摘している｡ただし、難波も触れているとおり、Ｂ類型については正式な発掘調査を経たものが知られておらず、詳細を検討すると出土時に破砕されたものや後世に細片化したものを再埋納した可能性を考慮すべき事例が多い[(6)]。東海地方においてもＢ類型については確実な事例を検討の俎上にあげることが難しいため､本稿においても､その評価を保留しておきたい。以下､難波のＡ類型に限定して議論を進める。東海地方における銅鐸破片についても、近畿式銅鐸が占める割合が極めて大きい[(7)]。今後、三遠式銅鐸の破片の出土例が確認される可能性はあるが、破片で出土する突線鈕式銅鐸の圧倒的多数が近畿式である傾向は変わらないとみてよいだろう。

東海地方における銅鐸破片の埋没時期には、二つの傾向を認めうる。一つは遠江の事例で整理したように、山中式期を中心とした弥生時代後期に埋没時期が求められるものである。遠江での事例のほかに愛知県の朝日遺跡１号破片（突線鈕３Ⅱａ～５Ⅱ式）や、西側遺跡例（３Ⅰｂ～３Ⅱ式）が該当しよう。いっぽう、確実に時代が降り、古墳時代前期まで伝世している事例がある。静岡県藤井原遺跡例は突線鈕３Ⅱａ～５Ⅱ式の双頭渦文飾耳の破片で、古墳時代前期の竪穴建物跡から出土している。静岡県段遺跡例は突線鈕４～５式の鰭飾耳の破片であり、共伴土器から古墳時代前期に埋没したと考えられよう。藤井原遺跡や段遺跡は、弥生時代の銅鐸分布圏外に相当する。銅鐸の

Tab.13　銅鐸型式別出土数

出土地	扁平鈕式		突線鈕式										破片		
			1式		2式		3式						扁平鈕式以前	突線鈕	
	古段階	新段階	1式	1式東海派	近畿式	三遠1式	近畿式	三遠2式	三遠3式	三遠4式	4式	5式		近畿式	三遠式
伊予													1		
讃岐	2	4											15		
土佐		1			1		1				1		1		
阿波	2	12										1			
伯耆	3	1													
石見	2	1	1												
出雲	3	9											1	1	
伯耆	3	1													
因幡		1											2	3	
但馬												1		1	
備後		1													
備中		3			2									1	
備前	5	1	1											1	
播磨	1	3									2			2	
摂津	1	15			3		1					1		2	
河内	2	7					1				1		1	1	
和泉	1	3					1							2	
紀伊	3	10			1		4				3	3	1		
大和	2	2	3										1	7	
山城		1					1								
丹波	1	1													
丹後		1					1			1		1			
若狭		2			1										
近江	1	1	4		3	2	11	1		4		1		1	
伊賀							1				1			2	
伊勢		2			1		1			1			(1)	3	
美濃												1		1	
尾張				1						2				3	
三河	1			3			1		3	2	1	2		2	
遠江					1	2	2	5	7		2	1		4	
駿河														1	
伊豆														1	
信濃								1							(1)

［難波2007］地名表をもとに新出資料を追加して作成、括弧内の数値は不明瞭な資料

破片の取り扱いも穿孔して装飾品として用いるなど、変容が著しい点で、近似した来歴がうかがえる（難波 2005･2007）。

ここでは、天竜川以西（東海西部地域）の銅鐸分布圏においては、突線鈕２～３式を中心とする破片が山中式期にもたらされていること、天竜川以東の東海東部地域では、突線鈕式でもやや新しい時期の破片が古墳時代前期まで伝世していることを確認しておきたい。

破片の類型化　突線鈕式の銅鐸破片は、東海地域以外にも近畿、山陰、瀬戸内地域といった銅鐸分布圏から出土例が確認できる（Tab. 13）。また本稿では深く立ち入らないが、扁平鈕式以前の古い時期の銅鐸破片も少なからず認められることは破砕行為と銅鐸破片活用の起源を考える上で参考になろう。

破片化された銅鐸の部位は多様であるが、鈕の双頭渦文や鰭の重弧文などの「飾耳破片」と、飾耳以外の鈕や鰭、身などの「本体破片」とを分けて捉えておきたい。松東遺跡２号破片は本体破片であるが、その大きさが東海地方から出土する飾耳破片や本体破片と比べて格段に大きく[8]、銅鐸そのものを強く連想させるものである。鈕全体の形状をうかがえる銅鐸破片として、愛媛県上分西遺跡例（四国中央市教委 2010）があげられる。この事例は扁平鈕式段階のものであり本稿で扱う時期より遡るものであるが、鈕のほぼ全体を残す点で松東遺跡２号破片と近似した残存状況を示す。松東遺跡２号破片と上分西遺跡例はともに、人為的に小穴や土坑に埋納したとみられる点も共通している。完形銅鐸との関連が意識されていた可能性を想起させる出土状態といえるだろう。

破片化の経緯　銅鐸が破片化することについては完形銅鐸の一部を破砕した可能性を考慮すべきであるが、最も欠損する可能性が高い飾耳破片についても、完形で出土した突線鈕式銅鐸に飾耳を意識的に取り除いた事例は一般的に認められないことから、銅鐸全体を破砕した際に生じたものと捉えられている（難波 2005･2007）。このほか、発掘調査で本来の埋納状態が確認できる銅鐸には、鈕を取り除いたり、鰭を打ち欠いたりするものが知られないので、本体破片においても銅鐸全体を破砕した際に破片の状態になったものであると考えられる。銅鐸破片は、完形の銅鐸を破砕して生じたものが大半であるといえるだろう[9]。

銅鐸破片の再利用　双頭渦文など単体でも目を引く飾耳破片と、身や鰭、鈕など装飾的要素を見出しにくい本体破片は、取り扱いや用途に違いがあった可能性がある。東海地方では、飾耳破片の出土例が多いが、当地域では、飾耳破片が装飾品や呪術的意義を見出す金属製品として識別されていた可能性をうかがわせる。藤井原遺跡例や段遺跡例など、垂飾品として用いる事例などは、飾耳破片が珍重すべき価値があったことを示すものといえるだろう。

いっぽう、最大長 10cm 以下の小型の本体破片は、奈良県の脇本遺跡や大福遺跡など、青銅器生産にかかわる遺跡 (10) からの出土例が示唆しているように、青銅素材としての用途が想定できる（難波 2012）。銅鐸の本体破片が青銅素材として用いられている可能性を考慮すると、飾耳破片についても本来は青銅素材として流通する中で、その形態的特徴が注目され、鋳潰されずに残った経緯を想定することも許されよう。松東遺跡２号破片のような大型の本体破片も飾耳破片と近似した来歴が想定しうる。本例にみられる折れ曲がった形状や飾耳の欠失は、破砕行為に起因するものと捉えられ、鈕そのものを丁寧に摘出したものとは考えられない。本例においても一義的には青銅素材として再利用すべく、破砕された可能性をうかがわせる。こうした事例が土坑に埋められた経緯としては、消費地において銅鐸そのものを強く連想させる残存状態が注視され、たんなる青銅素材として扱われなかった可能性が指摘できる。銅鐸破片の取り扱いについては、青銅素材として用いられるものの他に、各地で独自の選択肢が働くことがあったと解釈できよう (11)。

（４）銅鐸破砕の実態

銅鐸破砕の論点　突線鈕式段階の銅鐸破片が近畿式にほぼ限られる理由についてふれておこう。この議論を進めるにあたっては、破砕時期と破砕地という二つの論点を明確にする必要がある。前者については完形埋納例や銅鐸破片に共伴する土器から、後者については銅鐸の型式変遷と分布状況から検討を加えておきたい。

銅鐸破砕の時期　銅鐸破砕の時期をめぐっては、銅鐸祭祀の終焉後に集中的に銅鐸が破砕されたと捉える考えと、銅鐸祭祀が継続している段階で完全埋納と破砕という二種の処理方法が並存したとみる考えの二者がある。前者を一括破砕説、後者を継続破砕説と呼んでおきたい。

銅鐸の最終的な埋納時期については、突線鈕５Ⅰ式の銅鐸が出土した徳島県矢野遺跡（徳島県埋文 1993）の共伴土器から、弥生時代後期後葉からその直後の段階に求められるので（難波 2005）、銅鐸祭祀の終焉は弥生時代後期末から終末期（庄内式期）と想定できる。弥生土器の並行関係については詳細な吟味を加える必要があるが、庄内式期に破砕された銅鐸破片が各地にもたらされたとみると、東海地方における銅鐸破片の埋没時期は欠山式期に中心がある方が整合的である。しかしながら、東海西部地域における突線鈕２～３式の銅鐸破片の埋没時期は山中式新相期に接点があり、想定される銅鐸祭祀の終焉期よりも若干遡る。東海西部地域における銅鐸破片の事例は、庄内式期を遡る段階に銅鐸が破砕されていた可能性を示唆している (12)。

近畿式と三遠式　近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の差異を検討する上で、突線鈕式段階の完形埋納銅鐸の分布状況や埋納状況を瞥見しておきたい。近畿式銅鐸と三遠式銅鐸の共存は、遠江において最も顕著である。浜松市北区三ヶ日町や北区細江町では、近畿式銅鐸と三遠式銅鐸が近隣地から出土し

Tab.14　静岡県出土銅鐸一覧

資料名	出土地	出土年	型　式	銅鐸群	高　さ	重　量	所　蔵	状　態
長谷	掛川市長谷	1772	突線鈕２式～３式	三遠式	2尺余	10斤10両	—	所在不明
三方原	浜松市北部か	1787	突線鈕３式	三遠３式	1尺9寸5分	3貫700目	—	所在不明
白須賀１号	湖西市白須賀	1801	突線鈕５式	近畿式	112.3		東観音寺	舞から上のみ残存
白須賀２号	湖西市白須賀	1801	—	近畿式	3尺9寸	8貫200目	—	鋳潰し
荒神山１号	浜松市北区三ヶ日町	1838	突線鈕３式	三遠３式	74.2	10.57	東京国立博物館	
荒神山２号	浜松市北区三ヶ日町	1838	突線鈕３式	三遠２式	57.6		奈良国立博物館	
ﾂﾂﾐﾄﾞｵﾘ１号	浜松市南区芳川町	1868	突線鈕３式	三遠３式	64.6	8.325	東京国立博物館	
ﾂﾂﾐﾄﾞｵﾘ２号	浜松市南区芳川町	1868	型式不明	—	—	—	—	所在不明
船渡１号	浜松市北区細江町	1880	突線鈕３式	三遠２式	56.1		東京大学総合研究博物館	
船渡２号	浜松市北区細江町	1880	突線鈕２式	三遠１式	64.8		旧ベルリン博物館所蔵	所在不明
敷地１号	磐田市敷地	1890	突線鈕３式	三遠３式	68.5	9.31	東京国立博物館	
敷地２号	磐田市敷地	1890	突線鈕３式	三遠２式	62.7		辰馬考古資料館	
木船１号	浜松市東区和田町	1908	突線鈕３式	三遠３式	81.2	12.532	東京国立博物館	
木船２号	浜松市東区和田町	1908	突線鈕３式	三遠３式	現71.2	11.293	東京国立博物館	
悪ヶ谷	浜松市北区細江町	1912	突線鈕３式	三遠３式	62.9	7.92	東京国立博物館	
小野	浜松市北区細江町	1933	突線鈕３式	三遠２式	現46.6	3.147	東京国立博物館	
山田	浜松市北区三ヶ日町	1950	突線鈕４式	近畿式Ａ系列	96.7	15.42	東京国立博物館	分寸出土
猪久保	浜松市北区三ヶ日町	1965	突線鈕４式	近畿式Ｂ系列	96.0		浜松市	
七曲り１号	浜松市北区細江町	1966	突線鈕３Ｉｂ式	近畿式Ａ系列	現69.6		浜松市	
七曲り２号	浜松市北区細江町	1966	突線鈕３式	三遠２式	65.0		浜松市	
不動平	浜松市北区細江町	1967	突線鈕３Ｉｂ式	近畿式Ａ系列	72.3		浜松市	
藤井原	沼津市下香貫	1976	突線鈕３～５式	近畿式	破片		沼津市教育委員会	双頭渦文飾耳片
梶子	浜松市中区南伊場町	1983	突線鈕３Ｉｂ～３Ⅱ式	近畿式	破片	0.008	浜松市	鰭飾耳破片
穴ノ谷	浜松市北区細江町	1987	突線鈕３Ⅱa式	近畿式Ｃ系列	59.0	5.35	浜松市	
前原	浜松市北区新都田一丁目	1987	突線鈕２式	三遠１式	67.3		浜松市	
段	伊豆の国市大仁	1988	突線鈕４～５式	近畿式	破片		伊豆の国市教育委員会	双頭渦文飾耳片
滝峯才四郎谷	浜松市北区細江町	1989	突線鈕２式	近畿式Ｃ系列	72.7		浜松市	
松東１号	浜松市東区天龍川町	1990	突線鈕３Ｉa～３Ⅱa式	近畿式	破片	0.039	浜松市	双頭渦文飾耳片
敷地３号	磐田市敷地	2000	突線鈕３式	三遠３式	77.1	12.12	静岡県教育委員会	西の谷遺跡
掛之上	袋井市高尾	2001	突線鈕２～３式	近畿式か	破片		袋井市教育委員会	身破片
松東２号	浜松市東区天龍川町	2012	突線鈕２式	近畿式	破片	1.178	浜松市	鈕破片
出土地伝承資料								
（伝）浜松南海岸１号	浜松市南方か	—	突線鈕3Ｉｂ～３Ⅱ式	近畿式	破片		東京大学総合研究博物館	
（伝）浜松南海岸２号	浜松市南方か	—	突線鈕3Ｉｂ～３Ⅱ式	近畿式	破片		東京大学総合研究博物館	
（伝）遠江	浜松市か	—	突線鈕３式	三遠４式中根型	78.2		ギメ博物館	1787年出土品か
（伝）益山寺	伊豆市堀切	—	突線鈕５Ⅱ式	近畿式Ｃ系列	118.2		辰馬考古資料館	

ており、埋納箇所に目立った違いはない。埋納状態が判明する事例をみても、両者ともに、鰭を上にした一般的な埋納手法がみられる（静文研 2010）。内面突帯の形状から三遠式銅鐸には鳴らされたものが含まれる可能性が指摘されているが（難波 2005）、最終的な取り扱いについては、近畿式銅鐸も三遠式銅鐸も目立った差異はみられないといえるだろう。

遠江における完形銅鐸の時期別の推移をみると、近畿式と三遠式の流入開始時期や盛行時期はほぼ同段階であり、三遠式銅鐸の埋納が近畿式銅鐸の埋納よりも早く終了し、近畿式銅鐸のみが残存するような状況は想定しにくい。また、破片として知られる銅鐸の製作段階も三遠式銅鐸が製作されていた時期に重なる突線鈕２～３式のものが多く、その埋没時期も三遠式銅鐸が使用されたとみられる山中式新相期に接点が求められることも無視できない。当地域では近畿式銅鐸だけが選択的に破壊されていたと捉えることは難しいといえるだろう。

銅鐸破砕地　銅鐸を破砕する意味は必ずしも明らかではない。一括破砕説のように銅鐸祭祀の終焉に伴い、従前の宗教的な象徴物を否定するように一斉に銅鐸を破砕したという捉え方（福永 1998）は魅力的である。庄内式期に廃棄された銅鐸破片の多さを考慮すると、弥生時代終末期において銅鐸の多くが破砕された可能性は充分考えうる。いっぽう、東海西部地域における銅鐸破片の埋没時期を勘案すると、継続破砕説も完全には否定できない。現状では、銅鐸祭祀の終焉に伴い多

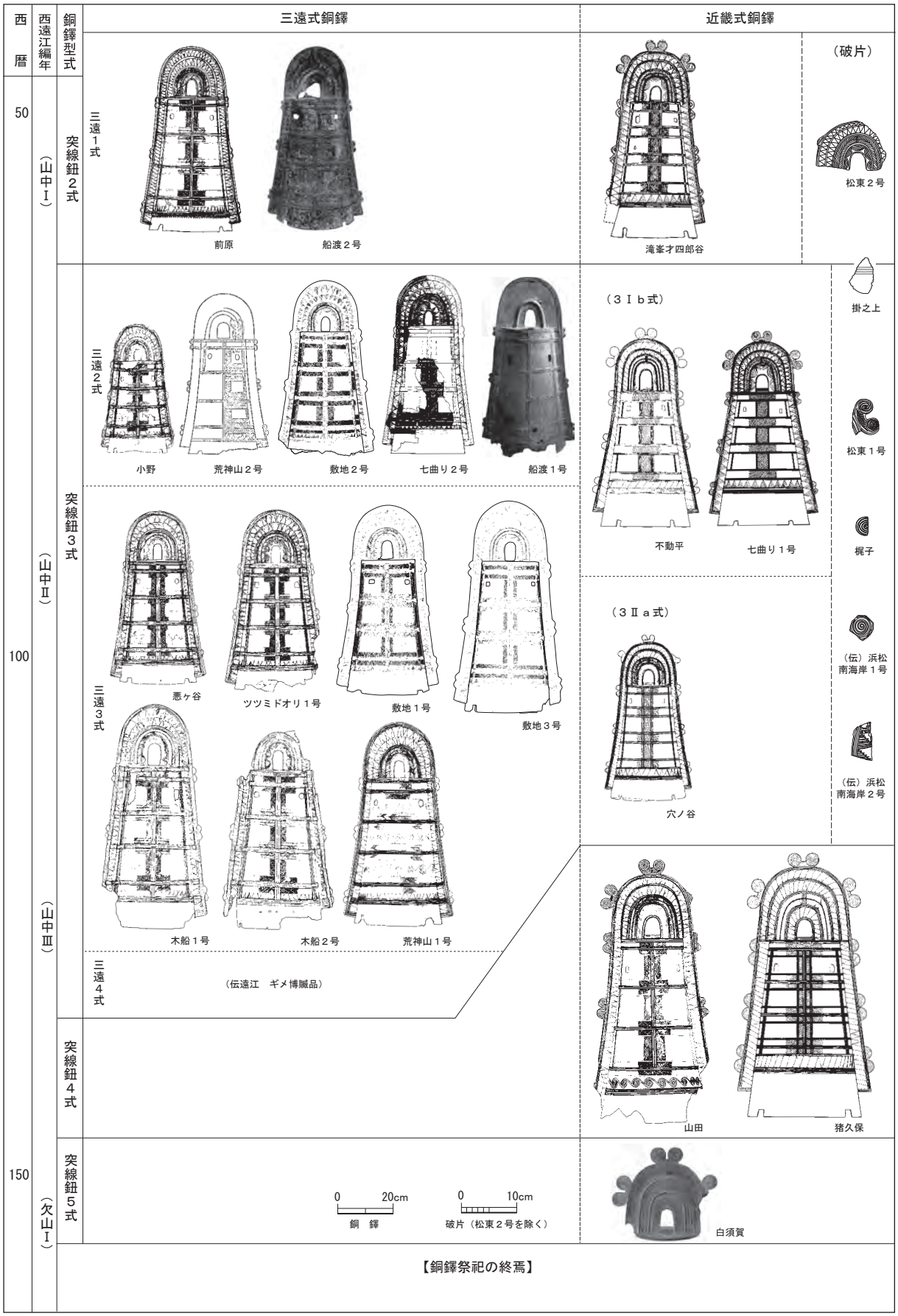


Fig.134　遠江における銅鐸の変遷

くの銅鐸が破砕された可能性を認めつつ、一部の銅鐸は銅鐸祭祀終焉よりも前に破壊されることがあったと捉えておくのがよいだろう。この考えに立つなら、破砕される銅鐸が近畿式にほぼ限定されていることと、銅鐸破砕時期の問題は切り離して検討すべきといえる。

突線鈕式段階の銅鐸破片が近畿式に偏ることについては、三遠式銅鐸が存在しない地域で銅鐸の破砕がなされていたと捉えれば理解しやすい。すなわち、近畿式銅鐸の中心的分布域である近畿地方中枢部で銅鐸の破砕が多く行われ、三遠式銅鐸が分布する東海西部地域では銅鐸破砕が積極的になされなかったとみるのが最も合理的な解釈といえるだろう[13]。

奈良県下では、確実に完形で出土する銅鐸は突線鈕１式が最新式であり、突線鈕２式期以後の出土例は破片に限定される。奈良県をはじめとした畿内地方中枢部においては共同体祭祀における銅鐸の役割が早い段階で変質していたと考えられており（佐原 1964、川西 1975）、破砕の頻度も相対的に高かった可能性が考えられる。銅鐸の破砕がすべて奈良県下で行われたとはいえないが、弥生時代後期を通じて銅鐸祭祀を頻繁に行っていた東海西部地域と比べて、銅鐸の取り扱いについて差異が生じていたとみても矛盾ない。銅鐸を小片化させるには特殊な熱処理が必要なことも、青銅器の処理方法に熟知しうる地域に限定して破砕処理が行われた可能性を示唆している。

（５）銅鐸破片流入の意義

銅鐸のライフサイクル　ここまでの議論をまとめておこう。銅鐸破片に青銅の原材料としての役割を認め、青銅素材として流通していた可能性を示した。また、突線鈕式段階の銅鐸破片が近畿式にほぼ限定できることの解釈として、銅鐸の破砕は、祭祀様式の変容が先行し、かつ青銅器生産の技術力が高かった近畿地方で多く行われたと捉えた。遠江には、近畿式･三遠式双方の完形銅鐸と、

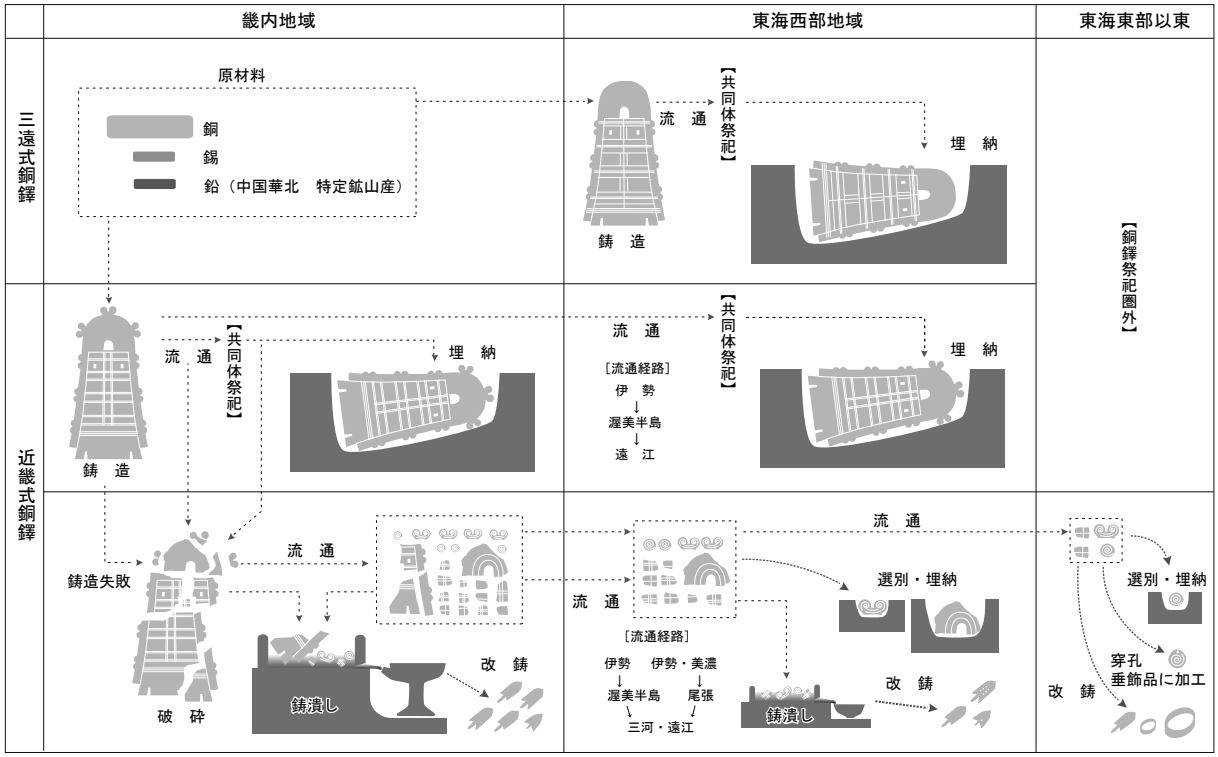


Fig.135　突線鈕式銅鐸のライフサイクル

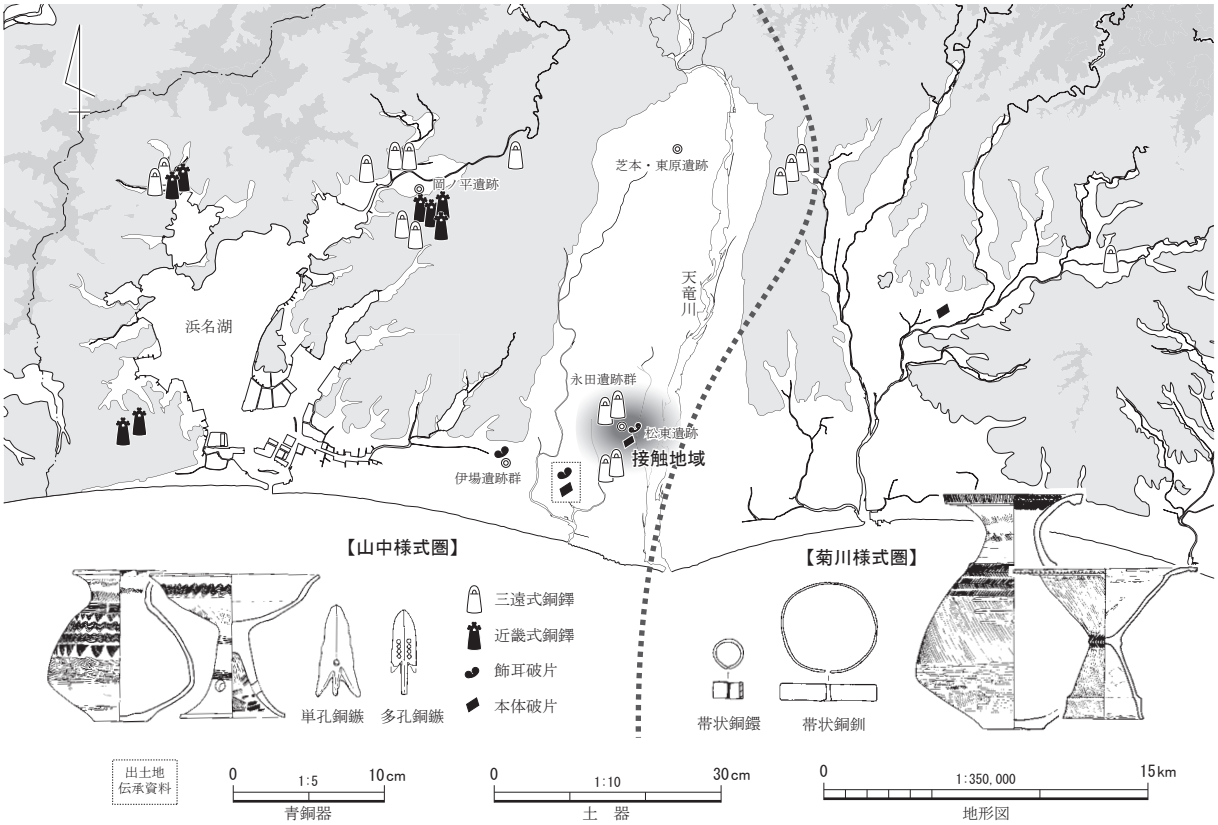


Fig.136　遠江における銅鐸の分布と地域圏

破片の状態の近畿式銅鐸が西方から流入したと考えられるだろう。近畿式・三遠式共に、祭器として用いた完形銅鐸は、同じ祭式に則って埋納されている。いっぽう銅鐸破片については、多くは鋳潰されて形を変えたとみられるが、飾耳破片や松東２号破片のような本体部材破片など、鋳潰す対象から外れたものもあった。こうした銅鐸破片の取り扱いにかかわる選択肢は消費地における価値観に依拠していたと考えられるだろう。銅鐸破片の取り扱いについては、銅鐸の生産地や祭祀圏の中心から離れるに従い、特殊な取り扱いの程度が増す傾向があるといえる。銅鐸分布圏の外側において飾耳破片が伝世し、穿孔して装飾品として用いるなどの変容例が生じるのも、祭器にかかわる規制力の弱い地域的特性を示すものと評価できるだろう（難波 2005）。

文化圏の差異と青銅器　松東遺跡が所在する天竜川西側の沖積平野には、弥生時代後期の遺跡が比較的高密度に分布する。当地は伊勢湾沿岸地域を中心とする山中・欠山様式圏の東端にあたり、銅鐸分布域や多孔銅鏃・単孔銅鏃分布域（鈴木敏 1997）の東縁地域と重なる。いっぽう、天竜川を境界として東の地域（東遠江地域）には山中・欠山様式とは形態や模様が大きく異なる菊川様式圏が広がっている。天竜川以東の地域では銅鐸の出土例は激減し、かわりに帯状円環形銅釧・帯状指輪形銅鐶（帯状銅釧・銅鐶）といった独特の青銅器が分布している。帯状銅釧・銅鐶は、関東地方にも広く分布しており（中村 2001）、青銅器文化という点においても、東遠江地域は東日本文化圏に含まれるといってよい。松東遺跡は、大型青銅器を用いる西日本文化圏の東縁に位置し、東日本文化圏と隣り合わせの接触領域に位置するといえるだろう。

銅鏃や帯状銅釧・銅鐶などの小型の青銅器は、鉛同位体分析の結果からも極めて画一的な同位体

比（ａ領域）をもつ中国華北産の鉛を含んでいることが明らかにされている（平尾 2003）。東日本地域では、小型青銅器の多くが弥生時代後期前葉に出現し、後期後葉から終末期にかけてその数を増していく状況が知られている。小型青銅器の素材としては、個別の金属素材が用いられた可能性もあるが、本稿で取上げたような銅鐸破片が利用された蓋然性も高いとみてよいだろう。

松東遺跡を含む永田遺跡群は広く東日本地域に青銅素材を提供する交易の窓口としても機能していた可能性がある。冒頭で述べたように、永田遺跡群に銅鐸にかかわる遺物が集中することについても、銅鐸文化圏の境界領域としての性格に加え（春成 1982）、日本列島の東西を結ぶ流通経路の要衝を占める地域的特性に起因するものと捉えておきたい。

（５）結　語

松東遺跡から出土した銅鐸破片の検討を端緒に、弥生時代後期における地域圏と青銅器の生産・流通の特性について触れてきた。松東遺跡は永田遺跡群の中でも最も東に位置する集落である。その先には天竜川を挟んで、菊川様式圏が広がっている。松東遺跡は、まさに山中・欠山様式圏（＝銅鐸文化圏）の辺境最前線に立地する集落といえるだろう。こうした文化の接触領域に相当する立地環境に銅鐸関連遺物が集中することは重要な意味をもつ。本稿で指摘したうように、青銅素材としての銅鐸破片の役割を重視するなら、松東遺跡を含む永田遺跡群に東西文化圏を繋ぐ結節点としての特質も認めてよい。当地における地域間関係を示す考古学的情報を解きほぐし（鈴木－2000）、東西交流の実態がさらに明らかにされることを期待したい。

謝　辞

本稿を作成する上で、難波洋三氏からは銅鐸にかかわる数多くの教示と情報を得た。本稿で用いた銅鐸の型式分類だけでなく、松東遺跡２号破片の編年的位置や全体像の復元についても、全面的に難波氏の見解に従っている。また、福永伸哉氏からは、銅鐸破片の解釈にかかわる重要な示唆を得た。末筆ながら、両者のお名前を明記して、深く感謝の意を表したい。

註

（１）永田遺跡群とは、中心集落「永田」（浜松市東区和田町）に由来する遺跡群の広域名称である。本稿では、山の神遺跡や木船銅鐸出土地、森西遺跡、松東遺跡を含む弥生時代後期の遺跡群の名前として用いる。この遺跡群は、奈良時代の長田（長上）郡家関連遺跡でもあり、大蒲町村東遺跡、木船廃寺、宮竹野際遺跡、越前遺跡など古代の遺跡も密集する（鈴木 2012）。

（２）本稿における銅鐸の型式分類と編年観は、難波洋三の業績（難波 1986、2007）に依拠する。

（３）突線鈕２式に位置づけられている銅鐸の舞長径に対する身の高さの割合（身高／舞長径）は、2.1 ～ 2.9 の範囲にあり、平均はおよそ 2.5 といった値を示す。舞長径と身の高さの比率を復元的に適用すると、舞長径 22.5cm と推定できる松東２号銅鐸の身の推定高は、22.5 × 2.5 ＝ 56.25cm であり、これに推定される鈕の高さ（21.2cm）と双頭渦文飾耳の高さ（2cm 程度）を加えると、本例の全高は 80cm を超える可能性がある。

（４）佐原 1960 では、鈕高／鈕幅がほぼ２／３以下を兜形、佐原 1964 では、0.7 未満あるいは鈕高が舞長径より小さいものを兜形としている。突線鈕２式の中でも最も新しい特徴をもつ（小判形の鈕をもつ）静岡県才四郎谷銅鐸は鈕の高幅比が 0.78、滋賀県大岩山第Ｉ地点出土ケルン東洋美術博物館蔵銅鐸は 0.74 であり、松東２号鐸はこれらほど鈕が縦長でない。

（５）この資料は、本来、完形銅鐸だったものが出土後に破片化した可能性もあるが、本稿では参考資料として銅鐸破片の一例に加えておく。

（６）東海地方で近畿式の砕片事例として挙げられている愛知県田原市椛銅鐸は、出土時に砕片化された可能性が高いことが指摘されている（浜松市博物館 2011、p53）。

（７）三遠式銅鐸の破片としては、長野県松本市宮淵例（本村遺跡例）が知られる程度である。この資料は採集品であり、明確な破片資料として扱うことは難しい。

（８）重量の比較においても、松東遺跡２号破片は1,178ｇであることに対して、松東遺跡１号破片は39.1ｇ、梶子遺跡例は7.5ｇとその格差は著しい。小型の銅鏃の重量は５ｇ前後であることを考えると、松東遺跡２号破片は銅鏃200個分以上の重量があるといえるだろう。

（９）唐古鍵遺跡から出土した銅鐸破片は、外縁付鈕２式～扁平鈕式新段階頃に位置づけられる身の破片であるが、厚さが0.9cmと極端に厚く、鋳造に失敗したものである可能性が指摘されている。破片化された銅鐸の中に鋳造失敗品が含まれる可能性は充分に考慮してよいだろう。

（10）高知県西分増井遺跡や岡山県高塚遺跡なども青銅器生産関連遺跡から銅鐸破片が出土する事例に加えてもよいだろう。

（11）松東遺跡のような銅鐸分布圏の境界地域においては、破片といえども重要視され、土坑に埋められることがあったと捉えられる。こうした周縁地域における大型の銅鐸破片の埋納例として、先に触れた愛媛県上分西遺跡例が類似した状況を示す事例として注目できる。

（12）この解釈は、庄内式期に多くの銅鐸が破砕された可能性を否定するものではない。一括破砕説と継続破砕説は二律背反するものでなく、両者は共に成り立ちうる。

（13）難波洋三は銅鐸破片が近畿式に偏ることの解釈として、①近畿式銅鐸はその祭祀の終焉に伴って壊されたが、三遠式銅鐸はそれ以前にすでに埋納されていた、②三遠式銅鐸と近畿式銅鐸の祭りは同時期に終わったが、近畿式銅鐸とは異なり、三遠式銅鐸は壊されなかった、③三遠式銅鐸も壊されたが、破片が残されなかった、といった３案を提示した。本稿における解釈は、解釈案②と触れ合うものであるが、銅鐸祭祀終焉の同時代性については、大きな問題として取り上げない。

参考文献

赤塚次郎　2002　「濃尾平野における弥生時代後期の土器編年」『八王子遺跡　考察編』愛知県埋蔵文化財センター
梅原末治　1927　『銅鐸の研究』大岡山書店
川西宏幸　1975　「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』第61巻第２号
佐原真　1960　「銅鐸の鋳造」『世界考古学体系』第２巻日本Ⅱ弥生時代　平凡社
佐原真　1964　「銅鐸」『日本原始美術』４青銅器　講談社
四国中央市教育委員会　2010　『上分西遺跡第２次調査現地説明会資料』
静岡県　1992　『静岡県史』資料編３考古三
進藤武　1995　「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『古代文化』第47巻 第10号
進藤武　1999　「銅鐸祭司の終焉―多数埋納・破砕破棄―」『滋賀考古』第21号
鈴木一有　2000　「天竜川南部平野南部における土器様式」『山の神遺跡５次』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有　2009　「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」『鳥居松遺跡５次　弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有　2012　「宮竹野際遺跡と長上郡家」『宮竹野際遺跡６次』（財）浜松市文化振興財団
鈴木敏則　1997　「東海地方の弥生銅鏃」『古文化論叢―伊達先生古稀記念論文集―』
田中琢　1970　「「まつり」から「まつりごと」へ」『古代の日本』第５巻　近畿　角川書店
徳島県埋蔵文化財センター　1993　『矢野銅鐸』
中村勉　2001　「銅環と呼ばれる青銅器について―東日本の青銅器に関する一考察―」『貝塚』第56号
難波洋三　1996　「銅鐸」『弥生文化の研究』第６巻　雄山閣
難波洋三　2005　「銅鐸の埋納と破壊」『西側遺跡（Ⅰ）』豊橋市教育委員会
難波洋三　2007　『難波分類に基づく銅鐸出土地地名表の作成』平成15年度～18年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書
難波洋三　2011　「扁平鈕式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館
難波洋三　2012　「銅鐸を使う国々」『卑弥呼がいた時代』兵庫県立考古博物館
浜松市博物館　2011　『銅鐸から銅鏡へ』
（財）浜松市文化協会　1990　『松東遺跡Ⅱ』
（財）浜松市文化振興財団　2005　『森西遺跡』
春成秀爾　1982　「銅鐸の時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第１集
平尾良光　2003　「青銅器の鉛同位対比―分析データをどう読むか―」『考古資料大観６』小学館
福永伸哉　1998　「銅鐸から銅鏡へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
福永伸哉　2001　『弥生・古墳時代青銅器の使用痕研究』大阪大学大学院文学研究科

藤田三郎・豆谷和之　2003 「奈良県における土器編年」『奈良県の弥生土器』奈良県立橿原考古学研究所
向坂鋼二　1993 「考古文物　伊勢経由遠江行」『遠江』第 16 号

銅鐸関連文献（静岡県・愛知県・三重県）

静岡県

三方原、長谷、白須賀、荒神山、ﾂﾂﾐﾄﾞｵﾘ、船渡、敷地 1･2 号、木船：梅原末治　1927 『銅鐸の研究』大岡山書店
悪ヶ谷：大野延太郎　1912 「引佐郡中川村悪ヶ谷発見の銅鐸について」『人類学雑誌』第 28 巻第９号
小　野：船越勇三郎・山崎常磐　1933 「遠江新発見の銅鐸」『考古学雑誌』第 23 巻第４号
山　田：三木文雄　1955 「静岡県引佐郡分寸銅鐸」『日本考古学年報』３　日本考古学協会
猪久保：平野和男・向坂鋼二　1965 「静岡県引佐郡三ヶ日町猪久保出土の銅鐸について」『考古学雑誌』第 51 巻第１号
七曲り１号：静岡県教育委員会　1969 『引佐郡細江町中川地区銅鐸分布調査報告』
七曲り２号：芝田文雄　1982 「静岡県引佐郡細江町滝峯七曲り２号鐸」『考古学雑誌』第 68 巻第１号
不動平：向坂鋼二　1968 「静岡県引佐郡細江町中川不動平出土の銅鐸」『考古学集刊』４－２
藤井原：沼津市教育委員会　1977 『藤井原遺跡第３次発掘調査概報』
梶　子：浜松市遺跡調査会　1983 『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
穴ノ谷：細江町教育委員会　1988 『障子ヶ谷・穴ノ谷遺跡発掘調査報告書』
前　原：（財）浜松市文化協会　1990 『都田地区発掘調査報告書（下）』
段：大仁町教育委員会　1994 『山崎・段遺跡発掘調査報告書』
滝峯才四郎谷：細江町教育委員会　1991 『滝峯才四郎谷遺跡発掘調査報告書』
松東１号：（財）浜松市文化協会　1990 『松東遺跡Ⅱ』
敷地３号：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010 『西の谷遺跡』
掛之上：袋井市教育委員会　2002 『掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹ』
松東２号：浜松市教育委員会　2014 『松東遺跡３次』**（本書）**
（伝）浜松南海岸：浜松市　2007 『浜松の銅鐸』
（伝）遠江：静岡県　1992 『静岡県史』資料編３考古三
（伝）益山寺：梅原末治　1927 『銅鐸の研究』大岡山書店

愛知県（銅鐸破片）

朝　日：愛知県教育委員会　1982 『朝日遺跡』
見晴台：名古屋市見晴台考古資料館　1999 『みはらし』No. 203
西　側：豊橋市教委　2005 『西側遺跡（１）』
瓜　郷：豊橋市教育委員会　2013 『史跡瓜郷遺跡保存管理計画書』

三重県（銅鐸破片）

西場谷Ｃ：上野市遺跡調査会　1994 『上野新都市開発整備区域埋蔵文化財発掘調査報告書　第３分冊』
一反通：三重県　2005 『三重県史』資料編　考古１
金　塚：三重県埋蔵文化財センター　2002 『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡　発掘調査報告』
桶　子：伊勢市　2013 『伊勢市史』第六巻　考古編
（伝）千歳：梅原末治　1927 『銅鐸の研究』大岡山書店

図出典

Fig.132　梶子・段：袋井市教委 2002 から引用、（伝）浜松南海岸：浜市博 2011 より写真トレース、上記以外は、各文献から引用
Fig.134　船渡１号:浜市博 2011（東京大学総合研究博物館掲載依頼済）、船渡２号:浜松市博物館館蔵資料（絵葉書）、荒神山２号・梅原 1927　白須賀：浜市博 2011（東観音寺掲載依頼済）、敷地１～３号：静文研 2010、松東１号：浜文協 1990、梶子・掛之上：袋井市教委 2002 から引用、（伝）浜松南海岸：浜市博 2011 より写真トレース、上記以外は、静岡県 1992 から引用
Fig.136　単孔銅鏃（愛知県中山遺跡）、多孔銅鏃（静岡県椿野遺跡）：鈴木 1997、帯状銅鐶、帯状銅釧（静岡県登呂遺跡）、山中式土器（静岡県伊場遺跡）、菊川式土器（静岡県一色前田遺跡、鶴松遺跡）：静岡県 1992 から引用

５　松東遺跡と長上郡家

（１）はじめに

松東遺跡の西側には古代の遺跡が広く展開しており、永田遺跡群と総称されている。そこには古代寺院である木船廃寺跡の存在に加え、各遺跡で陶硯、木簡、墨書土器等の官衙遺跡に特徴的な遺物が確認されていることから、長田郡（はじめ長田郡、和銅２（709）年に長上・長下２郡に分割）の郡家及び関連施設の所在地と想定されている。今回の発掘調査では、松東遺跡において初めて古代の遺構・遺物を確認することができたため、長田（長上）郡家において調査地周辺がどのように位置づけられるのかを考えてみたい。なお、松東遺跡における盛行期は、長上・長下２郡分割以降であり、その後当地は長上郡に属したと考えられるため、本稿では長上郡と記述することとしたい。

（２）西遠江における郡の範囲と郡家推定地

古代律令国家の成立により、地方には国 - 郡 - 里（郷）という行政単位が敷かれ、行政機関として国には国府、郡には郡家が置かれた。遠江国の国府は、奈良時代には御殿・二之宮遺跡、平安時代中期以降には見付端城遺跡（いずれも現磐田市域）に置かれたと考えられている。また、西遠江には、敷智郡、長田郡（後に長上郡・長下郡に分割）、引佐郡、浜名郡、麁玉郡が置かれ、敷智郡家は伊場遺跡群、引佐郡家は井通遺跡とその周辺の遺跡群、長田（のちに長上）郡家は永田遺跡群に想定されている。

敷智郡家に想定される伊場遺跡群は、伊場大溝と呼ばれる自然流路跡沿いに複数の遺跡が分布しており、遺跡群の南側を古代東海道が通過すると推定されている。城山遺跡・伊場遺跡周辺を中心

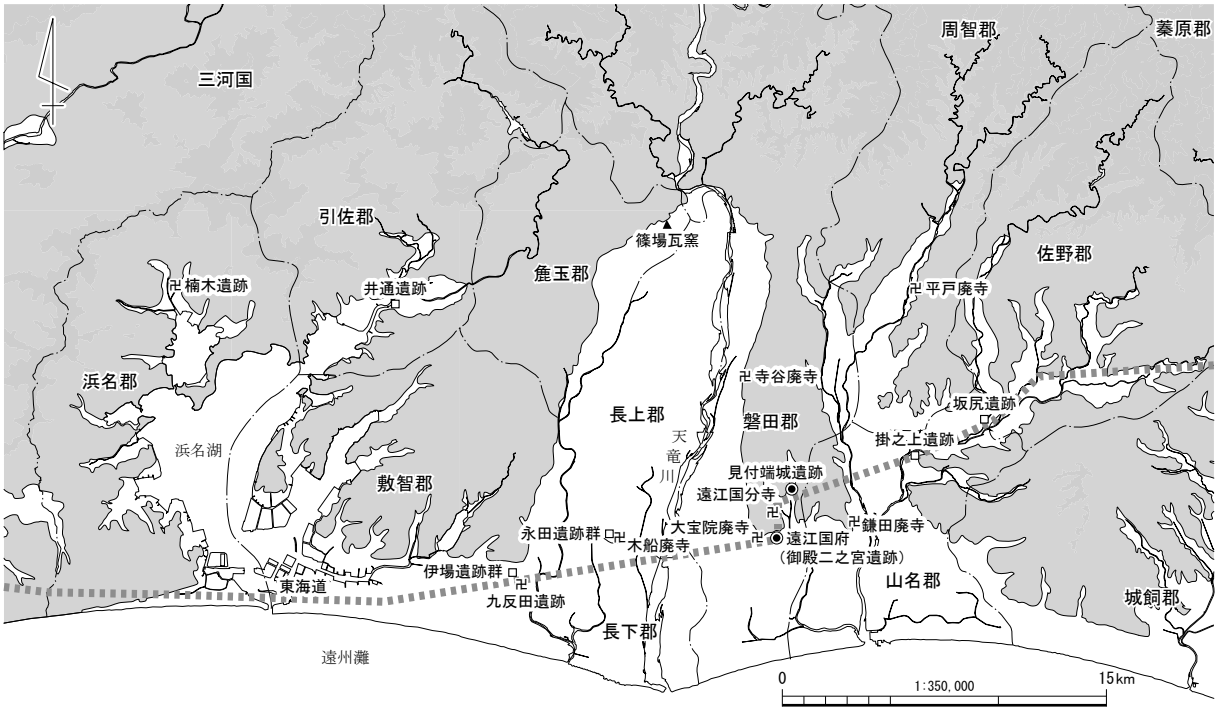


Fig.137　西遠江における郡と郡家の推定地

Tab.15　永田遺跡群における特殊遺物の出土状況

遺跡名	文字関係資料				祭祀関係資料				緑釉陶器	獣足	製塩土器	瓦	銅印	その他
	墨書土器	木簡	陶硯	その他	木製祭祀具	陶馬	土馬	その他						
木船廃寺跡												500以上		礎石
大蒲町村東Ⅰ遺跡		4			25							1?		木製機織具
大蒲町村東Ⅱ遺跡						1	1	人形土製品 皮袋形土製品 手捏ね土器						
森西遺跡	5		2	転用硯2		1		人形土製品	2		脚部2	3		
越前遺跡						1		暗文土師器 手捏ね土器				3		
山の神遺跡	2				1	1		手捏ね土器		2		2		
宮竹野際遺跡	79		12	刻書土器2 転用硯15 水滴1		6	1?	人形土製品 手捏ね土器 馬歯 桃核	1	3	坏部37	10		
松東遺跡	5					1	1	手捏ね土器	1		脚部1		1	鞴羽口 鉄滓

に、多数の掘立柱建物が検出され、木簡・墨書土器・銙帯金具・唐三彩などの特殊遺物が出土している。梶子北遺跡からは９世紀代のＬ形に配置された掘立柱建物群が検出されており、奈良時代に城山遺跡付近にあった郡家の中枢施設が、平安時代には梶子北遺跡周辺へと移ったと考えられる。また、伊場遺跡出土の文字資料からは栗原駅家との関連もうかがえる。

引佐郡家に想定される井通遺跡は、浜名湖北部に注ぐ都田川の支流井伊谷川左岸の微高地上に立地する。遺跡は都田川との合流地点から約 200 m上流に位置し、遺跡の南側には二見道が通る交通の要衝である。遺構は、大溝と規格性の高い掘立柱建物群が検出されており、「引佐一」「引佐二」などと記された墨書土器や、分銅やコップ形須恵器など度量衡に関する遺物が出土しており、物資の集散地としての役割も果たしていたと考えられる。

（３）永田遺跡群における各遺跡の様相

永田遺跡群は、木船廃寺跡、大蒲町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡、森西遺跡、越前遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡に松東遺跡を加えた、径約 1.5km の範囲に広がる遺跡の総称である。前述の通り、古代の官衙に関連する遺物が出土していることや、「永田」という地名が残っていることから、長上郡家所在地に比定されている。長田評は、飛鳥京跡や藤原宮跡で出土した木簡から７世紀代に成立していたと考えられている。ここでは、永田遺跡群を構成する各遺跡の概要について触れておきたい。

木船廃寺跡　1954 年に大量の白鳳期の瓦が採集されたことから、存在が知られるようになった遺跡である。発掘調査（浜文振 2011）では、白鳳期から奈良時代に至る大量の古代瓦が確認されており、白鳳期に創建された後、奈良時代を通じて堂宇の補修が行われてきたことがうかがえる。また、奈良時代の瓦は平城京系の瓦や、遠江国分寺系の瓦が出土していることから、中央政権や遠江国の中枢に関わる勢力が、寺院の造営に関わっていたとみられる（鈴木－2011）。南北 120 m、東西 80 m程度の寺域が想定されており、隣接する大蒲町村東Ⅰ遺跡が郡家の中枢部と想定される

ことから、木船廃寺は、長上郡の郡衙（家）隣接寺院と捉えられる。

大蒲町村東Ⅰ遺跡　木船廃寺跡の西側に隣接する遺跡で、発掘調査（浜文協 2004）では、自然流路の中から、木簡をはじめ、機織具、斎串など約 400 点の木製品が出土している。出土木簡のうち、１号木簡は公出挙に関する帳簿、２号木簡は駅（起）稲の支給に関する帳簿、３号木簡は田や稲の管理に関する帳簿と考えられており、いずれも税や公的機関に関係することから、当地周辺に郡家中枢部が存在していた可能性が高いと考えられる。また、機織具についても官衙関連遺跡からの出土例が多いことから、郡家付属の工房や有力農民のもとに備えられた機織具や織手によって、調・庸として納められる一定した規格の布が織られていたと推定されている（鈴木敏 2004）。

大蒲町村東Ⅱ遺跡　発掘調査（浜文協 2004）では、陶馬、土馬、手捏ね土器など祭祀的な遺物が認められたほかには、官衙関連の遺構・遺物はみられなかったが、古代末～中世にかけて当地周辺に展開していた蒲御厨に関係するとみられる「蒲屋敷」の推定地が地割や小字名に残されている。

森西遺跡　発掘調査（浜文協 2005）では、陶硯、墨書土器、製塩土器、緑釉陶器、布目瓦など少数ながら官衙関連遺物が出土している。遺構は明確ではないが、木船廃寺跡の東側に隣接することから、郡家の関連施設が存在する可能性は十分考えられる。

越前遺跡　木船廃寺跡の北側に隣接する。発掘調査（浜松市遺跡調査会 1982）では、祭祀土坑から奈良時代の暗文を施した赤彩土師器が数多く出土したほか、布目瓦、陶馬等も確認されている。

山の神遺跡　木船廃寺跡の約 500 m北西に位置する。６次にわたる発掘調査が行われており、弥生時代後期と鎌倉時代を主体とする遺跡ながら、古代の遺構・遺物も確認されている。１次調査（浜文協 1989）では、「長田」と墨書された山茶碗が出土しており、中世まで古代の郡名あるいは郷名が引き継がれていることがわかる。３次調査（静文研 1997）では、自然流路から、破砕された甕や墨書土器、斎串など祭祀行為をうかがわせる遺物が出土している。

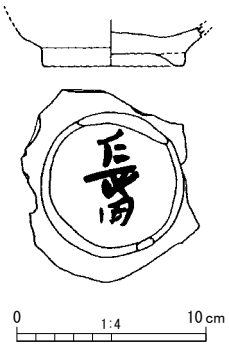


Fig.138　山の神遺跡 墨書山茶碗

宮竹野際遺跡　山の神遺跡の北側に広がる遺跡で、永田遺跡群の中では北端に位置する。６次にわたる調査が行われている。１・２次調査を中心に規則性のある掘立柱建物が確認されているほか、陶硯、墨書土器、布目瓦、陶馬、獣足、製塩土器など、官衙関連遺物が数多く出土している。宮竹野際遺跡の盛行時期は、木船廃寺跡や大蒲町村東Ⅰ遺跡より遅れる８世紀中葉以降であり、墨書土器には「北家」と書かれたものが複数確認されていること、５・６次調査で検出した自然流路が大蒲町村東Ⅰ遺跡や山の神遺跡で検出された自然流路と同一と考えられることから、当初大蒲町村東Ⅰ遺跡周辺を中心として運営されていた郡家が、同一河川の上流域に「北家」と

Fig.139　宮竹野際遺跡「北家」墨書

呼ばれる出先機関を設置し、郡域北部への対応を行ったと推測されている（鈴木－2012）。

（4）松東遺跡における古代の様相

①古代銅印について

古代印の種類と形態　古代印は文書等に押捺することにより、押印者の権利や正当性などを示すものとして律令制下で盛んに用いられる。多くは青銅製であるが、陶製、土製、石製、木製も存在する。大きく公印と寺社印、私印に分けられ、公印には、『令集解』「公式令」天子神爾条の中で用途・規格などが定められている内印（天皇の印）、外印（太政官の印）、諸司印、諸国印の４種と、規格などを定めた記録のない郡印、国倉印、郷印、軍団印などがある。私印は、家印と個人印に分けられ、『類聚三代格』巻 17 貞観 10（868）年６月 28 日太政官符において、公印との区別をつけるために、印面の規格を方１寸５分（約 45㎜）以内に制限されている。

古代印は形態の個体差が少ない遺物で、鈕の形態を中心に分類される。鈕の上部が円弧を呈する弧鈕と、花弁状を呈する莟鈕に大別され、さらに孔の有無、先端部の形状、基部の装飾の有無などで分類される。伝世品が多いことや、発掘調査出土品であっても伝世されている可能性があるため、編年作業が難しい遺物といえる。しかしながら、弧鈕無孔で鈕両端の張り出しが少ないものが古く位置づけられ、無孔→有孔、弧鈕→莟鈕という大きな変遷は看取される（田路 1999）。

印文には一字、二字、四字のものが存在する。一字、二字印はほとんどが私印であり、氏や名の一部のほか、吉兆文字も用いられたと考えられている。四字印は正式な印文の様式と考えられ、公印、寺社印の多くに採用され、私印にも「〇〇私印」として用いられる。

古代銅印の出土例　これまでに古代銅印は伝世品・出土品あわせて全国で 200 例以上が知られており、東海地方に関しては、発掘調査での出土例が静岡県で６点、愛知県では尾張国府跡から２点確認されており[1]、いずれも平安時代以降のものと考えられている。静岡県内出土例は、東平遺跡は富士郡家、内荒遺跡は安倍郡家、道場田遺跡は小河駅家、坂尻遺跡は佐野郡家に想定されるなど官衙関連遺跡からの出土が多数を占めている。他に伝世品として東海地方関連では 11 点が確認されており、静岡県関係では「駿河倉印」、「安倍郡」の２点が知られている。

今回出土の銅印について　銅印が出土した SD109 は検出面からの深さが非常に浅く、出土状況は良好とはいえないが、墨書土器を含む９世紀代の須恵器・土師器を共伴する。形態は弧鈕有孔であり、印面は 27㎜ 四方、高さは 30㎜ を測る。印文の意味は不明だが、私印の諸例と照らし合わせれば、以下のような可能性が指摘できる。

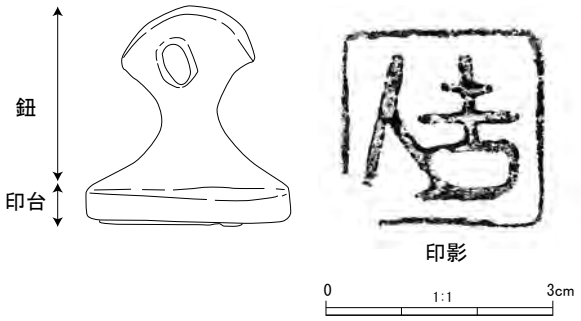


Fig.140　出土銅印

Ａ「吉人」：銅印保有者の名
Ｂ「吉□　人□」：銅印保有者の姓と名の頭文字
Ｃ「佶□」：銅印保有者の氏または名
Ｄ「佶」：吉兆文字として使用

二字印は多くはないが、印文の「人」の字を「にんべん」とするには右払いが顕著であり、一字とは読み取り難いことから、ＡまたはＢの可能性が

Tab.16　東海地方の銅印一覧

	状況	遺跡名または地域		印文	印形態	印面	現存高	備考
1	調査	静岡	富士市東平	十	不明	長(27)×21	(15.5)	鈕、印面下部を欠損、富士郡家推定地
2	調査	静岡	静岡市内荒	造大神印	菩鈕有孔	方35×35	41	9C中葉、安倍郡家推定地
3	調査	静岡	焼津市道場田	万	弧鈕有孔	方30×30	35	9～11C、小河駅家推定地
4	調査	静岡	袋井市川田・藤蔵渕	貞	菩鈕有孔	方34.8×33.7	39.4	10C、鈕部2次接合か
5	調査	静岡	袋井市坂尻	松	不明	方31×31	(24)	鈕欠損、8～12C、佐野郡家推定地
6	調査	静岡	浜松市松東	吉人？	弧鈕有孔	方27×27	30	9C、長上郡家推定地
7	調査	愛知	稲沢市尾張国府跡	珎冨	菩鈕有孔	八44×46	46	12C後葉
8	調査	愛知	稲沢市尾張国府跡	冨	菩鈕有孔	方30×30	32	
9	伝世	静岡	静岡県中～東部	駿河倉印	弧鈕無孔	方60×60	65	
10	伝世	静岡	静岡市	安倍郡	菩鈕有孔	方33×28.5	33	所在不明
11	伝世	愛知	豊田市	伊保郷印	菩鈕有孔	方33×33	34	豊田市郷土資料館所蔵
12	伝世	愛知	豊田市	伊保郷印	菩鈕有孔	方33×32	25	
13	伝世	三重	伊勢市	大神宮印	弧鈕無孔	方64.4×65	60.3	伊勢神宮、延長年間に再鈕か
14	伝世	三重	伊勢市	内宮政印	菩鈕無孔	方54.1×54.8	55.6	伊勢神宮、伝承暦3年再鈕
15	伝世	三重	伊勢市	内宮政印	菩鈕有孔	方52×52	42	伊勢神宮
16	伝世	三重	伊勢市	豊受宮印	菩鈕有孔	方62.8×62.3	(47.2)	伊勢神宮、伝貞観5年鋳造
17	伝世	三重	伊勢市	神主石敷	菩鈕無孔	方23×23	28	伊勢神宮関連
18	伝世	三重	伊勢市？	己西首丸	菩鈕有孔	方26×26	30	伊勢神宮関連
19	伝世	三重	伊勢市？	金剛契印	菩鈕有孔	方27×27	25	

凡例：印面・現存高の単位は㎜、括弧書きは現存値、印面は縦×横の数値　　国立歴史民俗博物館1999を改変
印面の形状：正方形→方、長方形→長、八角形→八

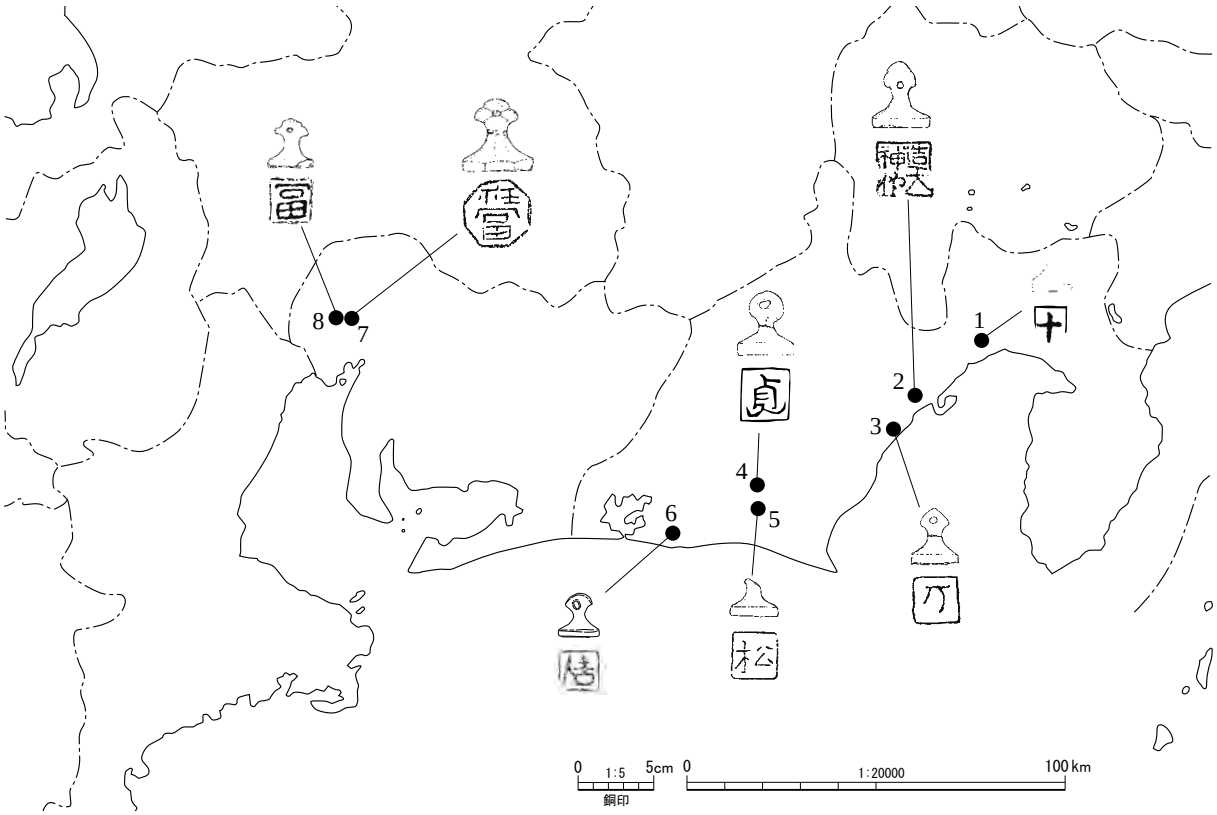


Fig.141　東海地方における古代銅印分布図（発掘調査出土品）

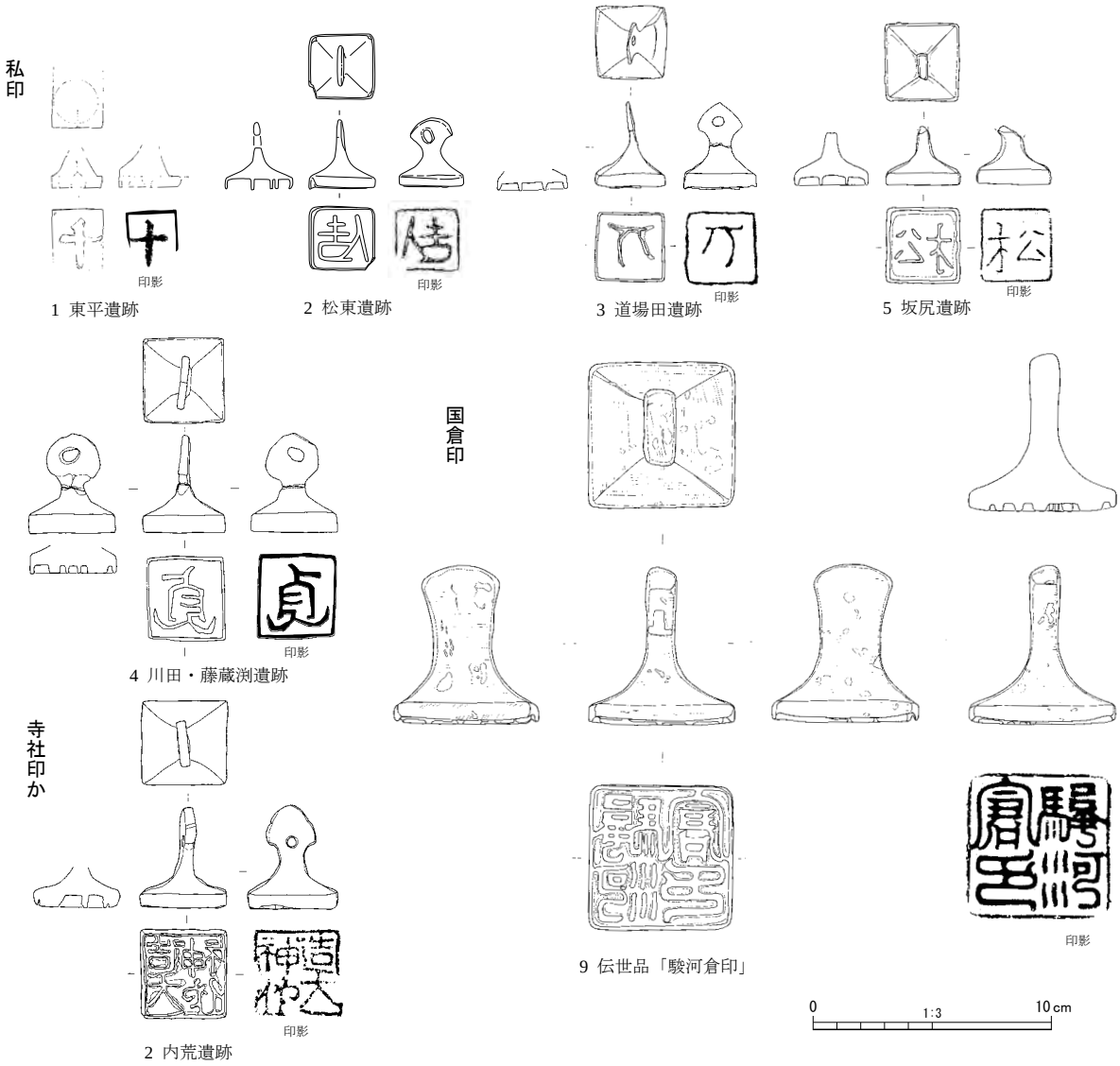


Fig.142　静岡県関係古代銅印

高いと考えられる。

　また、共伴する土器の年代は９世紀代であるが、

・印文の彫りが深く、鋳型をつくるための原型に蝋型を使用した可能性が考えられる

・印文の読みをＡ案の「吉人」とすれば、「～人」は奈良時代に比較的みられる名である

・伝世する可能性のある遺物である

・銅印が出土した SD109 と隣接して平行に延びる SD107 は８世紀代の遺物も出土している

　これらの点を考慮すると、銅印の年代が８世紀代に遡る可能性も考えられる。

②その他の特殊遺物について

鍛冶関連遺物　方形区画溝 SD107 の内側において、SK301・SK302 内及びその周辺の包含層から、鞴の羽口と鉄滓（Fig. 102 - 242 ～ 250）が集中的に出土した。鉄滓は図示しなかったものを含め 50 点出土している。SK301・SK302 は細長い楕円形状の遺構で、内部に被熱の形跡はなく、鉄滓も埋土上層からの出土であるため、炉などの用途を想定することはできないが、鍛冶関連遺物の集中

度から、方形区画内の北部において鍛冶が行われていたことがうかがえる。

墨書土器　今回の調査では５点の墨書土器が確認され、そのうち４点には「⊕」という同一の記号が認められた。いずれも時期は９世紀代のものである。この記号が何を示しているかは不明であるが、出土地点も銅印が出土したSD109や隣接する方形区画溝SD107 及びその周辺の包含層にまとまっていることから、９世紀代に方形区画溝内において、同一の施設あるいは人物が用いていたと考えられる。

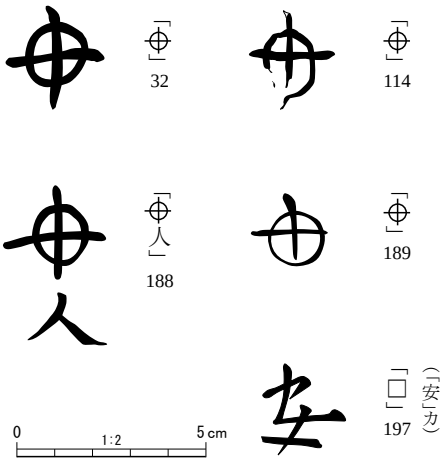


Fig.143　出土墨書

緑釉陶器　包含層から緑釉陶器（Fig.100 - 240）が１点出土した。古代における高級食器であり、永田遺跡群内では、宮竹野際遺跡や森西遺跡に出土例がみられる。伊場遺跡群や井通遺跡など官衙関連遺跡や、湖西市大知波峠廃寺など古代寺院跡に出土例が多い。

陶馬　（Fig.98 - 168）祭祀に用いられる陶製の馬形で、井戸（SE02）内から出土した。脚部１点のみの出土であり確証を得ないが、井戸周辺で祭祀が行われていた可能性がある。永田遺跡群では、木船廃寺跡、森西遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡で陶馬が確認されている。

製塩土器　（Fig.98 - 169）井戸（SE02）内から脚部が１点確認された。三河湾沿岸で土器製塩が行われ、土器ごと運ばれてくるため、当地域での出土例が知られるが、流通の過程で脚部が折り取られるとみられ、坏部と脚部が分離して出土する。永田遺跡群では、宮竹野際遺跡で坏部37点、森西遺跡で脚部２点が知られる。

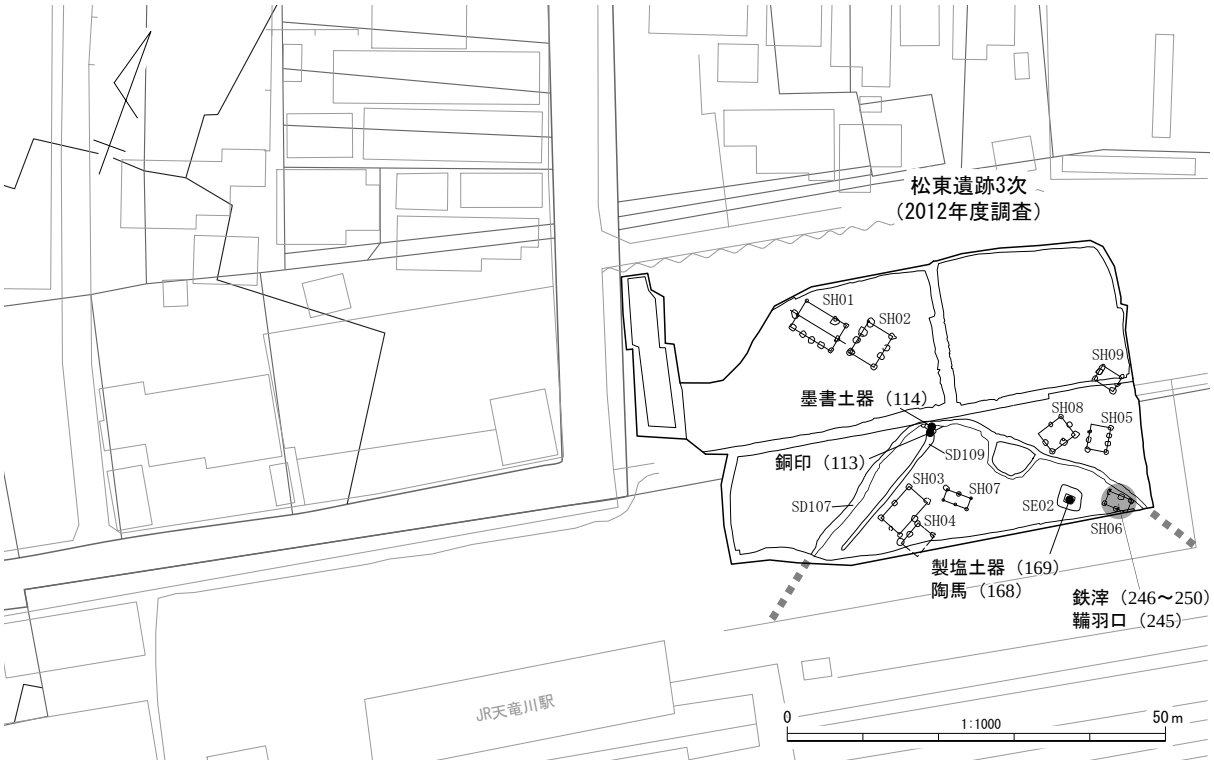


Fig.144　古代の主な遺構と特殊遺物の出土状況

③方形区画溝 SD107 とその内側の遺構

SD107 は調査区外に延びているため、正確な規模は不明だが、方位を真北からわずかに東へ傾けて、少なくとも南北 25 ｍ、東西 35 ｍ以上の土地を区画していたと考えられる。出土遺物の主な時期は８世紀～ 10 世紀前半と幅が広く認められる。

区画内で検出された主な遺構には、掘立柱建物４棟（SH03・04・06・07）、銅印・墨書土器出土溝（SD109）、SD107 と接続し半円形に延びる溝（SD110）、井戸（SE02）などがあり、SK301・302 やその周辺の包含層では鞴羽口、鉄滓が集中的に出土している。各遺構の相関関係は明確ではないが、井戸 SE02 出土遺物の時期は SD107 と同様８世紀～ 10 世紀前半であることから、この期間に方形区画内で何らかの施設が存続していたと考えられる。そこでは銅印や墨書土器が用いられ、鍛冶が行われており、井戸には陶馬・製塩土器が投棄されるなど一般的な集落とは捉えられない特殊な様相がみてとれる。

（５）永田遺跡群における松東遺跡の位置付け

永田遺跡群の各遺跡は、発掘調査の成果や古地図、地籍図などから旧河道をたどると、現在宮井戸川と呼ばれている河川やその支流沿いに展開していることがわかる（Fig.145）。宮井戸川は芳川、馬込川を通じて遠州灘へと注いでおり、伊場遺跡群（敷智郡家）、井通遺跡（引佐郡家）同様に、永田遺跡群においても水運に優れた河川沿いに長上郡家の関連施設が展開していたと考えられる。

長上郡家の中心は、白鳳期に造営された木船廃寺跡や、７世紀末葉～８世紀前葉頃の木簡が出土している大蒲町村東Ⅰ遺跡辺りと想定されており、８世紀中葉以降、郡家中枢から約１km 北側の宮竹野際遺跡に出先機関が置かれたと考えられている。そうした中で、永田遺跡群の東端に位置する松東遺跡の長上郡家における位置付けを考えてみたい。

松東遺跡については官衙関連の特殊遺物として、銅印をはじめ墨書土器、緑釉陶器、陶馬、製塩土器などが確認され、鞴羽口・鉄滓が出土している。また、竪穴住居跡は確認されずに方形区画溝とその内側に掘立柱建物、井戸などが検出されている。こうした遺構・遺物の状況からは一般的な集落景観は想定できず、長上郡家に関連する施設の存在がうかがえる。

ただし、その一方で木簡、陶硯が全く出土せず、墨書土器も記号の記されたものが少量出土しているのみで、官衙遺跡と想定する際に最も有力な資料となる文字関連遺物が極めて乏しい。このことは、永田遺跡群の東端部という地理的状況も踏まえると、松東遺跡が郡家の中枢部ではなく周縁部であることを示していると考えられる。

松東遺跡の年代は、８世紀中葉頃～ 10 世紀前葉を中心としており、７世紀末～８世紀代に盛期があり郡家中枢と目される大蒲町村東Ⅰ遺跡や木船廃寺跡との間に時期差が見受けられる。このことは、８世紀中葉以降、急速に郡家の出先機関が整備された宮竹野際遺跡の状況と重ね合わせると、その頃に長上郡家において諸施設の再整備による拡充・拡散が図られたと考えられる。

陶硯や墨書土器など文字関連遺物を多数出土する宮竹野際遺跡は、郡の政務を執り行う機能が与えられ、文字関連遺物がほとんどみられない松東遺跡の本調査区周辺は、郡家にかかわりを有し、銅印を所有することのできる有力者＝郡司クラスの居館的な施設であったか、郡家に属して鍛冶を

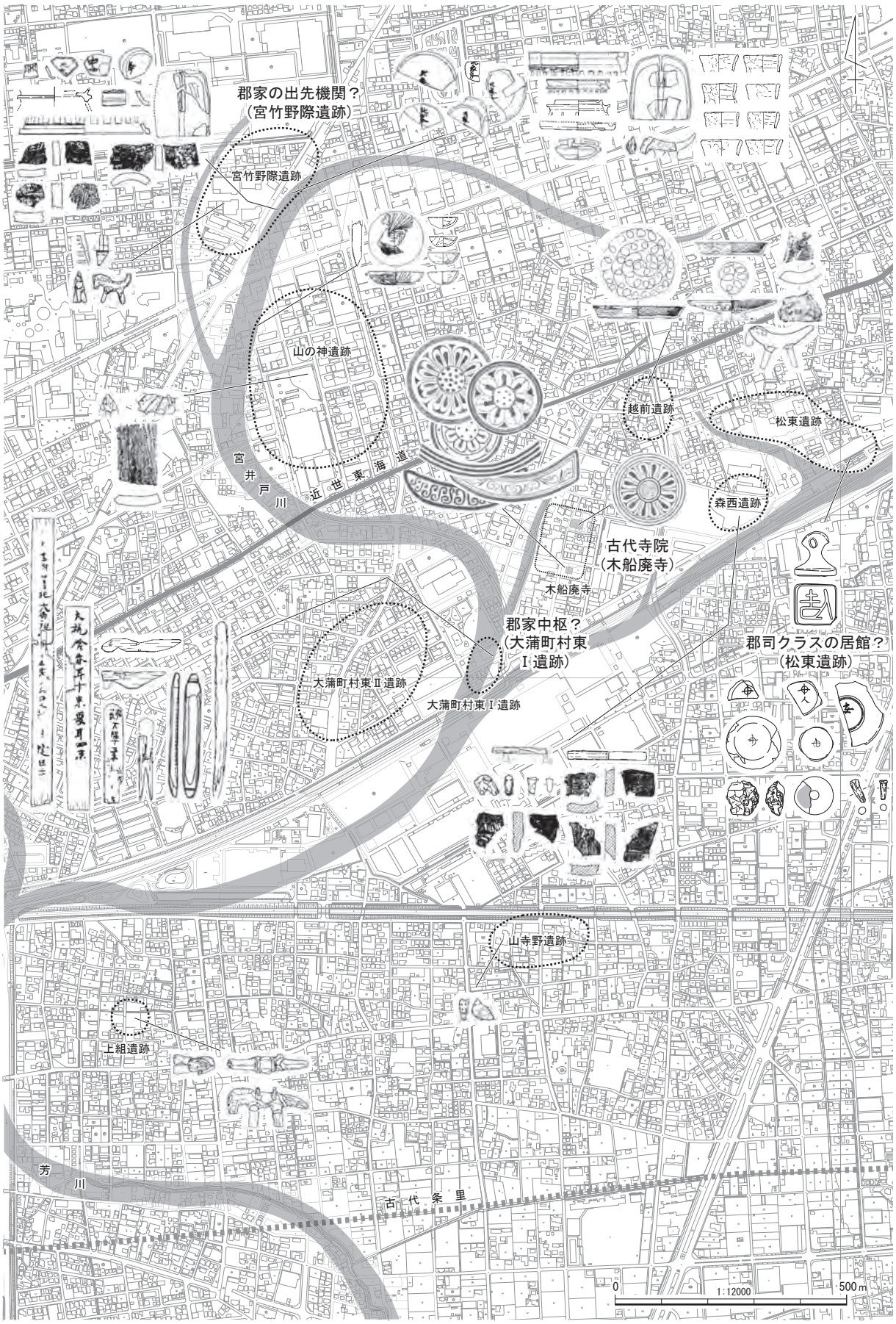


Fig.145　宮井戸川及び支流の推定流路と各遺跡の様相

行う工房的な施設であった可能性がうかがえるだろう。

（６）おわりに

以上、主な調査成果によりながら、長上郡家における松東遺跡の位置付けについて考えてきた。

今回の調査のみでは、建物の構造や配置に不明瞭な点が多く、明確な位置付けをすることは難しいが、特殊遺物の出土状況と遺構のあり方から、８世紀中葉以降に長上郡家の再整備による施設の拡充・拡散が行われたと推察し、今回の調査で検出された方形区画溝とその関連遺構については、郡司クラスの有力者の居館または郡家に属する鍛冶工房といった、郡家関連の施設である可能性に触れてみた。

水運に優れた河川沿いにおいて郡家の諸施設が散在的に配置される様相は、比較的発掘調査が進展している伊場遺跡群で知られており、永田遺跡群も類似した状況である可能性が次第にうかがえるようになってきた。伊場遺跡群と永田遺跡群は隣接する郡の郡家想定地であり、遠州灘から同じ水系を利用した水運が行われていたと想定されることから、今後は両遺跡群の関連性も視野に入れた調査・検討が必要になると考えられる。

註

（１）銅印以外では豊川市白鳥遺跡（三河国府跡）のほか、日進市岩崎 24 号窯・海老池１号窯、岐阜市老洞１号窯からの陶製印４例が知られる。

参考文献

国立歴史民俗博物館　1999 『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 79 集
静岡県　1994 『静岡県史』通史編１　原始・古代
静岡県教育委員会　2003 『静岡県の古代寺院と官衙遺跡』静岡県文化財調査報告書第 57 集
静岡県考古学会　2006 『古代の役所と寺院―郡衙とその周辺―』静岡県考古学会 2005 年度シンポジウム
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988 『内荒遺跡（遺物編）』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996 『川田・藤蔵渕遺跡』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997 『山の神遺跡』
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006 『井通遺跡』本文編 1・2
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006 『宮竹野際遺跡』
鈴木一有　2011 「木船廃寺出土瓦の時期と系譜」『木船廃寺 2 次』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有　2012 「宮竹野際遺跡と長上郡家」『宮竹野際遺跡 6 次』（財）浜松市文化振興財団
鈴木敏則　2004 「出土木製品」『大蒲町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』（財）浜松市文化協会
田地正幸　1999 「古代印の考古学的研究」『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 79 集
浜松市遺跡調査会　1982 『越前遺跡発掘調査報告書』
（財）浜松市文化協会　1989 『山の神遺跡』
（財）浜松市文化協会　1994 『宮竹野際遺跡 2』
（財）浜松市文化協会　2004 『大蒲町村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』
（財）浜松市文化協会　2005 『森西遺跡』
（財）浜松市文化振興財団　2011 『木船廃寺 2 次』
（財）浜松市文化振興財団　2012 『宮竹野際遺跡 6 次』
袋井市教育委員会ほか　1985 『坂尻遺跡』
富士市教育委員会　2013 『富士市内遺跡発掘調査報告書－平成 22・23 年度－』
山中敏史　1994 『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

第４章　総　括

本書で報告した松東遺跡３次調査では、弥生時代後期と古代の遺構・遺物を中心に豊富な情報が得られた。最後に調査で得られた成果を時代ごとに要約し、明らかになった内容を総合するとともに今後の展望について示したい。

１　発掘調査の成果

弥生時代後期　土坑や溝・小穴を検出し、山中Ⅲ式期～元屋敷Ⅰ－１式期までの時期が確認された。その中でも中心となる時期は欠山式期であり、１～２次調査で検出された環濠が廃絶した後の、欠山式期における集落の広がりをうかがうことができた。溝はほぼ真北とその直交方向に掘削されているものが多く、環濠内側の小区画溝と方向が一致しており、欠山式期にはこうした小区画溝で集落内部の空間構成を行っていたとみられる。また、廃棄土坑と考えられる SX01 などからは大量に土器が出土した。松東遺跡は山中・欠山様式圏の東端に位置し、菊川様式圏と接しているため、出土土器には、菊川様式の影響を受けた土器が多く見受けられた。SK06 からは銅鐸鈕の破片が出土した。発掘調査における銅鐸破片の出土は市内３例目で、破片としては大型である。周辺に多くみられる銅鐸、銅鐸関連遺物を出土する遺跡とのかかわりが注目される。

奈良・平安時代　掘立柱建物・土坑・溝・井戸・小穴を検出し、出土遺物などから８世紀後半から 10 世紀前半に当遺跡の盛行期があったといえる。調査区南側では方形区画溝である SD107 が検出された。SD107 からは尾張地方で生産された灰釉陶器を中心に多くの遺物が出土していることや、区画溝が囲う範囲が広大な規模に及ぶことからも、一般的な集落ではないことが理解できる。また、SD107 の内側に平行して延びている SD109 からは、銅印と墨書土器、同じく SD107 の内側に位置する SE02 からは、陶馬の脚部と製塩土器の脚部が出土している。こういった特殊遺物の出土から、松東遺跡の西側にその中心が想定されている長上郡家と関連する施設の存在がうかがわれる。

掘立柱建物は SD107 の区画溝内４棟、区画溝外が５棟の計９棟が検出された。SH01 と SH02、SH03 と SH04 は隣接し、建物方位も近似しているため関連性が認められる。調査区東端に位置する SK301、SK302、SD118 からは、鞴の羽口や鉄滓の鍛冶関連遺物が集中して出土し、SH06 を含むこの一画に鍛冶関連の工房があったと考えられる。

鎌倉時代以降　鎌倉時代以降の遺構・遺物は希薄であった。検出した遺構は、溝状遺構４条、井戸３基である。水田跡の可能性もある幅広の溝状遺構は４条平行に並んで検出され、主軸が古代の溝（SD107 等）や 1937 年頃の土地宝典にみられる古い地割と近似している。このように松東遺跡周辺の地割は、古代・中世からの地割を、時代が移り変わっても後世に踏襲されていったことがうかがわれる。

２　特筆すべきことがら

弥生時代後期の集落景観　１・２次調査で確認された環濠は検出されず、今回の調査区まで及んでいないとみられる。今回確認された遺構の多くは、環濠廃絶後に集落域が最大規模に広がった欠山Ⅱ式期以降と考えられる。永田遺跡群では、山の神遺跡、森西遺跡などに同時期の集落の存在が知られ、河川や低湿地の間の微高地ごとに集落が展開している様相がうかがえる。

弥生土器の地域性　弥生時代後期には、天竜川を境として西遠江に山中・欠山様式圏、東遠江に菊川様式圏が広がる。今回出土の土器群は、器種比率や属性分析では浜松南部の遺跡と概ね同様の傾向がみられたが、壺の肩部模様に羽状文の比率が高く、搬入品も多くみられるなど、永田遺跡群の東端という地理的要因から菊川式の影響が強くうかがえる。

銅鐸破片　永田遺跡群の東端に位置し、銅鐸分布圏の最も辺境地といえる松東遺跡において２例目となる銅鐸破片が出土した。浅い窪み状の土坑（SK06）から出土し、山中Ⅲ式（～欠山Ⅰ式）の弥生土器と共伴する。近畿式銅鐸の突線鈕２式の鈕の破片で、大きく折れ曲がっており、飾耳はすべて欠損している。近畿式銅鐸の破片は、青銅素材として再利用するために流通していた可能性があり、近畿地方を中心に破砕が行われ、本例のように破片が各地にもたらされたと考えられる。永田遺跡群周辺に銅鐸が集中する点については、銅鐸文化圏の境界領域としての性格に加え、東西の流通経路の要衝である地理的特性に起因すると捉えられる。

長上郡家との関係　古代の墨書土器、緑釉陶器など官衙関連の特殊遺物や、鍛冶行為を示す鞴羽口、鉄滓が出土しており、長上郡家の一部が及んでいると想定できる。一方で文字関連遺物（木簡・陶硯・墨書土器等）は乏しく、永田遺跡群の東端という地理的状況からも、今回の調査区付近は長上郡家の中でも周縁部と捉えられる。方形区画溝（SD107）とその関連遺構については、出土銅印を所有していた郡司クラスの有力者の居館あるいは郡家に属する鍛冶工房といった郡家関連の施設と推定され、長上郡家の施設の拡充・拡散が行われた８世紀中葉以降に整備されたと考えられる。

古代銅印　方形区画溝（SD107）に近接して平行に延びる溝（SD109）から銅印が出土した。本例は印面の規模などから私印と考えられ､印文は「吉人」または「佶」と読める。９世紀代の須恵器･土師器と共伴するが、製作年代は８世紀代に遡る可能性も考えられる。銅印は全国的にも官衙遺跡やその周辺での出土例が多く、本例についても郡司クラスの有力者が保有していたと推測される。

３　今後の展望

今回の調査では、弥生時代の銅鐸破片をはじめ、多くの土器資料を得られたほか、古代の銅印をはじめ、官衙関連の遺構・遺物を確認することができた。ただし、調査が行われたのは遺跡の一部に過ぎず、弥生時代の環濠の範囲や墓域が未だ明らかではなく、出土土器の地域性についても、より詳細な分析が必要であろう。また、古代の長上郡家の構造を明らかにするためには、歴史地理学的な検討も加えつつ、丹念な調査の継続が必要となる。

今後は、調査の進展によって松東遺跡を含む永田遺跡群の様相が明らかになっていくことを期待するとともに、多方面で今回の調査成果が活用されることを望みたい。

出土遺物観察表

凡例
残存率：％表示、基本的に10％単位での切り上げ
反転：「反」は断面を反転して図化したもの
大きさの単位はcm
回転体以外の大きさ表示　器径：長さ　　口径：厚さ
口径は接地径
色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
21	1	2364	2	SX01	弥生土器	広口壺	5	反			13.6	橙	
21	2	2616	2	SX01	弥生土器	外反口縁壺	5	反			13.1	浅黄橙	
21	3	2579	2	SX01	弥生土器	拡張口縁壺	30				14.9	浅黄橙	
21	4	2312	2	SX01	弥生土器	拡張口縁壺	10	反			37.4	にぶい黄橙	
21	5	2274・2281	2	SX01	弥生土器	内彎口縁壺	20	反			18.0	淡黄	
21	6	2491	2	SX01	弥生土器	内彎口縁壺	30				14.0	にぶい黄橙	
21	7	2530	2	SX01	弥生土器	内彎口縁壺	90	反	11.2	14.5	9.6	にぶい黄橙	底径5.1
21	8	2541	2	SX01	弥生土器	内彎口縁壺	10	反			12.5	にぶい橙	
21	9	2087・2477	2	SX01	弥生土器	直口壺	70		13.2	10.6	10.2	浅黄橙	底径4.0
21	10	2285・2280	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	30				16.2	にぶい橙	
21	11	2612	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	10	反			13.0	灰白	
21	12	2629	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	5	反			21.9	にぶい黄橙	
21	13	2629	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	10	反			19.0	にぶい橙	
21	14	2049・2415	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	20	反			17.7	黄灰	
21	15	2472	2	SX01	弥生土器	折返口縁壺	20	反			18.7	灰黄褐	
21	16	2603	2	SX01	弥生土器	壺	20	反	24.0			にぶい黄橙	
21	17	2282・2275	2	SX01	弥生土器	壺	30	反				にぶい黄橙	頸径8.0
21	18	2028・2523	2	SX01	弥生土器	壺	50		28.8			にぶい黄橙	底径9.8
22	19	2420・2203	2	SX01	弥生土器	小型直口鉢	90		11.7	3.4	11.0	浅黄橙	底径3.4
22	20	2612	2	SX01	弥生土器	小型直口鉢	80			7.4	9.3	橙	
22	21	2404	2	SX01	弥生土器	小型直口鉢	30	反		6.4	7.6	にぶい橙	底径3.5
22	22	2541	2	SX01	弥生土器	装飾小型直口鉢	50	反	11.2		10.7	にぶい橙	
22	23	2600・2412	2	SX01	弥生土器	小型鉢	50		9.9			にぶい橙	底径3.3
22	24	2401	2	SX01	弥生土器	小型鉢	40		9.8			明灰	底径4.0
22	25	2330	2	SX01	弥生土器	片口鉢	95		23.0	11.9	22.0	にぶい橙	底径4.1
22	26	2476	2	SX01	弥生土器	鉢	30	反	18.1		16.6	にぶい橙	
22	27	2087	2	SX01	弥生土器	小型脚付鉢	10	反	6.4			浅黄橙	
22	28	2087	2	SX01	弥生土器	把手	5					浅黄橙	
22	29	2319	2	SX01	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			24.3	浅黄橙	
22	30	2364	2	SX01	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			26.0	浅黄橙	
22	31	2399・2267	2	SX01	弥生土器	外反坏部高杯	30				25.9	灰黄	
22	32	2269	2	SX01	弥生土器	外反坏部高杯	20				21.2	にぶい黄橙	
22	33	2565	2	SX01	弥生土器	く字碗形坏部高杯	10	反			24.0	にぶい橙	
22	34	2421・2482	2	SX01	弥生土器	く字碗形坏部高杯	60				26.2	にぶい黄橙	脚頸径5.0
22	35	2374	2	SX01	弥生土器	く字碗形坏部高杯	20	反			23.2	橙	
22	36	2262・2489	2	SX01	弥生土器	く字碗形坏部高杯	10	反			20.8	にぶい橙	
22	37	2411	2	SX01	弥生土器	高杯	30					橙	脚頸径4.8
23	38	2406	2	SX01	弥生土器	高杯	5	反			29.9	にぶい黄橙	
23	39	2469	2	SX01	弥生土器	碗形坏部高杯	5	反			27.4	にぶい橙	
23	40	2584	2	SX01	弥生土器	碗形坏部高杯	5	反			16.8	にぶい黄橙	
23	41	2616・2609	2	SX01	弥生土器	有稜高杯	30	反			22.6	橙	
23	42	2573	2	SX01	弥生土器	有稜高杯	10	反			22.8	橙	
23	43	2175	2	SX01	弥生土器	返付高杯	10	反				にぶい橙	
23	44	2348	2	SX01	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚径15.4、脚頸径5.0
23	45	22353	2	SX01	弥生土器	高杯	30	反				にぶい橙	脚径14.7
23	46	2370	2	SX01	弥生土器	高杯	5	反				にぶい黄橙	脚径14.5
23	47	2494	2	SX01	弥生土器	高杯	20					にぶい黄橙	脚径15.1
23	48	2599	2	SX01	弥生土器	装飾高杯	20					橙	脚径12.3
23	49	2495	2	SX01	弥生土器	高杯	40					橙	脚頸径4.3
23	50	2492	2	SX01	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚頸径4.6
23	51	2601	2	SX01	弥生土器	高杯	40					にぶい橙	脚頸径4.2
23	52	2305	2	SX01	弥生土器	高杯	40					浅黄橙	脚頸径4.8
23	53	2305	2	SX01	弥生土器	高杯	30					にぶい橙	脚頸径3.9
23	54	2549	2	SX01	弥生土器	高杯	50					浅黄橙	脚頸径5.3
23	55	2613	2	SX01	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚頸径4.5
23	56	2414	2	SX01	弥生土器	高杯	40					にぶい黄橙	脚頸径4.6
23	57	2087・2428	2	SX01	弥生土器	小型高杯	90			11.2	14.0	橙	脚径11.8、脚頸径4.1
23	58	2606・2428	2	SX01	弥生土器	小型高杯	80		10.4	8.8	9.8	にぶい褐	脚径8.8、脚頸径4.0
23	59	2291	2	SX01	弥生土器	小型高杯	20	反			11.8	浅黄橙	
23	60	2380	2	SX01	弥生土器	小型高杯	50					にぶい橙	脚径9.0、脚頸径3.5
24	61	2615・2608	2	SX01	弥生土器	台付甕	40		22.4		20.1	にぶい黄橙	
24	62	2522・2585	2	SX01	弥生土器	甕	50	反	24.4		21.4	黒褐	
24	63	2397	2	SX01	弥生土器	甕	20	反			22.0	にぶい黄橙	
24	64	2321	2	SX01	弥生土器	甕	10	反			20.5	にぶい橙	
24	65	2556	2	SX01	弥生土器	甕	50		22.0		18.5	灰黄褐	
24	66	2390・2395	2	SX01	弥生土器	甕	30				17.0	灰黄褐	
24	67	2605・2087	2	SX01	弥生土器	甕	10	反			22.4	灰黄褐	
24	68	2413	2	SX01	弥生土器	甕	30	反	16.4		15.6	黒褐	
24	69	2321	2	SX01	弥生土器	甕	10	反			21.2	灰黄褐	
24	70	2290・2318	2	SX01	弥生土器	大型甕	10	反			44.6	灰褐	
24	71	2358	2	SX01	弥生土器	台付甕	10					浅黄橙	脚頸径5.6
24	72	2396	2	SX01	弥生土器	台付甕	20					灰黄褐	脚径9.1
24	73	2746	2	SX01	弥生土器	台付甕	20	反				にぶい黄橙	脚径10.8
24	74	2594	2	SX01	弥生土器	台付甕	30					にぶい橙	脚径8.1

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
25	75	2539	2	SX01	石製品	紡錘車	100		5.2	5.2	0.9		21.8g、泥岩
28	76	1103	1	SK06 1層	金属製品	銅鐸 鈕			17.8	25.2			1178.0ｇ
30	77	71	1	SK06 1層	弥生土器	折返口縁壺	5	反			13.2	にぶい黄橙	
30	78	67	1	SK06 1層	弥生土器	内彎口縁壺または鉢	5	反			15.4	にぶい橙	
30	79	67	1	SK06 1層	弥生土器	鉢	5	反			14.6	にぶい黄橙	
30	80	71	1	SK06 1層	弥生土器	甕	5					にぶい黄褐	
30	81	71	1	SK06 1層	弥生土器	外反坏部高杯	20	反			22.2	にぶい橙	
30	82	71	1	SK06 1層	弥生土器	小型高杯	10	反	9.4			橙	
30	83	67	1	SK06 1層	弥生土器	台付甕	5	反				にぶい橙	脚頸径5.6
30	84	111	1	SK06 1層	土師器	甕	5	反				灰黄褐	底径6.0
30	85	932	1	SK06 2層	弥生土器	壺	5	反				にぶい黄橙	
30	86	96	1	SK06 2層	弥生土器	壺	5					にぶい橙	
30	87	92	1	SK06 2層	弥生土器	壺	5	反			14.8	橙	
30	88	84	1	SK06 2層	弥生土器	鉢	5				16.9	にぶい黄橙	
30	89	95	1	SK06 2層	弥生土器	鉢	5					橙	
30	90	930	1	SK06 2層	弥生土器	壺	5	反				にぶい橙	底径5.8
30	91	935	1	SK06 2層	弥生土器	小型壺	5	反				にぶい橙	底径5.0
30	92	935	1	SK06 2層	弥生土器	甕	5				18.1	灰褐	
30	93	931	1	SK06 2層	弥生土器	台付甕	5					にぶい橙	脚頸径4.8
30	94	933	1	SK06 2層	弥生土器	台付甕	5					にぶい橙	脚頸径5.5
40	95	229	1	SK07	弥生土器	鉢	10	反			13.2	淡黄	
40	96	112	1	SK07	弥生土器	壺	5					灰	
40	97	237	1	SK07	弥生土器	壺	50		25.8			橙	底径6.2
40	98	239	1	SK07	弥生土器	小型壺	30	反	6.0		4.8	にぶい橙	
40	99	247	1	SK07	弥生土器	直立口縁鉢	10	反	12.1		11.0	浅黄橙	
40	100	241・243	1	SK07	弥生土器	碗形坏部高杯	60	反		20.6	28.6	橙	脚径16.6、脚頸径5.0
40	101	238	1	SK07	弥生土器	高杯	50					にぶい黄橙	底径13.5、脚頸径4.2
40	102	250	1	SK07	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚径13.8
40	103	237・240	1	SK07	弥生土器	高杯	60					浅黄橙	脚径14.0、脚頸径5.2
40	104	251	1	SK07	弥生土器	甕	10	反	26.6		25.2	にぶい橙	
40	105	246	1	SK07	弥生土器	甕	5	反			31.2	灰白	
40	106	253	1	SK07	弥生土器	台付甕	20					灰白	脚径10.8、脚頸径5.2
40	107	247	1	SK07	弥生土器	台付甕	30					橙	脚径9.4、脚頸径5.2
41	108	788	1	SK56	弥生土器	外反口縁壺	5	反			15.0	にぶい橙	
41	109	798	1	SK56	弥生土器	外反口縁壺	10	反			17.2	にぶい黄橙	
41	110	737	1	SK56	弥生土器	外反口縁壺	20	反			11.8	灰白	
41	111	730	1	SK56	弥生土器	外反口縁壺	30	反			10.4	にぶい黄橙	
41	112	814	1	SK56	弥生土器	小型壺	5	反			10.9	にぶい黄橙	
41	113	825	1	SK56	弥生土器	小型壺	5	反			8.8	にぶい橙	頸径5.9
41	114	604	1	SK56	弥生土器	折返口縁壺	5					浅黄橙	
41	115	769	1	SK56	弥生土器	壺	5					にぶい橙	
41	116	676	1	SK56	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
41	117	776	1	SK56	弥生土器	壺	5					灰白	
41	118	676	1	SK56	弥生土器	壺	5					灰白	
41	119	604	1	SK56	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
41	120	780	1	SK56	弥生土器	壺	5					灰白	
41	121	771	1	SK56	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
41	122	604	1	SK56	弥生土器	壺	5					浅黄橙	
41	123	604	1	SK56	弥生土器	壺	5					灰白	
41	124	604	1	SK56	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
41	125	746	1	SK56	弥生土器	装飾直口鉢	20	反			12.6	浅黄橙	
41	126	676	1	SK56	弥生土器	装飾直口鉢	5					にぶい黄橙	
41	127	828	1	SK56	弥生土器	有台小型壺	50					淡黄	脚径4.4、脚頸径3.3
41	128	733	1	SK56	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			24.2	にぶい橙	
41	129	736	1	SK56	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			23.0	浅黄橙	
41	130	827	1	SK56	弥生土器	外反坏部高杯	5					にぶい黄橙	
41	131	759	1	SK56	弥生土器	碗形坏部高杯	10	反			21.8	橙	
41	132	761	1	SK56	弥生土器	甕	5	反			20.6	にぶい橙	
41	133	806	1	SK56	弥生土器	甕	5					にぶい黄橙	
41	134	812	1	SK56	弥生土器	台付甕	10					にぶい黄	脚径69.9、脚頸径5.2
42	135	976	1	SK84	弥生土器	折返口縁壺	5	反			16.9	にぶい黄橙	
42	136	1004	1	SK84	弥生土器	片口瓢壺	100			11.5	10.0	橙	底径3.0
42	137	995・961	1	SK84	弥生土器	甕	50	反	23.4		19.3	にぶい黄橙	
42	138	972	1	SK84	弥生土器	甕	70		20.2		17.4	にぶい黄橙	
42	139	969・961	1	SK84	弥生土器	甕	50		22.3		19.3	にぶい褐	
43	140	2663・2670	2	SK231	弥生土器	外反口縁壺	20				15.3	にぶい黄橙	
43	141	2684・2674	2	SK231	弥生土器	外反口縁壺	10	反			14.0	灰黄	
43	142	2722	2	SK231	弥生土器	直立口縁壺	30				12.0	淡黄	
43	143	2636	2	SK231	弥生土器	直立口縁壺	50		12.9		8.1	灰黄	
43	144	2712・2641	2	SK231	弥生土器	折返口縁壺	40				14.5	にぶい橙	
43	145	2589	2	SK231	弥生土器	複合口縁壺	10	反			17.8	にぶい黄橙	
43	146	2637・2659	2	SK231	弥生土器	壺	50		21.8			にぶい橙	底径6.2
43	147	2648・2716	2	SK231	弥生土器	壺	20					浅黄橙	頸径8.1
43	148	2667	2	SK231	弥生土器	壺	5					にぶい橙	

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
43	149	2680	2	SK231	弥生土器	鉢	30	反	12.8		12.6	にぶい橙	
43	150	2656・2659	2	SK231	弥生土器	外反坏部高杯	20				24.6	にぶい橙	
43	151	2699	2	SK231	弥生土器	外反坏部高杯	20	反			19.8	にぶい黄橙	
43	152	2715	2	SK231	弥生土器	内彎坏部高杯	70	反	18.5	16.5	17.4	浅黄橙	脚径10.6、脚頸径3.6
43	153	2708	2	SK231	弥生土器	高杯	30	反				浅黄橙	脚径14.1、脚頸径4.0
43	154	2709	2	SK231	弥生土器	高杯	60					浅黄橙	脚径8.3、脚頸径3.4
43	155	2726	2	SK231	弥生土器	甕	10	反			22.3	灰黄褐	
43	156	2630	2	SK231	弥生土器	甕	20		21.4		17.5	にぶい黄褐	
43	157	2589・2655	2	SK231	弥生土器	甕	20	反	22.5		22.2	にぶい黄橙	
43	158	2697	2	SK231	弥生土器	甕	10	反			18.4	にぶい黄橙	
43	159	2678	2	SK231	弥生土器	甕	20	反	26.0		24.8	にぶい褐	
43	160	2676	2	SK231	弥生土器	台付甕	10					灰黄褐	脚頸径5.5
43	161	2702	2	SK231	弥生土器	台付甕	30	反				にぶい橙	脚径8.1
43	162	2705	2	SK231	弥生土器	台付甕	30					橙	脚径7.1
44	163	4238	3	SK339	弥生土器	装飾直口鉢	5	反			15.3	橙	
44	164	4242・4250	3	SK339	弥生土器	く字碗形坏部高杯	70			25.4	30.1	にぶい黄橙	脚径16.7、脚頸径4.6
44	165	4244	3	SK339	弥生土器	高杯	40					にぶい黄橙	脚頸径4.5
44	166	4246	3	SK339	弥生土器	高杯	40					灰黄	脚径10.9、脚頸径4.3
44	167	4237	3	SK339	弥生土器	甕	10	反	18.0		15.0	黒褐	
44	168	4248	3	SK339	弥生土器	甕	5	反			19.9	にぶい黄褐	
44	169	4247	3	SK339	弥生土器	台付甕	30					にぶい橙	脚径10.2
45	170	4302	3	SK346	弥生土器	直立口縁壺	80		12.6	13.7	6.6	浅黄橙	底径5.0
45	171	4300	3	SK346	弥生土器	直立口縁壺	50	反	14.2		8.4	橙	
45	172	4308	3	SK346	弥生土器	内彎口縁壺	10	反			13.4	橙	
45	173	4307	3	SK346	弥生土器	小型壺	60		8.0			にぶい橙	底径3.9
45	174	4301	3	SK346	弥生土器	小型壺	60		9.9			橙	底径3.8
45	175	4303	3	SK346	弥生土器	折返口縁壺	20				25.4	にぶい橙	
45	176	4271・4273	3	SK346	弥生土器	壺	30	反				灰黄	頸径13.4
45	177	4305	3	SK346	弥生土器	甕	30	反	25.0		21.6	にぶい黄橙	
45	178	4304	3	SK346	弥生土器	高杯	60					にぶい橙	脚径10.2、脚頸径3.4
45	179	4306	3	SK346	弥生土器	外反坏部高杯	60					橙	脚頸径4.0
45	180	4265	3	SK346	弥生土器	台付甕	30					灰黄褐	脚径9.6
45	181	4263	3	SK346	弥生土器	台付甕	20	反				にぶい橙	脚径9.6、脚頸径5.2
45	182	4314	3	SK347	弥生土器	壺	40	反	25.6			にぶい黄橙	
45	183	4312	3	SK347	弥生土器	壺	5	反				にぶい黄橙	
45	184	4319	3	SK347	弥生土器	く字鉢	5	反			23.6	にぶい黄橙	
45	185	4321	3	SK347	弥生土器	く字碗形坏部高杯	10	反			27.2	にぶい橙	
45	186	4311	3	SK347	弥生土器	高杯	30					にぶい黄橙	脚頸径4.3
45	187	4321	3	SK347	弥生土器	甕	10				19.8	にぶい黄橙	
46	188	4334・4345	3	SK351	弥生土器	く字鉢	40	反	15.4		14.6	にぶい黄橙	
46	189	4354	3	SK351	弥生土器	く字鉢	40	反	13.6		12.7	にぶい黄橙	
46	190	4360	3	SK351	弥生土器	小型直口鉢	5	反	7.0		6.6	にぶい橙	
46	191	4349	3	SK351	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			22.6	にぶい黄橙	
46	192	4359	3	SK351	弥生土器	高杯	50					にぶい黄橙	脚頸径4.6
46	193	4353	3	SK351	弥生土器	高杯	50					にぶい黄橙	脚頸径4.8
46	194	4358	3	SK351	弥生土器	甕	40	反	22.9		20.0	にぶい橙	
46	195	2730	3	SK351	弥生土器	甕	20				16.1	にぶい黄橙	
46	196	4357	3	SK351	弥生土器	台付甕	30					灰黄褐	脚径9.6、脚頸径5.3
47	197	4405	3	SK352	弥生土器	内彎口縁壺	20				16.3	にぶい黄橙	頸径8.0
47	198	4390	3	SK352	弥生土器	内彎口縁壺	30				16.1	にぶい黄橙	頸径8.2
47	199	4362・4411	3	SK352	弥生土器	拡張口縁壺	20				15.0	浅黄橙	
47	200	4401	3	SK352	弥生土器	拡張口縁壺	10	反			15.8	浅黄橙	頸径9.1
47	201	4404・4412	3	SK352	弥生土器	拡張口縁壺	30		13.6		9.2	橙	頸径6.4
47	202	4376	3	SK352	弥生土器	く字鉢	30	反	15.0		13.6	にぶい黄橙	
47	203	4391	3	SK352	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			24.4	にぶい黄橙	
47	204	4374	3	SK352	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			21.0	浅黄橙	
47	205	4408	3	SK352	弥生土器	外反坏部高杯	20	反			22.7	灰白	
47	206	4411	3	SK352	弥生土器	外反坏部高杯	20	反			20.4	にぶい黄橙	
47	207	4372・4409	3	SK352	弥生土器	外反坏部高杯	80			17.2	21.8	にぶい黄橙	脚径12.4、脚頸径4.2
47	208	4380・4400	3	SK352	弥生土器	外反坏部高杯	50				21.6	にぶい黄橙	脚頸径4.2
47	209	4403	3	SK352	弥生土器	高杯	40					にぶい黄橙	脚頸径4.6
47	210	4391	3	SK352	弥生土器	高杯	40					浅黄橙	脚頸径4.2
47	211	4406	3	SK352	弥生土器	高杯	60					にぶい黄橙	脚径12.1、脚頸径4.2
47	212	4411	3	SK352	弥生土器	高杯	5	反				灰白	脚径115.2
47	213	4371	3	SK352	弥生土器	高杯	10	反				浅黄橙	脚径15.6
47	214	4399	3	SK352	弥生土器	高杯	20					にぶい橙	脚頸径4.4
47	215	4411	3	SK352	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	脚径8.6、脚頸径3.3
47	216	4402・4396	3	SK352	弥生土器	台付甕	80		22.3	29.1	16.9	にぶい黄橙	脚径10.1、脚頸径5.8
47	217	4365	3	SK352	弥生土器	甕	20	反	18.4		16.4	灰黄褐	
47	218	4363	3	SK352	弥生土器	台付甕	30					灰黄	脚径9.4、脚頸径5.2
47	219	4397	3	SK352	弥生土器	台付甕	20					灰黄褐	脚径6.9、脚頸径4.7
47	220	4398	3	SK352	弥生土器	台付甕	30					にぶい橙	脚径8.4、脚頸径5.1
48	221	4528	3	SK361	弥生土器	直立口縁壺	95		14.7	13.7	9.2	にぶい橙	底径5.5
48	222	4484	3	SK361	弥生土器	拡張口縁壺	10				18.0	浅黄橙	

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
48	223	4456	3	SK361	弥生土器	折返口縁壺	20				16.8	浅黄橙	頸径10.3
48	224	4443	3	SK361	弥生土器	折返口縁壺	10	反			16.0	浅黄橙	
48	225	4544	3	SK361	弥生土器	折返口縁壺	30	反			12.7	淡黄	頸径9.0
48	226	4542	3	SK361	弥生土器	折返口縁壺	20				13.8	にぶい橙	
48	227	4496・4572	3	SK361	弥生土器	折返口縁壺	20				12.4	にぶい黄橙	
48	228	4533・4485	3	SK361	弥生土器	内彎口縁壺	30				18.0	にぶい黄橙	頸径9.6
48	229	4523・4467	3	SK361	弥生土器	内彎口縁壺	30		23.1		15.9	にぶい黄橙	
48	230	4465	3	SK361	弥生土器	内彎口縁壺	20				17.8	にぶい黄橙	
48	231	4478	3	SK361	弥生土器	内彎口縁壺	20				17.0	浅黄橙	
48	232	4527	3	SK361	弥生土器	内彎口縁壺	20				17.3	にぶい黄橙	
48	233	4447	3	SK361	弥生土器	内彎口縁壺	20				13.2	にぶい黄橙	
48	234	4441・4442	3	SK361	弥生土器	複合口縁壺	40				23.2	にぶい黄橙	頸径9.4
48	235	4586・4486	3	SK361	弥生土器	複合口縁壺	20				21.6	橙	頸径13.6
48	236	4572	3	SK361	弥生土器	壺	30	反	16.6		10.8	灰黄	
48	237	4572	3	SK361	弥生土器	壺	5					浅黄橙	
48	238	4572	3	SK361	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
48	239	4572	3	SK361	弥生土器	壺	5					灰白	
48	240	4473	3	SK361	弥生土器	壺	5					浅黄橙	
48	241	4535	3	SK361	弥生土器	壺	10	反	40.8			にぶい黄橙	
49	242	4522・4498	3	SK361	弥生土器	く字鉢	30		22.9		16.0	にぶい橙	
49	243	4446・4572	3	SK361	弥生土器	く字鉢	40	反			23.4	にぶい黄橙	
49	244	4529	3	SK361	弥生土器	装飾小型直口鉢	90			7.5	7.7	灰白	底径2.7
49	245	4572	3	SK361	弥生土器	瓢壺	5					浅黄橙	
49	246	4492	3	SK361	弥生土器	小型直口鉢	80			6.3	8.8	にぶい橙	底径4.4
49	247	4490	3	SK361	弥生土器	小型壺	50		10.5			にぶい黄橙	底径3.0
49	248	4491	3	SK361	弥生土器	小型壺	70		10.2			橙	底径3.2
49	249	4452・4468	3	SK361	弥生土器	碗形坏部高杯	20	反			29.8	にぶい橙	脚頸径4.9
49	250	4526・4518	3	SK361	弥生土器	碗形坏部高杯	50				26.8	にぶい黄橙	
49	251	4512・4532	3	SK361	弥生土器	高杯	30					橙	脚径14.4
49	252	4516・4503	3	SK361	弥生土器	甕	20		19.8		16.2	明褐灰	
49	253	4549	3	SK361	弥生土器	甕	20	反	15.2		11.5	灰褐	
49	254	458	3	SK361	弥生土器	甕	30	反			20.0	浅黄橙	
49	255	4525	3	SK361	弥生土器	甕	10	反			16.6	浅黄橙	
49	256	4446	3	SK361	弥生土器	台付甕	30					にぶい黄橙	脚径8.7、脚頸径5.1
49	257	4514	3	SK361	弥生土器	大型甕	10	反			46.0	にぶい橙	
57	258	58	1	SK01	弥生土器	壺	5					にぶい橙	
57	259	174	1	SK02	弥生土器	小型直立口縁壺	50		13.6	14.4	8.8	にぶい橙	底径4.9
57	260	60	1	SK03	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
57	261	60・192	1	SK03	弥生土器	複合口縁壺	10	反			26.4	にぶい橙	
57	262	183・60	1	SK03	弥生土器	壺	70		25.9			にぶい橙	底径5.9
57	263	296	1	SK20	弥生土器	外反坏部高杯	5	反			21.5	橙	
57	264	299	1	SK20	弥生土器	外反坏部高杯	5					にぶい黄橙	
57	265	594	1	SK43	弥生土器	小型内彎口縁壺	5	反			9.2	明褐	
57	266	595	1	SK43	弥生土器	壺	5					浅黄橙	
57	267	515	1	SK43	弥生土器	壺	5					浅黄橙	
57	268	592	1	SK43	弥生土器	台付甕	5	反				浅黄橙	脚径10.7
57	269	643	1	SK50	弥生土器	壺	5					橙	
57	270	563	1	SK50	弥生土器	壺	5					浅黄橙	
57	271	530	1	SK50	弥生土器	瓢壺	10	反			10.0	にぶい黄橙	
57	272	545	1	SK50	弥生土器	内彎口縁細頸壺	10	反			12.6	にぶい黄橙	
57	273	642	1	SK50	弥生土器	高杯	20	反				にぶい黄橙	脚径13.6
57	274	640	1	SK50	弥生土器	高杯	40					橙	脚径12.4
57	275	703	1	SK50	弥生土器	台付甕	10	反				にぶい橙	脚径9.8、脚頸径5.2
57	276	562	1	SK50	石製品	叩き石	100		12.2	8.3	3.0		384.3g、流紋岩
57	277	577	1	SK57	弥生土器	装飾高杯	5	反				灰黄褐	
57	278	574	1	SK59	弥生土器	く字碗形坏部高杯	5	反			22.1	橙	
58	279	267	1	SK69	弥生土器	内彎口縁壺	10	反			14.8	にぶい橙	頸径9.4
58	280	1028	1	SK79	弥生土器	外反坏部高杯	20	反			19.9	にぶい黄橙	
58	281	1026	1	SK79	弥生土器	高杯	10					にぶい褐	脚頸径3.4
58	282	1027	1	SK79	弥生土器	高杯	40					にぶい橙	脚頸径4.5
58	283	2205・2206	2	SK208	弥生土器	く字鉢	80		10.1	8.0	9.2	浅黄橙	
58	284	2091	2	SK208	弥生土器	く字碗形坏部高杯	20	反			21.4	浅黄橙	
58	285	2131・2135	2	SK209	弥生土器	壺	60		16.2			にぶい橙	底径3.2
58	286	2137	2	SK209	弥生土器	壺	20					にぶい橙	底径4.6
58	287	2138	2	SK209	弥生土器	く字鉢	30	反	18.6		18.6	淡橙	
58	288	2128	2	SK209	弥生土器	く字鉢	10	反	14.4		15.0	にぶい橙	
58	289	2152	2	SK212	弥生土器	壺	5					灰白	
58	290	2102	2	SK212	弥生土器	外反坏部高杯	5	反			24.0	明赤褐	
58	291	2761	2	SK212	弥生土器	高杯	40					橙	脚頸径4.8
58	292	2153	2	SK212	弥生土器	高杯	40					にぶい橙	脚頸径4.8
58	293	2145	2	SK212	弥生土器	高杯	20	反				橙	脚頸径5.0
58	294	2150	2	SK212	弥生土器	高杯	20					にぶい橙	脚頸径3.4
58	295	2151	2	SK212	弥生土器	甕	10					灰黄褐	
59	296	2212	2	SK215	弥生土器	高杯	50	反				浅黄橙	脚頸径4.4

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
59	297	2207	2	SK215	弥生土器	甕	30	反	17.0		17.2	にぶい黄橙	
59	298	2447・2448	2	SK233	弥生土器	台付甕	50		20.4	23.8	19.5	にぶい褐	脚径9.2、脚頸径5.7
59	299	4119	3	SK304	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
59	300	4117	3	SK304	弥生土器	高杯	30					橙	脚頸径4.1
59	301	4118	3	SK304	弥生土器	高杯	30					橙	脚頸径4.4
59	302	4136	3	SK315	弥生土器	壺	10	反				橙	
59	303	4140	3	SK315	弥生土器	直口壺	20	反			10.4	にぶい黄橙	
59	304	4139	3	SK315	弥生土器	く字鉢	30		11.3	8.7	11.5	にぶい橙	底径5.6
59	305	4139	3	SK315	弥生土器	外反坏部高杯	20	反			23.2	浅黄橙	
59	306	4166	3	SK320	石製品	砥石	90		6.5	4.1	2.1		47.8g、流紋岩
59	307	4156	3	SK320	弥生土器	装飾く字鉢	5	反			12.7	明赤褐	
59	308	4152	3	SK320	弥生土器	高杯	10	反				浅黄橙	脚径12.9
59	309	4166	3	SK320	弥生土器	甕	40	反	22.4		18.4	褐灰色に橙	
59	310	4212	3	SK337	弥生土器	外反口縁壺	20	反			14.3	にぶい黄橙	
59	311	4234	3	SK337	弥生土器	小型壺	80		11.7			にぶい黄橙	底径5.2
59	312	4217	3	SK337	弥生土器	複合口縁壺	10	反			25.8	浅黄橙	
59	313	4219	3	SK337	弥生土器	く字鉢	5	反			9.8	にぶい黄橙	
59	314	4225	3	SK337	弥生土器	く字鉢	20	反			10.1	浅黄橙	
59	315	4219	3	SK337	弥生土器	装飾く字鉢	10	反			6.4	にぶい黄橙	頸径5.4
59	316	4329	3	SK350	弥生土器	高杯	50					にぶい橙	菊川系、脚径10.6、脚頸径4.3
59	317	4420	3	SK354	弥生土器	拡張口縁壺	5	反			24.7	浅黄橙	
59	318	4414	3	SK354	弥生土器	く字鉢	5	反			9.5	橙	
59	319	4415	3	SK354	弥生土器	台付甕	10					灰黄	脚頸径5.2
59	320	4425	3	SK355	弥生土器	壺	10					浅黄橙	頸径8.0
59	321	4423	3	SK355	弥生土器	高杯	30					橙	脚頸径3.5
59	322	4690・4691	3	SK356	弥生土器	内彎口縁壺	40	反			13.0	にぶい褐	頸径7.8
64	323	315	1	SD03	弥生土器	高杯	30	反				にぶい黄橙	脚頸径4.6
64	324	317	1	SD03	弥生土器	台付甕	10	反				にぶい黄橙	脚頸径5.8
64	325	917	1	SD13	弥生土器	折返口縁壺	5					灰黄褐	
64	326	912	1	SD13	弥生土器	複合口縁壺	5	反			24.3	橙	
64	327	922	1	SD13	弥生土器	く字鉢	10	反			13.8	灰黄褐	
64	328	919	1	SD13	弥生土器	甕	10				15.3	にぶい黄橙	
64	329	1043	2	SD17	弥生土器	甕	10	反			19.0	にぶい黄褐	
64	330	2117	2	SD51	弥生土器	小型壺	90		11.1	9.6	7.9	浅黄橙	
64	331	2118	2	SD51	弥生土器	高杯	30	反				橙	脚頸径3.0
65	332	2590	2	SD58	弥生土器	折返口縁壺	20				14.0	浅黄橙	頸径9.4
65	333	2446	2	SD58	弥生土器	内彎口縁細頸壺	10				12.4	にぶい黄橙	
65	334	2249	2	SD58	弥生土器	外反坏部高杯	5	反			24.2	にぶい橙	
65	335	2591	2	SD58	弥生土器	碗形坏部高杯	5	反			25.2	浅黄橙	
65	336	2338	2	SD58	弥生土器	有稜高杯	10	反	12.8		12.4	にぶい黄橙	
65	337	2338	2	SD58	弥生土器	高杯	10	反				にぶい黄橙	脚径12.0
65	338	2591	2	SD58	弥生土器	甕	10	反	18.9		18.8	浅黄	
65	339	2591	2	SD58	弥生土器	甕	5	反	19.8		19.8	にぶい黄橙	
65	340	2591	2	SD58	弥生土器	甕	20	反	24.3		23.2	にぶい黄橙	
65	341	2591	2	SD58	弥生土器	台付甕	20					にぶい黄橙	脚径10.5、脚頸径6.3
65	342	2738	2	SD60	弥生土器	折返口縁壺	10	反			14.0	にぶい黄橙	頸径9.2
65	343	2740	2	SD60	弥生土器	外反口縁壺	10	反			9.7	橙	頸径6.0
65	344	2756	2	SD60	弥生土器	壺	5					灰白	
65	345	2736	2	SD60	弥生土器	壺	10					にぶい褐	底径6.8
65	346	2740	2	SD60	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			24.0	浅黄橙	
65	347	2737	2	SD60	弥生土器	高杯	10					浅黄橙	脚頸径4.0
65	348	2739	2	SD60	弥生土器	台付甕	10					灰黄褐	脚頸径5.2
66	349	4581	3	SD102	石器	磨製石斧	60		6.7	5.4	1.4		66.5g、緑色片岩
68	350	344	1	SP24	弥生土器	小型壺	60		9.0			にぶい黄橙	底径3.2
68	351	491	1	SP73	弥生土器	壺	5					灰黄褐	
68	352	894	1	SP131	弥生土器	台付甕	30					にぶい橙	脚径10.0
68	353	962	1	SP170	弥生土器	甕	5					にぶい黄褐	
68	354	964	1	SP172	弥生土器	甕	10		20.3		20.0	にぶい黄橙	
68	355	2729	2	SP351	弥生土器	壺	5					にぶい橙	
68	356	3697	3	SP575	弥生土器	台付甕	10	反				にぶい橙	脚径9.0、脚頸径4.8
68	357	3716	3	SP597	石製品	砥石	90		9.4	9.3	2.9		278.5g、流紋岩
68	358	3787	3	SP713	弥生土器	内彎口縁壺	20	反			14.6	橙	
68	359	3788	3	SP713	弥生土器	外反坏部高杯	10	反			20.6	橙	
68	360	3852	3	SP786	弥生土器	壺	5					にぶい橙	
68	361	3854	3	SP786	弥生土器	高杯	10	反				にぶい橙	脚径16.0
68	362	3874	3	SP813	弥生土器	壺	5					灰白	
68	363	3933	3	SP874	弥生土器	台付甕	30					にぶい黄橙	脚径7.5
68	364	4045	3	SP1009	石製品	砥石	80		15.1	8.7	6.8		1161.6g、流紋岩
70	365	2021	2	包含層	土師器	二重口縁壺	5					淡黄	
70	366	2012	2	包含層	弥生土器	装飾く字鉢	5					にぶい橙	
70	367	2012	2	包含層	弥生土器	複合口縁壺	10	反			19.7	灰白	
70	368	2012	2	包含層	弥生土器	複合口縁壺	10	反			23.8	灰白	
70	369	4176	3	包含層	弥生土器	壺	5	反				にぶい橙	
70	370	2012	2	包含層	弥生土器	壺	5					灰白	

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
70	371	2021	2	包含層	弥生土器	壺	5					浅黄橙	
70	372	2012	2	包含層	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	
70	373	2012	2	包含層	弥生土器	壺	5					にぶい橙	
70	374	2012	2	包含層	弥生土器	壺	5					灰白	
70	375	2045	2	包含層	弥生土器	壺	5					灰白	
70	376	142	1	包含層	弥生土器	壺	5					灰黄	
70	377	3453	3	包含層	弥生土器	小型壺	30	反				にぶい橙	底径4.3
70	378	2001	2	包含層	弥生土器	小型壺	70		9.2			にぶい橙	底径2.8
70	379	2012	2	包含層	弥生土器	く字鉢	20	反	21.8		20.4	にぶい橙	
70	380	2012	2	包含層	弥生土器	外反坏部高杯	5	反			29.0	にぶい橙	
70	381	2012	2	包含層	弥生土器	外反坏部高杯	5					にぶい黄橙	
70	382	2012	2	包含層	弥生土器	高杯	60					にぶい黄橙	脚頸径4.3
70	383	2012	2	包含層	弥生土器	高杯	40	反				にぶい橙	脚径15.0、脚頸径4.8
70	384	2012	2	包含層	弥生土器	高杯	30	反				にぶい黄橙	脚径13.8、脚頸径4.2
71	385	391	1	包含層	弥生土器	装飾高杯	20	反				橙	脚径14.2
71	386	2012	2	包含層	弥生土器	甕	10	反	19.2		17.2	灰黄褐	
71	387	33	1	包含層	弥生土器	甕	30	反	18.4		15.2	にぶい褐	
71	388	53	1	包含層	弥生土器	甕	30	反	23.6		19.2	にぶい黄橙	
71	389	3309	3	包含層	弥生土器	Ｓ字甕	5	反			15.8	灰黄褐	
71	390	3228	3	包含層	弥生土器	台付甕	30					灰黄褐	脚径8.6
71	391	3405	3	包含層	弥生土器	台付甕	30					橙	脚頸径3.4
71	392	4776	3	包含層	石製品	叩き石	100		5.4	4.5	2.2		87.3g、砂岩
71	393	608	1	SK60	石器	磨製石斧	100		5.2	3.3	1.2		41.0g、泥岩
72	394	4167	3	包含層	石製品	砥石	100						18.9g、軽石
72	395	2740	2	包含層	石製品	砥石	100		3.8	2.5	2.2		5.8g、軽石
72	396	3692	3	包含層	石製品	砥石	100		5.6	4.8	3.8		30.2g、軽石
72	397	49	1	包含層	石製品	砥石	100		9.3	6.5	4.1		37.5g、軽石
72	398	2012	2	包含層	石製品	砥石	100						19.9g、軽石
72	399	2085	2	包含層	石製品	砥石	100						26.0g、軽石
84	1	2089	2	SK207	土師器	摘蓋	30			2.8	16.2	浅黄	摘径2.5
84	2	4148	3	SK317	灰釉陶器	長頸壺	10	反			12.2	灰白	
84	3	4148	3	SK317	土師器	坏	30	反		3.3	12.0	灰白	底径5.6
84	4	4147	3	SK317	土師器	甕	10	反			24.4	灰白	
84	5	4148	3	SK317	土師器	甕	5	反			26.6	浅黄橙	
84	6	4148	3	SK317	土師器	甕	5	反			23.0	淡黄	
84	7	4148	3	SK317	土師器	甕	10	反				にぶい橙	底径5.7
84	8	4169	3	SK322	土師器	甕	5	反			23.8	にぶい黄橙	
84	9	4170	3	SK322	土師器	甕	5	反			23.2	にぶい黄橙	
84	10	4171	3	SK322	土師器	鉢	10	反	16.7		17.6	にぶい橙	
84	11	4179・4178	3	SK325	土師器	甕	10	反			26.3	にぶい黄橙	
84	12	4198	3	SK332	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径7.2
84	13	4197	3	SK332	灰釉陶器	壺	10	反				灰	底径5.5
84	14	4203	3	SK333	灰釉陶器	碗	50					灰白	底径8.0
84	15	3561・4207	3	SK333	灰釉陶器	長頸壺	20	反				灰	頸径5.0
84	16	4204	3	SK333	灰釉陶器	壺	5	反				灰白	底径16.2
84	17	4210	3	SK334	灰釉陶器	壺	40					にぶい黄橙	底径5.5
89	18	4614	3	SD107	須恵器	摘蓋	30	反			22.4	灰	
89	19	4689	3	SD107	須恵器	坏蓋	10	反			18.0	灰白	
89	20	4689・3017	3	SD107	須恵器	坏蓋	10	反			17.8	灰白	
89	21	4619	3	SD107	須恵器	摘蓋	50				16.6	灰	
89	22	4599	3	SD107	須恵器	摘蓋	60				15.8	灰	
89	23	4689	3	SD107	須恵器	摘蓋	10					灰白	摘径2.8
89	24	4689	3	SD107	須恵器	有台坏身	10	反				灰白	底径8.8
89	25	4689	3	SD107	須恵器	有台坏身	10	反				灰白	底径9.5
89	26	4689	3	SD107	須恵器	箱坏	20	反		6.2	17.2	灰白	底径11.6
89	27	4689	3	SD107	須恵器	箱坏	20	反				灰白	底径11.0
89	28	4618	3	SD107	須恵器	箱坏	30	反		3.9	11.6	灰	底径7.6
89	29	4596	3	SD107	須恵器	箱坏	60			3.5	10.5	黄灰	底径8.6
89	30	4689	3	SD107	須恵器	箱坏	10	反				灰白	底径8.2
89	31	4685	3	SD107	須恵器	箱坏	50			3.6	9.8	灰	底径6.0
89	32	4688	3	SD107	須恵器	箱坏	20					灰白	底径7.9、墨書
89	33	4587	3	SD107	須恵器	皿	40	反		2.2	16.0	灰	
89	34	4689	3	SD107	須恵器	皿	10	反			14.4	灰白	
89	35	4644	3	SD107	須恵器	高杯	10	反				灰	脚径12.8
89	36	4682	3	SD107	須恵器	鉢	30	反	22.1		20.0	灰	
89	37	4669	3	SD107	須恵器	甕	20	反			33.0	灰白	
89	38	4689	3	SD107	須恵器	甕	20	反			24.0	灰	
90	39	4689・3388	3	SD107	灰釉陶器	皿	20	反		2.5	16.0	灰白	底径9.0
90	40	4600	3	SD107	灰釉陶器	皿	40	反		2.5	15.4	灰オリーブ	底径8.4
90	41	3021	3	SD107	灰釉陶器	皿	10	反		2.9	15.4	灰	底径7.0
90	42	4689	3	SD107	灰釉陶器	皿	10	反			15.0	灰白	
90	43	4689	3	SD107	灰釉陶器	皿	10	反			15.6	灰白	
90	44	4642	3	SD107	灰釉陶器	碗	60					浅黄橙	底径6.6
90	45	4641	3	SD107	灰釉陶器	碗	60			6.9	16.9	灰白	底径7.0

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
90	46	4653	3	SD107	灰釉陶器	碗	70			6.1	14.9	灰黄	底径6.4
90	47	4689・3031	3	SD107	灰釉陶器	碗	20	反		4.5	16.5	灰白	底径7.7
90	48	4689・3424	3	SD107	灰釉陶器	碗	30	反				灰白	底径5.8
90	49	4628	3	SD107	灰釉陶器	碗	40			4.1	13.9	灰白	底径5.9
90	50	4621	3	SD107	灰釉陶器	碗	30					灰白	底径5.6
90	51	4648	3	SD107	灰釉陶器	碗	20					灰	底径6.6
90	52	4689	3	SD107	灰釉陶器	長頸壺	10	反				灰	頸径5.2
90	53	4637	3	SD107	灰釉陶器	壺	40	反	18.4			灰	底径10.4
90	54	4638	3	SD107	灰釉陶器	平瓶	10	反	22.4		8.6	にぶい黄褐	
90	55	4671	3	SD107	灰釉陶器	平瓶	10		18.0		5.6	灰	
90	56	4597	3	SD107	灰釉陶器	壺	10					赤灰	底径7.8
90	57	4590	3	SD107	灰釉陶器	壺	10					灰白	底径10.2
90	58	4647	3	SD107	灰釉陶器	壺	30	反				灰白	底径8.2
90	59	4689・3211	3	SD107	灰釉陶器	壺	10					灰白	底径12.6
90	60	4636	3	SD107	灰釉陶器	壺	5	反				灰	底径18.8
90	61	4018	3	SD107	土師器	有台坏	40	反		5.2	16.0	にぶい黄橙	底径9.0
90	62	4690	3	SD107	土師器	有台坏	60			4.5	13.0	にぶい黄橙	底径8.2
90	63	4690	3	SD107	土師器	有台坏	40					にぶい黄橙	
90	64	4690	3	SD107	土師器	坏	30	反			12.0	にぶい黄橙	
90	65	4595	3	SD107	土師器	坏	30	反		3.5	12.4	にぶい橙	底径8.6
90	66	4603	3	SD107	土師器	坏	30	反		3.8	12.2	にぶい橙	底径8.4
90	67	4690	3	SD107	土師器	坏	30	反		3.5	13.0	にぶい黄橙	
90	68	4665・4666	3	SD107	土師器	坏	30	反		4.0	12.0	にぶい黄橙	底径6.0
90	69	4667	3	SD107	土師器	坏	20	反		3.0	12.8	灰黄	底径8.8
90	70	4602	3	SD107	土師器	坏	30	反		3.2	12.2	にぶい黄橙	底径8.0
90	71	4691	3	SD107	土師器	坏	30	反		3.6	12.3	浅黄橙	
90	72	4034	3	SD107	土師器	坏	80			3.3	10.1	にぶい黄橙	底径7.4
90	73	4668	3	SD107	土師器	坏	20	反				にぶい橙	底径6.6
90	74	4690	3	SD107	土師器	坏	30	反			12.0	にぶい黄橙	
90	75	4042	3	SD107	土師器	坏	10	反			9.8	にぶい橙	
90	76	4684	3	SD107	土師器	坏	90			2.9	12.2	浅黄橙	底径6.8
90	77	4690	3	SD107	土師器	坏	20	反			13.8	浅黄	
90	78	4690	3	SD107	土師器	坏	30	反			12.8	にぶい黄橙	
90	79	4691	3	SD107	土師器	坏	20	反			13.6	にぶい黄橙	
90	80	4043	3	SD107	土師器	坏	90			3.9	12.7	にぶい黄橙	底径8.0
90	81	4690	3	SD107	土師器	坏	10	反			11.0	にぶい黄橙	
90	82	4690	3	SD107	土師器	坏	10	反			11.8	にぶい黄橙	
91	83	4690	3	SD107	土師器	坏	30	反		3.6	12.0	灰黄褐	底径7.6
91	84	4603	3	SD107	土師器	坏	50			4.1	12.0	にぶい黄橙	底径8.4
91	85	4612・4616	3	SD107	土師器	皿	100			2.6	15.3	にぶい黄橙	底径11.0
91	86	4690	3	SD107	土師器	皿	10	反		1.6	15.0	にぶい黄橙	
91	87	4690	3	SD107	土師器	皿	50			1.9	14.7	にぶい黄橙	
91	88	4656	3	SD107	土師器	皿	30	反		2.0	14.6	灰黄	
91	89	4691	3	SD107	土師器	皿	10	反		2.0	14.7	にぶい橙	
91	90	4690	3	SD107	土師器	皿	30	反		1.9	14.3	浅黄橙	
91	91	4690	3	SD107	土師器	皿	10	反		1.5	13.2	にぶい橙	
91	92	4018	3	SD107	土師器	鉢	10	反			23.6	にぶい黄橙	
91	93	4690	3	SD107	土師器	盤	20	反		3.7	22.2	にぶい黄橙	脚径12.4
91	94	4633	3	SD107	土師器	高盤	30					にぶい橙	脚頸径3.4
91	95	4617	3	SD107	土師器	甕	10	反			27.0	にぶい橙	
91	96	4041	3	SD107	土師器	甕	5	反			26.8	にぶい褐色	
91	97	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			27.0	にぶい黄橙	
91	98	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			26.8	にぶい橙	
91	99	4040	3	SD107	土師器	甕	5	反			24.4	にぶい黄橙	
91	100	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			25.6	にぶい黄橙	
91	101	4687	3	SD107	土師器	甕	10	反			23.8	浅黄橙	
91	102	4632	3	SD107	土師器	甕	5	反			24.8	にぶい黄橙	
91	103	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			24.8	灰白	
91	104	4690	3	SD107	土師器	甕	5	反			24.0	にぶい橙	
91	105	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			23.8	橙	
91	106	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			23.5	にぶい橙	
91	107	4632	3	SD107	土師器	甕	20	反	22.2		22.4	浅黄橙	
91	108	4680	3	SD107	土師器	甕	10	反			22.0	にぶい黄橙	
91	109	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			22.0	淡黄	
91	110	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			21.6	にぶい黄橙	
91	111	4690	3	SD107	土師器	甕	10	反			21.8	にぶい橙	
91	112	4690	3	SD107	土師器	甕	5	反			19.4	にぶい橙	
92	113	4832	3	SD109	金属製品	銅印			2.7	2.7	2.9		29.4g
93	114	4697	3	SD109	土師器	坏	90			3.6	11.2	にぶい橙	底径4.9、墨書
94	115	580	1	SD05	須恵器	壺	5	反			14.2	灰黄	
94	116	615	1	SD08	土師器	内彎坏	50	反		3.1	12.4	橙	暗文
94	117	2239	2	SD57	須恵器	壺	30					灰白	底径6.0
94	118	4575	3	SD101	灰釉陶器	碗	10	反			14.0	灰白	
94	119	4575	3	SD101	石製品	砥石	60		5.9	3.6	3.8		65.2g、流紋岩

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
94	120	4694	3	SD108	須恵器	皿	10	反			14.8	灰白	
94	121	4708	3	SD110	須恵器	有台坏	30					灰白	底径9.4
94	122	4705	3	SD110	灰釉陶器	碗	30	反		6.4	18.8	灰白	底径7.6
94	123	4710	3	SD110	須恵器	有台坏	10	反			16.1	灰	
94	124	4704	3	SD110	須恵器	有台坏	20	反		5.2	15.8	灰	底径9.1
94	125	4713	3	SD112	須恵器	皿	10	反		1.6	16.9	灰白	
94	126	4715	3	SD113	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径8.0
95	127	167	1	SP18	土師器	坏	20				13.9	にぶい橙	
95	128	853	1	SP39	須恵器	碗	5	反			13.9	灰	
95	129	620	1	SP39	土師器	皿	10	反		1.8	15.8	にぶい橙	
95	130	853	1	SP39	土師器	甕	5	反			19.4	橙	
95	131	439	1	SP47	土師器	甕	10	反			15.4	橙	
95	132	684	1	SP100	須恵器	有台坏	30	反			15.1	灰	
95	133	202	1	SP155	土師器	坏	5	反			13.8	にぶい橙	
95	134	3659	3	SP533	灰釉陶器	碗	10	反				黄灰	底径7.4
95	135	3665	3	SP539	灰釉陶器	碗	30	反				灰	底径6.0
95	136	3706	3	SP585	灰釉陶器	碗	10	反			15.4	灰白	
95	137	3712	3	SP593	須恵器	摘蓋	10					灰	摘径2.6
95	138	3733	3	SP620	土師器	甕	5	反			24.6	にぶい黄橙	
95	139	3733	3	SP620	灰釉陶器	碗	10	反			15.6	灰白	
95	140	3778	3	SP699	灰釉陶器	平瓶	5	反	16.8			灰黄	
95	141	3848	3	SP785	須恵器	皿	10	反		2.3	16.6	灰	底径11.2
95	142	3848	3	SP785	須恵器	壺	10	反	15.6			灰	
95	143	3927	3	SP868	土師器	甕	5	反			23.0	灰黄	
95	144	3980	3	SP939	灰釉陶器	壺	20	反				にぶい黄橙	底径10.2
98	145	4743	3	SE02	須恵器	摘蓋	10	反			22.8	灰白	
98	146	4736	3	SE02	須恵器	有台坏	30	反				灰白	底径8.8
98	147	4738	3	SE02	須恵器	有台坏	20	反				灰白	底径10.0
98	148	4741	3	SE02	須恵器	無台碗	20	反		15.0	14.5	灰白	底径4.4
98	149	4743	3	SE02	須恵器	皿	10	反		1.8	17.0	灰白	底径12.0
98	150	4742	3	SE02	須恵器	平瓶	20	反				灰白	底径11.6
98	151	4743	3	SE02	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径8.6
98	152	3419・4743	3	SE02	灰釉陶器	段皿	30	反		3.2	20.8	灰白	底径9.8
98	153	4743	3	SE02	灰釉陶器	段皿	10	反			19.0	灰白	
98	154	4742	3	SE02	灰釉陶器	皿	20	反		2.5	13.4	灰	底径5.9
98	155	4742	3	SE02	灰釉陶器	碗	20	反				灰白	底径5.5
98	156	4742	3	SE02	灰釉陶器	碗	30					灰黄	底径8.0
98	157	4743	3	SE02	灰釉陶器	碗	20	反				灰白	底径6.6
98	158	4743	3	SE02	灰釉陶器	長頸壺	20	反	17.0			灰白	
98	159	4744	3	SE02	土師器	内彎坏	5	反			19.8	にぶい橙	
98	160	4744	3	SE02	土師器	有台坏	30	反		4.5	13.8	にぶい黄橙	底径7.8
98	161	4743	3	SE02	土師器	有台坏	10				15.2	にぶい黄橙	
98	162	4743	3	SE02	土師器	坏	10	反			14.0	灰黄褐	
98	163	4744	3	SE02	土師器	坏	10	反		3.3	13.0	にぶい橙	底径9.8
98	164	4744	3	SE02	土師器	坏	20	反		3.0	12.0	にぶい黄橙	底径6.6
98	165	4744	3	SE02	土師器	坏	50	反		3.2	13.4	灰白	底径9.1
98	166	4744	3	SE02	土師器	甕	5	反			21.1	にぶい橙	
98	167	4744	3	SE02	土師器	甕	5	反			20.4	浅黄橙	
98	168	4743	3	SE02	須恵器	陶馬	10					灰	
98	169	4744	3	SE02	土製品	製塩土器	20					にぶい橙	
98	170	4830	3	SE02	木製品	井戸枠（側板）	70		102.8	42.5	4.2		
98	171	4831	3	SE02	木製品	井戸枠（側板）	70		103.4	44.8	4.6		
98	172	4826	3	SE02	木製品	井戸材（底板）	80		87.0	8.4	2.0		
98	173	4825	3	SE02	木製品	井戸材（底板）	100		83.0	9.8	2.0		
99	174	3279	3	包含層	須恵器	坏身	5		13.0		11.1	灰	
99	175	2032	2	包含層	須恵器	坏身	30		11.3	3.8	9.7	灰	底径4.5
99	176	2001	2	表土	須恵器	摘蓋	90			2.9	18.7	灰	摘径3.4
99	177	2011	2	包含層	須恵器	高杯	50					灰白	脚頸径3.7
99	178	3549	3	包含層	須恵器	高杯	60					灰	脚頸径4.0
99	179	31	1	包含層	須恵器	平瓶	30				7.5	褐灰	頸径5.1
99	180	3466	3	包含層	須恵器	摘蓋	20	反			17.9	灰白	
99	181	3278	3	包含層	須恵器	有台坏身	50					灰	底径9.6
99	182	3501	3	包含層	須恵器	箱坏	20	反		4.7	14.8	灰	底径10.9
99	183	3044・3048	3	包含層	須恵器	箱坏	30	反		4.5	12.0	灰白	底径9.8
99	184	3012	3	包含層	須恵器	箱坏	40	反		4.1	11.8	灰	底径8.0
99	185	3028	3	包含層	須恵器	箱坏	10	反			14.4	灰	
99	186	3568	3	包含層	須恵器	箱坏	30	反		4.2	9.8	灰	底径7.2
99	187	3389	3	包含層	須恵器	双耳箱坏	40	反		4.0	9.8	灰	底径7.5
99	188	3558	3	包含層	須恵器	箱坏	20	反				灰白	底径6.0、墨書
99	189	3559	3	包含層	須恵器	箱坏	40	反				灰	底径6.7、墨書
99	190	3527	3	包含層	須恵器	蓋	20	反		2.7	13.6	灰黄褐	底径7.2
99	191	3503	3	包含層	須恵器	盤	10	反		2.0	14.0	灰白	底径5.1
99	192	3385	3	包含層	須恵器	短頸壺	10		3.3		4.6	灰白	
99	193	3388	3	包含層	灰釉陶器	皿	30	反		2.4	16.0	灰白	底径8.7

Fig.	番号	取上番号	工区	遺　構	種　別	細　別	残存率	反転	器径	器高	口径	色　調	備　　考
99	194	3331	3	包含層	灰釉陶器	皿	5	反		5.5	16.0	灰白	底径9.4
99	195	3001	3	包含層	灰釉陶器	皿	50	反		3.1	15.4	灰白	底径6.4
99	196	377	1	包含層	灰釉陶器	碗	20	反				灰白	底径7.4
99	197	3588	3	包含層	灰釉陶器	碗	50	反		4.9	15.4	灰	底径7.3、墨書
99	198	3413	3	包含層	灰釉陶器	深碗	90			6.4	15.8	灰白	底径7.2
99	199	378	1	包含層	灰釉陶器	碗	60			3.9	14.4	灰オリーブ	底径6.8
99	200	3409	3	包含層	灰釉陶器	碗	40	反		5.3	15.6	灰白	底径6.6
99	201	3557	3	包含層	灰釉陶器	長頸壺	30	反			10.0	灰白	
99	202	3019	3	包含層	灰釉陶器	壺	40	反	14.8			灰白	底径8.2
99	203	18	1	包含層	灰釉陶器	仏餉器	30					灰白	脚径5.4
100	204	3328	3	包含層	土師器	有台坏	40			5.5	14.8	にぶい黄橙	底径7.5
100	205	3432	3	包含層	土師器	内彎坏	30	反		3.9	14.2	明赤褐	ヘラ記号
100	206	908	1	排水溝	土師器	坏	20	反		2.9	12.2	明赤褐	
100	207	113	1	包含層	土師器	坏	20	反		3.0	12.0	にぶい黄橙	
100	208	3082	3	包含層	土師器	坏	20	反		3.2	12.4	赤橙	
100	209	590	1	包含層	土師器	坏	30			3.5	12.8	赤橙	底径6.6
100	210	375	1	包含層	土師器	坏	20	反			13.4	褐灰	
100	211	3170	3	包含層	土師器	坏	10	反		3.2	13.5	赤橙	
100	212	3130	3	包含層	土師器	坏	30	反		3.3	12.4	赤橙	
100	213	3378	3	包含層	土師器	坏	50			4.1	12.2	明黄褐	
100	214	3432	3	包含層	土師器	坏	40	反		3.1	11.9	明赤褐	
100	215	3515	3	包含層	土師器	坏	40	反		3.4	11.8	にぶい黄橙	底径7.8
100	216	3093	3	包含層	土師器	台付碗	10					にぶい黄橙	脚径12.2
100	217	3004	3	包含層	土師器	甕	5	反			35.6	にぶい桐	
100	218	4166	3	SK320	土師器	甕	5	反			32.2	にぶい橙	
100	219	4182	3	SK325	土師器	甕	5	反			31.9	にぶい橙	
100	220	3003・3159	3	包含層	土師器	甕	60		26.0		25.0	にぶい橙	
100	221	3376・3379	3	包含層	土師器	甕	5	反			25.7	にぶい橙	
100	222	3374	3	包含層	土師器	甕	10	反			24.4	灰黄	
100	223	3370	3	包含層	土師器	甕	5	反			23.9	にぶい黄橙	
100	224	3560	3	包含層	土師器	甕	10	反			22.8	浅黄橙	
100	225	3146	3	包含層	土師器	甕	10	反			23.1	にぶい黄橙	
100	226	3334	3	包含層	土師器	甕	10	反			22.0	にぶい黄橙	
100	227	3392	3	包含層	土師器	甕	5				21.1	にぶい黄橙	
100	228	3144	3	包含層	土師器	甕	10				18.6	灰黄褐	
100	229	2022	2	包含層	土師器	甕	30					にぶい黄橙	底径6.4
100	230	3239	3	包含層	土師器	鉢	10	反	17.1		17.0	にぶい黄橙	
100	231	4160	3	SK320	土師器	鉢	10	反			12.8	浅黄橙	
100	232	3180	3	包含層	土師器	甕	10					にぶい黄橙	底径4.4
100	233	3295	3	包含層	土師器	甑	100					灰黄褐	
100	234	4764	3	包含層	石製品	砥石	50		6.2	5.2	2.4		86.6g、流紋岩
100	235	42	1	包含層	土師器	鉢形	95			2.5	5.0	にぶい黄橙	底径3.1
100	236	3216	3	包含層	土師器	壺形	95		3.6	2.6	3.0	灰黄褐	底径2.3
100	237	113	1	包含層	土師器	壺形	30	反		2.0	2.4	明黄褐	
100	238	4785	3	包含層	土師器	壺形	95		2.7	1.9	2.1	にぶい黄橙	
100	239	26	1	包含層	土製品	土馬	60					橙	
100	240	3518	3	包含層	緑釉陶器	稜碗	5	反			12.8	オリーブ黄	K90
101	241	3063	3	包含層	土師器	甕	10	反			22.5	橙	
102	242	3339	3	包含層	土製品	鞴			7.1	7.3	3.8		酸化：橙　還元：灰黄
102	243	2001	2	表土	土製品	鞴			3.9	7.8	4.3		酸化：橙　還元：灰黄
102	244	3339	3	包含層	土製品	鞴			4.9	3.3	3.5		酸化：にぶい橙　還元：灰黄
102	245	4094	3	SK301	土製品	鞴			4.1	5.0			酸化：橙　還元：灰白
102	246	4100	3	SK301	鉄製品	鉄滓			7.2	8.2	4.1		
102	247	4101	3	SK301	鉄製品	鉄滓			6.3	7.8	4.0		
102	248	4106	3	SK301	鉄製品	鉄滓			7.3	7.6	3.7		
102	249	4729	3	SD118	鉄製品	鉄滓			6.7	8.8	4.3		
102	250	4017	3	SP982	鉄製品	鉄滓			5.2	7.2	2.5		
102	251	3338	3	包含層	鉄製品	鉄滓			6.6	8.8	3.6		
102	252	3340	3	包含層	鉄製品	鉄滓			5.6	4.2	2.5		
102	253	4793		表採	鉄製品	鉄滓			6.0	6.4	2.3		
102	254	4761	3	包含層	鉄製品	鉄滓			4.2	5.6	2.7		
107	255	352	1	SE01	中世陶器	山茶碗	10	反				灰白	底径5.8
107	256	4746	3	SE03	中世陶器	山茶碗	90			6.1	16.5	灰白	底径7.3
107	257	4749	3	SE04	中世陶器	山皿	70			2.3	8.6	灰白	底径4.0
107	258	3233	3	包含層	土師器	かわらけ	40	反		2.4	9.9	灰黄褐	底径7.0
107	259	3239	3	包含層	土師器	かわらけ	30	反		3.0	9.2	にぶい橙	底径4.4
107	260	3305	3	包含層	土師器	かわらけ	20					にぶい黄橙	底径5.2
107	261	3125	3	包含層	土師器	羽釜	5					にぶい黄橙	
107	262	3006	3	包含層	青磁	有稜皿	10	反			10.4	明オリーブ灰	
107	263	3206	3	包含層	青磁	碗	10	反				オリーブ灰	底径7.0
107	264	3005	3	包含層	白磁	碗	5	反				青灰白	底径6.2
107	265	4760	3	包含層	木製品	漆椀	10	反				黒/赤黒	

付　図

Fig.146　松東遺跡 検出遺構全体図
Fig.147　弥生時代 検出遺構
Fig.148　奈良・平安時代 検出遺構
Fig.149　鎌倉時代以降 検出遺構
Fig.150　松東遺跡 検出遺構図①
Fig.151　松東遺跡 検出遺構図②
Fig.152　松東遺跡 検出遺構図③

Fig.146　松東遺跡 検出遺構全体図

Fig.147　弥生時代 検出遺構

Fig.148　奈良・平安時代 検出遺構

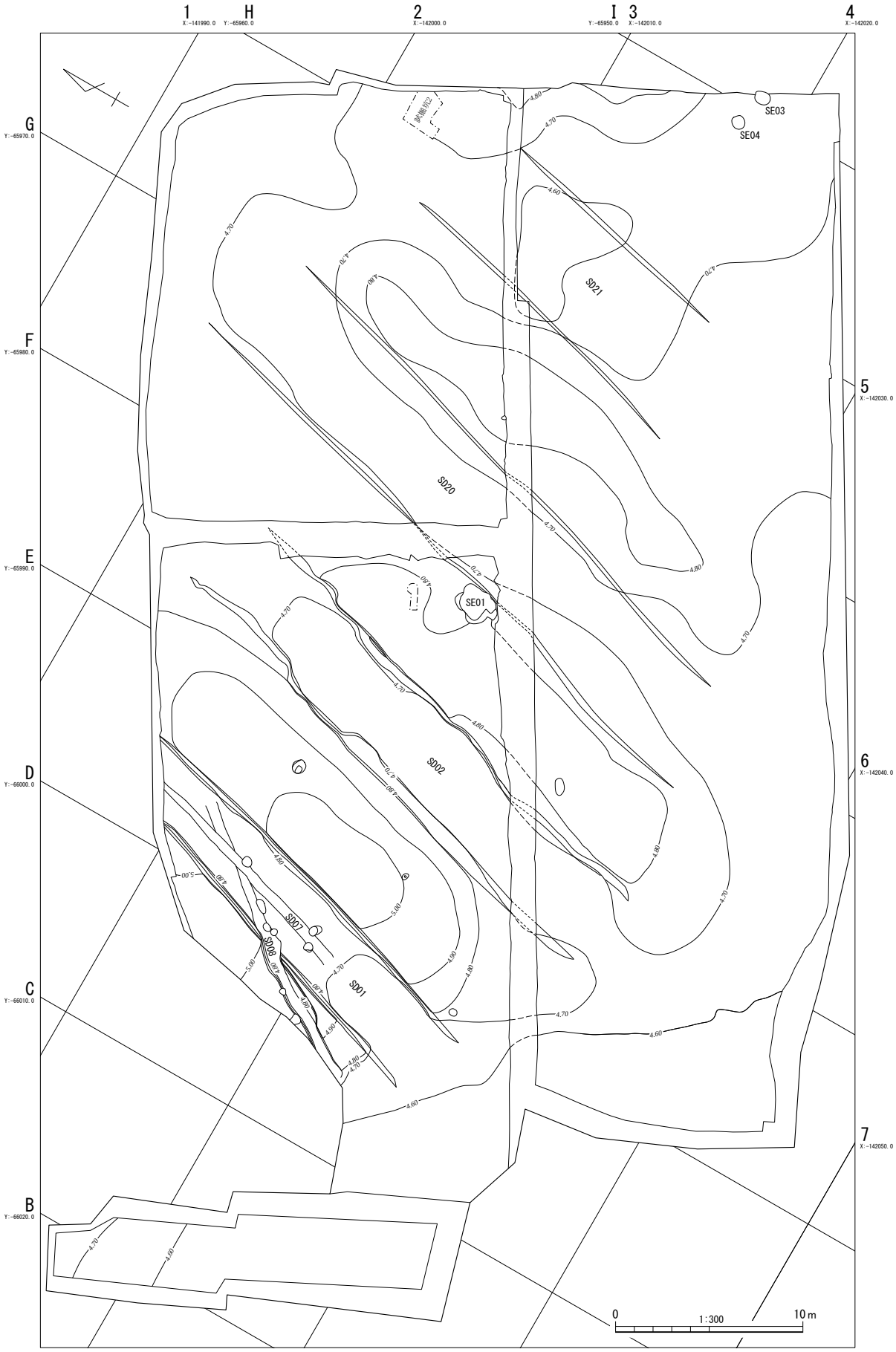


Fig.149　鎌倉時代以降 検出遺構

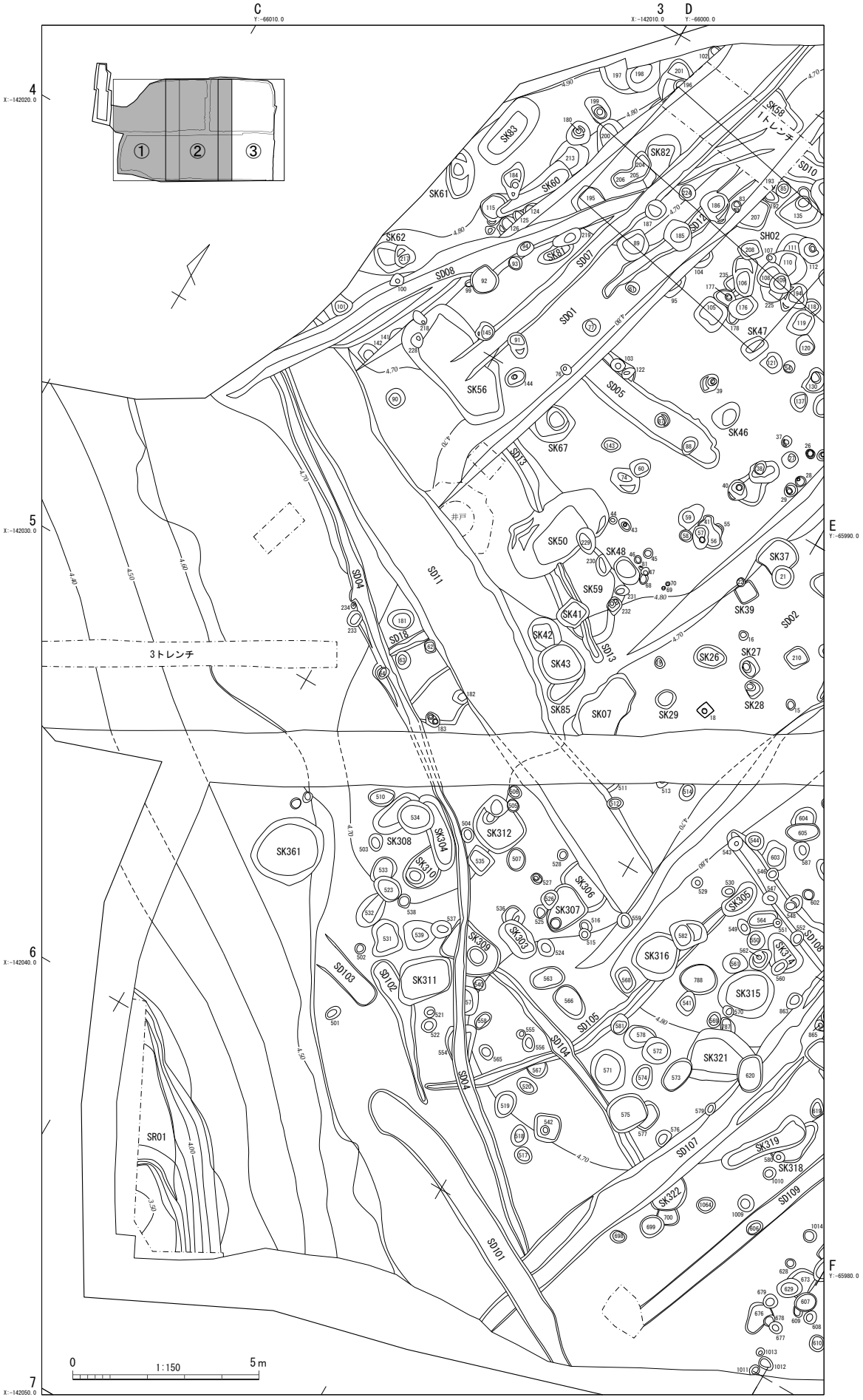


Fig.150　松東遺跡 検出遺構図①

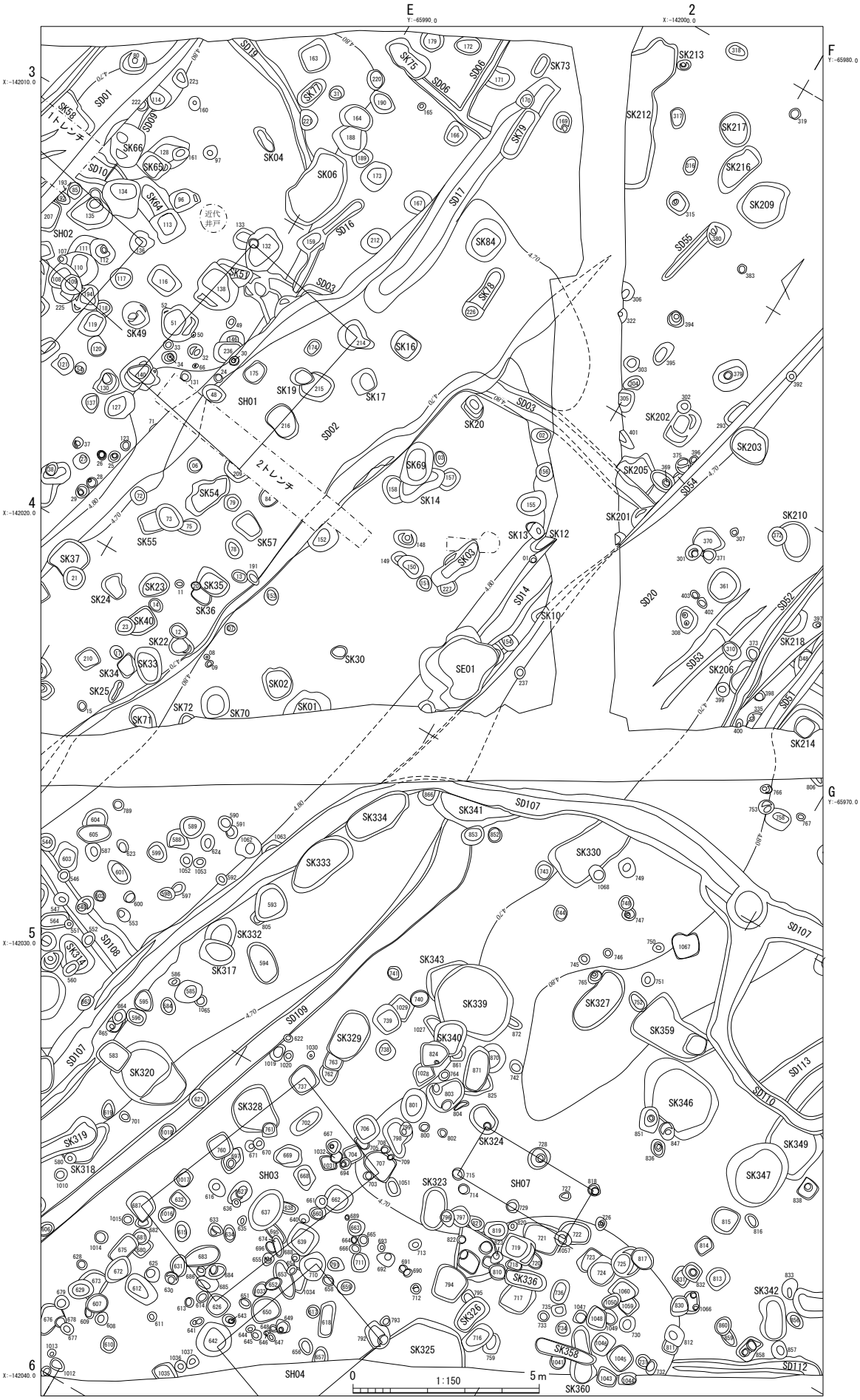


Fig.151　松東遺跡 検出遺構図②

Fig.152　松東遺跡 検出遺構図③

図　版

SK06 銅鐸出土状況

１工区 全景（北から）

1　２工区 全景（北東から）

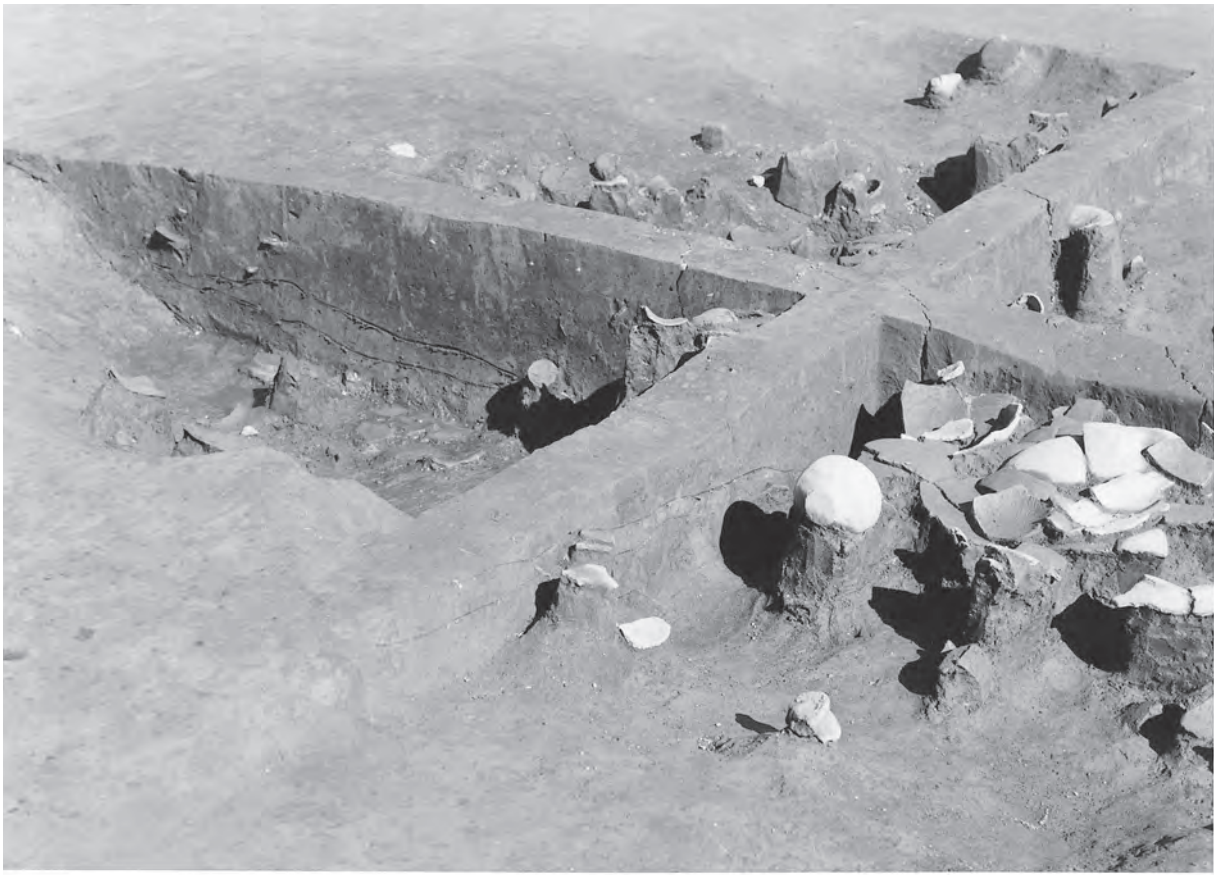
2　２工区 全景（東から）

３工区 全景（南西から）

PL. 4

弥生時代 土坑 遺物出土状況（SK361 南西から）

1　SX01 遺物出土状況（西から）



2　SX01 土層断面（西から）

1　SX01 焼土内遺物出土状況（北東から）

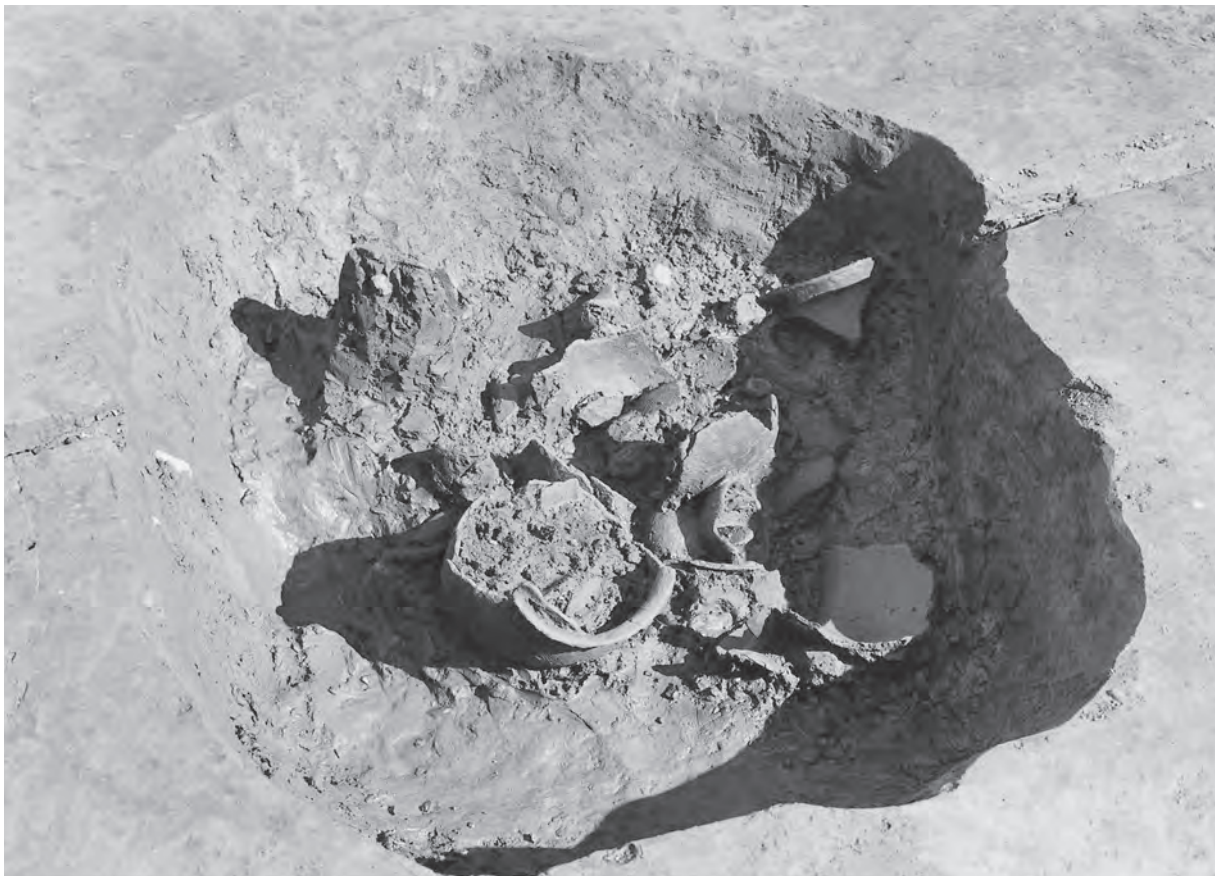
2　SX01 焼土断面（北西から）

SK06 銅鐸出土状況（南東から）

1　SK06 銅鐸出土状況(北東から)

2　SK06 土層断面(南東から)

1　SK07 遺物出土状況（北から）



2　SK84 遺物出土状況(南から)

1　SK231 遺物出土状況（北東から）

2　SK231 土層断面（南西から）

1　SK339 遺物出土状況（北西から）

2　SK346 遺物出土状況（南東から）

1　SK352 遺物出土状況（東から）

2　SK361 遺物出土状況（南西から）

1　SK03 遺物出土状況（東から）

2　SK03 土層断面（南西から）

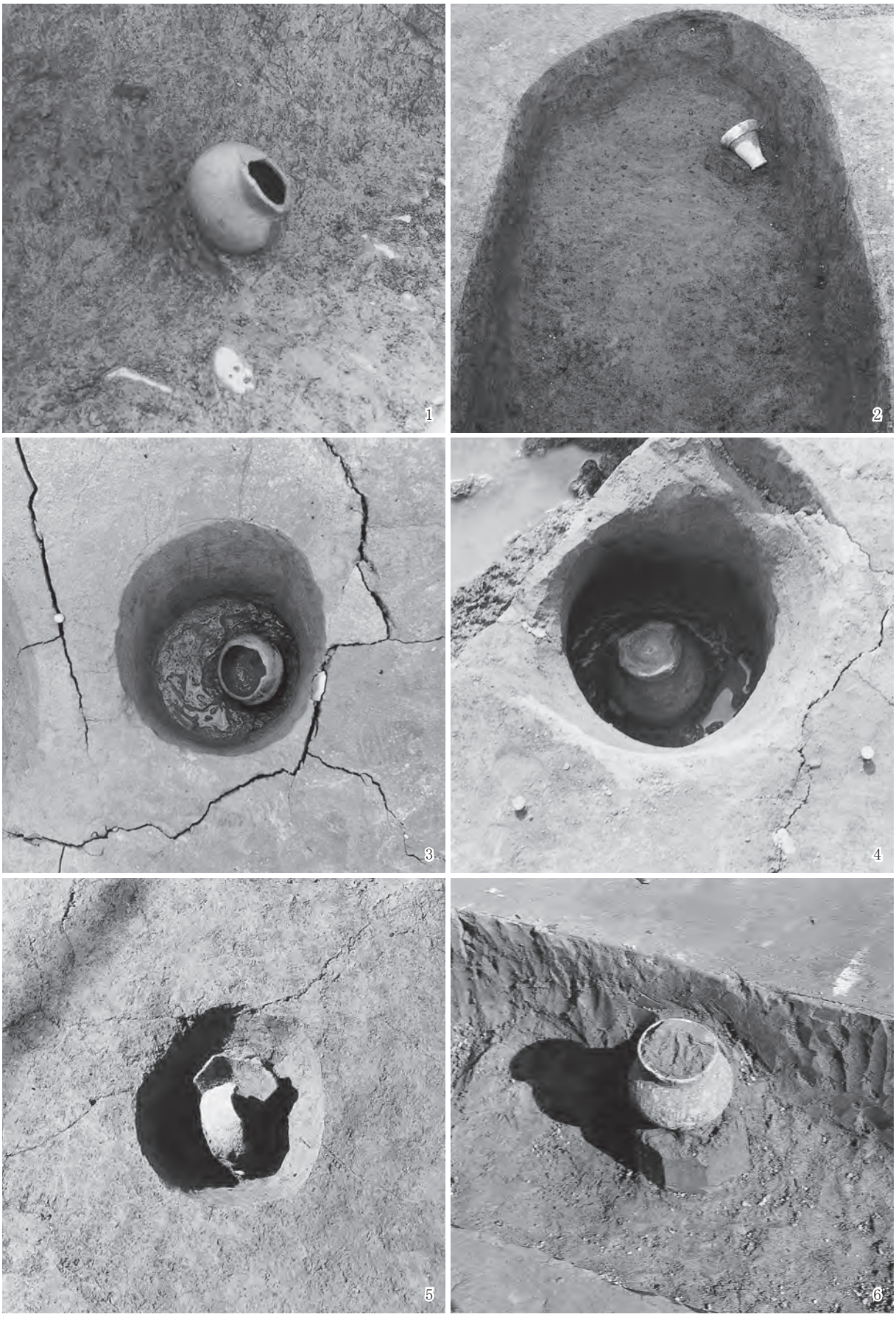
3　SK03 遺物出土状況（北西から）

1　SK208・SK215 遺物出土状況（南東から）

2　SK209 遺物出土状況（北東から）

3　SD03 遺物出土状況（南東から）

4　SD51 完掘状況（北から）



弥生時代 遺物出土状況　1.SK337（東から）　2.SK350（南東から）　3.SP24（東から）　4.SP131（北東から）
5.SP713（北東から）　6.SD51（西から）

奈良・平安時代 遺構集中部（３工区 東から）

1　奈良・平安時代 遺構集中部（１工区 北から）

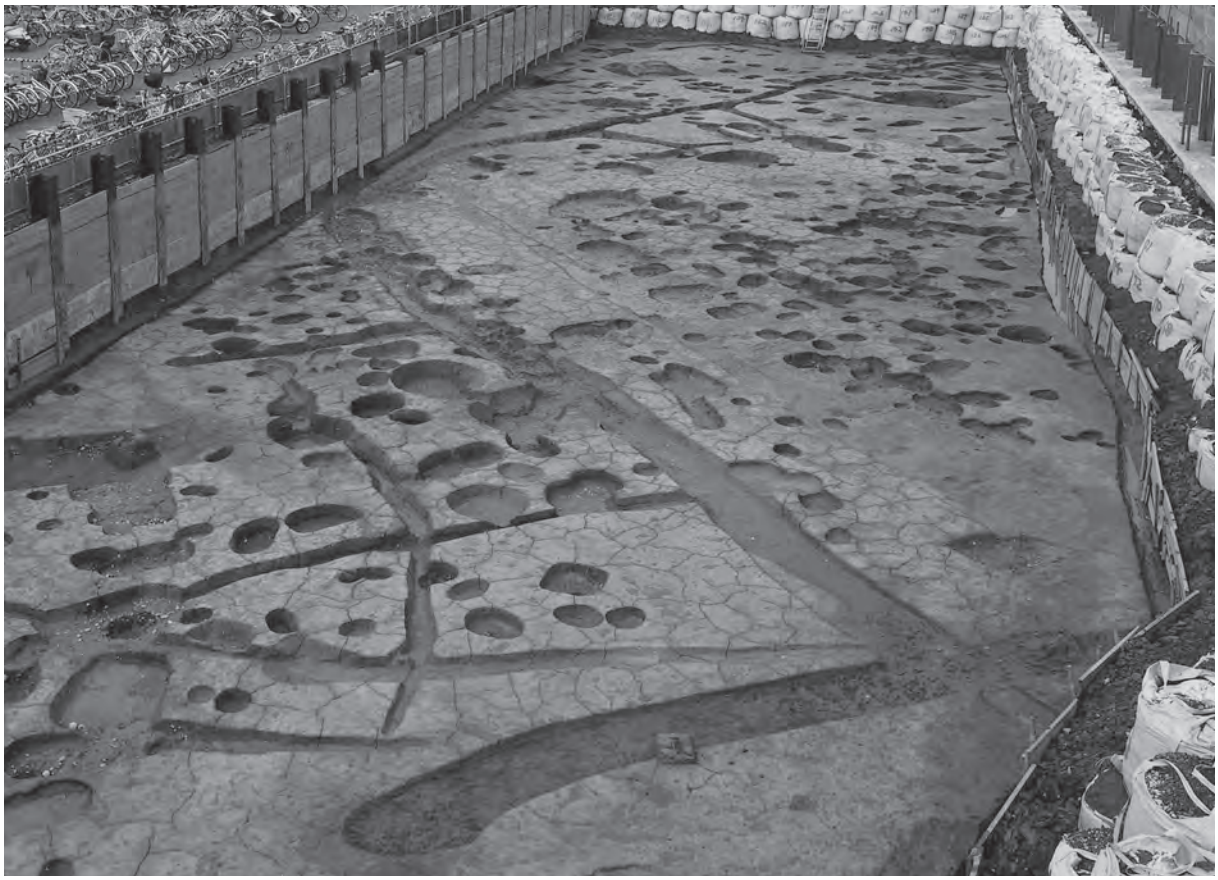
2　SH02（西から）

3　SH03（南から）

4　SH05（南から）

5　SH07（西から）

1　SD107 完掘状況（東から）



2　SD107 完掘状況（南西から）

1　SD107 遺物出土状況（南東から）

2　SD107 遺物出土状況（北西から）

3　SD107 遺物出土状況（南西から）

4　SD118 遺物出土状況（南から）

1　SD109 銅印出土状況（北西から）

2　SD109 銅印出土状況（北西から）

3　SD109 銅印出土状況（南東から）

1　SE02 井戸枠 検出状況（南東から）

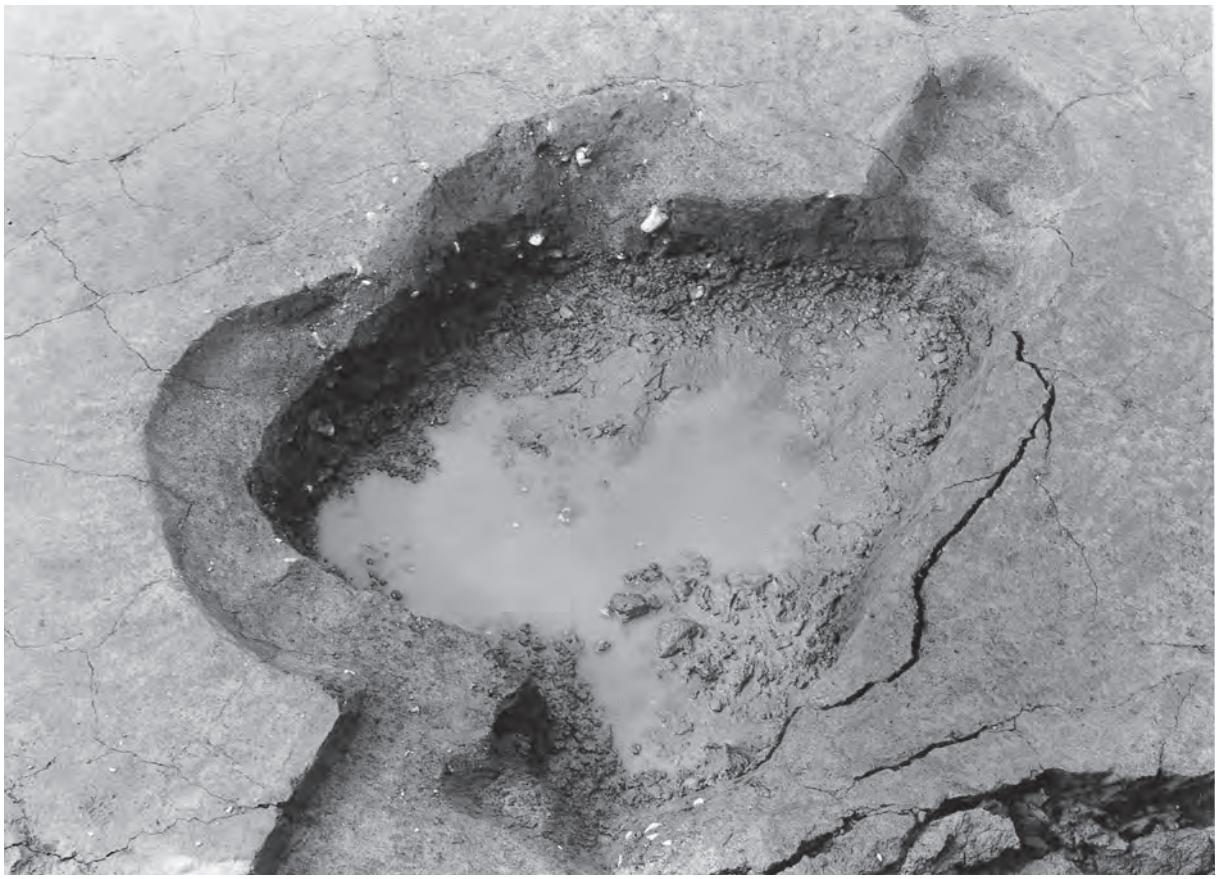
2　SK301・SK302 遺物出土状況（南西から）

鎌倉時代以降 大型溝（SD01・SD02 北から）

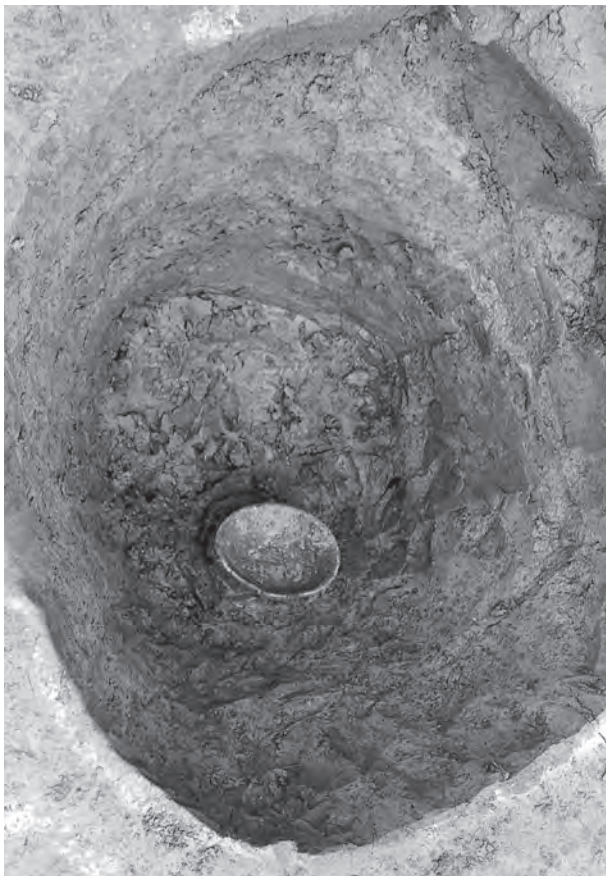
1　SD01・SD02 完掘状況（南から）

2　SD01 完掘状況（北から）

3　SD02 完掘状況（南から）



1　SE01 完掘状況（南から）



2　SE03 遺物出土状況（南から）

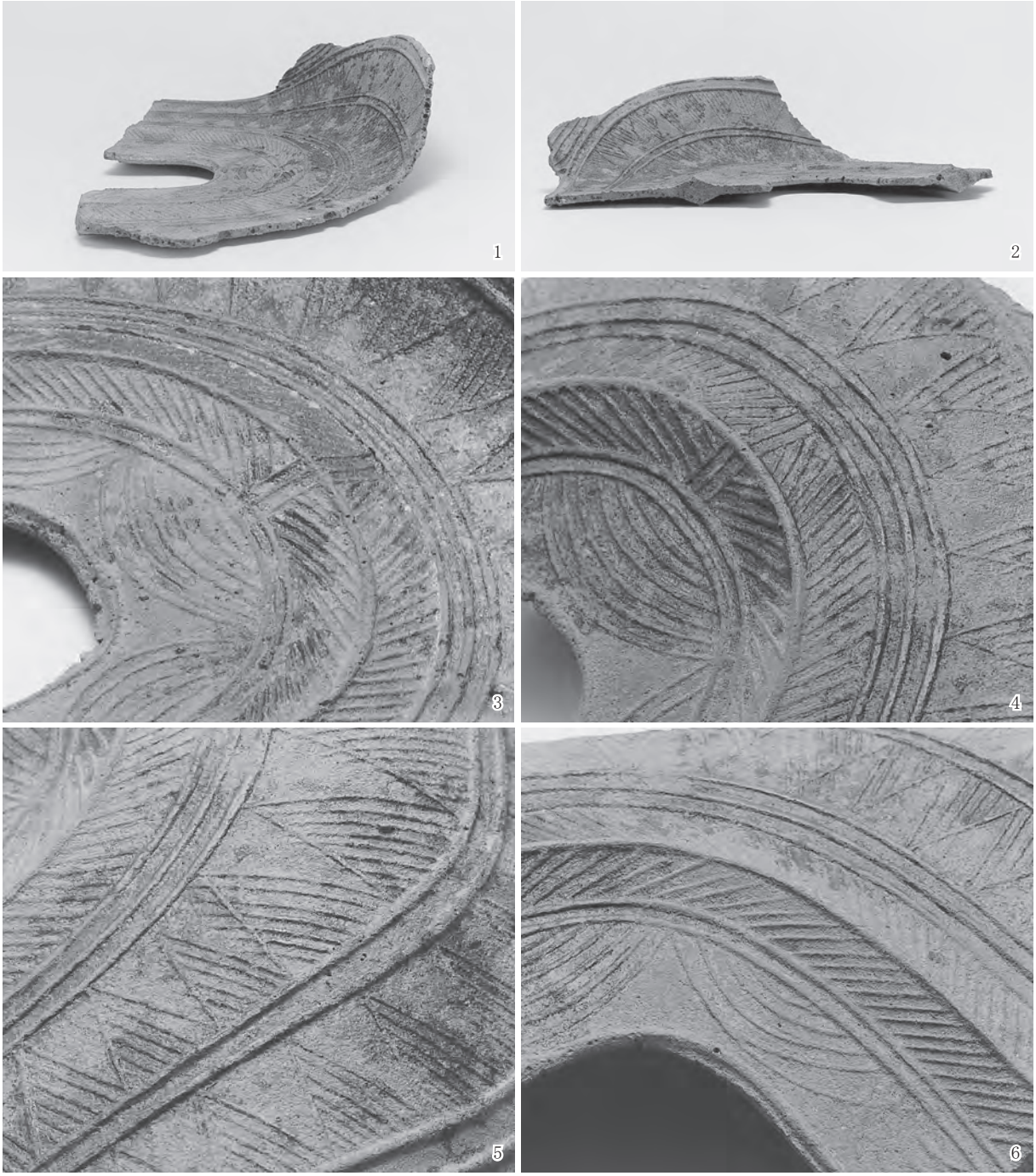
3　SE04 遺物出土状況（西から）

弥生時代 主要出土遺物

弥生時代 大型土器集積土坑（SX01）出土遺物（1）

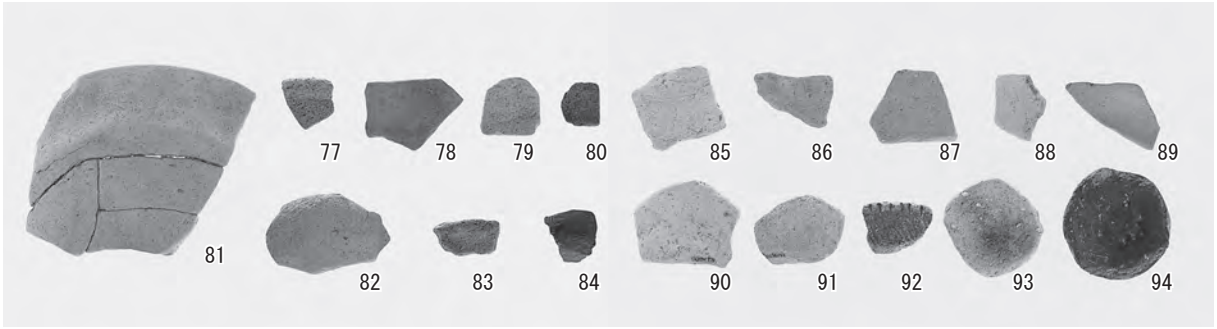
弥生時代 大型土器集積土坑（SX01）出土遺物（2）

弥生時代 銅鐸出土土坑（SK06）出土遺物（1）　銅鐸（76）　1. A面　2. B面



1　弥生時代 銅鐸出土土坑 (SK06) 出土遺物 (2)　銅鐸（76）詳細

1. A面 右側面　2. A面 下側面　3. A面 菱環周辺　4. B面 菱環周辺　5. B面 鋸歯文　6. B面 重弧文



2　弥生時代 銅鐸出土土坑 (SK06) 出土遺物 (3)　銅鐸（76）共伴土器

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（1）

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（2）

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（3）

SK361 221

SK361 223

SK361 227

SK361 225

SK361 228

SK361 229

SK361 230

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（4）

SK361 231

SK361 234

SK361 232

SK361 235

SK361 242

SK361 244

SK361 246

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（5）

SK361 248

SK361 251

SK361 249

SK361 252

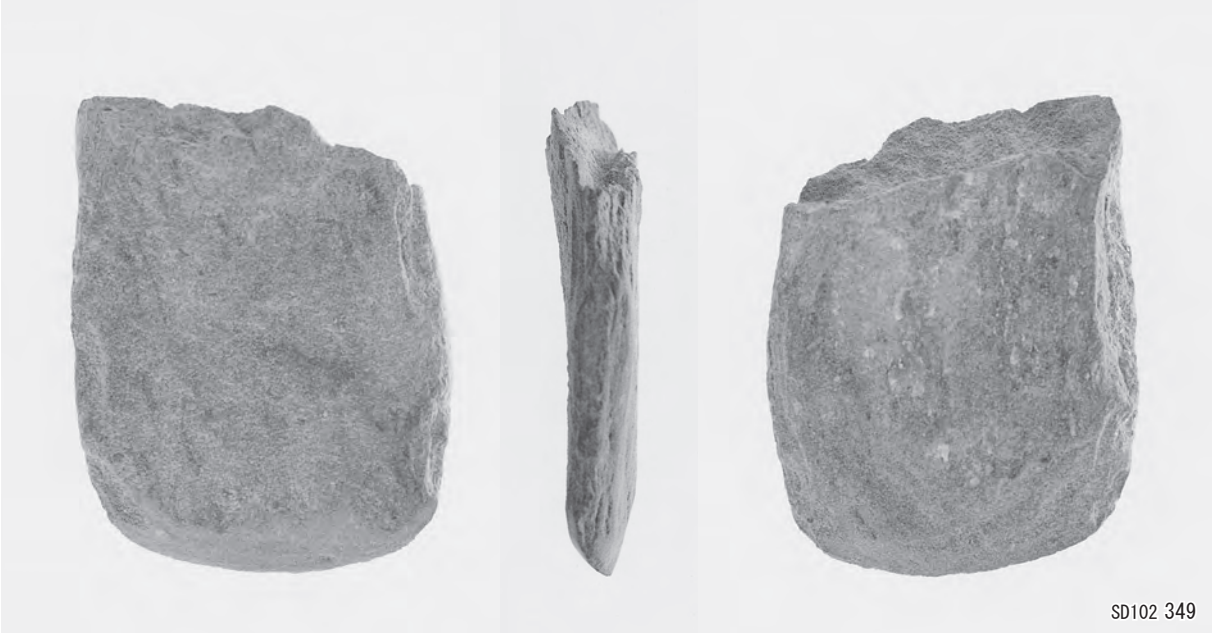
SK361 253

SK361 254

弥生時代 土器集積土坑 出土遺物（6）

弥生時代 土坑 出土遺物（1）

1　弥生時代 土坑 出土遺物 (2)



2　弥生時代 溝・小穴 出土遺物

奈良・平安時代 主要出土遺物（SD107 出土遺物）

1　奈良・平安時代 土坑 出土遺物

2　奈良・平安時代 溝 出土遺物（1）

SD107 39

SD107 40

SD107 41

SD107 45

SD107 46

SD107 47

SD107 49

SD107 61

SD107 62

SD107 65

SD107 72

SD107 76

奈良・平安時代 溝 出土遺物 (2)

SD107 80

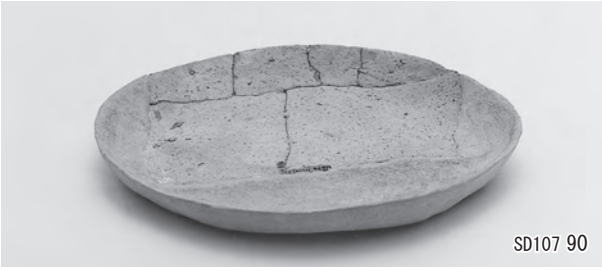
SD107 83

SD107 84

SD107 85

SD107 87

SD107 88


SD107 90

SD107 93

SD109 114

SD08 116

SD109 114

SD110 122

SD110 124

奈良・平安時代 溝 出土遺物 (3)

1　奈良・平安時代 溝 出土遺物（4）　SD109 出土銅印

2　奈良・平安時代 井戸（SE02）出土遺物

179

188

190

197

197

180

184

187

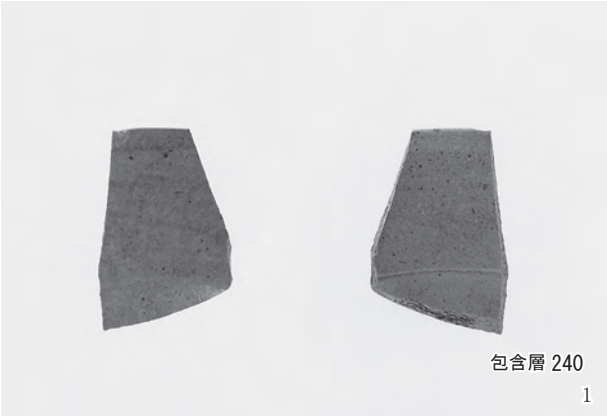
193

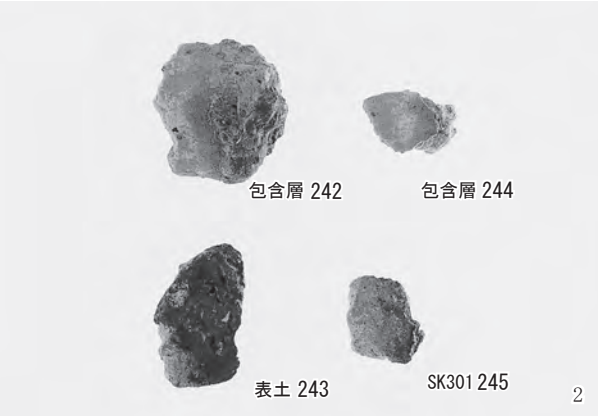
195

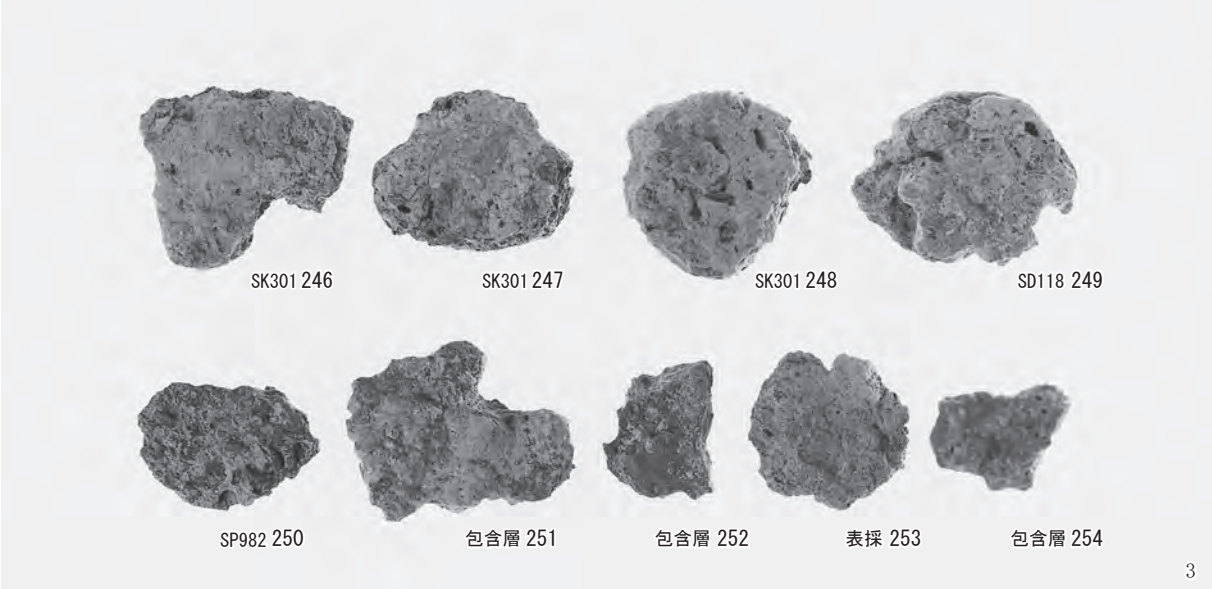
198

奈良・平安時代 包含層 出土遺物（1）

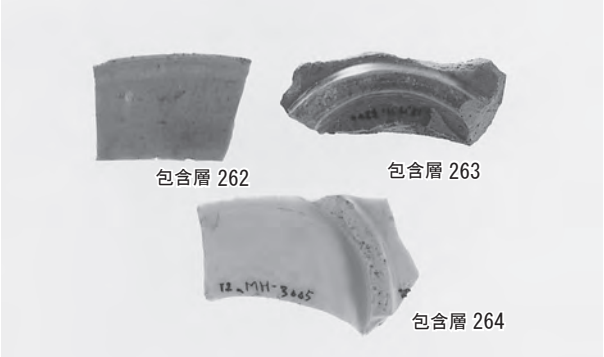
奈良・平安時代 包含層 出土遺物 (2)

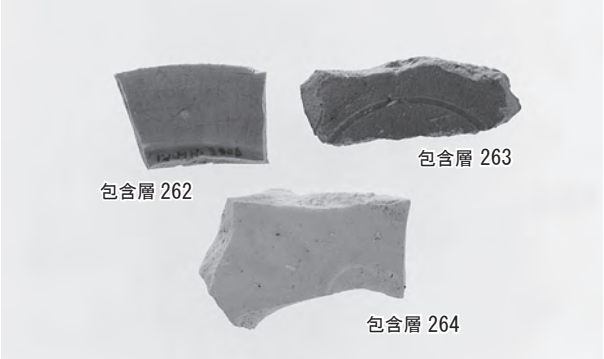


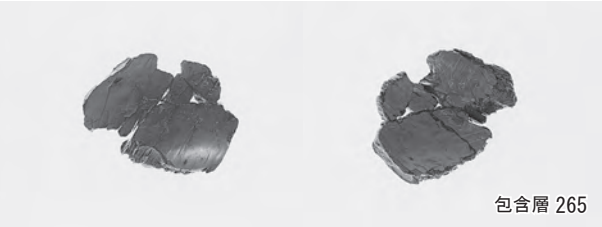




1　奈良・平安時代 包含層等 出土遺物　1. 緑釉陶器　2. 鞴羽口　3. 鉄滓

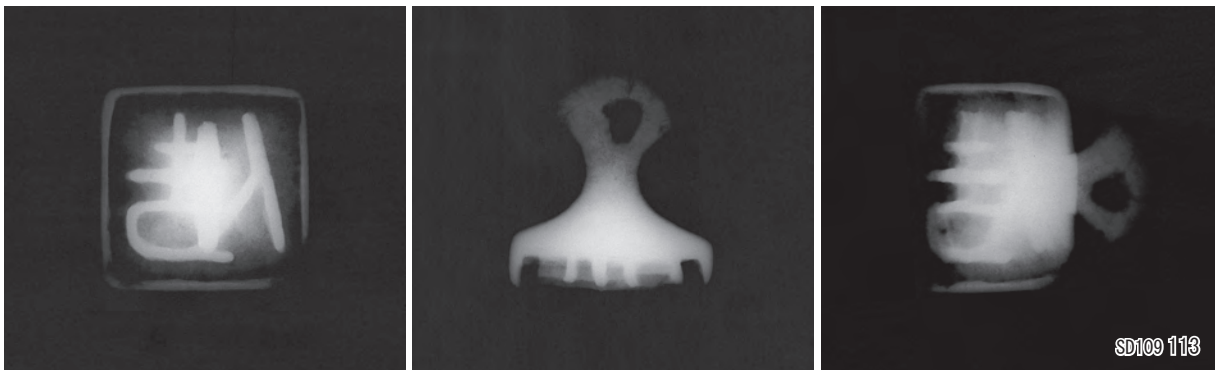






2　鎌倉時代以降 出土遺物

1　銅鐸 X 線画像



2　銅印 X 線画像

報　告　書　抄　録

書名（ふりがな）	松東遺跡３次　（まつひがしいせき３じ）
編著者名	坂下俊介（編）、鈴木一有、鈴木京太郎、坂田昌代、川本耕三、西田京平、平尾良光、西尾太加二
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-0946　浜松市中区元城町 103-2 TEL(053)457-2466　FAX(053)457-2563
発行年月日	2014 年 2 月 21 日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
松東遺跡（まつひがしいせき）	静岡県 浜松市 東区 天龍川町	22202	2-06-06	34 度 43 分 03 秒	137 度 46 分 46 秒	2012 年 6 月 1 日 ～ 2013 年 3 月 22 日	2,102 ㎡	道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
松東遺跡	集落	弥生時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 ～近世	掘立柱建物 土坑 溝 井戸 自然流路	弥生土器 須恵器 土師器 灰釉陶器 緑釉陶器 中世陶器 土師質土器 土製品 石器 石製品 金属製品 木製品 鉄滓 鞴羽口	弥生時代後期～終末期の遺構、遺物を確認 近畿式銅鐸（突線鈕２式）の鈕破片が出土 奈良～平安時代の遺構・遺物を確認 方形区画溝を検出 銅印や墨書土器等が出土

要約

松東遺跡は、天竜川の沖積平野の南部に形成された微高地上に立地する。周辺には弥生時代及び古代の遺跡が数多く分布しており、永田遺跡群と総称される。今回の発掘調査では、遺跡の南部分において調査を行い、主に弥生時代後期～終末期、奈良～平安時代、鎌倉時代以降の遺構・遺物を確認した。

弥生時代後期～終末期の主な遺構は、土坑、溝である。出土遺物は、弥生時代後期後半（欠山式期）の土器を主体とするが、特筆される遺物として土坑（SK06）から出土した近畿式銅鐸（突線鈕２式）の鈕の破片が挙げられる。

奈良時代～平安時代の主な遺構は、掘立柱建物、土坑、溝、井戸等である。特に方形区画溝（SD107）の内側に遺構・遺物が多く認められており、永田遺跡群が長田郡家に想定されていることから、郡家に関連した施設の存在がうかがえる。出土遺物は須恵器・土師器・灰釉陶器のほか、特筆される遺物として、銅印、墨書土器、鍛冶関連遺物（鉄滓・鞴羽口）などが挙げられる。

鎌倉時代以降の遺構・遺物はわずかである。遺構は幅広な溝、井戸を検出した。幅広の溝は４条が等間隔で平行に延びており、古代の区画溝および調査区近辺の地籍図に認められる古い地割と同じ方向である点が注目される。主な出土遺物は山茶碗、青磁などが挙げられる。

松東遺跡３次

2014 年 2 月 21 日発行

編集・発行機関　浜松市教育委員会
（浜松市市民部文化財課が補助執行）
印　　刷　中部印刷株式会社

Matsuhigashi Site

The 3rd excavation report

A report of archaeological investigations
in Western Shizuoka,Japan

February,2014

Hamamatsu Municipal Board of Education